

1998年度教育改善推進経費

言語研究Ⅸ

1999

東京外国語大学

特集

使役と他動性

はじめに

本学の「言語教育」が、一般的な「語学校」のものと異なり、大学教育に相応しい質の高さを獲得するためには、本学の個人レベルの「言語研究」を有機的に統合しつつ、研究の「質」を高めることが不可避である。このような認識に基づき、従来、何人かの言語研究仲間と、特集を組みながら、「言語研究」という冊子を作成してきた。

現在まで確かに、理想的な形での協同作業を実現するには至っていないが、昨年度の活動に関しては、本プロジェクト参加者が本学語学研究所の例会で研究成果を発表し、種々の意見交換を行うなど、一定の前進が見られた。

このような私的営みにそもそも「将来性」がありうるのかと疑問をもたれるかも知れない。確かに現在、残念ながら、それに対し、目に見える成果をもって答えることはできない。しかし、専攻語ごとに閉鎖的になりがちな本学において、外語大らしい「言語研究」の確立を志向するならば、複数の研究者による批判的共同作業の機会を設けることは、すべての試みの第1歩であるとも言えよう。

過去8年間は、態、時勢などの文法範疇あるいは語順、文型などの構造的現象を中心に特集を組んできたが、今回は「使役と他動性」という極めて意味的なテーマを特集した。現在は、正直に言えば、このような細々とした小さな営みを「継続する」ということにしか意味を求めることができないであろうが、しかし、それほど遠くない将来、このような営みの「成果内容」そのものに意味を主張できるようになることを願うものである。同僚諸氏の協力と積極的な参加を心から願い期待する。

1999年3月4日

編者

目次

ロシア語における活動体・不活動体のカテゴリーをめぐって 中澤 英彦	1
When Causatives mean Passive in Mandarin Chinese Keiko MOCHIZUKI	11
マレーシア語の使役表現	正保 勇 37
ラオス語の使役表現について	上田 玲子 63
現代トルコ語の使役構文 — その機能と意味 —	川口 裕司 69
[研究ノート]	
語彙アスペクトとスペイン語の迂言的受動文 — De Miguel (1992) 第4章から —	高垣 敏博 97
使役対象が人ではない他動詞使役をめぐって — 使役動詞文と他動詞文 —	早津 恵美子 109
Une correspondance entre <i>On baisse le niveau</i> , <i>Le niveau baisse</i> et <i>On fait baisser le niveau</i>	Yoichiro TSURUGA 151
[資料]	
ドイツ語の他自動詞	成田 節 165
結合価理論を越えて — 文意味形成メカニズム研究へ —	在間 進 183
コーパスを用いた認知論的頻度分析 — steigen と ab-, aus-, auf-, einsteigen を調査対象に — 亀ヶ谷 昌秀	197
コーパス言語学の試み “on the hoof” の新しい意味をめぐって	馬場 彰 207

0 名詞の様々な区分、例えば名詞句階層は文の統語法に様々な影響を与える。使役文の作り方でいうなら、主語>直接目的語>間接目的語>斜格目的語>所有格句>比較の対象という順に名詞句階層が働くのである (Keenan, E. L. and Comrie B.: 63-99)。この主語、目的語といった文法機能 grammatical functions, syntactic function と意味役割 semantic role の関係においては、人間を表す名詞 (≒活動体名詞) は行為者、動作主、主体の位置に現れ、事物を表す名詞 (≒不活動体名詞) は動作の対象を表す名詞として用いられやすいという傾向が見られる (Золотова: 123)。このように、名詞の意味、とりわけいわゆる活動体・不活動体のカテゴリーは、統語法に様々な影響を与えるが、このカテゴリーと統語法の関係の研究はまだ十分にはされていない。

拙稿では、名詞の意味区分のうち活動体・不活動体のカテゴリーの問題を扱う。この問題は先行研究においては、形態論・意味論的にしか扱われず、統語論的な視点が欠如している。そこで、下の Чехов の作品中の этого мурло は、なぜ文法の教科書の教える形 это мурло をとらないかという疑問に納得のいく答をあたえられない<1>。

—Как зарождается любовь, —сказал Алехин, —почему Пелагея не полюбила кого-нибудь другого, более подходящего к ней по ее душевным и внешним качествам, а полюбила именно Никанора, этого мурло, —тут у нас все зовут его мурлом, —поскольку в любви важны вопросы личного счастья —все это неизвестно и обо всем этом можно трактовать как угодно.

(А. П. Чехов: «О любви»)

我々にはこのような言語の実際や 3 で触れるような問題を説明できる研究がぜひとも必要なのである。最終的にはこれらのことを射程にいれつつも、本稿ではまずロシア語における活動体・不活動体の問題を概観しようと思う<2>。

1 では活動体・不活動体名詞の記述に移ろう。先行研究のうち、活動体・不活動体を対象にしたものはそれほど多くはない。その中で緻密な研究と見解の点で際立っているのは Исаченко と Ицкович である。Исаченко は西スラヴ語、特にスロヴァキア語、チェコ語とロシア語の比較対照を行い、Ицкович は現代ロシア語に焦点を絞り、特に 1960 年代、1970 年代の資料を記述・分析している。彼の主眼は現代ロシア語における傾向を探ることであり、現代人の言語意識とは異なる用法の語彙を対象とする。本稿では Ицкович の記述と枠組みを軸に、Исаченко、Зализняк (以後文法辞典と略記) を初めとする諸研究とを対照させて行こう。特に断らないかぎり、例に挙げる語、記述や記述の順番は結果的に Ицкович と一致することはあっても我々が諸研究を対照・抽出したものである。

まず表現手段である。周知のように、現代ロシア語においては、名詞は語尾屈折の型によって二分される。すなわち、単数形 (-а, -я は除く男性名詞) と複数 (男性名詞、中性名詞、女性名詞) において

1) 対格形が生格形と等しい変化型の名詞と

2)対格形が主格形と等しい変化型の名詞である。この1)型の名詞を活動体、2)型の名詞を不活動体名詞と規定する。

Исаченко も指摘するように、スロヴァキア語などとは異なり、ロシア語には (Виноградов: 71-92) の主張する、男性名詞の下位クラス(人間名詞のクラス)は形態論的には存在しない。いわゆる第二生格、第二前置格は、不活動体名詞の一部に限定されるなど統一的な意味・形態論的な特徴を持たないからである(Исаченко:67)。

活動体のカテゴリーはこのように語尾屈折の型に依存し、言語外現実における生物・無生物の区別とは1対1対応をなさない。両者は峻別されるのである。

これから両者のこの対応関係に基づいて名詞を検討していくが、この対応関係には下に見るⅠ,Ⅱの2つの関係がある。

Ⅰ. 語本来の用法。語の語彙的な意味と形態・文法的な区分が一致する直接的な対応関係である。ここでは無生物を表す名詞が形態論における不活動体、生物が活動体として扱われる。

Ⅱ. 比喩的、多義的用法<3>。語の語彙の意味と形態・文法的な区分が一致しない場合で、言語外現実における無生物が形態・文法的に活動体の事物として扱われる場合およびその逆の場合がある。対格形の選択(生格に等しい対格形をとるか、主格に等しい対格形か)における揺れは、名詞の文法的な形態と文脈によって与えられる意味との対立に現れる。では具体的な検討を行なおう。

Ⅰ. 語本来の用法

A.男性、女性名詞

1.a)人間、(想像上のものを含む)動物、鳥、昆虫、(人の似姿をもつ)神、神話

や民話の登場人物を表す名詞:мальчик, волк, Зевс, Юпитер, ангел, архангел, черт, дьявол, нечистый, леший, домовый, водяной, ведьма, кикимора, муза

b) 人称代名詞類: я, ты, мы, вы, он, , кто

以上には揺れはない。

c) мертвец「死者」, покойник, утопленник には生命がないが形態論的には活動体扱いを受ける。しかし、труп「死体」は不活動体である。

d)人間や動物の集団:народ, студенчество ロシア語では個々の人間を表す具体的な意味の名詞のみが活動体になるのである(Шелякин:43、Валгина:149)。

Ицкович は次の①文を揺れと考える: ① Антропологический анализ может открыть автохтонность, местные корни народа, которого считают пришлым.
(Наука и жизнь, 1971, №5)

e)文学作品の登場人物を表す、抽象的な意味をもつ語(Валгина:152)

:тип о, образ н, характер н, оригинал н/о

必要に応じて文法辞典の活動体、不活動体の注記を名詞の後にスペースをおいて о, н と併記する。н/о は両方の記載があることを意味する。記載がない場合は-と記す。

☆揺れ 魚、海産物と蛭

食材としては不活動体:海の魚、たこなどの軟体動物、甲殻類。ロシア中部では最初瓶詰め、缶詰にされた食材として登場した。つまり生きた実物を一般のロシア人は知らず、後になって生きた姿を見たので(Ицкович:71):

любить устрицы/устриц,мидии/мидий,креветки/креветок,крабы/крабов
есть трепанги/трепангов,омары/омаров,кальмары/кальмаров

ただし複数形の сардины,шпроты,кильки は不活動体扱いがふつう。小魚類
を指し、燻製が缶詰,瓶詰類として植物油で貯蔵されるので (Ицкович:71) 。

есть сардины(単数形は о), шпроты(単数形は о), кильки(単数形は о)
これらも単数形では съел трепанга, принесли большого омара на блюде
と活動体扱いをし、初めから生きた姿で知られている рак「ザリガニ」、
карась「フナ」は食材としても活動体扱いをする:есть раков。

Пиявка「ヒル」は、淡水に住む環形動物としては活動体。ただし、医療「
手段」として用いられると不活動体とされる (Ицкович:72) 。

- 2.トランプのカード、チェスの駒の名前は活動体扱い: туз о, король о, дама о,
валет о, конь о, слон о, ладья н, пешка н。現代ロシア語文法の現状を記述しよ
うとした文法辞典では、最後の2つをチェスの駒の意味では不活動体としているの
は興味深い。ちなみに ладья は城塔形をしている。

- 3.微生物や幼虫、胎児などは不活動体扱い: вирус н, бактерия н/о, вибрион н/о,
стафилококк н/о, стрептококк н/о, бацилла о/н, микроб о/н
これらは発見と辞典への登録が遅く、したがって生物としての認知も遅く、不活
動体扱いが多い。これらには下の場合のような揺れがある。

а)-кокк に終わるもの、 вибрион については揺れがある。

不活動体扱い: ② В положительном случае надо дифференцировать
стрептококк. (Терапевтический справочник, т. II)

③ Они ввели одной группе этих крыс стрептококки.

(За рубежом, 1977, №21)

活動体扱い:

④ Я даже придумал похожий метод охоты на стафилококков.

(Знание-сила, 1977, №10)

Ицкович は解説をしていないが、私見によれば、上の②③④では動詞や例
えば、名詞 охота が対象として活動体を要求するので当該の名詞が活動体扱
いを受けると考えられる〔参照,動詞「殺す」が生命体を対象とするのは当然
であろう〕。

b) микроб

☆揺れ 専門書では活動体扱いが普通、しかし日常言語的には不活動体扱い。

⑤ Наладить промышленное производство зитромицина—

препарата, убивающего микробов, перед которыми бессилен
пенициллин.

(Комс. правда, 28 ноября, 1964)

ただし、不活動体扱いもある:

⑥ Необходимо уничтожить микробы. (Смена, 1977, №24)

c) бактерия н/о, бацилла о/н 揺れがある。

d) микроорганизм н 不活動体のみ。Ицкович は、ここで организм という語の影

響があるとするが正しいであろう(Ицкович: 74)

е)личинка о「幼虫,幼生」,эмбрион н「胚」,зародыш н「胎児」

☆揺れ 一般的な文献ではふつう личинка は活動体、эмбрион,зародыш は不活動体とされる。しかし、専門的な話や文献では活動体とする。

(Розенталь: 105, Рожкова: 41-42)

ф)глист о 蠕虫 Ицкович は不活動体が普通とするが文法辞典は活動体扱い。

4.ある種の茸

Исаченко によれば、ロシア語、スロヴァキア語ではある種のキノコ、例えば рыжик,подосинник は活動体扱いという(Исаченко:69):

⑦ Я нашел рыжика,подосинника.(しかし я нашел белый гриб.) ただし、文法辞典は подосинник= подосиновик「カラハツタケ」、рыжик「キンチャヤマイグチ」をともに不活動体としている。

5.その他、人間を表す語

а)личность н, элемент н, персонаж о/н, создание о/н, жертва о/н
лицо о, существо о

揺れはあるが、一般に人間を指すこのグループの語を活動体とする傾向がある。

б)指示的意味が無生物を表すときは不活動体で、生物を表すときは活動体扱い:

кукла 人形 о、人 н/о, марионетка 人形 н/о、人 о, змей о, конь о,
призрак 幻 н、幽霊 н/о, дух 精神 н、亡霊 о, гений 才能 н、人 о

注目に値するのは робот о である。空想科学小説に人造人間として登場して以来活動体扱いだったが、工業用ロボット,自動機械の意味になると不活動体とされ、現代のポピュラーサイエンス、新聞雑誌などでは工業用ロボットの意味でも再び活動体扱いの傾向が出てきた。

③Он просто разбил недорогой робот.

(Р.Шекли,Билет на планету Транай.Перев. с.англ.)

⑨Стало ясно, что нельзя будет просто взять робота за его механическую руку. (Наука и жизни,1977, No.1)

⑩Обучать таких роботов можно по-разному.(Наука и жизни,1977, No.1)

с)主人公の名を冠した芸術作品名は統語的には複雑であるが活動体扱いがふつう:
⑪ Мы с увлечением читали《Евгения Онегина》(Аникина:13).

Б.中性名詞の場合

一般に活動体の名詞は基本的に男性、女性名詞であり、中性名詞はまれである。(空想上のものを含む)動物の種類などを表す。

複数形のみが活動体として変化する。男性名詞の影響で新聞や雑誌では単数でも活動体にすることがあるがノルマの逸脱である(Ицкович:75)。

形態的に接尾辞-ище :чудовище о,чудище о,страшилище оを持つものや形容

詞、形動詞から形成されたもの:млекопитающее о, насекомое о, животное о, травоядное, парнокопытное о, сумчатое о その他:дитя о, дитятко о, лицо о, существо о/н, ничтожество н/о

I. の語本来の用法の場合、Ицкович も指摘するように、揺れは語の指示的意味の変化によるものである。

II 比喩・多義的表現

A. 本来無生物を表す名詞が文脈上活動体のものを表す場合、活動体扱いの傾向がある(Булаховский:199, Грамматика русского языка:106)。

これは語の語彙的意味が文脈の表す活動体の意味よりも強いことを示す。生物のうち、とくに人間を表す名称の場合にはこの傾向が一層顕著である。

1. партнер о, чертежник о, помощник о, претендент о, гигант 巨人 о, 巨大なもの н/о, великан о, электропастух, чиновник о, участник о, дракон о, зверь о, мотылек о

☆揺れ 文脈の表す不活動体の意味が語彙的意味より強い場合もある Ицкович はその理由について述べず、下の例を挙げる(Ицкович:82):

Обнаружить предвестники землетрясений предвестник 人 о、物 н/о

⑫ Этот стальной конь местные хлеборобы получили с завода еще в 1936 году.(Правда, 10 марта 1976)

⑬ Способен ли человек передвигать каменные исполины?

(Неделя. 16 февр. 1975, №7)

同一の文章中でも揺れがあるので、これは文体の問題ではない。

2. спутник「衛星」は不活動体扱いがふつうだが、専門書の中では活動体扱いもある。文法辞典では、「衛星」の意味に活動体、不活動体の両様を挙げている。

3. 古代の神々の名にちなむ天体名は活動体扱いもあるが、現代文章語では不活動体がノルマである。

4. -тель に終わる語は、本来動作主を表すので、不活動体の事物でも活動体扱いが普通である(Буслаев Ф.И. :187)。文法辞典では、-тель の項<4>の総数は 729 で、その 60.9%の 444 が活動体扱いを受けている。語彙的に生物は活動体、無生物は不活動体とする傾向がある。これは Исаченко の記述に近い。若干の例を挙げよう。

числитель н, знаменатель н, делитель н, множитель н, представитель о

5. 艦船、自動車は活動体の名前を持つものでも、不活動体扱いがふつう。管見によれば活動体扱いの数少ない例では、例えば下に見るように動詞 гнали が「活動するもの」を対象とするからである:⑭ 9 тысяч лошадиных сил гнали «Ягуара» сквозь черноту черноморской ночи... (Комс. правда, 9 июня 1977)

B. 本来無生物を表す名詞が文脈上活動体の事物を表す場合には、Ломоносов М.В. 以来指摘されてきたように文脈によって与えられる活動体の意味が本来の意味より強い傾向がある(Ицкович:84)(Лопатин В.В., Милославский И.Г., Шелякин М.А.:67)。典

型的なのが⑮の нос である。

⑮ Он искал господина носа по всем углам. (Гоголь:《Нос》)

1.不活動体が転義で人間を表す場合は活動体扱い:такого тюфяка впервые вижу

- | | |
|---------------|-------------------|
| а) мешок 袋 н | [口] のろま、ぐず о |
| тюфяк 敷布団 н | [口] 無気力な人、ぐず о |
| тряпка 襤褸切れ н | [口、卑] 意気地なし о |
| шляпа 帽子 н | [口] 無気力な人、意気地なし о |

звезда 星 н

スター о

б) правый край московского «Динамо» н, белый воротник н, (синий) чулок 青いストッキング н [卑] 青鞥派 о б)はこの結合以外は文法辞典の示すように不活動体である。

самородок に対して Ицкович は不活動体の例しかあげていないが、文法辞典では意味に応じて「天才児」活動体、「自然鉱」不活動体としている。

Шар「ビリヤードの球」は動物を指さないが、話し言葉では専門家や愛好家は活動体扱いをする(Валгина:151)というのは示唆的である。

2.動物の呼び名も活動体扱いをする。

※ダンス、踊りの名前は特別である。(Русская грамматика:464) は伝統的な舞踊名を活動体として扱う танцевать,гопака,казачка,камаринского,трепака が、ヨーロッパ由来のそれは不活動体としている:танцевать вальс,полонез,фокстрот。しかし、一般的に現代では不活動体に扱う傾向が現れている(Ицкович:87)。

※поступить,произвести,вступить+v+活動体複数形で別の状態への変化を表す時:идти в гости(Валгина:150)。ここでは主格に等しい対格形が用いられる。

以上の典型例をまとめたのが下の表である。

名詞	活動体扱い	不活動体扱い	
краб	生物,単数	食材	海の生物 不慣れ
рак	生物、食材		川の生物 馴染み
пиявка	生物	医療手段	人との関わり
микроб	専門書、専門家	一般人、日常語	専門家、非専門家
микроорганизм		Организм の影響	形態の影響
робот	人造人間, 自動機械	(自動機械)	時代による変化
кукла	人間の意味	人形の意味	指示物による分化
народ		人々	人を表す集合名詞
призрак	幽霊	幻	非生物の活動体化
нос	人の意味	鼻	一時的な意味

2 では、以上から何が読み取れるであろうか。表を参照されたい。Ицкович は次の1)2)3)の結論に達している (Ицкович:87)。1)部分的、周辺のながら活動体・不活動体の対立を現代の言語意識に近づける傾向が現れる。2)活動体のカテゴリーとしての

意味は、不活動体の名詞が文脈上活動体の事物を表す場合でも、活動体の名詞が不活動体の事物を表す場合でも不活動体よりも強い。 3)現代の言語意識からは根拠のない活動体・不活動体の対立は、название живого предмета 対 название неживого предмета 活動物対不活動物の対立に収斂する傾向を強めている。ただし生物とは自ら移動する能力、自ら行動する能力 способный к самостоятельному, передвижению к самостоятельным действиям のあるものという意味である。だから植物は活動体・不活動体の対立では、不活動体に入る。

この結論は大筋においては正しいが、ここには言語外現実と言語内の区分の混同が幾分ある。1)の結論は、言語外現実において生物、無生物が言語内の活動体、不活動体に投影する傾向があるという謂であろう。確かに 19 世紀において不活動体とされた лицо「個人」が活動体とされ(Валгина:150)、ダンス名が不活動体とされるなどの例は多い。しかし、我々は言語外現実の区分が忠実に言語に投影されない例に注目したい。生物(名)でありながら不活動体とされる集合名詞 народ「人々」、生産的かつ成句的結合 идти в гости, играть в кошки-мышки、逆に робот が活動体とされる例、無生物 шар「ビリヤードの球」が愛好家には活動体にされ、微生物を専門家は活動体、非専門家は不活動体にする事実などがある。ここでは言語外現実の言語化に際してある制約が働くのである。この制約、枠組みこそが活動体・不活動体名詞全体を束ねる言語内の「意味」である。その「意味」、枠組みとは、不活動体=非能動性(集合性、抽象性)対活動体=能動性(個別性、具体性)となろう《5》。こう捉えると 3)の結論では処理できなかった народ が不活動体、動物名や普通名詞を用いた結合 играть в кошки-мышки, играть в казаки-разбойники に対して、固有名詞起源の名詞を用いた場合活動体扱い играть в чапаевцев になる(Шелякин:44)理由も判明する。上の成句的結合に対する歴史的な解釈《6》は現代ロシア語におけるニュアンスをなにも説明してくれないが、我々の解釈ではこれらは「集合的な状態を意味する」となり、母語話者の感覚と一致する(Шелякин:44)。歴史が現代語の枠の中で意味付けを受けるのである。

3 さらに Ицкович やその他の研究者には形態論と統語論の混同も幾分ある。たしかにこれまで見たように形態論的な研究は語の範囲では一定の成果をあげている。しかし成果を形態論を超えて統語論の領域にまでそのまま及ぼすべきではない。このカテゴリーは統語論との関連で十分に研究されていないのである。そのため従来の研究は先にみた Чехов の例や文例①⑩⑪の解釈では有効に力を発揮しない。Исаченко も Ицкович (①) も定語的な関係代名詞 который が生格に等しい対格形をとるという一事から先行詞を活動体としている(Исаченко:67)。

⑩ Но этот народ он не считал тем, настоящим..., которого все любят, жалеют и единодушно желают ему счастья. (М.Горький:《Жизнь Клима Самгина》, т. I.).

⑪ И он состарился один со своей второю старухой и видел, как его оставляют силы и подходит злая, бесприютная дряхлость. Они стояли одинокие, как стоят в степи две сиротливые елки, которых бьют отовсюду жестокие метели

(В.Г.Короленко:《Сон макара》).

しかし、語形は言語が定めるが、ある制約下でありながらも語の結合法は個人の自由裁量に任されている。上の例では従属節中の意味が関係代名詞の形の選択に影響しているのである。我々が記したコメントから（例えば、③-⑥⑧⑩⑫-⑭）も、名詞の対格形の選択には動詞、名詞などの意味が影響することが見て取れよう。だから関係代名詞の形態一つから、先行詞の活動体・不活動体を決定するわけにはいかないのである。

こうして形態論のレベルだけでなく、統語論的な視点、文体論的な視点の研究が必要になってくるのである。そしてそのような視点からの研究はロシア語のより根源的な問題の解明にもつながる可能性を秘めている。

そのような問題の一つが態の問題である。ロシア語の-ся動詞による受動文では、主語の位置においては活動体名詞が排除されると通説はいう。しかし、活動体を主語とする下のような文は決して稀ではない。

Будущие чемпионы готовятся в спортивной школе опытным тренером.

ただし、このような受身文の主語や述語（動詞）には様々な制約があり、その制約は私見では活動体・不活動体に関係するのである（中澤:90-106）。

さらに格構造の問題もその一つである。格の組織には一般に主格・対格構造、能格構造などがある（角田:30）。言語類型論、歴史文法の仮説によれば、原インドヨーロッパ語においては、文ははじめ **активный строй** 能動構造であり、その後主格・対格構造に移行した。その移行の過程で活動体・不活動体の範疇が成立した。その際、能動構造時代における基本文型は、**активный-неактивный** 能動（活動）体-非能動（不活動）体の区分を基準として分類されている（Степанов:46）。このように活動体（人間）・不活動体（非人間）の区分は統語法に直接影響してくるのである。このような視点に立てば、形態論の立場から否定された（Виноградов :71-92）の人間名詞のクラスの考えもまた異なる意味を持つてくる可能性がある。

4 以上から、活動体・不活動体のカテゴリーとは我々のいうところの能動性・非能動性の対立であるといえよう。このカテゴリーは形態論的な研究にくわえて、統語論、文体論的に厳密な検討が必要である。その検討については別の機会に譲りたい。

注 本文中の<>は注を示す。

1. Чехов の作品は 1898 年の作品ながら、インフーマント（モスクワ出身のロシア語教師 3 名）によれば、「不細工な顔をした男」の意味では **этого мурло** の結合は自然であるという。
2. 拙稿の例文は我々が集めたもの以外に、Ицкович を初め文献リストに挙げた研究者の資料を援用したが、とくに必要がない限りその都度断らなかった。
3. Ицкович は比喩的とするが、比喩と多義性の峻別は拙稿の趣旨ではないので並列した。
4. 文法辞典では変化型の一つ一つに注記をつけるので、これは総語数ではない。
5. さらに活動体には「情動」の要素もある。шар でみるとおり、人間が対象を個別的、具体的で身近に感ずれば感ずるほど対象は活動体として扱われる傾向がある。ともに

死人でありながら、解釈が異なる мертвец、труп も参照されたい。Wierzebicka A. (Степанов Ю.С.:63) によると человек は тело + дух である。мертвец 「死者、死んだ人」 は тело + дух、で труп は тело 「死体、軀、死んであるもの」と解釈できる。
6.文献の(Иванов:270-273)に活動体・不活動体形成の歴史が記されている。

文献

- Аникина А.Б., Калинина И.К. Современный русский язык. Морфология. М., 1983.
- Булаховский Л.А. Курс современного русского литературного языка, т.1. Киев, 1952.
- Валгина И.С., Розенталь Д.Э., Фомина М.И. Современный русский язык. М., 1987.
- Виноградов В.В. Русский язык, М., 1947.
- Грамматика русского языка, т.1. Изд-во АН СССР. М., 1952.
- Граудина Л.К., Ицкович В.А., Катлинская Л.П. Грамматическая правильность русской речи. М., 1976.
- Гужва Ф.К. Современный русский литературный язык. часть 2. Киев. 1979.
- Зализняк А.А. Грамматический словарь русского языка. М., 1987.
- Золотова Г.А. Коммуникативные аспекты русского синтаксиса. М., 1982.
- Иванов В.В. Историческая грамматика русского языка. М., 1990.
- Исаченко А.В. Грамматический строй русского языка в сопоставлении с словацким. Морфология. Братислава. 1965.
- Ицкович В.А. Очерки синтаксической нормы. М., 1982.
- Лекант П.А. Современный русский литературный язык. М., 1996.
- Лопатин В.В., Милославский И.Г., Шелякин М.А. Современный русский язык. Теоретический курс. М., 1989.
- Рожкова Г.И. Очерки практической грамматики русского языка. М., 1978.
- Розенталь А., Теленкова М. Практическая стилистика русского языка. 1976.
- Русская грамматика, т. I, Изд-во АН СССР. М., 1980.
- Степанов Ю.С. Индоевропейское предложение: лексические вхождения в структурные схемы // ВЯ. 1988. №1.
- Шелякин М.А. Справочник по русской грамматике. М., 1993.
- Янко-Триницкая Н.А. Русская морфология. М., 1989.
- Keenan, E. L. and Comrie B. 1977. Noun phrase accessibility hierarchy and universal grammar. Linguistic Inquiry. 8.
- Wierzebicka A. Semantic primitives. Frankfurt-am-Main, 1972.
- 角田太作. 1991. 世界の言語と日本語. 東京: くろしお出版.
- 中澤英彦 「受動的意味の -ся 動詞と活動体名詞」 『ロシア語研究』 №4. 1991.

When Causatives mean Passive in Mandarin Chinese

MOCHIZUKI Keiko

0. Introduction

It is often noted that causative markers *rang/jiao* in Mandarin can function as passive markers¹. However, the passive reading is possible only under certain restricted environments. Consider the following sentences.

- (1) a. wo rang ta da / la wo.²
I RANG he hit / pull me
'I had him hit / pull me.' (Causative)
- b. wo rang ta da le.
I RANG he it Perf.
'I was hit by him.' (Passive)
'I had him hit (someone).' (Causative)
- c. wo rang ta la le.
I RANG he pull Perf.
'I had him pull (something).' (Causative)
- (2) a. wo rang ta jian wode toufa.
I RANG he cut my hair
'I had him cut my hair.' (Causative)
- b. wo rang ta jian le wode toufa.
I RANG he cut Perf. my hair
'I had him cut my hair.' (Causative)
'I had my hair cut by him. = I was affected by his cutting of my hair.' (Passive)
- c. wo rang ta jian le Lisi de toufa.
I RANG him cut Perf. Poss. Hair
'I had him cut Lisi's hair.' (Causative)

In (1) the passive reading is available, when the postverbal object is empty and refers

¹ There is another passive marker *bei*, which is used in passive only. According to Hashimoto (1987,1988), *bei* developed from the transitive verb meaning 'undergo' in Archaic Chinese, whereas *rang/jiao* developed from their original causative use meaning 'cause/let' through a process of language contact of Mandarin with Altaic languages at a later stage.

² *Rang* and *jiao* developed from different sources of lexical verbs meaning 'allow' and 'tell/order' respectively. However, they are neutralized in the causative and passive usage. Henceforth I will only use *rang* in examples for simplification. At least for all examples in this paper these are interchangeable, although these are different in that *jiao* only takes an animate NP as a causee while *rang* can take all kinds of NPs as its causee.

to the subject, as seen in (1b). However, in the case of the verb ‘pull’, even if the postverbal position is empty, no passive reading is available, compare (1b) and (1c). In (2) the passive reading is possible only if a) there is a perfective maker ‘le’ existing, as shown in the contrast between (2a) and (2b), and b) there is an ‘aboutness’ relation (an inalienable possession) between the object and subject, as seen in the contrast between (2b) and (2c). That is, contrary to (2c), the object ‘hair’ in (2b) has to be interpreted as belonging to the subject.

This observation suggests that the *rang* construction receives a causative reading basically, but receives a passive reading only under certain restrictions. Then the question arises as to under what kind of restrictions is a passive reading available in *rang* construction.

Traditionally, *rang/jiao* are treated as elements to form ‘jian-yu-shi’³ (‘pivotal constructions’) where the NP following *rang/jiao* functions both as an object of *rang/jiao* and as a subject of the embedded clause as follows:

(3) [_s *rang/jiao* [_s NP [_{vp} V NP]].⁴

Now consider (2b), which is ambiguous in causative/passive reading. In causative it means ‘I caused the event that he cut my hair’, whereas in passive it means ‘I was affected by the event that he cut my hair’. Obviously, the matrix subjects in both sentences have different interpretations; it is a Causer in the former, but an Experiencer in the latter. Both sentences are in common in that they involve two events, but different in the relation between the matrix subject and the second event⁵:

(4) [_{EVENT1} I *rang* [_{EVENT2} he cut my hair]].

- a. Causative: Causer(I) → Event [he cut my hair] (→: the direction of
b. Passive: Experiencer (I) ← Event [he cut my hair] affecting)

If we apply structure (3) to (4), the questions arise as to a) why *rang/jiao* assign different theta roles to a position in the same structure, and b) what factor plays a role in the shift of theta roles in the argument structure.⁶

Furthermore, consider the contrast between (1a) and (1b) again. The obvious distinction between them is the gap in the object position, which appears in a passive reading but not in a causative reading. Most importantly, the gap is co-referential with the matrix subject. Does this mean that the passive is derived from the causative by an NP

³ ‘jian-yu-shi’: a form with one word having two grammatical functions/roles (Chao 1968 among others).

⁴ See Shen (1996) for a different approach. According to him, *rang/jiao* are ‘lian-dong-shi’ (serial verb construction) verbs with the structure [_{vp} [_{vp} *rang* NP] [_{vp} V NP]].

⁵ See Washio (1997, p.59) for analyzing the have-construction in English along the same line.

⁶ As pointed out by Washio (1993, p.68) a similar shift of theta-roles is also seen in Japanese. However, in contrast to Mandarin, in Japanese the causative and passive are morphologically distinguished (-(s)ase vs. -(r)are). In other words, in Japanese the shift of theta-roles is morphologically licensed, whereas it is not in Mandarin.

i) John-wa Mary-ni kami-o kir-aseta. ii) John-wa Mary-ni kami-o kir-areta.
-Top. -Dat. hair-Acc. cut-Caus. -Top. -Dat. hair-Acc. cut-Pass.

‘John caused the event that Mary cut his hair’ ‘John was affected by the event that Mary cut his hair.’

movement from the object, as is always suggested for the English *be*-passive? However, as shown in (2b), even when no gap is in the object position, the passive reading is still available.

The purpose of this paper, therefore, is to explore these questions, summarized as follows:

- a) Under what conditions can a causative have a passive reading?
- b) What is the syntactic structure of *rang/jiao* in Mandarin? And how can the semantic interpretation be mapped onto the structure with respect to the ambiguity of causative/passive?
- c) What is the mechanism triggering the passive in the *rang/jiao* construction? Is it possible to explain the difference between the passives with the postverbal gap and the ones without the postverbal gap in a uniform fashion?

In section 1, I will show what conditions constrain the passive reading in the *rang/jiao* construction on a descriptive level. Then, in section 2 and 3, I will show how the ambiguity of the causative and the passive can be represented in the syntactic structure of the *rang/jiao* construction. I will argue that causative and passive basically have the same syntactic structure, and the different interpretation between them is due to a null Operator movement from the empty object, as suggested by Huang (1997) for *bei*-passive in Mandarin, involved in the passive but not in the causative. Finally, in section 4, I will relate the analysis of null OP movement to the restrictions discussed in section 1, and argue that these restrictions in fact come from the requirement of a structure involving the null OP movement.

1. Restrictions for Passive Readings in *Rang/Jiao* Construction

1.1 Empty Object Position

Consider the following contrasts.

- (5) a. Zhangsan rang Lisi sha le.
 RANG kill Perf.
 ‘Zhangsan was killed by Lisi.’

- b. Zhangsan rang Lisi sha le Wangwu/ ta / ziji.
 RANG kill Perf. him self
 ‘Zhangsan had Lisi kill Wangwu/ him/ himself.’

- c. Zhangsan rang Lisi lai le / bian -de geng piaoliang.
 RANG come Perf. become more beautiful
 ‘Zhangsan had Lisi come/ become more beautiful.’

Let us ignore the cases of indirect passives as in (2b) above at this moment, which will be discussed later. Compare (5a) with (5b). Assuming both have the same structure, it must be agreed that there is a gap in the object position of (5a). So, the difference between a

causative and a direct passive is that there is an empty object in the latter but not the former. In (5b) even an anaphoric pronoun *ziji* ‘-self’ that can refer to the matrix subject appears in the postverbal position, however a passive reading is still unavailable. In (5c) since ‘come’ is an intransitive verb and ‘become’ requires an adjective as its complement, there is no empty object licensed and only a causative reading is possible.

1.2 the Semantic Properties of Verbs

Compare the following sentences.

- (6) a. ta rang wo sha le, (* dan mei si).
 he RANG I kill Perf. but Neg. die
 ‘He was killed by me (* but he didn’t die.)’

- b. ta rang wo la le (dan mei dao).
 he RANG I pull Perf. but Neg. fall
 ‘He had me pull (something).’
 * ‘He was pulled by me (but he did not fall down).’

- c. ta rang wo la-dao le (*dan mei dao) .
 he RANG I pull-fall Perf. but Neg. fall
 ‘He was pulled by me and fell down (* but he didn’t fall down) .’

The contrasts show that only verbs that implicate the resultative/ accomplished /achieved state of an action can license the passive reading of a *rang* construction. For example, in (6b) the verb ‘pull’ is an active verb that does not implicate the result of the action, therefore, the sentence has a causative reading only.⁷

The same restriction can apply to the indirect passive.

- (7) a. wo rang ta jian toufa (dan ta mei jian).
 I RANG he cut hair but he Neg. cut
 ‘I had him cut (my) hair (but he didn’t cut it).’

- b. wo rang ta jian le toufa (* dan ta mei jian).
 I RANG he cut Perf. hair but he Neg. cut
 ‘I had my hair cut by him (*but he didn’t cut it).’

Perfective aspect ‘le’ plays a role in this case, since it implicates the accomplishment of the action . Thus, (7a) without perfective ‘le’ attached to the embedded verb is interpreted only as causative.

⁷ See Sasaki (1997) for a similar prediction, and Toshima (1988, p. 102-104) for the same restriction for *bei* passive in Mandarin.

However, not all of the verbs that denote a resultative/accomplished /achieved state can license the passive reading, for example:

- (8) a. zhe shuang xie rang wo chuan-po le. (zhe shuang xie po le)
 this pair shoes RANG I wear-broken Perf. this pair shoes broke Perf.
 'This shoes were worn out by me so that they are torn/broken. (These shoes broke.)'
- b. *zhe shuang xie rang wo chuan-guan le. (wo xiguan le)
 this pair shoes RANG I wear-getting used to Perf. I get used to Perf.
 'These shoes have been well worn into by me. (I got used to them)'

The difference between these two Resultative Verb Compounds (henceforth, RVC) is that in *chuan-po* (wear-broken) it is the theme that is predicated by the resultative state (broken), hence, (8a) entails 'the shoes broke'. On the other hand, in *chuan-guan* (wear-getting used to) it is the agent /experiencer that is predicated by the resultative state (getting used to), therefore, (8b) entails 'I got used to the shoes'⁸. Therefore, only the verbs denoting a resultative state of the theme can license a passive reading in the *rang/jiao* construction.

One of the important properties for these verbs discussed above is that they form a causative/ergative alternation. Given the ergative is an intransitive counterpart of the causative and always denotes a resultative state of an action, it is natural to say that the causative verbs with its intransitive counterpart must implicate a resultative / accomplished /achieved state. Compare the following pairs:

- (9) a. wo yijing sha le ta.
 I already kill Perf. him
 'I have already killed him.'
- b. ta yijing sha le.
 he already kill Perf.
 'He has already been killed.'
- (10) a. wo yijing la le ta.
 I already pull Perf. him
 'I have already pulled him.'
- b. ta yijing la le.
 he already pull Perf.
 'He has already pulled (something). / * He has already been pulled.'
- (11) a. wo chuan-po le zhe shuang xie.
 I wear-broken Perf. this pair shoes
 'I wore these shoes and caused these shoes to be broken.'
- b. zhe shuang xie chuan-po le.
 this pair shoes wear-broken Perf.
 'These shoes are worn out (and torn).'

⁸ See Toshima (ibid.) and references cited there for more detail in RVCs in Mandarin.

- (12) a. wo chuan-guan le zhe shuang xie.
 I wear-getting used to Perf. this pair shoes
 'I wore and got used to these shoes.'
- b. *zhe shuang xie chuan-guan le.
 this pair shoes wear-getting used to Perf.
 'These shoes were worn and got used to.'

The active verbs such as *la* 'pull' in (10) and the agent-predicating RVCs like *chuan-guan* 'wear-getting used to' in (12) cannot have the ergative alternation, whereas the causative verbs like *sha* 'kill' in (9) and the causative RVCs like *chuan-po* 'wear-broken' can⁹.

To conclude, another restriction under which the *rang/jiao* construction can be licensed as the passive is that the verb in the embedded clause must implicate the resultative state /accomplished/achieved state. Generally, these verbs have the ergative alternation and hence are classified as causative verbs or verb compounds¹⁰.

1.3 the Effect of the Inclusive

Consider the following examples.

- (13) a. wo rang ta jian le Zhangsan de toufa.
 I RANG he cut Perf. Poss. Hair
 'I had him cut Zhangsan's hair.'
- b. wo rang ta jian le (wode) toufa.
 I RANG he cut Perf. (my) hair
 'I had him cut my hair.'
 'I was affected by his cutting of my hair.'

⁹ Both the causative verb and the causative RVCs discussed here are formed in lexicon, hence are called 'lexical causative', contrary to the *rang* construction, which is formed in syntax, hence 'productive causative'. For the distinction between the lexical and the productive causative see Washio (1997, p. 9). Cheng, Huang, Li, Tang (1997a) argue that the causative RVCs are formed in lexicon in Mandarin but in syntax in Taiwanese, based on the evidence of definiteness of the postverbal NP.

¹⁰ The so-called 'reason causative' (Sasaki, 1997, p.137) marker *shi* 'cause' never can be used in the passive, contrary to *rang/jiao*. This might be due to the fact that *shi* never takes an agentive subject in the embedded clause:

- i) wo shi ta chuan-guan zhe xie. (Active RVC)
 I SHI he wear-getting used to this shoes 'I caused him to wear and get used to these shoes.'
- ii) *wo shi ta chuan-po zhe xie. (Causative RVC)
 I SHI he wear-broken this shoes '*I caused him to wear and have these shoes broken.'
- iii) wo shi ta chijing. (Intransitive)
 I SHI he surprised 'I caused him to be surprised.'
- iv) *wo shi ta sha ren. (Causative)
 I SHI he kill people 'I caused him to kill people.'

However, the distinction between *shi* and *rang/jiao* in the causative interpretation needs a further exploration.

(13a) has only the reading of the ‘exclusive causative’, whereas (13b) is ambiguous in the ‘inclusive causative/ passive’.¹¹ (13a) is exclusive in the sense that the matrix subject (Causer = I) is not involved in the second event [he cut Zhangsan’s hair]. On the other hand, (13b) is inclusive through a possessive relation: [EVENT₁ I caused [EVENT₂ he cut *my* hair]]. Obviously, a passive reading is licensed in the *rang* construction only if there is an inclusive relation (affectivity) so that the matrix subject is affected by the caused event.¹²

Furthermore, not only is the indirect passive like (13b) inclusive, but the direct passive in the *rang* construction must also be inclusive, for example:

- (14) ta rang wo sha le.
 he RANG I kill Perf.
 ‘He was killed by me.’

In (14) the matrix subject is involved in the second event through the referential relation between it and the gap in the second event: [he_i rang [EVENT₂ I kill e_i]].

All passives must be inclusive, but not necessarily vice versa. For instance, in (15) below, the inclusive relation is confirmed, nevertheless the passive reading is unavailable.

- (15) ta rang wo sha le ta.
 he RANG I kill Perf. him
 ‘He had me kill him.’
 ‘* He was killed by me.’

(15) is ruled out in a passive reading due to its violation of another constraint (at least, for the direct passive) that requires an empty gap in the postverbal position, as mentioned above.

1.4 Summary

To summarize the discussion so far, the passive reading of the *rang/jiao* construction is available only if the following conditions are satisfied:

- a) Structurally, there is an empty gap in the postverbal object position, at least for the direct passive¹³.

¹¹ For ‘exclusive’ vs. ‘inclusive’ in English *have*-construction and French, Korean and Japanese see Washio (1993, 1997).

¹² According to Washio (ibid.), languages differ in whether an exclusive passive is allowed or not. For example, Japanese allows an exclusive passive, so-called ‘adversity by the exclusive’:

i) John-wa Mary-ni Tom-no kodomo-o home -rare -ta.
 -Top. -Dat. -Gen. Child-Acc. praise- Pass- Past

‘John suffered by Mary’s praising of Tom’s child (not his own child).’

¹³ This condition, at this moment, applies to the direct passive only, although I will show in the following discussion that indirect passive also involves an empty object position. However, it is different from that of the direct passive, being preverbal rather than postverbal.

- b) Semantically, the verb selected by *rang/jiao* implicates a resultative / accomplished / achieved state which predicates the patient/theme. Generally, these are verbs that can alter with their ergative forms, and the ergative always expresses the resultative /accomplished/achieved state of a patient/theme.
- c) Pragmatically, there is an inclusive relation between the matrix subject and the second event denoted by the embedded clause. An indirect passive is inclusive through the aboutness relation such as possession, whereas the direct passive is inclusive through the co-referentiality between the subject and the postverbal gap.

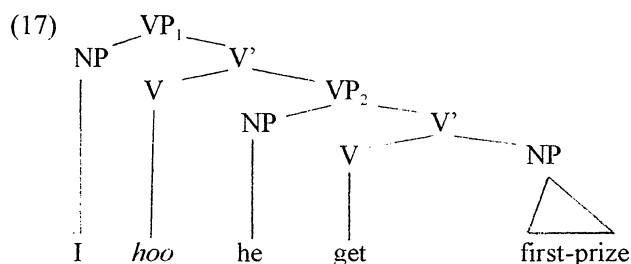
In the following discussion, I will show how these restrictions are related to the syntactic structure of the *rang/jiao* construction, and especially how the ambiguity of a causative/passive reading can be expressed in the structure.

2. the Structure of the Causative *rang/jiao* Construction

As mentioned in the introduction, *rang* and *jiao* are traditionally treated as functional verbs (so-called causative '*jian-yu-shi*'(pivotal construction) verbs), which select an external NP subject and an internal clause. The NP following *rang/jiao* functions both as an object of *rang/jiao* and as a subject of the embedded clause. This analysis implies that *rang/jiao* construction is bi-clausal.

In analyzing *hoo* causative construction in Taiwanese, Cheng, Huang, Li, Tang (henceforth, C.H.L.T, 1997 b, p.4-5) suggest that causative structure in Taiwanese is a bi-clause, in which the causative verb semantically selects (s-selects) an event/situation/state as its complement. This eventuality is syntactically realized as a VP, given a VP is the 'core' clause following the VP-internal Subject Hypothesis. Therefore, a causative sentence (16) has the structure (17) below:

- (16) wa hoo i de dei-mia.¹⁴
 I HOO he get first-prize
 'I had him get the first prize.'



¹⁴ *Hoo* is grammaticalized from a lexical verb meaning 'give'. In modern Taiwanese it can function as a transaction /causative verb as well as a passive marker. For a uniform analysis of these different functions of *hoo*, see C.H.L.T (ibid.)

Following this analysis, I assume that the *rang/jiao* causative in Mandarin is also bi-clausal. However, being different from *hoo* in Taiwanese, the clause selected by *rang/jiao* is not a VP, but an IP (or AspP, according to the ‘split-IP hypothesis’). In the following sections, I will show some evidence which supports that *rang/jiao* selects an IP as its complement.

2.1 Aspect and Causative/Passive Ambiguity

As mentioned in 1.2, perfective aspect denoting the accomplishment of an event plays a role in interpreting the ambiguity of the *rang/jiao* construction (see (7))¹⁵. The contrast below shows further evidence.

- (18) a. wo bu rang ta da (wo).
 I Neg. RANG he hit (me)
 ‘I won’t let him hit me.’

- b. wo mei rang ta da.
 I Neg. RANG he hit
 ‘I didn’t let him hit (someone).’
 ‘I wasn’t hit by him.’

The difference between the negatives *bu* and *mei* is that the latter denotes an accomplishment but the former does not. That is why (18a) with *bu* can receive only a causative reading.

Furthermore, not only can the perfective occur in the *rang/jiao* construction but also with other aspect markers¹⁶:

- (19) wo meitian dou rang ta guangshu zhe.
 I everyday all RANG he bind Durative
 ‘I am bound by him everyday.’

2.2 Pronominal Reference

Consider pronominal references in the *rang/jiao* construction.

- (20) a. Zhangsan_i sha le *ta_i / ta-ziji_i.
 kill Perf. him / himself
 ‘Zhangsan killed himself.’

¹⁵ There is no perfective marker which corresponds to perfective ‘le’ in Taiwanese, where the accomplishment of an event is expressed mainly by resultative compounds:

i) wa hoo i ga taomen. ii) wo hoo i ga -diao taomen.
 I HOO he cut hair I HOO he cut-away hair
 ‘I had him cut my hair.’ ‘I was affected by his cutting of my hair.’

¹⁶ Toshima (1988, p.102) argues the same phenomena for the *bei* passive in Mandarin.

- b. Zhangsan_i rang Lisi_j sha ta_{i/*j}.
 RANG kill him
 ‘Zhangsan had Lisi kill him (Zhangsan).’
- c. Zhangsan_i rang Lisi_j sha ta-ziji_{*i/j}.
 RANG kill himself
 ‘Zhangsan had Lisi kill himself.’

Assuming that a pronoun is free while an anaphor must be bound in a certain local domain, such a local domain in Mandarin is an IP, as seen in (20a). The contrast between (20b) and (20c) shows that the clause selected by *rang* must be an IP.

2.3 Quantifiers in the Causative Construction

Let us consider the case where the interpretation of a quantificational scope is ambiguous in the *rang/jiao* construction :

- (21) mama rang haizi chi liang-ci yao.
 mother RANG child eat two times medicine
 a. ‘It happened twice that the mother caused her child to have medicine.’
 b. ‘The mother caused her child to have medicine two times.’
- (22) mama gei haizi chi liang-ci yao.¹⁷
 mother GEI child eat two-times medicine
 ‘It happened twice that the mother caused her child to have medicine.’

(21) is ambiguous since the quantifier can modify both the matrix clause (the reading of (21a)) and the embedded clause (the (21b) reading). On the other hand, (22) can only have the quantifier modify the matrix clause. The scope interactions are shown as follows:

- (23) a. [two times [the mother *rang* [her child have medicine]]. (21a)
 [the mother *rang* [two times [her child have medicine]]. (21b)
 b. [two times [the mother *gei* [her child have medicine]]. (22)

According to Sasaki (1997, p.141), the contrast between *rang/jiao* and *gei* comes from the ‘stronger properties’ of *gei* as a lexical verb. In terms of structure, it is equal to saying ‘what the complement clause *rang/jiao* selects is different from what *gei* selects’. In the former, it is an IP; therefore, the quantifier can adjoin to the embedded IP to get an additional reading. In the latter, it is a VP; therefore, no intermediate position can be adjoined by the quantifier to get the other interpretation. In other words, the former is a bi-clause, while the latter is a mono-clause.

¹⁷ *Gei* in Mandarin with the original meaning of ‘give’ functions as a transaction /causative verb. Its causativity is called *sousa-shieki* (operational causative) (Sasaki, 1997, p.141). This paper will not consider the differences between *gei* and *rang/jiao* in detail. See Sasaki for detailed discussion.

2.4 Negatives and Modals in the Causative Construction

Some negatives and modal verbs can occur in the *rang/jiao* construction with the reading of the indirect imperative (Yang, 1989, p. 65-66; (24a,b) from p. 65, (24c) from p.88):

- (24) a. jiao ni bie qu, ni pian yao qu.
JIAO you forbid go you insistently want go
'I told you not to go, but you insisted in going.'
- b. rang ni bu gao ba, bu xing, rang ni xuexi ne, ni you bu yuanyi.
RANG you Neg. do Prt. Neg. can RANG you learn Prt. you again Neg. want
'I can't just let you not do this, but you won't study even if I tell you to.'
- c. shuo da-sheng-dian, rang dajia neng ting-jian.
speak loudly RANG everyone can hear
'Speak loudly so that everyone can hear you.'

As pointed out in Yang (ibid., p.66), there is no obvious distinction between the causative and the indirect imperative in Mandarin. Therefore, (24a) and (24b) above, although involving causative *rang* and *jiao*, are imperative. However, even if the *rang/jiao* construction is ambiguous in a causative/imperative reading, it is preferable to treat them in a uniform way, namely, *rang/jiao* as a main verb selecting an IP as its complement.

2.5 Indefinite Subject in the Causative Construction

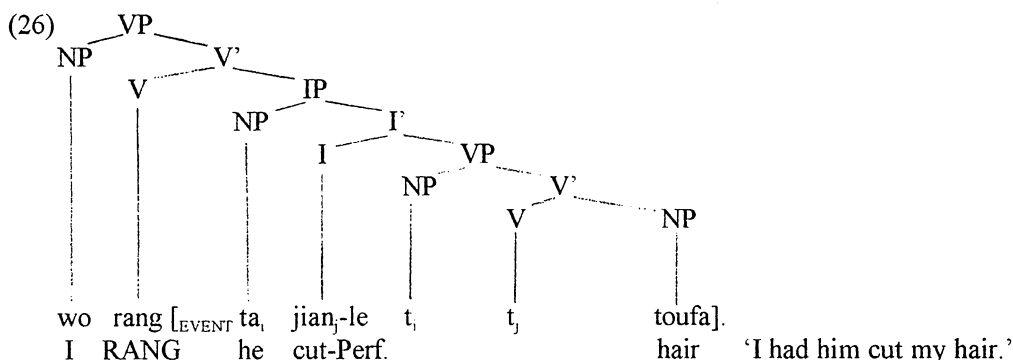
Compare the following sentences.

- (25) a. *(you) yi-ge ren lai le.
have one man come Perf.
'A man came.'
- b. Zhangsan shuo *(you) yi-ge ren lai le.
say have one man come Perf.
'Zhangsan said that a man came.'
- c. Zhangsan rang (*(you) yi-ge ren lai le.
RANG have one man come Perf.
'Zhangsan had a man come.'

As seen in (25a) and (25b), in Mandarin an indefinite NP cannot be in a subject position without licensing of the verb *you* (have). This seems to argue against the assumption that the embedded clause in the *rang/jiao* construction is an IP, since the indefinite NP can occur in the embedded subject position without licensing by the verb 'have', as in (25c). However, the problem will disappear, if we assume that in this case the indefinite is

licensed by the causative verb directly, and IP is not a barrier for the licensing relation. On the other hand, a CP is a barrier, therefore, in (25b) the verb ‘say’, selecting a CP, cannot govern onto the embedded subject, and the insertion of the licenser verb ‘have’ is necessary.

As a conclusion, I claim that *rang/jiao* in the causative is a main verb semantically selecting an eventuality as its complement, which is syntactically realized as an IP:



3. Structure of the Passive *Rang/Jiao* Construction

As mentioned in 1.1, the structural restriction for the *rang/jiao* construction in receiving a passive reading is the existence of the gap in the postverbal position. So far there have been two ways to treat this empty position in generative studies of Chinese syntax. One assumes that the gap is an NP trace caused by an NP movement. Another assumes that the gap is not a trace, but a deleted, phonetically unrealized NP through its identity with the matrix subject¹⁸.

In this section, I will show the problems caused by these two approaches, and suggest an alternative approach to solve these problems, following Huang (1997)’s analysis on the *bei* passive in Mandarin and C.H.L.T (1997b)’s analysis on the *hoo*-passive in Taiwanese.

3.1 Problems of the Previous Approaches

According to the movement approach, *rang/jiao* is a preposition taking the Agent NP as its complement, whose appearance dethematizes the subject and absorbs the Case-assignment properties from the verb, as in (27a). This causes the Caseless object to move to the subject position in S-structure to receive a Case, as in (27b):

- (27)
- | | | | | | | |
|-----------------|------------------------------|----------------|------|----------|--------------|------------------|
| | wo | rang | ta | da-shang | le. | |
| | I | RANG | he | hit-hurt | Perf. | |
| | ‘I was hit and hurt by him.’ | | | | | |
| a. D-structure: | [| e | RANG | he | hit and hurt | me] |
| b. S-structure: | [| I _i | RANG | he | hit and hurt | t _i] |

¹⁸ Hashimoto (1987,1988) are representative of the complementation approach.

Consequently, two points are crucial in the movement hypothesis: a) *rang/jiao* is not a verb, but a preposition, contrary to its causative counterpart, as discussed in 2. b) the whole sentence is a mono-clause.

On the other hand, the complementation approach assumes that *rang/jiao* is a main verb selecting a clause. The object in the embedded clause is obligatorily deleted through its identity with the matrix subject:

- (28) a. D-structure: [_{IP} I_i RANG [_{IP} he hit and hurt me_j]].
 b. S-structure: [_{IP} I_i RANG [_{IP} he hit and hurt e_i]].

Consequently, for this analysis a) *rang/jiao* maintains its verbal status, as in its causative counterpart, and b) the whole sentence is bi-clausal.

However, the following properties of the *rang/jiao* construction are problematic for both approaches¹⁹.

a) the obligatory empty object

- (29) a. Zhangsan rang Lisi da le.
 RANG hit Perf.
 ‘Zhangsan was hit by Lisi.’
 b. Zhangsan_i shuo Lisi da le *(ta_i).
 say hit Perf. him
 ‘Zhangsan said that Lisi hit him.’
 c. Zhangsan_i rang Lisi da le ta_i.
 RANG hit Perf. him
 ‘Zhangsan had Lisi hit him.’

The complementation approach cannot explain why the deletion of the object is obligatory in the passive, why the object is obligatory in (29b), where even the object is referred to the matrix subject. Furthermore, it cannot explain why the *rang* construction only receives a causative reading when the object is not deleted, as in (29c).

b) Subject-oriented adverbs

- (30) Zhangsan guyi rang Lisi da-shang le.
 intentionally RANG hit-hurt Perf.
 ‘Zhangsan intentionally got hit and hurt by Lisi.’

Similar to the get-passive and contrary to the *be*-passive in English, an adverb predicating the subject such as ‘intentionally’ can occur in the *rang/jiao* passive. This phenomenon leads to the conclusion that the subject is base-generated. The movement approach cannot explain this.

¹⁹See Huang (1997) and C.H.L.T. (1997b) for the same argument for the *bei* passive in Mandarin and the *hoo* passive in Taiwanese.

c) the Constituency of *rang/jiao* with the following NP

(31) a. * rang wo Zhangsan da-shang le.
 RANG I hit-hurt Perf.
 'It's me that Zhangsan was hit by.'

b. gen wo Zhangsan cong-bu shuo-hua.
 with me never talk
 'It's me that Zhangsan never talks with.'

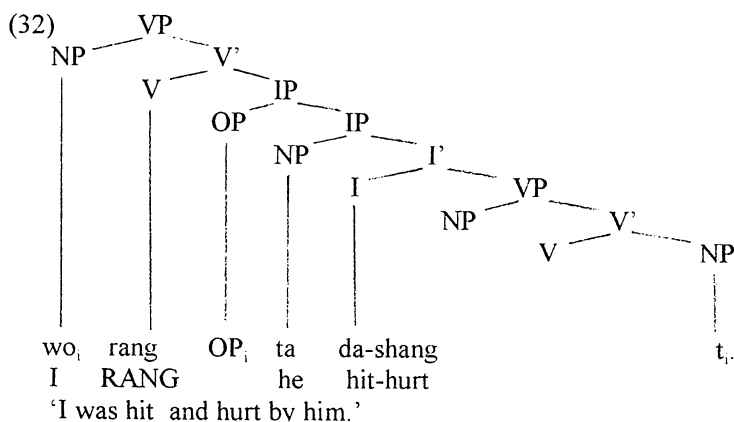
(31a) shows that *rang/jiao* is not a 'true' preposition, since the PP it heads cannot be preposed unlike ordinary PPs. Therefore, this is another problem for the movement analysis.

To summarize, theoretically the complementation approach to the *rang/jiao* passive might be preferable, since according to this approach, the passive structure can be treated as a parallel structure to the causative structure in that a) *rang/jiao* in both cases are all main verbs, and b) both are bi-clausal. However, on the other hand, the existence of an empty object in the passive predicts that there must be a movement involved in the *rang/jiao* passive.

An approach that can solve these problems is the Null Operator Movement, suggested by Huang (1997) following the proposal in Feng (1995).

3.2 *Rang/Jiao* Passive as Null OP Movement

According to the Null OP Movement approach, *rang/jiao* maintains the status of a main verb, which selects an external NP and an internal clause. Hence, parallel to the causative structure, the passive is also a bi-clause. The difference between them is simply that there is an empty object in the passive. In contrast to the canonical passive such as the *be*-passive in English, the empty object is an operator, which has to adjoin to an A'-position to get interpreted:



In (32) the empty operator in the object position adjoins to IP, where it is controlled by the matrix subject through the strong binding²⁰. Since the subject is base-generated, the problem seen in (30) disappears. Given that *rang/jiao* is not a preposition, the problem seen in (31) also disappears. Most importantly, the causative and passive in the *rang/jiao* construction can be captured in a uniform way. They differ from each other only in the status of the postverbal object.

Semantically, the null OP movement correlates to a lambda abstraction, in which the trace left by the OP turns to a variable bound by the OP. Since the OP is strongly bound by the matrix subject, the variable is co-referential with the subject. The semantic representation of (32) is as (33):

(32) I_i RANG [OP_i [he hit t_i]].

(33) I_x RANG [λ_x [he hit x]].

In the semantic representation, the OP is revealed as a lambda predicate, denoting a property. In other words, the null OP movement turns the embedded clause into a predicate denoting a property. Therefore, in this sense, the embedded clause functions as a secondary predicate, which combines with the causative verb *rang/jiao* to form a complex predicate. The complex predicate is a one-place predicate, which selects only an external NP argument. This precisely predicts the fact that the (direct) passive is always intransitive, with only an external argument.

To conclude, the causative and passive in the *rang/jiao* construction are common in that

- a) In both cases *rang/jiao* is a main verb, syntactically selects a NP subject and an IP complement,
- b) consequently, both are bi-clausal.

However, they are different in that

- a) syntactically, there is a null OP movement in the passive, but not in the causative,
- b) semantically, the embedded IP in the passive turns to a predicate through a lambda abstraction, denoting a property of the matrix subject, whereas the embedded IP in the causative is maintained as the internal argument of the causative verb, denoting a proposition,
- c) consequently, the causative contains a two-place predicate, whereas the passive contains a one-place predicate.

In the next section, I will show how this conclusion can be applied to the restrictions for a passive reading in the *rang/jiao* construction, discussed in section 1 and repeated as follows:

The *rang/jiao* construction can receive a passive reading if and only if the following conditions are satisfied:

²⁰ See Huang (1997, p. 11-14) and C.H.L.T. (1997b, p.37-40) for further evidence supporting A'-movement involved in Mandarin *bei* passive and Taiwanese *hoo* passive.

- a) there is an empty object,
- b) the embedded verb implies a resultative / accomplished /achieved state of an event,
- c) the subject is involved in the second event denoted by the embedded IP.

4. Null OP Movement and the Conditions on the Passive

4.1 Argument Structure

Consider the following examples.

- (34) a. wo rang ta da wo.
 I RANG he hit me
 'I had him hit me.'
 b. wo rang ta da le.
 I RANG he hit Perf.
 'I was hit by him.'

(34a) with an overt object has a causative reading, while (34b) with an empty object receives a passive reading.

Following the discussion so far, the syntactic structures and semantic representations of the two sentences are as (35) and (36) respectively.

- (35) (=34a.) a. [_{IP} I RANG [_{IP} he hit me]].
 b. RANG (I, EVENT [he hit me]).
- (36) (=34b) a. [_{IP} I_i RANG [_{IP} OP_i [_{IP} he hit t_i]]].
 b. (RANG (λ_x [he hit x])) (I_{=x})

In the causative case (e.g.(35)), RANG is a two-place predicate, and the embedded IP is a proposition argument, denoting an EVENT. In the passive case (e.g.(36)), the null OP movement turns the embedded IP into a predicate denoting a property through the lambda abstraction, and this second predicate combines RANG to form a complex predicate. Given that the internal argument has been lost, there is only the external argument existing.

Furthermore, because of the different argument structures they have, RANG in (35b) and (36b) receive different interpretations. In the causative, it is interpreted as a 'cause', which selects an external Causer and an internal Event argument. In the passive, it combines with the lambda predicate to form a complex predicate with the interpretation of 'end up with the property of being an x', in which 'the property of being an x' is denoted by the lambda predicate. The whole complex predicate, in turn, selects an external Experiencer argument²¹. Thus, (34a) and (34b) have the following distinct interpretations respectively:

²¹ As pointed out in C. H. L. T. (1997b, p.53 , note 17), it has been recently agreed among linguists that theta-roles are descriptive labels only, and their nature is derivative from the event structure which they are involved in.

(37) a. CAUSE (CAUSER _{=I}, EVENT _{= [he hit me]})
 ‘I caused the event that he hit me.’

b. (END UP with (the PROPERTY of being x _[he hit x]) (EXPERIENCER _{=I})
 ‘I ended up with the property of being x such that he hit x.’

Therefore, the empty object is crucial for a passive reading in the sense that it is both quantificational and anaphoric²². It is quantificational, therefore it can undergo operator raising to change the argument structure. It is also anaphoric, therefore it can undergo strong binding to ensure the co-referential relation between it and the Experiencer subject.

This, in turn, explains why every sentence with an overt object (ignoring the indirect passive at this moment), be it an anaphoric pronoun or a quantificational NP, must receive a causative reading:

(38) wo rang ta da wo/ yi-ge ren.
 I RANG he hit me/ a man
 ‘I had him hit me / a man.’

In (38) the pronoun ‘I’ is anaphoric, but it is not an operator, therefore no OP raising can occur. Similarly, an existential phrase ‘ a man’ is quantificational, but not anaphoric, therefore it cannot refer to the matrix subject²³.

4.2 Causative / Ergative Alternation

Consider the following examples.

(39) a. women da-bai le tamen.
 we hit-defeated Perf. them
 ‘We defeated them.’

b. tamen da-bai le.
 they hit-defeated Perf.
 ‘They were defeated.’

²² See C. H. L. T (1997b, p. 45).

²³ The question arises as to what happens if the object is a phonetically unrealized pronoun (i.e. pro):

i) wo rang ta da pro.
 I RANG he hit
 ‘I had him hit (somebody).’
 ‘I was hit by him.’

Note that it is always assumed that Chinese is a pro-dropped language not only in the subject but also in the object. For Sasaki (1997, p.148), a sentence like i) is ambiguous in a causative or passive reading. In terms of the discussion here, it is the causative if the empty object is a null pronoun(pro); it is the passive if the empty object is a null OP. However, according to C. H. L. T. (1997b, p. 45), a null pronoun is excluded from the object position in both S-structure and LF, given that theoretically, in that position it cannot satisfy the requirement of Binding and Control Theory. Therefore, for C.H.L.T i) has only a passive reading, in which the empty object must be a null OP and never a pro.

(40) a. tamen rang women da-bai tamen.
 they RANG we hit-defeated them
 'They had us defeat them.'

b. tamen rang women da-bai le.
 they RANG we hit-defeated Perf.
 'They were defeated by us.'

The pair in (39) is a lexical causative/ergative alternation, whereas the pair in (40) is a productive causative/passive alternation²⁴.

The two pairs in (39) and (40) are common in that,

- a) in the interpretation, both causative (39a) and (40a) have the meaning of 'we caused the state / event in which they are defeated', and both passive (39b) and (40b) have the meaning of 'they ended up with the state / property of being defeated', and
- b) structurally, both involve the alternation of a two-place predicate (the causative) with a one-place predicate (the passive), assuming that passive in (40b) involves a null OP movement, as discussed in 3.2 and 4.1²⁵.

Following C. H. L. T. (1997b, p.41-44) in treating the *hoo* passive in Taiwanese, I assume that the causative/passive alternation seen in the *rang/jiao* construction is also parallel to the causative/ergative alternation. In other words, the passive in the *rang/jiao* construction displays a parallelism to the ergative as shown in (41)-(42).

(41) a. wo yijing sha le tamen. (Causative)
 I already kill Perf. them
 'I have already killed them.'

b. tamen yijing sha le. (Ergative)
 they already kill Perf.
 'They have already been killed.'

c. tamen rang wo sha tamen. (Causative)
 they RANG I kill them
 'They had me kill them.'

d. tamen rang wo sha le. (Passive)
 they RANG I kill Perf.
 'They were killed by me.'

²⁴ See note 9 for the distinction between the lexical and the productive causative.

²⁵ However, they are different in the movement involved. For the canonical causative/ergative alternation in (39), the ergative is derived from the causative by eliminating the external argument and an NP-movement from the internal argument. On the other hand, for the causative/passive alternation in the *rang/jiao* construction (40), the passive is derived from the causative by eliminating the internal argument and a null OP movement from that position. As C. H. L. T. (1997b, p.42-44) points out, the former is parallel to the *be*-passive and the latter to the *get*-passive in English.

- (42) a. wo yijing la le ta. (Active)
 I already pull Perf. him
 'I have already pulled him.'
- b. wo yijing la le. (Active / *Ergative)
 I already pull Perf.
 'I have already pulled (someone).'
 '*I have already been pulled.'
- c. ta rang wo la ta. (Causative)
 he RANG I pull him
 'He had me pull him.'
- d. ta rang wo la le. (Causative / *Passive)
 he RANG I pull Perf.
 'He had me pull (someone).'
 '*He was pulled by me.'
- (43) a. women da-bai le tamen. (Causative)
 we hit-defeated Perf. them
 'We defeated them.'
- b. tamen da-bai le. (Ergative)
 they hit-defeated Perf.
 'They were defeated.'
- c. tamen rang women da-bai tamen. (Causative)
 they RANG we hit-defeated them
 'They had us defeat them.'
- d. tamen rang women da-bai le. (Passive)
 they RANG we hit-defeated Perf.
 'They were defeated by us.'
- (44) a. women da-ying le tamen. (Active)
 we hit-win Perf. them
 'We defeated them.'
- b. tamen da-ying le. (Intransitive/ *Ergative)
 they hit-win Perf.
 'They won.'
 '*They were defeated.'
- c. tamen rang women da-ying tamen. (Causative)
 they RANG we hit-win them
 'They had us defeat them.'

- d. tamen rang women da-ying le. (Causative/ *Passive)
 They RANG we hit-win Perf.
 ‘They had us defeat (them).’
 ‘*They were defeated by us.’²⁶

As mentioned in 1.2, the verbs that reveal an alternation with the ergative must be verbs that implicate a resultative/accomplished/achieved state/event/action. Hence, they must be causative verbs or causative RVCs, their lexical conceptual structure is represented as [x ACT ON y] CONTROL [y BECOME [y BE AT z], (x:external argument, y:internal argument). Given that the passive is an ergative alternation of the *rang/jiao* causative, it is natural to conclude that the verbs involved in the passive also have to have the implication of a resultative/accomplished/achieved state of an event, i.e. they are lexical causative verbs. Therefore, the causative verb ‘kill’ in (41) can have the causative/ passive (ergative) alternation, whereas the active verb ‘pull’ in (42) cannot. Similarly, the causative RVC ‘hit-defeated’ in (43) reveals the causative/ passive alternation in the *rang/jiao* construction, whereas the active RVC ‘hit-win’ in (44) cannot²⁷.

4.3 Outer Subject and the Inclusive

Consider the following sentences.

- (45) a. wo rang ta jian le toufa.
 I RANG he cut Perf. hair
 ‘I had him cut my hair.’
 ‘I suffered by his cutting of my hair.’
 b. wo rang ta jian le Zhangsan de toufa.
 I RANG he cut Perf. Poss. hair
 ‘I had him cut Zhangsan’s hair.’
 (46) a. wo rang ta fa le (wo) sanbai kuai.
 I RANG he fine Perf. me 300 dollar
 ‘I had him fine (me) 300 dollars.’
 ‘I was fined 300 dollars by him.’

²⁶ The causative reading in this case is sometimes easily misunderstood as a passive reading due to some pragmatic reasons. For instance, there are always two sides (the winner and the loser) involved in an event of ‘defeating’; therefore, the causative reading of ‘they had us defeat them’ always implies the equivalent passive reading ‘we were defeated by them’. Therefore, I claim that (44d) is not the passive, because if *rang* is replaced by *bei*, which only has a passive-usage, the sentence would become odd:

i) *tamen bei women da-ying le.
 they BEI we hit-win Perf.
 ‘They were defeated by us.’

²⁷ As discussed in 1.2, ‘da-bai’ (hit-defeated) is the causative, because the result ‘-defeated’ is Patient-predicating, while ‘da-ying’ (hit-win) is not the causative, since the result ‘win’ is Agent-predicating.

- b. wo rang ta fa Lisi sanbai kuai.
 I RANG he fine 300 dollar
 'I had him fine Lisi 300 dollars.'

Recall that the inclusive can be ambiguous in a causative or passive reading, while the exclusive only has a causative reading in Mandarin, as mentioned in 1.3. (45a) and (46a) are inclusive in the sense that the matrix subjects are involved in the second event, denoted by the embedded clause, through some pragmatic relation such as possession.

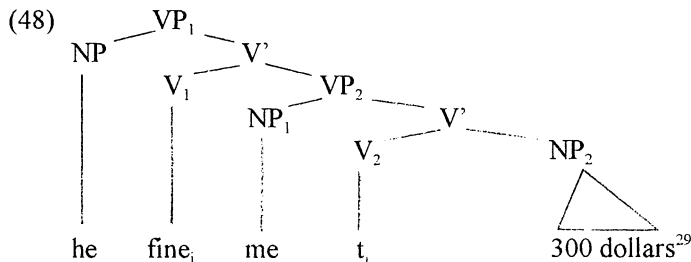
Furthermore, (45a) and (46a) are called indirect passive in the sense that it is not the (direct) object that is interpreted as Affectee. Put into another way, the objects are always phonetically realized. Therefore, the null OP movement from a postverbal object position is not available in these cases²⁸.

However, following Huang (1997, p.37-39), I assume that the indirect passive in the *rang/jiao* construction actually involves a null OP movement, similar to the pattern in the direct *rang/jiao* passive as discussed so far. The only difference is that in the indirect passive it is an outer empty object that undergoes the movement, while in the direct passive it is the postverbal empty object that undergoes the movement.

Consider the following sentence, which is an active counterpart of (46a).

- (47) ta fa le wo sanbai kuai.
 he fine Perf. me 300 dollar
 'He fined me 300 dollars.'

'fa' (fine) in (47) is a so-called 'outward transaction' verb, which requires an 'inner' object as well as an 'outer' object in the sense of C. H. L. T. (1997b, p.29-31):

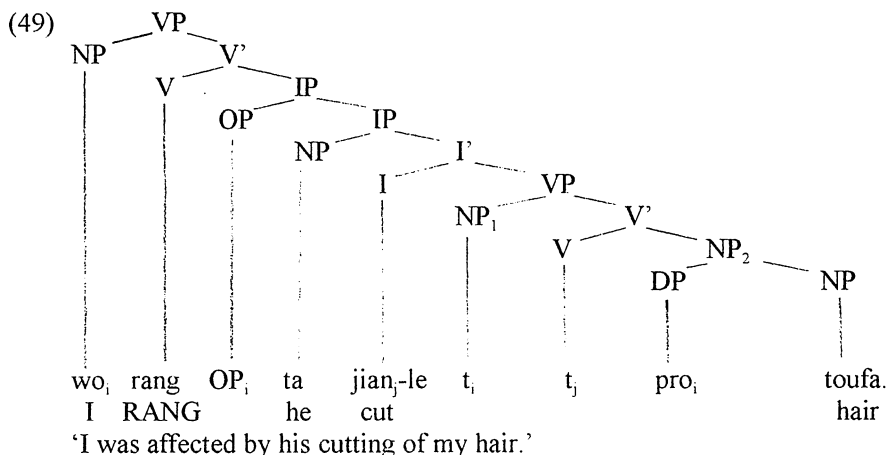


The NP₁ above is the outer object, whereas the NP₂ is the inner object. Therefore, an outer object is the specifier of the VP headed by an embedded verb, while an inner object is the complement of that verb. An indirect inclusive passive like (45a) has a structure as follows, in which,

²⁸ According to Huang (1997, p.38), a null OP moved from the possessor position is also unavailable, because this would violate the Left Branch Condition, proposed by Ross (1967).

²⁹ The main verb 'fine' is assumed to have moved into a position occupied by a light verb DO within the framework of lexical decomposition.

- a) the phonetically unrealized possessor is a null pronoun controlled by the empty outer object,
- b) the empty outer object undergoes the OP movement, adjoined into an A'-position to get interpreted,
- c) the null OP is controlled by the matrix subject through the strong binding:



In (49), the inner object 'hair' is assigned the theta-role Theme by the verb 'cut' before moving. The inner object and the verb, in turn, form a complex predicate, i.e. [_{V'} cut hair] to assign the outer object the role of Affectee.

Following the discussion of the Null OP movement in the direct passive, the OP movement turns the whole embedded IP into a predicate, denoting a property, which, in turn, combines with *rang* to form a complex predicate with the meaning of 'end up with the property of being x'. Thus, the passive (49) has the interpretation of 'I (Experiencer) ended up with the property of being x, such that he cut x's (Affectee) hair'³⁰.

Furthermore, as mentioned in 1.3, all the direct passives in the *rang* construction must be inclusive in the sense that the matrix subject is co-referential with the postverbal gap. As a result, the conception of inclusiveness suggested by Washio(1993) can be related to Null OP Movement. Namely, all passives in the *rang* construction involve the null OP

³⁰ Recall that the inclusive is ambiguous in a causative/ passive reading. Therefore, we have to assume that null OP movement is optional for the outer object, but obligatory for the inner object, given that the *rang* construction with a postverbal gap has only a passive reading. The question arises as to why such an asymmetry happens. One possibility might be due to the asymmetry between the specifier and the complement. That is, the specifier is the position where a null pronoun (pro) can satisfy the requirement of Binding and Control Theory, while the complement is not (see note 23). Therefore, if an outer object is a non-quantificational null pronoun (pro), no OP movement can occur; consequently, the whole embedded IP is a proposition argument denoting an Event and *rang* is a two-place predicate denoting the action of 'cause': the causative reading is obtained. On the other hand, if the outer object is an empty anaphoric/quantificational PRO, then the Null OP movement occurs and a passive reading is obtained. In other words, an inclusive *rang* construction is ambiguous because the empty outer object has two distinct possibilities of status.

movement. The difference is simply that the direct passive undergoes the movement from the inner object, while the indirect passive undergoes the movement from the outer object. In both cases a one-place predicate is derived, with the meaning of ‘end up with the property of being x’. In other words, both direct and indirect passives are all ergative alternations of the causative.

5. Conclusion

In this paper I have examined the *rang/jiao* construction in Mandarin. The potentially causative *rang/jiao* construction can receive a passive reading under the following restricted environments:

- a) when there is an empty object,
- b) when the embedded verb implicates a resultative/accomplished/achieved state,
- c) when there is an inclusive relation between the matrix subject and the embedded object.

These conditions can be explained in terms of the null OP movements:

- a) The empty object in the embedded clause must be an anaphoric OP, therefore, it can undergo A'-movement syntactically and turn the internal argument of *rang/jiao* into a predicate semantically. Thus, the argument structure of the causative is changed to one in which a passive reading is available.
- b) The causative/passive alternation in the *rang/jiao* construction is a kind of causative/ergative alternation by eliminating the internal argument, i.e. turning the internal argument into a predicate. Since it is required that an ergative always expresses a resultative/accomplished/achieved state of an event, the passive in the *rang/jiao* construction must require the same condition.
- c) The inclusive in the direct passive is expressed by the co-referential relation between the moved OP and the matrix subject through the strong binding (controlling). The indirect passive involves a null OP movement from the outer object position, in which the inclusive relation between the matrix subject and the embedded inner object is mediated by the OP in the outer object position.

Therefore, the causative and the passive in the *rang/jiao* construction can be explained in a uniform way:

- a) *Rang/jiao* in both cases are all main verbs, c-selecting an embedded IP as its complement.
- b) The matrix subjects in both cases are all base-generated.

The differences between them are simply that

- a) There is an OP movement involved in the passive but not in the causative.

- b) The causative includes a two-place predicate, while the passive includes a one-place predicate due to the OP movement.

In studies of the passive from a typological viewpoint, Huang (1997) points out that languages without passive voice morphology tend to 'resort to an embedding strategy and exploit the process of grammaticalization (from causative to ergative to passive) that eventually triggers A'-movement' (ibid.p.44). On the other hand, in languages with passive voice morphology like English, since the passive morpheme directly operates on the main verb and alters the argument structure through an NP movement, no additional process such as the null OP movement is necessary. The examination of causative/passive in the *rang/jiao* construction in this paper further supports this cross-linguistic generalization.

REFERENCES

- Chao, Y.-R. 1968. *A Grammar of Spoken Chinese*. University of California Press, Berkeley and Los Angeles.
- Cheng, Lisa L.-S., C.-T. James Huang, Y.-H. Audrey Li, and C.-C. Jane Tang. 1997 a. 'Causative Compounds across Chinese Dialects: A Study of Cantonese, Mandarin and Taiwanese'. *Symposium Series of the Institute of History and Philology, Academic Sinica*, No. 2. Taipei.
- _____. 1997 b. 'Hoo, Hoo, Hoo: Syntax of the Causative, Dative, and Passive Constructions in Taiwanese'. ms., University of California, Irvine.
- Feng, S. 1995. 'The Passive Construction in Chinese'. To appear in *Chinese Linguistics* 1. Beijing.
- Hashimoto, M. 1987. 'Hanyu Beidongshi de Lishi ,Quyu Fazhan' (The Historical and Geographical Development of Chinese Passive Construction). *Zhongguo Yuwen* 196, 36-49.
- _____. 1988. 'The structure and typology of the Chinese passive construction'. Shibatani M.(ed.), *Passive and Voice*, 329-354. John Benjamins Publishing Company, Amsterdam/Philadelphia.
- Hayatsu, E. 1992. 'Shieki to Ukemi no Sekkin ni kansuru Oboegaki' (Close Encounters: A Note on the Coming Together of Causatives and Passives), *Liguistic Research* 11, 173-256. Kyoto University.
- Huang, C.-T. J. 1997. 'Chinese Passives in Comparative Perspective'. ms., University of California, Irvine.
- Mochizuki, K. 1991. 'The Passive in Mandarin Chinese' *Gengo Kenkyuu* 1, Institute of Linguistics, Tokyo University of Foreign Studies.
- Rose, J.R. 1967. *Constraints on Variables in Syntax*, PhD dissertation, MIT.
- Sasaki, Y. 'Chyugokugo ni okeru Shieki to Zyudoo no Aimaisei' (The Ambiguity of Causative and Passive in Chinese). In *Voisu ni kansuru Hikaku Gengogakuteki Kenkyuu* (Comparative Linguistic Studies on Voice), the Linguistic Society of Tsukuba University , 135-160. Sanshyusha publishers, Tokyo.
- Shen, L. 1996. ' Tan Hanyu de Shiyiju he Beidongju de Jiegou' (On the structures of Causative Sentences and Passive Sentences in Mandarin Chinese), *Bulletin of the*

- Chinese Language Society of Japan*, No243, 75-84.
- Toshima, Y. 1988. 'Bei-ziju no Seiritu zyookken ni tuite' (On the Conditions for Forming "bei"-Sentences). *Bulletin of the Chinese Language Society of Japan*, No. 235, 99-108.
- Washio, R. 1993. 'When Causatives Mean Passive: a Cross-Linguistic Perspective'. *Journal of East Asian Linguistics* 2,45-90.
- _____. 1997. 'Tadoosei to Voisu no Taikei' (Transitivity and The System of Voice). *Voisu to Asupekuto* (Voice and Aspect), Nakau M.(ed.), 1-106. Kenkyuusha Publishers, Tokyo.
- Yang, K.-R. 1989. *Nihongo-to Chyuugokugo no Shieki hyoogen ni kansuru Taishoo kenkyuu* (Comparative Studies on the Causative between Japanese and Chinese). Kuroshio Publishers, Tokyo.

Abstract

When causative *Rang/Jiao* constructions in Mandarin Chinese have a passive reading, the following conditions should be satisfied.

- a) Syntactically, a postverbal object in an embedded clause is empty and is not a phonetically unrealized pronoun (i.e. 'pro').
- b) Semantically, the verb selected by *rang/jiao* implicates a resultative/ accomplished/ achieved state of an event. Hence the verb should be a lexical causative verb/ causative Resultive Verb Compound or should be attached by the perfective 'le' or a resultative complement.
- c) Pragmatically, there is an inclusive (or aboutness) relation between the matrix subject and the second event expressed by the embedded clause.

These apparently distinct constraints can be explained in a uniform fashion, in terms of Null Operator Movement proposed by Huang (1997) for passive *bei* construction and Cheng, Huang, Li and Tang (1997b) for *hoo* construction in Taiwanese.

- a) The empty object in the embedded clause is an anaphoric OP, which syntactically undergoes A'-movement and semantically turns the internal argument of causative *rang/jiao* into a predicate through a lambda abstraction.
- b) The passive alternation in the *rang/jiao* construction is an ergative counterpart of the causative alternation by eliminating the internal argument through an OP movement. As an ergative always requires the resultative/accomplished/achieved state of an event, the passive in the *rang/jiao* construction also requires the same condition.
- c) The inclusive relation between the matrix subject and the embedded clause is ensured by the coreferential relation between the subject and the moved null OP, which is generated in the postverbal inner object position in the direct passive and in the preverbal outer object position in the indirect passive.

The merit of Null OP Movement analysis is that the causative and the passive in the *rang/jiao* construction can be treated in a uniform way as follows;

- a) The causative and passive are in common in that both consist of a bi-clause in which *rang/jiao* is a main verb which categorially selects an IP as its complement. Moreover, the matrix subject in both cases is base-generated in a Spec of IP/VP contrary to NP Movement analysis assumed in the *be* passive in English.
- b) The causative and the passive are different in that there is null OP movement in the latter but not in the former. In terms of argument structure, the causative *rang/jiao* is a two-place predicate which selects an external NP argument (the matrix subject) denoting the Causer and an internal Propositional argument (the embedded IP) denoting the Caused Event. On the other hand, since null OP movement turns the internal argument (the embedded IP) into a predicate denoting a Property through lambda abstraction, the passive *rang/jiao* combines with this internal predicate to form a complex one-place predicate, which selects an external NP argument denoting Experiencer.

In short, the causative *rang/jiao* construction has a passive reading when there is null OP movement involved from the embedded (either outer or inner) object position to an adjunct position of the embedded IP.

1. はじめに

マレーシア語に於ける語彙的使役表現を担うものとしては、接頭辞の *per-*、接尾辞の *-kan* が付加された *me-* 形動詞を挙げることができる。例えば、次の例に於ける *mendatangkan* という *me-* 形他動詞は、①呼ぶ、取り寄せる、招聘する、②齎す、惹起する、という意味で使われるが、ここでの接尾辞の *-kan* は使役の機能を有している。即ち、この *-me* 形他動詞の語根は「来る」という意味の語根動詞 *datang* であるが、接尾辞の *-kan* はこの語根動詞に使役的な意味を加えて、来る様にさせる、即ち「来させる」という新しい意味の動詞を作るのに寄与している。

- 1) *Universiti itu akan mendatangkan beberapa orang pensyarah dari Indonesia tahun depan.* (Kamus Am Terbaru Bahasa Malaysia, P. 215)

(その大学は来年インドネシアから数人の大学の教員を招聘する予定である)

- 2) *Perusahaan memungut telur penyu sentiasa mendatangkan untung.*

(Kamus Am Terbaru Bahasa Malaysia, P. 215)

(ブニユ亀の卵の収獲は常に利益を齎している)

一方 *datang* を土台として作られる動詞のパラダイムの一つの形に、*mendatang* という自動詞がある。これは、次の例に見られる様に、①急に現れる、急に起こる、②他の場所から移って来た、という意味で使われる。

- 3) *Senjakala telah datang.* (An Illustrated Malay English Dictionary, P. 92)

(忽ち夜が訪れた)

- 4) *Penduduk datang ini diam di tepi-tepi pantai.*

(An Illustrated Malay English Dictionary, P. 92)

(他の土地からの移住者は海沿いに住んでいる)

mendatangkan の意味から考えると、*-kan* 使役化接辞の使役化の対象となっている形は、*mendatang* ではなく、*datang* であると考えられる。

次の *menghilangkan* (無くす、消す) という *-me* 形他動詞も、使役化接辞 *-kan* の対象となる形は、*hilang* (消える、無くなる) という語根動詞であると考えられる。

5) Dia mengaku menghilangkan cincin berlian itu.

(Kamus Baku Federal, P. 344)

(彼女はそのダイヤの指輪を無くしたことを認めた)

つまり, “menghilangkan cincin berlian itu”の意味は, “Cincin berlian itu hilang.” (そのダイヤの指輪が無くなる) という状態にするということである。

同じく hilang を土台にして作られる自動詞に menghilang がある。この動詞は 7) の様に, 物にも使われるが, 基本的な用法としては, 「(人が) 姿を消す」, 「(人が) 隠れる」という意味で使われる。つまり, (6) は (7) の用法の menghilang が擬人化された物にもその用法が拡大したものと考えられる。

6) Bas itu menghilang di balik bukit.

(An Illustrated Malay English Dictionary, P. 158)

(そのバスは山の後ろに消えた)

7) Pengurus bank itu menghilang setelah penyelewengan itu dikesan.

(Kamus Baku Federal, P. 344)

(その銀行の頭取はその背任行為が暴露されると姿を晦ました)

menghilang が主として人間を主語として取り, 物を主語として取るときには, その物は擬人化されているという用法上の制限から観ると, menghilangkan の被動者が通常は物であるという用法上の制限とは相容れないものがある。従って, この場合にも, menghilangkan の使役化接尾辞の対象となっているのは, hilang であって, menghilang ではないと考えるのが妥当と思われる。

以上の例では, 接頭辞 *me N-* と接尾辞 *-k a n* がいわば, 共同してその土台となっている語根動詞に使役の意味を付加していると言える。しかし, これらの例とは異なり, *-k a n* のみが, 単独で使役の意味の付与の機能を果たしている例も見出すことができる。そういう一つの例として, menyewakan の *-k a n* 接尾辞を挙げることができる。従来, マレーシアの学者による文法書では, この *-k a n* は, 反対の意味を作る接尾辞として扱われてきた。即ち, menyewa は対価を払って借りるという意味であるのに対して, menyewakan の方は, 対価を払って貸すという具合に, 一方の意味が他方の意味の反対となっている。このことから, menyewakan の *-k a n* は menyewa の意味を逆にする機能を有する接辞であるという説明がなされるのが普通であった。しかし, 筆者の考えでは, この *-k a n* 接辞の機能も使役であると考えて構わないのではないかと思われる。つまり, menyewakan (対価をもらって貸す) という動詞は, やり取りの相手に menyewa (対価を払って借りる) させるという使役の意味を付加していると考えれば, *-k a n* にこの例だけにしか通用しない非常に限定的な機能を設定する必要はなく,

これまでの例に於けると同様の機能でもって説明ができるという点で、言い換えれば、説明の一般化という点で優れていると言える。この今問題にしている例に於いては、*-kan* という使役化接辞の対象となっているのは、*sewa*ではなく、*menyewa* という *me-* 形 of 他動詞であると言える。更に、*sewa* は動詞としては使われず、名詞として使われるという事実からしても、*sewa* が使役化の対象であるとは考え難い。本論では、*-kan* 接頭辞の使役化の対象となるものが、① *me-* も *-kan* も取り除いた形である場合と、② *-kan* だけを取り除いた形である場合の二種類が認められるという主張をなす。

又、これまで *per-* 接辞にも使役化の機能が認められると言われてきた。、その様な見解を取る学者は、*mempertinggi*, *memperbesar*, *memperbaiki*, *mempercepat* の様な例を通常挙げる。しかし、これらの例も含め、一般に形容詞の語根に、*memp-* が付加されてできた他動詞は、単に語根によって表される状態にするという意味になるのではなくて、語根の状態よりも更に一段と高い水準にするという意味で使われるのが本来の使い方である。本来のと言ったのは、実際にこれらが使われる場合には、使役化接辞の *-kan* を取る形と同じ意味で使われることも多く、両形の間に本来存在した筈の区別が曖昧になっているという事実が看取されるからである。これらと同じ語根に使役化接辞の *-kan* を付けた *meninggikan* (高くする、高める), *membesarkan* (大きくする、拡張する), *membaiki* (直す、矯正する), *mencepatkan* (速くする) が、語根で表される状態にするという純粋に使役の意味を付加するだけなのに対して、*memp-* 接辞の方は、使役の意味以外の要素も同時にそれに添加しているという相違点を見逃す訳にはいかないだろう。

同じ様に、*-per-* を含んではいるが、*memperisterikan* (～に妻を娶らせる) という動詞の場合には、*beristeri* (妻を持つ) が基になっていて、それに、そういう状態にさせるという使役の意味が加わって、できたと考えれば、この *-per-* は *ber-* に由来すると考えられる。

又、接尾辞の *-i* にも、*-kan* の様に、使役の機能を認めなければならない場合もある。*meminjam* は、「～に貸す」という意味の動詞であるから、*meminjam* (借りる) を、*-i* 接尾辞の付加によって、やり取りの相手に「借りる」という行為をさせる、即ち「貸す」という意味に転換させていると考えれば、ここでは、*-i* が使役の機能を果たしていると考えられる。

本論の前半では、これまで述べた様な、接辞の付加によって作られる使役動詞に就いて、使役の機能を与える接辞と、その接辞が使役付与のターゲットにしている要素は何であるかを中心に考察する。後半では、使役構文を形成する動詞に

就いて、主としてその文型的な相違点に就いての考察を行うつもりである。

2. 語彙的使役表現

2. 1. 接尾辞 - k a n

前章では, *mendatangkan*, *menghilangkan* の様に, 使役化接尾辞の - k a n が使役化の対象とする要素が語根であるものと, 語根に m e - が付加された要素が使役化の対象となっているものとの二種類が認められることを観てきた。ここでは, 後者の例をもう少し挙げて, 更に詳しい考察を加えてみよう。次の例に現れる *menyusukan* という動詞は, 「乳を飲ませる」という意味の他動詞であるが, この例では, *menyusu* が使役化の対象となる要素と考えられる。

8) *Babi itu sedang menyusukan anaknya.*

(その(母)豚は仔豚に乳を遣っている)

menyusukan の語根は *susu* であるが, この語は名詞としてしか使われないから, この語根が使役化の対象にはそもそもなりえない。そして, - k a n による使役化の対象となっているのは, m e - が付加された *menyusu* という要素であると言える。*menyusu* は次に見る様に, 「乳を吸う」という意味の自動詞である。

9) *Kanak-kanak itu sudah berhenti menyus.*

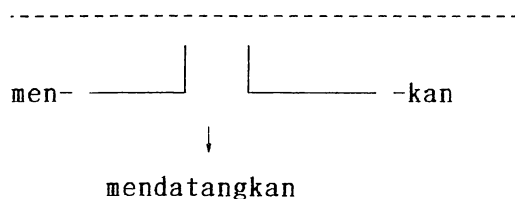
(その子は既に乳離れした)

menyusu に - k a n が付されることによって, 相手に *menyusu* させる, 即ち乳を飲ませるという意味の動詞が作られる。*menyusu* から *menyusukan* への転換はつまり, *menyusu* する主体を相手方へ移し, 自分はそうさせる主体であると同時に, *menyusu* という行為を受ける側, 即ち, 「乳を飲まれる」側に立場の転換を計ることでもある。*menyusu* という行為の発信源から着信地へと, いわば矢印の方向を逆転させているという点で, *meminjam* から *meminjamkan* への転換と同じことが言える。

以上のことから, *mendatangkan* や *menghilangkan* の場合には, 語根に動詞形成辞である m e - と使役化接辞の - k a n が同レベルでなされるのに対して, *menyusukan* の様な例の場合には, 先ず動詞形成辞の m e - が付され, その後の段階で, 今度は使役化接辞の - k a n が付されるというプロセスを取ることになる。今, この間のプロセスを図示すれば次の如くである。

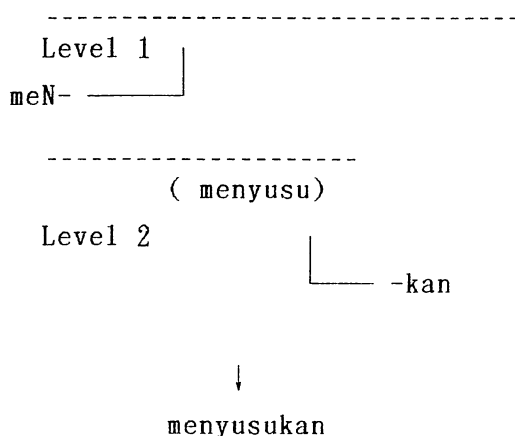
1 0) mendatangkanの形成過程

datang (語根)



1 1) menyusukanの形成過程

susu (語根)



脇道へ入ることになるが、接辞付加の過程に幾つかのレベルを設けることの必要性は、別の事例でも立証することができる。例えば、利益格を導く接尾辞の - k a n は、他動詞にしか付かないという特徴がある。このことを、menggorengkan で説明してみよう。次の例では、menggorengkan の直後にある名詞句、即ち、この場合には、saya が利益を受ける主体となっている。

1 2) Emak menggorengkan saya pisang.

(お母さんは私にバナナを揚げてくれた)

この形から、利益格の - k a n を除いた形、即ちmenggorengは、次例に見られる如く、この形で他動詞としての資格を既に持っている。

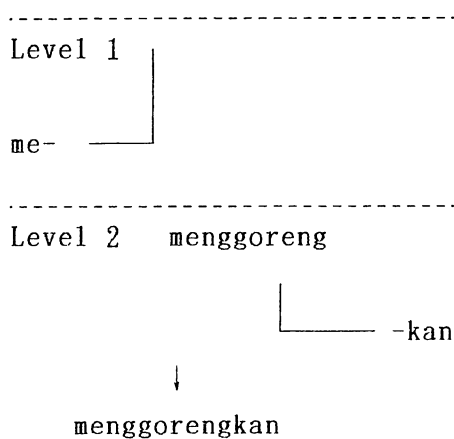
1 3) Emak sedang menggoreng pisang.

(お母さんはバナナを揚げています)

同じことは、mencarikan (～の為に探す、探してあげる、探してくれる)、menuliskan (～の為に書く、書いてあげる、書いてくれる)、membacakan (～の為に読んで聞かせる)、memasakkan (～の為に(料理等を)作る)、menumb

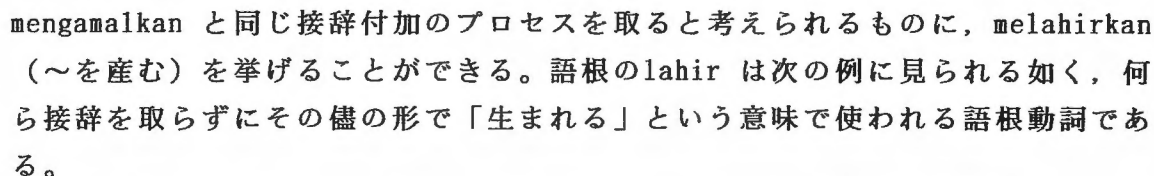
ukkan (～の為に(辛子などを) 搗る; ～の為に(米等を) 搗く) に就いても言える。これらから -k a n w を除いた mencari , menulis , membaca , memasak , menumbuk は全て他動詞として使えるものばかりである。従って, mencari kan , menuliskan , membacakan , memasakkan , menumbukkan の, 利益格の -k a n が付いた形は, 先ず第一段階で, 動詞形成辞の m e - が付加され, 他動詞が形成される。第二段階でこの他動詞に利益格を導く -k a n がそれを覆う形で付加される。今, menggorengkan に例を取って, この動詞形成のプロセスを図示すれば次の様になる。

1 4) menggorengkan の形成過程
goreng (語根)



これと対照をなすのが, mengamalkan に現れる, 他動詞化接辞の -k a n が付加されるレベルである。mengamalkan は他動詞であるが, -k a n を除いた *mengamal は使えない形であるから, *mengamal の形が形成された後の段階で, これに他動詞化接辞の -k a n が付加されて他動詞が出来上がったと考えることはできない。そうすると, 残る合理的な形成プロセスは, 語根である名詞の amal に m e - と -k a n を同一レベルで同時に付加し, 一気に他動詞を形成するというものである。この形成のプロセスは, mendatangkan の形成のプロセスと軌を一にしている。mengamalkan の形成の過程を図示すれば次の如くである。

amal (語根)



(その作家はマレーシアが独立した日と同じ日に生まれた)

従って、melahirkanの - k a n は lahir の状態にするという使役の機能を担った接辞と考えられる。それでは、この使役化の接辞 - k a n がその対象としている形は何かということになるが、*melahir という形が使えない形であるところから考えると、melahir という意味を成さない単位に使役化接辞の - k a n が付されたと考えることはできない。- k a n がその使役化の対象としているのは、lahir であると考えるのが言語直感にも適合している。以上のことから、melahirkanの形成プロセスは、mengamalkan と同様のプロセスを踏むものと考えられる。即ち、語根の lahir に m e - と - k a n の両接辞が同一レベルで付加されると考えられる。melahirkanの形成の過程を図示すれば、17)の如くである。

lahir (語根)



例えば、次の *menghadiahkan* と *menghadiahi* とが上記の様な用法上の使い分けが成されるペアーを成している。

(私はそ絵本をアミンにプレゼントした)

(私はアミンに一冊の絵本をプレゼントした)

(アフマッドは100リングット私に貸してくれた)

2 1) Ahmad meminjam saya 100 ringgit.

(アフマッドは私に100リングット貸してくれた)

meminjamkan と meminjam 是、共に貸すという意味であり、相違点は、直後に直接目的語を取るか、間接目的語を取るかという点だけである。こう考えると、接尾辞の - i にも、- k a n と同様、使役の意味を付加する機能を認める方が自然であろう。

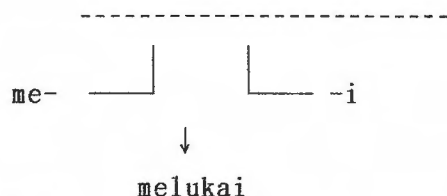
これ以外に、-i が使役の意味を付与しているものとしては、melukai を挙げることができる。luka は次の例に見られる如く、「傷つく」、「怪我をする」という意味の自動詞である。

2 2) Tangannya luka terkena pisau.

(彼はナイフで手を怪我した)

一方, melukai は, 「傷つける」, 「怪我をさせる」という意味の他動詞である。この melukai の意味は, - i が luka の状態にするという使役の意味を付加していると考えれば, 説明がつく。今, この melukai の形成過程を図示すれば, 次の如くである。

23) luka (語根)



実際に傷ついたり，怪我をするといった状況では，次の例の様に，melukai のみ
が使われる。

24) Pisau yang dibaling oleh musuh itu telah melukai tangan kirinya. (Kamus Am Terbaru Bahasa Malaysia, P. 559)

(敵の投げたその剣で彼は左腕を負傷した)

これに対して、「心を傷つける」といった、比喩的な意味の場合には、melukai も使われるが、melukakan の形も使うことができる。このことは、-i と -kan が同じ使役の機能を持っていることを示している。次例のmelukakan はmeluka i と交換可能である。

24) Kata-kata Tan yang pedas itu telah melukakkan hati saya.

(Kamus Am Terbaru Bahasa Malaysia, P. 559)

(タンの辛辣な言葉は私の心を傷付けた)

又, †memakaii (†は廃用の意で使うことにする) という形は, i が二つ重な

るという、発音上の難点が、阻害要因となって今は使われていないが、以前はmemakaikanとペアーで使われていた。そして、-kanと-iの使い分けは， meminjamkan と meminjami の場合と同じである。即ち，直接目的語が直後に来る時は，-kanが使われ，間接目的語が直後に来る時は-iが使われるというものである。以前の用法に基づくならば，次の文は，†memakaiiを使えば，26)の様に言える。

25) Semasa kecil ibulah yang memakaikan baju kepada saya.

26) †Semasa kecil ibulah yang memakaii saya baju.

2. 3. 接頭辞memper- + 接尾辞-kan

次の例に現れるmemperlarikan は，「走らせる」，「(車等を)飛ばす」という意味の他動詞である。

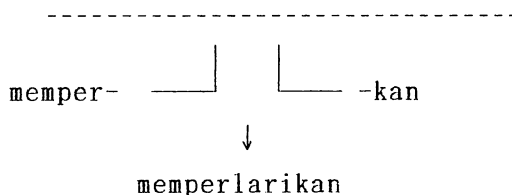
27) Di jalan yang sibuk begini pun dia memperlarikan keretanya.

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P.385)

(こんなに交通が激しい所でも彼は車を飛ばしている)

そして，ここに現れる-kanは，memper-と共同して，語根lariに使役の意味を付加していると考えられる。つまり，memper-kanは，lariという状態にするという意味を付加している。そして，語根lariは，この形の儘で，自動詞として使われる動詞（今後この類いの動詞を語根動詞と呼ぶことにする）であるから，-kanの使役の標的となっているのは，語根olariと考えて何ら不都合は生じない。このことを踏えて，memperlarikan の形成過程を図示すれば，次の如くである。

28) lari (語根)



同じくlariを語根にしているが，melarikanの方は，①持ち逃げする，②逃れる，③目を逸らすの意味で使われているから，-kanが使役の意味で使われているとは考え難い。

次の例に現れるmemperlihatkanの-kanも，melarikanのそれと同じく，使役の機能を有する接尾辞である。唯，今度の場合には，使役化の標的となっているのは，自動詞ではなく，他動詞という違いがあるだけである。

29) Mereka akan memperlihatkan tarian-tarian Melayu.

(Kamus Harian Federal(1995), P.359)

(彼等はマレーの舞踊を披露することになっている)

この様に、語根が動詞の場合 *m e m p e r -* は単独で使役の意味を付加することはできず、必ず *- k a n* と一緒になってその機能を果たす。

m e m p e r - が、*- k a n* 無しで、使役の意味を付加する例としては、*m e m p e r +* 形容詞の場合位だろう。しかし乍ら、この形は語根の形容詞の意味に、使役の意味を付加しただけの意味ではなく、「より一層～にする」という意味を語根に付加するのである。従って、これも、使役の接頭辞と考えられるかもしれないが、特殊な例としなければならないだろう。この様な例としては、*mempertinggi* を挙げることができる。この語は、単に「高くする」、「高める」という意味ではなく、「より高める」という意味である。次の文はそれが使われた例である。

30) Ia belajar bersungguh-sungguh untuk mempertinggi ilmu pengetahuannya.

(彼は知識を一層増やす為に一生懸命勉学に励んでいる)

そして、この *m e m p e r +* 形容詞は、後ろに更に *- k a n* が付加される場合もある。このことは、*m e m p e r -* だけでは、使役の意味を加える接辞としては、力が弱いということではないだろうか。

語根が動詞の場合には、先程観てきた *memperkirakan* の様に、前に *m e m p e r -*、後ろに *- k a n* を付けなければならない。

例えば、*memperbuat* という動詞があるが、*membuat* が「作る」という意味なのに対して、こちらの方は、「作らせる」という意味ではなく、①生産する、②(努力して)作り上げる③擲揄するという意味で使われる他動詞であるから、*m e m p e r -* が使役の意味を付加しているとは考えられない。次の *memperbuat* は、①の意味で使われている例である。

31) Sekarang ini tidak banyak lagi yang memperbuat gula kabung.

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia (Cetakan Kesebelas), P.89)

(今や棕櫚糖を作れる人はもう多くはなくなった)

又、次の様に、*m e m p e r +* 名詞は、「～を名詞として扱う」、「～を名詞と見做す」という意味で使われるので、これも使役の意味を付加している訳ではない。

3 2) Pekerja-pekerja itu enggan mempertuan majikan mereka.

(Kamus Harian Federal(Cetakan Pertama),P.597)

(労働者達は彼等の雇い主を自分達が仕える主人だと思いたくはなかった)

次の例も, m e m p e r - + 名詞の例であるが, これは, 「名詞とする」, 即ち, 「妻にする」という意味である。

3 3) Rahmat telah memperisteri anak Pak Daud.

(Kamus Harian Federal(Cetakan Pertama),P.231)

(ラフマットはダウト叔父さんの娘を娶った)

そして, (3 2), (3 3) 孰れも, - k a n が付加された形, 即ち, mempertuan kan, memperisterikan が可能である。このことは, m e m p e r - + 名詞は何となく不安定な結合だと言えるかもしれない。

2. 4. b e r - 起源の - p e r -

(3 4) のmemperisteri は, 「～を妻とする」, 「～を娶る」という意味の他動詞である。

3 4) Baginda memperisteri puteri dari Palembang.

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, PP.268-269)

(陛下はパレンバン出身の王女を妃にした)

それに対して, 次例にある様なmemperisterikan は, 「～に妻を取らせる」, 「(男を)結婚させる」という意味の他動詞である。

3 5) Encik Hamid mengadakan kenduri kahwin kerana memeperisterikan anak sulungnya. (Kamus Pelajar Bahasa Malaysia,P.269)

(ハミッドさんは長男に嫁をもらったお祝いに祭宴を開いた)

それでは, このmemperisterikan の使役化接辞 - k a n が, 使役化の標的としているのは何であろうか。その標的は名詞であるisteriとは考えられないから, memperisteriということになる。しかし乍ら, ここで問題となるのは, 使役化の標的が他動詞である時, 極一部の例外を除いて, その直後の目的語となるのは, 使役動詞形成の土台を成している他動詞の目的語と同じとなるという原則から外れるということである。ここで, 前に取り上げた使役動詞memakaikanの取る目的語に注目して貰いたい。(3 6) の例から明らかな様に, memakaikanの目的語は, この使役動詞形成の土台と成っている(3 6)のmemakai という他動詞の目的語と同じとなっている。

3 6) Ketika kita kecil-kecil dahulu, ibulah yang menyuapi kita dan memakaikan baju pada kita.

(Kamus Pelajar Bhasa Malaysia, P. 481)

(私達が小さかった頃、私達に食べさせてくれ、そして服を着せてくれたのはお母さんだったじゃないか)

3 7) Ali memakai baju baru hari ini.

(Kamus Am Terbaru Bhasa Malaysia, P. 631)

(アリは今日はおニウの服を着ている)

使役化の土台となるものが他動詞ということは、当然その動作主と被動者が想定される訳であるが、これに - k a n が付された動詞の目的語は、土台となった他動詞の動作主、即ち服などをそれに着させる対象である人ではなく、着させる物である。同じことは、前に触れた使役動詞 meminjamkan の目的語に就いても言える。次例を参照されたい。

3 8) Saya telah meminjamkan buku itu kepadanya.

(Kamus Harian Federal (Cetakan Pertama), P. 447)

先に述べた如く、meminjamkan の - k a n が使役化の標的にしているのは他動詞の meminjam (借りる) である。この meminjam に - k a n が付された動詞の目的語は、土台と成っている meminjam の動作主ではなくて、被動者の方である。次の例は、Kamus Am Terbaru Bahasa Malaysia (1992), P. 675 に載っている例文である。

3 9) Dia telah meminjamkan saya sebuah novel.

この例は、一見すると、使役動詞 meminjamkan の目的語は、土台となる他動詞の動作主、即ちこの場合 saya である様に見える。しかし、別の所で、筆者が主張した様に、meminjamkan の直後にある saya は、実際は、最初からこの位置を占めていたのではなく、次の様な元となる文の kepada saya が、動詞の直後の位置に繰り上がった結果派生したものである。筆者は、この様な間接目的語が他動詞の直後の位置に繰り上がる現象を間接目的語上昇変形と呼んだことがある。そして、動詞の直後に、前置詞付きの間接目的語が繰り上がった際には、この前置詞は削除されるという原則を同時に設定することによって、この構文を説明することができると思われる。

4 0) Dia telah meminjamkan sebuah novel kepada saya.

meminjamkan と並んで、次の様に間接目的語を直後に取り meminjami という形も存在する。

4 1) Dia telah meminjami saya sebuah novel.

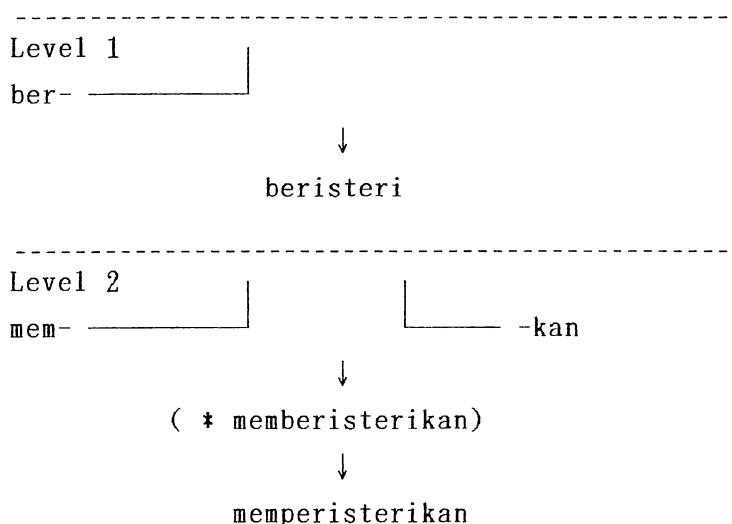
そして、menghadihkan, menghadihi のペアーに於ける - k a n, - i の使い

分けと同様の使い分けがmeminjamkan, meminjami にもあると考える方が理に適っている。つまり, meminjamkan という他動詞は直接目的語を直後に従えるのが本来の用法と考えられる。

以上のことを基にして考えると, もしmemperisterikan の - k a n が使役化の標的としている単位がmemperisteriだとすると, これは既にこの形で他動詞であるから, 使役化接辞の - k a n が付された動詞の目的語は, 被動者である筈だが, 実際には使役化の土台となっている動詞memperisteriの動作主として想定されるものがその目的語となっている。この問題を解決するには, memperisterikan の使役化接辞 - k a n の標的となっているのは, 表面には現れてこないが, 実は beristeri だと考えられる。そう考えれば, beristeri は自動詞であるから, 使役化接辞 - k a n が付した時, その使役化の標的となるのは土台となっている自動詞の動作主以外には無いことになる。自動詞の項は唯一つであるから。このような仮定に立てば, 全てが整合的に説明される。又, b e r - と - p e r - は発音の上でも似ているから, m e m b e r - が m e m p e r - に形を変えたと考えても, 無理は生じない。もし, この仮定に立って, memeperisterikanの形成過程を図示すれば, 次の如くである。

4 2)

isteri



派生の途中で現れる*memberiisterikan という形は実際には, この儘で出現することはなく, b e r - は臆て p e r - へと姿を変えるのである。

これと丁度逆なケースが次のmemperanakan である。

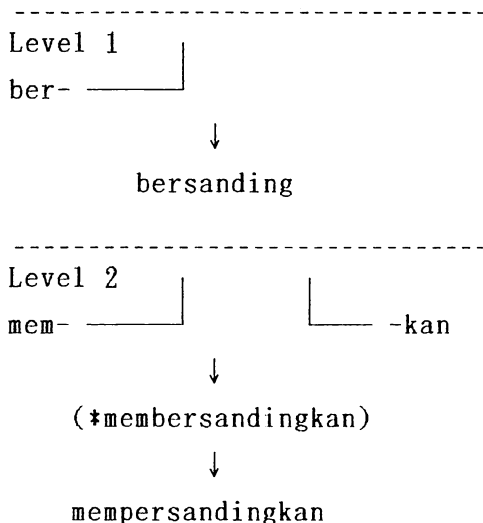
4 3) Nanti akan datang waktunya kamu akan dipersandingkan pula.

(Kamus Dewan (Edisi Ketiga), 1185)

(いずれ今度はお前が二人並んで華燭の典を挙げることになるだろう)

bersandingは、「結婚式で、花嫁、花婿が段の上に並ぶこと」をいう。一方、mempersandingkanは「花嫁、花婿を並べて座らせる」という意味であるから、明らかに、mempersandingkanは、bersandingを使役接辞 *m e m p e r -* の使役化の標的としていると考えられる。今、このmempersandingkanの形成過程を図示すれば次の如くである。

4 4) sanding



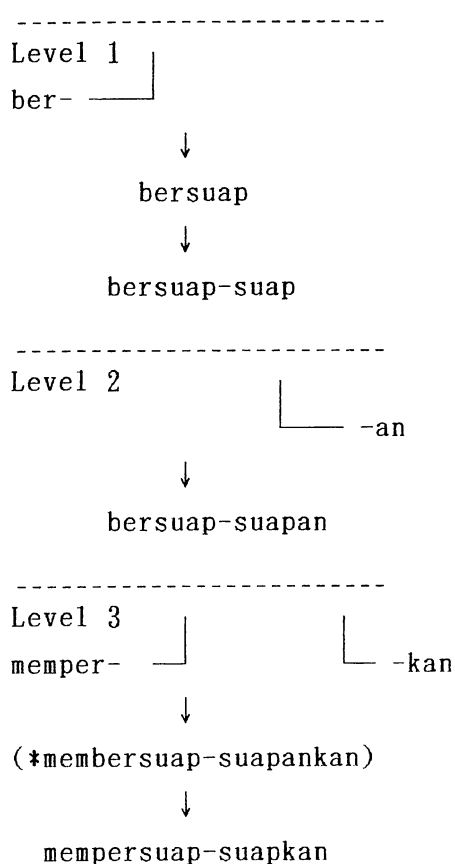
次のmempersuap-suapkanは、「(結婚式の儀式として)お互いに食べ物を相手の口に入れる」という意味であるが、これも、上記2つの例と同じく、*m e m p e r - k a n* の使役化接辞の標的となっているのは、*bersuap-suapan* (お互いに食べ物を相手の口に入れる) という *b e r -* 動詞であると考えられる。今、このmempersuap-suapkanの形成過程を示せば(46)の通りである。

4 5) Pengantin itu dibawa naik ke dalam istana ,dipersandingkan dan dipersuap-suapkan makan nasi kunyit.

(Kamus Dewan(Edisi Ketiga)P.1307)

(花嫁は宮廷に連れて来られ、花婿と並ばせられ、お互いにサフラン入りのご飯を食べさせる儀式をさせられた)

4 6) suap



これと丁度逆なケースが次のmemperanakan である。

4 3) Dia diperanakan di negeri Kedah.

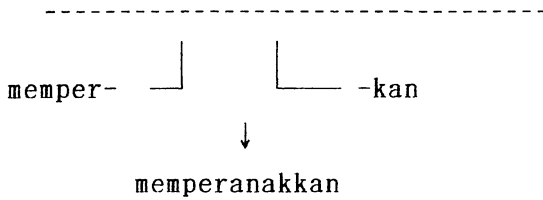
(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia(Cetakan Keempat),P.17)

(彼はケダ州で生まれた)

もし、memperanakan の使役化接尾辞の - k a n がその標的としているのが、beranak だとすると、b e r - 動詞は全て、自動詞であるから、beranak も勿論、自動詞ということになる。しかし、そうなると、- k a n が付加された使役動詞の目的語はberanak の動作主となる筈であるが、実際はこの予想を裏切っている。memperanakan は、「～を産む」という意味で使われ、「～に子供を産ませる」という意味ではないからである。従って、このケースに於いては、memperisterikan の時と同じく、使役化接辞 - k a n の標的となっているのは、beranak と考えることはできない。この場合は、anak という語根に m e m p e r - と - k a n が同一レベルで、即ち同時に、付加されたと考えなくてはならない。語根が、名詞のanakとなっているということは、この動詞が使役動詞ではないということに

もなるのである。今、以上の考察に基づいて、memperanakkan の形成過程を図示すれば、次の如くである。

4 4) anak (語根)



3. 構文的使役表現

前章では、単語の構成のレベルで、使役化接辞と、その接辞が使役化の標的とするのはどのような要素であるのかに就いて観てきた。マレーシア語には、この他に、「～に～させる」という構文の「させる」の意味を受け持ち、使役構文の構成に与かる動詞が存在する。それらの動詞の代表的なものを、その例と共に挙げる。

4 5) Engkau telah membuat aku malu di tengah orang ramai.

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P.87)

(お前は俺に人前で恥をかかせたんだぞ)

4 6) Emak tidak memberi saya bermain-main di tepi kolam itu.

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P.67)

(お母さんは私が池の淵で遊ぶのを許してくれません)

4 7) Alat itu diberi bertangkai.

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P.67)

(その道具には柄が付いています)

4 8) Kematian anaknya yang sulung itu menjadikan dia selalu termenung.

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P.67)

(彼の長子が死んだため、彼はしょっちゅう考え込む様になった)

4 9) Apa yang menyebabkan bandar itu maju dengan cepat ?

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P.67)

(町が急速に発展したのは何によるのですか?)

5 0) Kita tak boleh memaksa orang melakukan sesuatu yang tidak disukainya.

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P.67)

(私達は人に好きでもないことをさせることはできない)

上記構文の中、(4 7) の様にdiberiの後に b e r - 動詞が続く形は、主語に物

が来るのが普通である。この場合, diberi ber- ~は「~が施されている」という意味になる。

又, (49)を除き, 他の構文は全て, S + V + O + Comp. Sentence (主語 + 動詞 + 目的語 + 補文) という構造を成している。そして, この構造では, 動詞の後の目的語を, 目的語焦点化変形によって, 文頭に出すことができる。(45), (46), (48), (50)に焦点化変形を掛けたものは, それぞれ, (51), (52), (53), (54)となる。

51) Aku telah engkau buat malu di tengah orang ramai.

52) Saya tidak diberi emak bermain-main di tepi kolam itu.

53) Dia dijadikan selalu termenung oleh kematian anaknya yang sulung itu.

54) Orang tidak boleh kita paksa melakukan sesuatu yang tidak disukainya.

それに対して, (49)に現れるmenyebabkan は, S + V + Comp. Sentence という構文を作ると考えられる。そして, 次の如く, Comp. Sentenceの中から主語を取り出したものは非文となる。

55) * Bandar itu disebabkan maju dengan cepat oleh wujudnya kilang-kilang itu.

(*その町は工場があることによって急速に発展することとなった)

memberi は又, tahu (知る) という動詞と一体化して, 次に見られる様なmemberitahuという新たな動詞を作り出した。

56) Dia memberitahu saya bahawa isterinya telah meninggal.

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P.68)

(彼は私に妻が亡くなったと告げた)

元々は, 使役動詞のmemberi とtahuが一緒になって, 出来た動詞であるが, 今は, beritahuという形でエントリーされていることから分かる様に, この動詞は現在では, 単一の動詞として扱われている。次の例に於ける如く, memberi を単独で使った場合には, tahuの目的語に, 名詞を取れる。

57) Dia tidak memberi saya tahu perkara itu.

(彼は私にその事を知られない様にしている)

それに対して, 単一動詞となったmemberi は, 間接目的語の後に, bahawaに導かれる節は取れるが, 次の様に名詞を取ることはできないという相違点が現れている。

58) * Dia memeberitahu saya perkara itu.

memberitahu を使って、「彼はその事を私に知らせた」という意味にするのであれば、「私に」の部分に、kepadaを用いて次の様にすればよい。

59) Dia memberitahu perkara itu kepada saya.

以上のことから、memberitahu は、その直後に間接目的語も、直接目的語も来れるという特徴があることが分かる。そして、この特徴は又、疑似目的語を取る語根動詞が使役化の標的となっている様な動詞、例えば、mengingatkanの様な使役動詞にも見られる。ingat は次の例に見られる如く、直後に名詞を従えることができる。

60) Saya masih ingat (akan) peristiwa itu.

(私達はその出来事を未だ覚えています)

これは、一見するとm e - 他動詞が直後に目的語を従えるのと同じ形を取っている。しかし乍ら、語根動詞の直後の位置に現れる名詞は、m e - 動詞の目的語とは異なる特徴を有している。例えば、(61)のm e - 動詞の目的語(pahlawan-pahlawannegara)を文頭に移した(62)は文となる。

61) Kita mesti memperingati pahlawan-pahlawan negara.

(私達は国の為に戦った英雄達のことを心に留めて置かねばならない)

62) *Pahlawan-pahlawan negara kita mesti memperingati.

それに対して、語根動詞のingatの方は、直後の名詞句を、次の様に、文頭に移すことが可能である。

63) Peristiwa itu saya masih ingat.

この様に、語根動詞の直後の名詞句は、m e - 動詞の目的語とは性格を異にするので、前者の方を、疑似目的語と呼んで区別するのがよいと思われる。

このingatの様に、疑似目的語を取る語根動詞には、使役接辞の-k a nを付けた場合の目的語に、(語根動詞の)動作主も、(語根動詞の)被動者も両方取りうるものがある。次例を参照されたい。

63) Sepasang kasut hitam yang telah tembus tapaknya mengingatkan dia kepada pak ciknya di kampung.

(Kamus Dewan(Edisi Ketiga), P.491)

64) Ibunya pernah mengingatkan bahawa tidakada sebaik-baik tempat untuk mengadu selain daripada Tuhan.

(Kamus Dewan(Edisi Ketiga), P.491)

63)では、mengingatkanの目的語は、動作主であるのに対して、64)では被動者になっている。又、mengingatkanとは別に、memperingatkanという使役動詞があるが、こちらの方は、目的語に動作主しか取らない。従って、動作主が目的

語となっている（65）は認められる形であるが，（66）では被動者が目的語となっているので，これは認められない形である。

65) Saya telah banyak kali memperingatkan mereka tentang bahaya bermain bunga api dekat rumah.

66) * Saya telah banyak kali memeperingatkan bahaya bermain bunga api kepada mereka.

4. 使役動詞の目的語－結びに代えて

付された使役接辞の標的が動詞である場合，出来上がった使役動詞の目的語の性格に就いて，ここでは考察する。先ず，語根動詞の場合に就いて考えてみよう。語根動詞は自動詞と，疑似目的語を取るもの（これを疑似他動詞と呼ぶことにする）とに分かれる。前者の場合，当然項は一つであるから，使役動詞の目的語となるのは，語根動詞の動作主を置いて他にはない。その例として，memandikanを挙げることができる。

67) Maheran sedang memandikan anaknya di bilik air.

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia ,p.431)

（マヘランは水浴び場で子供の体を洗ってやっているところです）

この使役動詞の語根はmandi であり，この語根は自動詞であるから，唯一の項である動作主，即ち水浴をする人が，使役動詞の目的語となる。今，同じ意味を，使役構文を作るmemberi を使ってパラフレイズすれば，次の如くである。

68) Maheran sedang memberi anaknya mandi di bilik air.

68) に於いて，memberi の目的語であるanaknya は，解釈上はmandi する動作主でもある。68) の様に，使役構文を構成する動詞でパラフレイズした場合，memberi の直後に来る名詞句が，memandikanの目的語となるという関係がある。

もう一つの例として，次の様な例に現れるmemasukkanを考えてみよう。

69) Ia memasukkan mesin taip ke dalam bilik.

(Kamus Dewan (Edisi Ketiga),P.865)

（彼はタイプを部屋に運び入れた）

使役接辞－k a nの標的となっているのは，語根動詞のmasuk である。masuk は自動詞であり，その唯一の項，即ち，部屋に入る物は，mesin taipであるが，この唯一の項であるmesin taipが使役動詞の目的語となっている。但し，この場合，masuk の唯一の項は，人ではなく，物であるから，入るよう命令する対象にはなり得ないから，この様な場合には，前のmemandikanの時の様に，memberi での書き換えが不可能である。つまり，次の様な文は非文となる。

70) * Ia memberi mesin taip masuk ke dalam bilik.

この場合は、membawa（運ぶ）を使って、次の如く書き換えることができる。

71) Ia membawa mesin taip masuk ke dalam bilik.

このmembawaの目的語は又、解釈上、masukする（といっても人の力で結果的にそうなるということであるが）主体でもある。このmasukする主体が、memasukkanの目的語となるという関係がある。（71）は次の様に、membawaとmasukを一つの合成動詞として使って、書き換えることもできる。

72) Ia membawa masuk mesin taip ke dalam bilik.

membawa masukは、実際上は、memasukkanの様に、全体として一つの使役動詞相当と考えて差し支えないのではないかと思う。つまり、ここには、構文的な使役表現が、上位の動詞と下位の動詞の凝縮化によって、語彙的使役動詞への変質という現象が生じていると言える。同様の現象は、次の例に於けるmemberi makanにも起こったと考えていいだろう。

73) Aminah sedang memberi makan Tompok.

（アミナは今（猫の）トンポに餌を遣っているところです）

このmemberi makanは、これ全体で、一つの使役動詞相当として機能し、「～に餌を遣る」という意味で使われる。この凝縮動詞memberi makanは、次の様な文から、memberiとmakanが凝縮化により、makanが上位の動詞であるmemberiに付着することにより生じたと考えられる。

74) Aminah sedang memberi Tompok makan.

次に、使役接辞の語根が疑似他動詞の語根動詞である場合に就いて考えてみる。その例として、minum（飲む）を挙げることができる。この動詞は、（75）の様に、二項動詞として使われる。

75) Ia suka minum minuman keras.

（彼は酒を飲むのが好きだ）

そして、この語根動詞に使役接辞の-kanを付したmeminumkanは、次の例に見られる如く、使役の標的とする語根動詞の動作主も、被動者もその目的語に取ることが可能である。

76) Ia meminumkan ubat kepada ayahnya yang sedang sakit.

（Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P.447）

（彼女は病気のお父さんに薬を飲ませてあげた）

77) Ia sedang meminumkan lembu.

（Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P.447）

又、ingatという語根動詞も次の様に、疑似目的語を取る。

78) Saya tidak dapat ingat lagi hari lahir saya.

(Kamus Am Terbaru Bahasa Malaysia, P.355)

(私は私の誕生日がいつだったか思い出せません)

そして, minum の場合と同じく, ingat を使役の標的にしたmengingatkanも, 語根動詞の動作主と, 被動者の両方共その目的語に取ることができる。次にその例を掲げる。

79) Sepasang kasut hitam yang telah tembus tapaknya mengingatkan dia kepada pak ciknya di kampung.

(Kamus Dewan(Edisi Ketiga), P.491)

(そこに穴の開いた靴を見て彼は田舎の叔父さんを思い出した)

80) Ibunya pernah mengingatkan bahawa tidak ada sebaik-baik tempat untuk mengadu selain daripada Tuhan.

(Kamus Dewan(Edisi Ketiga), P.491)

(彼のお母さんは悩みを打ち明けるには神様程良い心の拠り所はないということを忘れない様にとっていた)

(79) に於いては, mengingatkanは動作主のdia を目的語に取っているのに対して, (80) では, 被動者のbahawaに導かれる名詞節を目的語に取っている。

しかし乍ら, 疑似他動詞の語根動詞の全てが, meminumkanやmengingatkanの様に, 語根動詞の動作主と被動者の両方を目的語として取る訳ではない。例えば, 次のkenal という語根動詞も2項動詞である。

81) Saya sudah kenal dia semenjak kecil lagi.

(Kamus Dewan(Edisi Ketiga), P.631)

このkenal という語根を使役化の標的にしたmemperkenalkanは, 上記2例とは, 違って, 語根の被動者しかその目的語に取らない。

82) Beliau telah memperkenalkan sahabatnya itu kepada saya.

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P.331)

(氏はその友人を私に引き合わせた)

83) Buku itu ditulis untuk memperkenalkan satu kajian yang mudah mengenai Geografik Kawasan kepada murid-murid.

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P.331)

(その本は地質地理学に関する或る調査をやさしく紹介する為に編まれたものである)

そして, 同じ語根を基として作られた, 使役動詞のmengkenalkanの方は, 逆に語根の動作主をその目的語として取る。

8 4) Hanya dengan mengenalkan penduduk-penduduk luar bandar kepada perusahaan besar-besaran, barulah rakyat akan sedar.

(Kamus Dewan(Edisi Ketiga),P.632)

(郊外の住民達に大企業に就いて知って貰うことで、漸く住民達の意識の覚醒が図れるだろう)

次に使役の標的となる要素が b e r - 動詞の場合を考えてみる。このカテゴリーに入るものの中には、次の様に、b e r - がその儘の形で現れているものもあるが、大抵の場合、b e r - が p e r - に隠れている。

8 5) Dia memberhentikan basikalnya.

(彼は自転車を止めた)

b e r - が p e r - に隠れている場合としては、次の様な例がある。

8 6) Encik Hamid mengadakan kenduri kerana memperisterikan anak sulungnya.(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia(Cetakan Kesebelas, P.269)

(ハミッドさんは長男に嫁を貰ったので祭宴を催した)

memperisterikan の意味は、「妻を娶らせる」であるから、辞書の記述にもある如く、パラフレイズすれば、memberi (～にする) beristeri (妻を取る) である。従って、使役動詞が使役の標的にしている要素はberisteri ということになる。memperisteriは、「～を妻にする」という他動詞であるから、もしこの他動詞が使役の標的だと考えると、「～を妻として娶らせる」という意味になる筈であるが、実際はそうではないので、これは使役化接辞 - k a n の標的の候補からは外れる。言うまでもなく、b e r - 動詞は自動詞であるから、これを使役化の標的にした場合には、使役動詞の目的語は、b e r - 動詞の唯一の項以外にはあり得ない。

しかし、memperkelahikan は、一見すると、これの例外の様に見える。この動詞は次に見られる如く、①喧嘩させる、争わせる、②戦って手に入れる③～と敵対する、～と争う、～を襲うの意味で用いられる。今、(1)と(2)の例文を挙げる。

8 7) Dia sering memperkelahikan rakan-rakannya.

(Kamus Imbuhan Bahasa Melayu(1993),P.138)

(彼は屡々友達同士を喧嘩させる)

88) Dia sedia memperkelahikan haknya.

(Kamus Imbuhan Bahasa Melayu(1993),P.138)

(彼は争ってでも自分の権利を護りたいものと思っている)

(87)のmemperkelahikanの意味は、パラフレイズすれば、memberi (～させる) berkelahi (戦う)となるから、この例だけを考えるならば、使役化の標的はberkelahiと考えて差し支えない様に思われる。しかし乍ら、memperkelahikanには、上記②と③の意味もあることが旨く説明できない。②や③の意味も併せて考えるならば、この使役動詞は、使役の標的として、berkelahiを取ると考えない方がよいのではないかと思われる。つまり、memperkelahikanの使役の標的はkelahiと考えるのである。

次に、使役の標的が他動詞である場合を考えてみる。先に見てきた様に、meminjamkanは、その使役の標的がmeminjam (～を借りる)というそれ自体既に他動詞である要素であった。他動詞は、当然のこと乍ら、2項動詞であるから、meminjamkanの目的語はこの両方がその候補となり得る可能性がある訳だが、実際には、次の例が示す如く、その使役動詞meminjamkanの目的語に選ばれるのは、使役の標的である他動詞の被動者の方だけである。

89) Bank telah meminjamkan beratus ribu ringgit kepada peniaga kecil.

90) * Bank telah meminjamkan peniaga kecil beratus ribu ringgit.
そして、meminjamの動作主を、使役動詞meminjamkanの目的語にしたければ、次のような形にすれば良い。

90) Bank telah meminjami peniaga kecil beratus ribu ringgit.
これも、既に主張したことではあるが、この場合の-iも使役接辞と見做す必要がある。そして、使役接辞の-iと-k a nには、いわば仕事の分担が成り立っていて、前者は使役標的の動作主を直後に従える時、後者は使役標的の被動者を直後に従える時に使われる。しかし、同じ様に、使役標的が他動詞であっても、memakaikanの場合は些か事情を異にする。memakaikanは次の様に、被動者を直後に取る用法がある。

91) Diberinya sebilah keris yang bernama Tanjung Lada ,maka dipakaikan oleh Apu itu kepada anaknya.

(Kamua Dewan (1989),P.890)

(タンジョン・ラダと呼ばれる一振りの剣が渡されると、アプはそれを自分の子供に佩びさせた)

この例では、被動者がkepadaという前置詞で導かれていることから分かる様に、

memakaikanの目的語は、被動者のみであることがはっきりしている。しかし乍ら、同書には次の例も見受けられる。

9 2) Ia telah dipakaikan pula baju dan seluar yang labuh dan besar.
(Kamua Dewan (1989), P. 890)

(彼には又、服とたっぷりとして大きなズボンが着せられた)

もし文頭のiaがmemakaikanの直後の位置から出てきたとするならば、その元となる文として、次の様な文が想定される。

9 3) Ibu memakaikan dia baju dan seluar yang labuh dan besar.
(母は彼に服とたっぷりして大きなズボンを着せた)

そして、この様な形は、Kamus Pelajar Delta に実際に挙がっているのである。

9 4) Ia memakaikan adiknya baju.
(Kamus Pelajar Delta, P. 511)

(彼は弟に服を着せてあげた)

そして、Kamus Dewan (1989)の890 頁には、今は廃用となったmemakaiiという形が挙がっている。そして、恐らくは、このmemakaii は、meminjami と同じく、直後に間接目的語を取る動詞だったのだろう。つまり、次の様な使い方が以前にはあったものと思われる。

9 5) Ia memakaii adiknya baju.

しかし、語の終わりの-i i という好ましくない同一母音の重複が原因で衰退していったものと思われる。memakaikanはmeminjamkan と同じく、使役の標的となる他動詞の被動者をその直後に従えるのが、本来の用法であろう。他動詞化するだけの機能を持った-k a nと、-i には、前者が直接目的語を、後者が間接目的語を直後に従えるという機能上の分業が成り立っているが、この分業体制が、形態上の同一性の故に、使役接辞の-i と-k a nの使い分けに重ね合わされたのではないだろうか。しかし、memakaiiという形が衰退していった為に、memakaikanはこのmemakaiiの用法をも併せ持つ様になったのではないだろうか。そして、(9 3)の様な形が可能になった為に、このmemakaikanの直後の間接目的語に焦点前置変形を掛けることで、派生したのが、(9 2)の文である。

参考文献

- Asmah Haji Omar(1993). Nahu Melayu Mutakhir. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Nik Safiah Karim, Farid M. Onn, Hashim Hj. Musa, and Abdul Hamid Mahmood (1993). Tata Bahasa Dewan (Edisi Baharu). Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.

ラオス語の使役表現について

上田玲子

0. はじめに

本稿で述べる「ラオス語」とは、ラオス人民民主共和国ヴィエンチャン特別区で話されているラオ語のことを指す。また、動詞とはその直前に否定辞/*boj*/を付して否定表現にできるもののことをいう。インフォーマントは、ウティン・ブンニャウオン氏（男性・52歳）でラオス西北部のサイニャブリー県に生まれ、両親ともにサイニャブリー県出身である。6歳以降はヴィエンチャン特別区チャンタブリー郡南ワッタイ村（6歳～28歳）と北ワッタイ村（28歳～51歳）に住む。1998年来日。

1. 「hàj」について

ラオス語では、使役文を作るには、「与える」を基本的な意味とする「hàj」を必要とする。この「hàj」は使役の意味も含めて次のような用法がある。

1.1. 「与える」

「与える」という意味で、後ろに授与物を表す補語かもしくは受益者を表す補語のどちらか一つを置く。

(1) láaw hàj khanǒm
(彼・与える・菓子) = 「彼はお菓子をあげた」

(2) láaw hàj déknǒj
(彼・与える・子供) = 「彼は子供にあげた」

1.2. 「～に」

「～に」という意味で、後ろに受益者を表す補語を置く。動詞ではないことは、「hàj」の前に否定辞を付すことができないという理由による。

(3) láaw ǎaw khanǒm hàj déknǒj
(彼・とる・菓子・～に・子供) = 「彼は子供にお菓子をあげた」

1.3. 「～てくれる」

「～てくれる」という意味で、受益者は話し手である。

(4) láaw sūu khanǒm hàj
(彼・買う・菓子・くれる) = 「彼はお菓子を買ってくれた」

1.4. 「～させる」

「～させる」という意味で、一般に「使役者+*hàj*+受益者+動詞句」の順に置く。動詞句の動作者は直前の受益者である。

(5) *khòj hàj láaw sùu khanǎm*

(私・させる・彼・買う・菓子) = 「私は彼にお菓子を買わせた」

1.5. 「～ように」

「～ように」という意味で、後ろに結果を表す補語を置く。

(6) *láaw tát phǎm hàj sǎn*

(彼・切る・髪・ように・短い) = 「彼は髪を短く切った」

(7) *thàa hàj khòj ?aapnǎm*

(待つ・ように・私・水浴びする) = 「私が水浴びするまで待つ」

このように多様な用法が見られる「*hàj*」であるが、なぜ使役表現に使用される「*hàj*」文を次節で検討する。

2. 使役表現の分類

ラオス語の使役表現は以下の4つの型がある。

2.1. *X+hàj+Y+V*

2.2. *X+hethàj+Y+V*

2.3. *X+V 1+hàj+Y+V 2*

2.4. *X+V 1+Y+hàj+V 2*

(X、Yは名詞句、Vは動詞句)

以下にそれぞれについて検討する。

2.1. 「*X+hàj+Y+V*」

(8) *láaw hàj déknǎj pǎj sùu yǎa*

(彼・させる・子供・行く・買う・たばこ) = 「彼は子供にタバコを買いに行かせた」

上の文は「XがYに直接はたらきかけてYの動作であるVを引き起こしている」という意味にとれる。Xは有生物で有意志である。ところが、次の(9)のXは有生物とはいえない。

(9) *latthabǎan hàj phûaksáawnum sùuuptoo*

(政府・させる・青年・受け継ぐ) = 「政府は青年に受け継がせた」

例文（９）のX部分である/latthabáan/（政府）は一見無生物であるが、「政府」は人間が作り出したもので構成委員は人間である。従って無生物とは性格が異なり、いわば準有生物のようなものだと言うことができ、「青年」にはたらきかけられる有意志性があると考ええる。

2.2. 「X+het hàj+Y+V」

この型の/het/は「する・やる・作る」という意味で、文は「Xが原因やきっかけとなって、YのVを引き起こさせた」という意味である。例えば、

- (10) déknôj sɛŋ tók, het hàj phɔɔmɛɛ sɿacǎj
 (子供・試験・落ちる・させる・両親・悲しい)
 = 「子供が試験に落ちたことは両親を悲しめた。」

(10)は「子供が試験に落ちたこと」が原因で「両親が悲しむ」ということを引き起こさせたのである。この表現では、Xは有生物、無生物のどちらでもよく、意志性があってもなくてもよい。またYも有生物、無生物のどちらでもよく、Vは自発的に起こりうる動作を表している。従って誘発的な使役文であるといえる。換言すれば、「原因Xと結果Y+V」という因果関係を表している。

2.3. 「X+V 1+hàj+Y+V 2」

- (11) láaw saŋ hàj khòj pǎj sɿuu khuaŋ
 (彼・命令する・させる・私・行く・買う・もの)
 = 「彼は私に買い物に行かせた」

- (11)' láaw hàj khòj pǎj sɿuu khuaŋ
 (彼・させる・私・行く・買う・もの)
 = 「彼は私に買い物に行かせた」

2.3.の文は「XがV 1することはYにV 2させること」という意味である。一方、(11)'は先の「2.1.」の「XがYに直接はたらきかけてYの動作であるVを引き起こしている」という意味の文である。両者のちがいは、Xの動作V 1が述べられているか否かである。(11)では/saŋ/（命令する）という「彼」の動作、即ち使役態度が明確に述べられている。即ちXの動作であるV 1は、XのYに対する使役態度を明確に示していると考ええる。V 1には/saŋ/（命令する）の他にも例えば、

- (12) khòj yàak hàj cǎw pǎj
 (私・したい・させる・あなた・行く) = 「私はあなたに行かせたい」

/yàak/は「～したい」という願望を表す意味なので、(12)は「Xが願望することはYにV2させること」という意味である。

(13) phùuthàwphùukee lăw hăj déknôj fáj

(年寄り・語る・させる・子供・聞く) = 「お年寄りには子供達に語って聞かせた」

/lăw/は「語る」という意味なので、(13)は「Xが語ることはYにV2させること」という意味である。

いずれの場合も、XのYへの使役態度を明確に表しているものであり、Xは有生物でV1には意志性がある。一方のV2には意志性があってもなくてもよく、このことはY+V2がX+V1の意図することであることに他ならない。即ち強制的な使役文であるといえる。その一歩進めた形が、以下の(14)のような禁止の命令文や(15)のような祈願文になると考えられる。

(14) yaa hăj son sǎj dǎj

(するな・させる・送る・音・大きい) = 「大きい音をたてないで下さい」

(15) khǎo hăj mǐ sôok mǐ lăap

(下さい・させる・ある・運・ある・吉祥) = 「幸せでありますように」

(14)は「(私が) 禁止することは大きい音をたてさせること」で、(15)は「(私が) 請うことは(私を) 幸せにさせること」である。

2.4. 「X+V1+Y+hăj+V2」

前の2.3.「X+V1+hăj+Y+V2」とのちがいは、Yが/hăj/の前に置かれるか後ろに置かれるかである。/hăj/がYの後ろにある2.3.は「XがV1することはYにV2させること」であるのに対し、/hăj/がYの前にある2.4.は「XがYにV1することはV2させること」である。一見どちらも同じことを表しているようである。もし同じであるならば、2.3.と2.4.が置き換えが可能なはずである。次の(11)(16)(17)は置き換えが可能な例である。それぞれを2.3.と2.4.の形式の順に示すと、

(11) láaw saŋ hăj khòj pǎj sūuu khuan

(彼・命令する・させる・私・行く・買う・もの)

= 「彼は私に買い物に行かせた」

(11) " láaw saŋ khòj hàj pǎj sūu khmaŋ

(彼・させる・私・行く・買う・もの) = 「彼は私に買い物に行かせた」

(16) phoomɛɛ bǎŋkhaŋ hàj lúuk pǎj

(両親・強制する・させる・子・行く) = 「両親はむりやり子供に行かせた」

(16) " phoomɛɛ bǎŋkhaŋ lúuk hàj pǎj

(両親・強制する・させる・子・行く) = 「両親はむりやり子供に行かせた」

(17) khòj ne?náam hàj láaw hūu

(私・紹介する・させる・彼・知る) = 「私は彼に知らせた」

(17) " khòj ne?náam láaw hàj hūu

(私・紹介する・させる・彼・知る) = 「私は彼に知らせた」

一方、次の(12) (18) (19)は2.4への置き換えが不可能な例である。

(12) khòj yaak hàj cǎw pǎj

(私・したい・させる・あなた・行く) = 「私はあなたに行かせたい」

(12) " *khòj yaak cǎw hàj pǎj

(*は非文の意味。)

(18) láaw tókloŋ hàj khòj pǎj

(彼・承知する・させる・私・行く) = 「彼は私に行かせるを承知した」

(18) " *láaw tókloŋ khòj hàj pǎj

(19) khǒo hàj khòj pǎj dǎj

(下さい・させる・私・行く・できる) = 「私が行けますように」

(19) " *khǒo khòj hàj pǎj dǎj

これらの例文から2.3.と2.4.が置き換えが可能な場合と不可能な場合があることがわかった。置き換えが可能な動詞は、/bǎŋkhaŋ/ (強制する)、/pooj/ (放っておく)、/sɔɔn/ (教える)、/cǎaŋ/ (雇う)、/ne?náam/ (紹介する)、/súkpuu/ (応援する)などで、置き換えが不可能な動

詞は/yaak/ (したい)、/tókłón/ (承知する)、/tátcĩncǎj/ (決心する)、/póom/ (認める)、/khoo/ (下さい)、/yaa/ (するな)、/lâw/ (語る) などである。それぞれの場合についてどのような動詞があるか今後さらに検討する必要があるが、これらの動詞から、置き換えが可能な動詞は、V 2 が V 1 の意図ととれる動詞である。一方の置き換えが不可能な動詞は、V 2 が V 1 の意図ととれない動詞である。なぜならば、前者は「X + V 1 + /phua/ (ために) + Y + V 2」で置き換えられるが、後者は置き換えられないからである。従って/hàj/以下は、2.3.では意図すること、2.4.では結果的にそうなることを表すと考えられる。

3. 今後の課題

3.1. /hàj/ の意味

「X + hàj + Y + V」の/hàj/はXのYへの直接的なはたらきかけで、「X + het hàj + Y + V」の/het hàj/はXが原因でYが結果という因果関係を表すこと、また「X + V 1 + hàj + Y + V 2」の/hàj/はY + V 2 が X + V 1 の意図であることを表し、「X + V 1 + Y + hàj + V 2」の/hàj/はV 2 が X + V 1 + Y の結果であることを表すということを述べた。いずれの場合も/hàj/の前の部分によって/hàj/以下のことが存在するということができる。これらのことから、/hàj/の意味は「はたらきかけ」ではないかと思われるが、使役文について更なる検討が必要であろう。また先の1の1.1.から1.5.の用法についても「はたらきかけ」と解釈できるかどうか、今後の検討課題としたい。

3.2. 動詞の結合性

2.4.で、2.3.と2.4.の置き換えを検討し、「V 1 + hàj + Y」と「V 1 + Y + hàj」が、動詞によって両方の形が可能である場合と後者の形が不可能である場合があることがわかった。本稿では、それは文の意味が異なるためであるとして、/hàj/以下の意味の違いを述べたが、なぜ動詞によっては「動詞 + hàj」の間に他の要素を入れる形を許さないのかはさらに検討する必要がある。このことは、「動詞」と「hàj」との間の結合性が関与していると思われる。今後更に例文を収集し、検討することにした。

現代トルコ語の使役構文—その機能と意味—

川口 裕司

はじめに

論文の最後に掲げた参考文献を見るとわかることだが、トルコ語の使役構文はすでに多くの研究者によって分析の対象とされてきた。ここでは先人たちの研究成果を踏まえ、現代トルコ語における使役構文を概観するとともに、使役化の統辞的機能を明らかにし、使役化がどのような意味をもっているのかを考えてみたい。筆者はこの論文の中で使役構文の仕組みを考える際の一つの作業仮説を提示したつもりである。本稿で提案した作業仮説の検討は今後の論文に委ねたいと思う。また脱稿した際に、インフォーマント調査を行なうべき幾つかの問題点が残されたが、その疑問点も稿をあらためて論ずることにする。

本論考で用いた例の多くは実際のトルコ語のコーパスから引用したものである。それらの出典と省略記号を以下にあげておく。

資料体

省略記号 ()

1. Çetin Altan, *Al işte İstanbul*, 3 basım, Yazko, İstanbul, 1981. (Altan)
2. Sait Faik, *Bütün Eserleri 1, Semaver/Sarnıç*, Bilgi Yayınlar, Ankara, 1981. (Faik)
3. *Türk Mizah Hikâyeleri Antolojisi*, Bilgi Yayınlar, Ankara, 1982. (Mizah)
4. Yaşar Kemal, *İnce Memed II*, Toros Yayınları, İstanbul, 1983. (Memed)
5. A. Turan Oflazoğlu, *Kösem Sultan*, Adam Yayıncılık, İstanbul, 1982. (Kösem)
6. 雑誌 *Nokta*, 10-16, 17-23, 24-30 Aralık, 1995. (Nokta)

I. 使役構文と格付与

まずは次の4つの動詞文を考えてみよう。

- (1) At koş -uyor.¹ その馬が走る
馬 走る -現在
- (2) Kemal at -ı koş -tur -uyor. ケマルはその馬を走らせる
ケマル 馬 -を 走る-使役-現在
- (3) Kemal kapı -yı aç -tı ケマルはそのドアをあけた
ケマル ドア -を あける-定過去
- (4) Ben Kemal' -a kapı -yı aç -tır -dı -m.²
私 ケマル -に ドア -を あける -使役-定過去-私
私はケマルにそのドアをあけさせた

(1)は動詞 *koşmak* (-mak は不定詞語尾)「走る」を用いた構文であり、いわゆる自動詞文である。この動詞は目的格を支配しない動詞であるため、本稿ではこれを無目的格動詞と呼ぶことにする³。使役接尾辞-DIr-⁴がこの動詞につくと、(2)の例に現れる使役不定詞 *koşturmak*「走らせる」になる。この動詞は直接目的語 *at-ı* を支配することができるため、ここでは直接目的格を支配する動詞、直接目的格動詞と呼ぶ。無目的格動詞 *koşmak* は使役化することで、直接目的格動詞 *koşturmak* になったと言える。

一方、例文の(3)は不定詞 *açmak*「あける」を用いた他動詞文である。*açmak* は直接目的語 *kapı-yı*「ドアを」を支配する直接目的格動詞である。この動詞に

¹ 動詞に人称語尾がついていない形は三人称形と解釈される。(1)の *koşuyor* と(4)の *açtırdım* を比較。

² トルコ語では固有名詞に接尾辞がつくとき、正書法上、Kemal'a のようにアポストロフィーが必要になる。

³ 本稿で用いられる無目的格動詞のような術語については、稿を改めて、その妥当性と一般性を論じることにした。

⁴ トルコ語学の慣例にしたがって、文法形態を代表形として記する場合には形態音韻表記を用いた。したがって使役接尾辞 /-DIr-/ は、実際には、直前に現れる子音と母音の性質により、以下の8つの変異態のいずれかの形態になる：-dir-, -dır-, -dür-, -dur-, -tir-, -tır-, -tür-, -tur-。この使役接尾辞は現代語において、-T-

使役接尾辞 -Dir-をつけると、(4)の使役不定詞 açtırmak「あけさせる」になる。açtırmak はもとの直接目的語 kapıyı のほかに、間接目的語 Kemal'a「ケマルに」も支配する。つまり直接目的格動詞 açmak は使役化することで、直接目的格と間接目的格を支配する動詞、直接・間接目的格動詞に変わったのである。

ところで、すでに 1970 年代に Bernard Comrie は、こうした非使役文 (1)、(3) と使役文(2)、(4)の間の格付与の関係に注目し、格階層 (Case Hierarchy)と使役の問題を論じている⁵。その説明を簡単にまとめておこう。

上の例をもう一度みていただきたい。使役文(2)では主語 Kemal が非使役文(1)の主語 at に行為を行なわせる主体となるため、非使役文の主語 at は主格ではなく、格階層においてランクが一つ下の直接目的格(at-1 の -1)に降格される⁶。ところが、非使役文が例文(3)のようにもともと直接目的語 kapı-yı もっていると、(3)における主語 Kemal は使役文(4)において、さらにランクが下の間接目的格(Kemal-a の -a)に降格される。

使役文の中には、例文(2)や(4)における atı と Kemal'a のような、いわゆる埋め込まれた主語が現れるわけであるが、Comrie の主張する埋め込み主語の格階層とは次のようなものである。

上位 ——— 格階層 ———→ 下位
主格—直接目的格—間接目的格—他の斜格 (Comrie, 1976, p.263)

使役文における埋め込み主語の降格は、上の順序で行なわれる。こうした格の再編と使役化の関係を整理すると以下のようなだろう。

と共に生産的な接尾辞とすることができる。

⁵ Comrie (1974)と(1976)は、ほぼ同じ時期に書かれた論文であり、内容的にも多くの点で重複している。論文の題名から明らかなように、普遍文法(universal grammar)との関連性において、Comrie は使役構文を複数の言語にわたって分析している。

⁶ (...) the effect of causativization has been to retain matrix subject as superficial subject, whereas embedded subject turns up as superficial direct object - in fact, demoted one step down the Case Hierarchy. (Comrie, 1974 p.5) (下線は川口)

例文(1)→(2)の使役化による統辞変化

非使役文(1) —————→ 使役文(2)
無目的格動詞——（支配格の増加）——→ 直接目的格動詞
主格 —————（降格）————→ 直接目的格

例文(3)→(4)の使役化による統辞変化

非使役文(3) —————→ 使役文(4)
直接目的格動詞——（支配格の増加）→ 直接・間接目的格動詞
直接目的格———（留任）————→ 直接目的格
主格———（降格）————→ 間接目的格

この場合に見過ごしてはならないことだが、例文(3)の直接目的格動詞が支配する目的語 *kapı-yı*「ドア-を」の直接目的格 *-yı* は、使役化によっても統辞的な変化を一切被っていない。変化したのは主語 *Kemal* のほうである。同じことが例文(1)の使役化についても言える。格付与が変化したのは主格名詞の *at* である。Comrie が主張した格階層とは、使役化による統辞操作にともなって、発話中に統辞的变化が生じ、埋め込まれた主語の格が影響を受けて格の再編成が起きるとき、どのような順序で優先的に格が付与されるのか、そうした格付与の優先順位を示したものに過ぎない。それは使役化によるもろもろの統辞変化の原因、すなわち、なぜ上の(3)→(4)において直接目的格は保持されたのか、あるいは(1)→(2)と(3)→(4)において、なぜ非使役文の主格だけが再編成の対象となったのか等を説明するものではない。しかしながら、格階層の議論ではあまり論じられていない事実が使役化の本質を考える上で重要であると筆者は考えたい⁷。

⁷ とはいえ格階層の重要性は、たとえば次のような例を見れば明らかである。

*Hediye-yi Tokay için (*Tokay-a) hoca-ya ver-di-m.*
プレゼント-を トカイのために トカイ-に 先生-に 与える-定過去-私
私はトカイのためのプレゼントをその先生に渡した

直接・間接目的格動詞 *vermek*「与える」が、間接目的語 *hoca-ya*「先生-に」をすでに支配しているとき、受益項 *Tokay* を間接目的格 *-a* で示すことはできない。この場合には、間接目的格よりランクの低い斜格、受益格 *için* が割りふられる。上記の例文は Laura Knecht (1986) p.104 から引用した。議論の本質には関係ないことだが、実際には次の例文の方が自然かと思われる。

Tokay için (bir) hediyeyi hocaya verdim.

II. 使役化による統辞操作

直接目的格動詞の例はすでに見た。次に間接目的格動詞や斜格を支配する動詞の例を見てみよう。たとえば、不定詞 *binmek* 「乗る」は間接目的格 *-E*⁸ を支配する動詞であり、*buluşmak* 「合致する」は道具格 *ile* をとる。後者をここでは斜格動詞と呼ぶ。

(5) *Koca Osman at -a bin -di.* 老オスマンは馬に乗った
老 オスマン 馬-に 乗る-定過去

(6) *Koca Osman-ı (...) at -ı -na bin -dir -di, (...) (Kösem)*
老 オスマン -を 馬-彼の-に 乗る -使役 -定過去
彼は老オスマンを馬に乗らせた

(7) *ülke devlet anlayışı ile buluş -tu.* その国は政府見解に合致した
国 政府 理解 道具格 合致する-定過去

(8) (...) *ülke-yi tamamen hukuk dışı bir devlet anlayışı ile*
国 -を 完全に 法 外 ある 政府 理解 道具格
buluş -tur -mak iste -yen -ler (...) (Nokta)
合致する-使役-不定詞 望む -動名詞-複数
(...)その国を完全に法の外にある政府見解に合致させようと望む者たち(...)

例文(5)→(6)の使役化による統辞変化

非使役文(5) —————→使役文(6)
間接目的格動詞—— (支配格の増加) →直接・間接目的格動詞
間接目的格——— (留任) —————→ 間接目的格
主格——— (降格) —————→ 直接目的格

例文(7)→(8)の使役化による統辞変化

非使役文(7) —————→使役文(8)
斜格動詞——— (支配格の増加) → 直接目的格・斜格動詞
斜格——— (留任) —————→ 斜格
主格——— (降格) —————→ 直接目的格

以上から、使役化は非使役文における主格以外の格構成に一切影響を与えないということ、逆に言えば、使役化は非使役文における主格の統辞機能だけに影響を

⁸ 間接目的格 *-E* は先行する母音の性質により、*-e* または *-a* の形態をとる。

与える統辞的操作であることがわかる。

ではなぜ使役化は主格の格構成にだけ影響を与えるのであろうか。今まで述べてきた例を論理的な意味構造の観点から分析すれば、その理由は極めて単純であることがわかる。

(1) At koşuyor.
行為項 過程

(2) Kemal atı koşturuyor.
使役項 行為項 過程

(3) Kemal kapıyı açtı.
行為項 被行為項 過程

(4) Ben Kemal'a kapıyı açtırdım.
使役項 行為項 被行為項 過程

(5) Koca Osman ata bindi.
行為項 被行為項 過程

(6) Koca Osman'ı atına bindirdi (Kösem)
行為項 被行為項 過程

(7) ülke devlet anlayışı ile buluştu.
行為項 被行為項 過程

(8) ülkeyi (...) bir devlet anlayışı ile buluşturmak isteyenler (...) (Nokta)
行為項 被行為項 過程 使役項

(1)と(2)の例において、koşmak「走る」という過程に直接参加するのは、いずれも行為項 at「馬」である。(2)の使役項⁹ Kemal は、いわば、そうした「馬が走る」という過程を起動させる働きを担っているに過ぎない。したがって上の例文に下線を附したように、使役文の中には新たな使役項が現れているが、非使役文の行為項と被行為項の関係は全く変化していない。非使役文がもともと持っていた行為項と被行為項の関係を保持しつつ、使役項を新たに生み出す統辞的操作が

⁹ 本論考では使役文の主語を、仮に、使役項と呼んでいるが、こうした用語の検討はここでは行わない。

使役化であると言える。そして使役項が創出される中で、非使役文の主格の格構成が見直されるわけである。

Ⅲ. 使役化と受動化

使役化というのは、動詞が支配する項を新たにもう一つ増やすための統辞的操作であると考えられる。このことは多くの研究者が認めるところである。この観点から、使役化は受動化と関連づけて述べられることが多い。なぜならば受動化は、能動文から行為項を減らすための統辞的操作と位置づけることができるからである¹⁰。

能動文

- (9) O şampanya -y1 aç -t1. 彼はそのシャンパンをあけた
彼 シャンパン-を あける-定過去
行為項 被行為項 過程

受動文

- (10) Şampanya aç -ıl -d1. そのシャンパンがあげられた
シャンパン あける-受身-定過去
被行為項 過程

受動文は被行為項を中心にして生起する過程が問題になるため、行為項は一般に表示されない¹¹。能動文(9)の主語 O「彼」は受動文の中で消え去り、使役文とは逆に、直接目的格の名詞 şampanya-y1「シャンパン-を」が受動文では、主格の名詞 Şampanya「そのシャンパンが」に昇格している。したがって、もとの直接目的格を支配する動詞 açmak「あける」は受動動詞 açılmak「あけられる」となることで、いかなる目的格も支配し得なくなる。受動化によって直接目的格動詞は無目的格動詞、いわゆる自動詞に変わったのである。

¹⁰ トルコ語における受動態に関しては、たとえば川口(1995)を参照。

¹¹ 川口(1995) p.125 を参照。

例文(9)→(10)の受動化による統辞変化

能動文(9) -----→受動文(10)
直接目的格動詞——（支配格の減少）→無目的格動詞
直接目的格———（昇格）———→主格
主格———（解任）———→φ

受動化が他動詞を自動詞化するのと対照的に、すでに述べたように、使役化は自動詞を他動詞化する¹²。自動詞の他動詞化が起きるのは、使役化が動詞の支配する目的格を一つ増やすための統辞的操作であるからにほかならない。

このように受動態と関連づけて論議されるためであろうか、「トルコ語の使役は態である」という考え方が、とりわけロシアの学者に根強い¹³。筆者はこの「使役＝態」説について、L.H. Babby (1983)と意見を同じくする。Babby が提起した「使役＝態」説への反論を紹介しておく。それは「態」の定義そのものとも関わりがあるため、極めて重要な反論と言える。

彼の仮説によれば、「動詞語幹には態のために、たった一つのスロットしかない」。したがって使役が仮に態であるとすれば、一つの文の中で使役接尾辞と受動接尾辞、あるいは使役接尾辞と使役接尾辞が共起することはあり得ない。ところが使役受身形は実際に存在し、二重使役形も頻度は高くないが観察されるのである。コーパスからそうした例をあげてみよう。

使役受身文

- (11) (...) haddi aşan dil-leri ne zaman sus-tur-ul-acak? (Kösem)
度をこした 言葉-彼らの いつ 黙る-使役-受身-未来
被行為項 過程
彼らの度をこした言葉はいつ黙らせられるのだろうか

¹² トルコ人の子供がトルコ語を習得するとき、使役接尾辞 -DIr- は動詞を他動詞化する接尾辞として習得される傾向がある。その結果、たとえば二歳三カ月の子供が、動詞 *kestirmek* を本来の「切らせる」という使役の意味ではなく、単なる他動詞「切る」の意味で用いたという報告がある。Aksu-Koç and Slobin (1985) p.846 を参照。

¹³ 「使役＝態」説に関しては Babby (1983)を参照のこと。

二重使役文

- (12) Kanunî, baba-sı Yavuz-'un anı -sı için yap -tır -t ¹⁴ -mıştı
 スレイマン大帝 父-彼の ヤヴズ-の 回想-その ために 作る-使役-使役-大過去
 使役項 過程
 bu cami-i. (Altan)
 被行為項
 この モスク-を
 スレイマン大帝は父ヤヴズの回想のためにこのモスクを建設させた

もしも一つの文の中で複数の態を選択することが可能ならば、使役を態の一つと見なすこともできようが、そのような考えには賛同しかねる。単一の発話において、態は一度だけ選択することができるのと筆者は考えるからだ¹⁵。その理由をもう少し具体的に述べておこう。

すでに説明したように、非使役文と使役文の論理・意味構造における最も際違った違いは、使役文には使役項という新たな項が導入されていることである。

- (13) O biz -e cami -i gez -dir -di. (Faik)
 彼 私達 -に モスク -を 見学する-使役-定過去
 使役項 行為項 被行為項 過程
 彼は私達にそのモスクを見学させた

使役文(13)の主語 O「彼」は実際にモスクを見学する人ではなく、いわば「私たちがモスクを見学する」という事態を生起させる人である。(14)の例はそのような行為項が無生物の例である。

¹⁴ -T-形は -Dir-形とともに現代語における生産的な使役接尾辞と言える。この-T-形は、動詞の語幹が二音節以上で、かつその語幹が -r-か -l-あるいは母音で終わっている場合に用いられる。

例 büyümek「成長する」→ büyütme「成長させる」

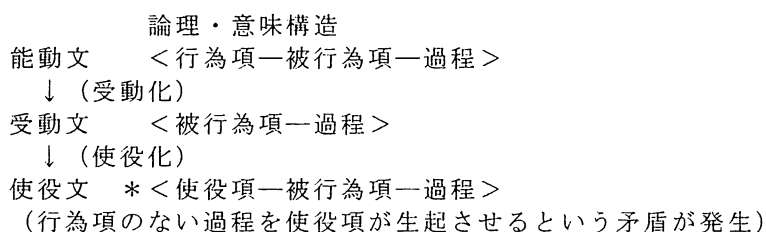
oturmak「座る」→ oturtmak「座らせる」

darılmak「腹をたてる」→ darıltmak「怒らせる」

yaptırmakの場合、-tır-形があるため使役接尾辞 -t- が選ばれる。

¹⁵ 川口(1995)の特に pp.118-121 を参照。受動態は一つの発話で二度選択されることがなく、したがって二重受身形はない。

の中でも被行為項として保持され、こうして使役文中には結局のところ行為項がなくなり、主格の位置に新たな使役項を導入したとしても、その使役項によって生み出される事態の中には行為項が欠落することになり、論理・意味構造上の矛盾に陥ってしまう。使役文の受動化はあり得ても、受動文の使役化があり得ないのは、「行為項が不在の事態」を使役項が生み出してしまうという矛盾が原因と考えられる。以下の図式を参照されたい。



IV. 使役文における制約

すでに数人のトルコ語学者により指摘されていることであるが、無目的格動詞や間接目的格動詞の使役文の行為項には統辞・意味的な制約が観察される。コーパスに見られる例をあげて説明することにしよう。

間接目的格動詞の使役

- (15) Ben-i zorla otur -t -tu -lar bu makam-a, (Kösem)
 私-を 無理に 座る-使役-定過去-複数 この 地位 -に
 彼らは私を無理やりこの地位に据えた

- (16) Gecim-leri -ni en dar ve en elemli derece-ye
 暮らし-彼らの-を 最も 窮屈な かつ 最も 苦しい 程度 -に
 in -dir -di. (Mizah)
 下りる-使役-定過去
 彼らは暮らしぶりを最も窮屈で苦しいレベルに下ろした

(15)と(16)のそれぞれに対応する非使役文は以下のようなだろう。

(15') Ben bu makama zorla oturdum. 私はこの地位に無理についた

(16') Geçimleri en dar ve en elemli dereceye indi.

彼らの暮らしは最も窮屈で苦しいレベルに下がった

間接目的格を支配するこうした動詞の使役文では、非使役文の主語は必ず直接目的格として現れ、しかもそれは特定(specific)でなければならない。このため(15)と(16)から Beni と Geçimlerini を取り去った文 (15'')と(16'')は一般に容認されない¹⁶。

(15'') *Zorla oturttular bu makama.

(16'') *En dar ve en elemli dereceye indirdi.

非使役文における主語は行為項を表すが、この行為項は使役文になっても依然として行為項のまま残る。たとえ使役化によって使役項が導入されたとしても、それによって oturmak「座る」や inmek「下りる」という過程が引き起こされるためには、それぞれの過程に当然のことながら行為項が必要になる。これは受動文の使役化が不可能になる原因と全く同じである（IV章を参照）。

とはいえ実際には頻繁にはないが、次のような例文に出くわすこともある。

(17) (...) bir delikanlı çıplak bir eşeğ-e bin -miş koş-tur-uyordu.

一 若者 裸の 一 ロバ-に 乗る-不定過去 走る-使役-状態過去
一人の若者が一頭の裸ロバに乗って、走らせていた (Altan)

(17)では文脈中に bir eşeğe binmiş「一頭のロバに乗った」とあり、これによって非使役文の行為項 eşek「ロバ」と使役文の意味上の行為項 eşeğ-i「ロバ-を」が容易に復元される。このような場合には、たとえ動詞が無目的格動詞 koşmak「走る」であっても、使役動詞 koşturmak「走らせる」の論理・意味上の行為項 eşeği を省略することができるものと考えられる。

¹⁶ Knecht (1986) pp.97-99 を参照。

V. 語彙的使役形

直接目的格動詞ではないいくつかの動詞には、今まで述べてきた使役操作の定式化を根底からくつがえすものがある。たとえば *korkmak*「恐れる」や *sevinmek*「喜ぶ」のような心理状態を表す動詞である。*sevinmek* には生産的な使役接尾辞 *-Dir-* がついて *sevindirmek*「喜ばせる」となるが、*korkmak* には非生産的な接尾辞 *-IT-* がつき、*korkutmak*「怖がらせる」となる。後者は語彙化した使役形と言える。

(18) O, köpek-ten kork-tu. 彼はその犬を怖がった
 彼 犬-から 怖がる-定過去
 行為項 被行為項 過程

(19) Köpek o-nu kork-ut -tu. その犬が彼を怖がらせた¹⁷
 犬 彼-を 怖がる-使役-定過去
 使役項 行為項 過程

(20) O, bu haber-e çok sevin-di. 彼はこの知らせに大変喜んだ
 彼 この 知らせ-に 大変 喜ぶ-定過去
 行為項 被行為項 過程

(21) Bu haber o-nu çok sevin-dir-di. この知らせは彼を大変喜ばせた
 この 知らせ 彼-を 大変 喜ぶ-使役-定過去
 使役項 行為項 過程

発話内の行為項の論理・意味関係が組み換えられていないことは見てのとおりであるが、使役操作により動詞が支配する項は一つも増えていない。さらに興味深いことに、非使役文の主格名詞 O「彼」(＝行為項)は使役文の中で直接目的格 o-nu「彼-を」に降格されているが、逆に非使役文の被行為項 köpek-ten「犬-から」と haber-e「知らせ-に」は、それぞれ奪格と間接目的格であったのが、使役文ではいずれも主格に昇格している。それだけではない。非使役文の行為項は使役文においても実質的な行為項である。したがって「怖がる」と「喜ぶ」とい

¹⁷ (18)と(19)の例は Sultanov (1998) p.267 から引用した。

う二つの過程では、非使役文と使役文の如何にかかわらず、「彼」が行為者であり、「犬」と「知らせ」はそうした事態を生起させる引き金であるがゆえに、ここでは使役項と解釈した。最もこの場合、犬と知らせは積極的に事態を発生させるというよりは、事態が生み出される要因と言ったほうがよいかもしれない。

こうした動詞に加えて、数は少ないが、非使役文でありながら、主語が意味的に使役項と解釈できるような動詞もある。実際、(22)は二つの相対立する論理・意味的解釈が可能のように思える。一つは Bu iş「この仕事」を行為項と考え、beni「私を」が疲れさせられるという過程を被る被行為項であるとする解釈である。もう一つの解釈では、実際に疲れるのはあくまで人間であって、beniを行為項と考え、この文の主語 Bu işをそのような過程を生起させる使役項としてとらえる。

- (22) Bu iş ben-i yor -du. この仕事は私を疲れさせた
 この 仕事 私-を 疲れさせる-定過去
 行為項 被行為項 過程 (第一の解釈)
 使役項 行為項 過程 (第二の解釈)

第一の解釈は表層構造をより反映したものであり、第二の解釈は論理・意味的なものと言えよう。しかし動詞 yormak の統辞的特徴を説明するためには、この二つの解釈の両方が重要である。

たとえば(22)が使役化できない理由は、beni が実際上の行為項のように解釈され、その結果 Bu iş がその行為を引き出す使役項とみなされるからに他ならない。他方、yormak は一般に受動動詞 yorilmek「疲れる」の形で用いられる。この(22')の受動化が可能なのは、(22)の beni が被行為項と解釈されるからである。受動化はその被行為項を中心に、行為項を解任することで発話が成立する。

- (22') Ben yor -ıl -dı -m. 私は疲れた
 私 疲れさせる-受身-定過去-私

yormak のように使役形があり得ない動詞はむしろ少数派と言えるが、幾つか

の動詞では使役接尾辞 -DIr-や -T- ではなく、明らかに語彙化した使役形が用いられる。一音節の語幹をもつ 20 くらいの動詞では接尾辞 -Ir- による使役形が見られる。例、içmek「飲む」→ içirmek「飲ませる」、bitmek「終わる」→ bitirmek「終わらせる」等。少数の動詞ではあるが、接尾辞 -Er- も見られる。例、çıkmaq「出る」→ çıkarmak「出す」、gitmek「行く」→ gidermek「除去する」等。さらに語彙化した使役形としてよく引用される例としては、emmek「吸う」→ emzirmek「吸わせる」、gelmek「来る」→ getirmek「連れて来る」、görmek「見る」→ göstermek「見せる」、kalkmak「立つ」→ kaldırmak「持ち上げる」、yanmak「燃える」→ yakmak「燃やす」等がある¹⁸。

Jacklin Kornfilt は -DIr- 形と -It- 形の違いを行為項の行為者性 (agentivity) という観点から説明しようとした。彼女によると、使役文の行為項が行為者性を持たない場合、規則的な使役接尾辞 -DIr- を用いることができないという¹⁹。

(23) *kapı-nın alt-ın-dan su ak-tır-dı-m.

kapı-nın alt-ın-dan su ak-ıt-tı-m. 私はドアの下から水を流した

(24) *su-yu kapı-nın alt-ın-dan ak-tır-dı-m.

su-yu kapı-nın alt-ın-dan ak-ıt-tı-m. 私はその水をドアの下から流した

自動詞は akmak「流れる」である。(23)と(24)で aktırmak 形が容認不可能なのは、使役文の行為項 su「水」に行為者性がないからだと Kornfilt は考える。-DIr-形による使役文では、意味上の行為項にはその行為を自ら行なうことができる要素、つまり行為者性の高い項が望ましいというのである。

上に掲げた akmak「流れる」→ akıtmak「流す」に似た例としては、たとえば artmak「増える」→ artırmak「増やす」、arttırmak「増やす」が考えられ

¹⁸ 筆者の知る限り、使役形の形態に関する最も詳細かつ有益な分析は Osman Nedim Tuna (1986) である。トルコ人の子供は yanmak「燃える」の語彙的な使役形 yakmak「燃やす」の代わりに、誤って *yandırmak 形を用いてしまうという報告がある。これは語彙的な使役形の典型的な誤用の例と言える。Aksu-Koç and Slobin (1985) p.849 を参照。

¹⁹ Kornfilt (1997) p.333.

るが、次の(25)と(26)を見てみると、-ır-形と -tır- 形の間にそのような行為者性の顕著な違いがあるようには思えない。行為者性というのは相対的な規準に過ぎない。

- (25) genelinde kullanmak üzere gelişmiş kara ambulans sayı-sı -nı
 一般に 使用する ために 発達した 大陸 救急車 数 -その-を
artır -ma -yı planl -ıyor. (Nokta)
 増やす-動名詞-を 計画する-現在
 広く使用する目的で発達した救急飛行機の数を増やすことを計画している

- (26) Y Ö K, her sene kontenjan-ı art -tır -ıyor ama,
 高等教育審議会 毎 年 分担金 -を 増える-使役-現在 しかし
 bütçe bu oran-da art -tır -ıl -m -ıyor. (Nokta)
 予算 この 割合-で 増える-使役-受身-否定-現在
 高等教育審議会は、毎年、分担金を増やそう（させよう）としているが、
 予算はこの割合で増やされてはいない

(25)と(26)の違いを取えてあげるとすれば、(26)は YÖK が自ら分担金を増やす努力をするというよりは、分担金を増やすように第三者に働きかけを行なうニュアンスを読み取ることができるかもしれない。

ところで Karl Steuerwald の Türkisch-Deutsches Wörterbuch では、arttırmak 形は artırmak の誤用 (irrtümlich)と記載されているが、我々の関心は、むしろなぜこのような二つの形態が現代トルコ語に存在するのかという事実にあるのであって、慣用 v s 誤用という規範的な見解には関心がない。

いずれにしても我々のコーパスに関するかぎり、行為者性という意味論的制約は規則的接尾辞 -DIr- を禁止する絶対的な原因にはなっていない。

- (27) Bir grup öğrenci okul duvar-ı-na seçim afiş -ler -i
 一 グループ 学生 学校 壁 -その-に 選挙 ポスター-複数-を
 yapış -tır -ıyor. (Nokta)
 くっつく-使役-現在
 ある学生のグループが学校の壁に選挙ポスターを貼っている

(27)では接尾辞 -DIr- が用いられているが、この使役文の意味上の行為項は、行為者性が極めて低い筈の afiş-ler 「ポスター-複数」である。ただし、この場合、

使役接尾辞 -Dir- は用いられているものの、この(27)のような文を使役文と考えるかどうかは検討の余地がある。

VI. 理論性と現実性の狭間

トルコ語の使役文に関する統辞・意味論的分析で、これまで最も多くの研究者の関心をひいてきたテーマは、おそらく二重与格をもつ使役文 (double-dative causative)であろう。二重与格文の中にあらわれる間接目的語の一つは埋め込まれた主語であり、もう一つは間接目的語になる。この構文を検討するために Comrie(1974) と Zimmer(1976)が用いたのは、あまり現実的な発話とは思えない以下の文であった。

非使役文

- (28) Hasan mektub-u gör-dü. ハサンはその手紙を見た
行為項 被行為項 過程

使役文

- (29) Müdür Hasan-a mektub-u göster-di. 経営者はハサンにその手紙を見せた
経営者 ハサン-に 手紙-を 見せる-定過去
使役項 行為項 被行為項 過程

- (29') Dişçi Hasan-a mektub-u müdür tarafından göster-t -ti.
歯医者 ハサン-に 手紙-を 経営者 によって 見せる-使役-定過去
使役項 行為項 被行為項 使役項 過程
歯医者は経営者に (=を介して) ハサンにその手紙を見させた (=見せた)

- (29'') ? Dişçi müdür-e mektub-u Hasan-a göster-t -ti.
歯医者 経営者-に 手紙-を ハサン-に 見せる-使役-定過去
使役項 使役項 被行為項 行為項 過程

すでに述べたように、göstermek「見せる」は görmek「見る」の語彙的な使役形と考えられる。Comrieによれば、(29)の直接・間接目的格動詞 göstermekをさらに使役化した文は、(29')のようになり、(29'')は不自然な文であるという。なぜならば、göstermekは直接目的語と間接目的語をすでに支配しているため、使役項がさらに第三者を仲介にして事態を生起させるとき、その第三者、この例

では経営者(müdür)には、間接目的格よりもさらに低い格階層の斜格 *tarafından* 「～によって」が割りふられるからである²⁰。Karl Zimmer はこれに異を唱えた。彼曰く、(29')の容認度の低さは四つの名詞句が連続しているせいであって、文法的な原因によるものではない。なぜなら次の(30)は問題がないからだという。

- (30) Biz -e mektub-u Hasan-a göster-t -ti -ler.
 私たち-に 手紙 -を ハサン -に 見せる-使役-定過去-複数
 使役項 被行為項 行為項 過程 使役項
 彼らは私たちに(=を介して)ハサンにその手紙を見させた(見せた)
 (文全体の使役項「彼ら」は動詞の活用語尾(-ler)に現れる)

筆者はそもそもこのような問題設定自体に疑問を投げかけたい。Zimmer のみならず、Sebüktekin (1971)や Knecht (1986)も二重与格文を容認可能とする。ところがそのとき研究者は、異口同音に、二重与格文に対するインフォーマントの判断は一樣ではない、と一定の留保をつけているのである。筆者はこの論文を執筆するにあたり、コーパスの中に現れる約 200 の使役構文を分析したが、その中に二重与格の例は一つもない。200 ほどの使役文からなる資料体は、十分な資料とは到底言い難いが、二重与格構文の頻度が低いことの一つの証左にはなるであろう。こうした頻度の低い構文の容認可能性を調べることは、理論的な統辞的可能性を問うことが目的ならばいざ知らず、実際のコミュニケーションにおける当該構文の統辞機能や発話の機能を分析することにはならないのではないだろうか。二重与格文に対するトルコ人の容認可能性に揺れが見られるのも当然である。ちょうど我々が「AはBに～をCに～させた」という文の容認可能性を尋ねられ、実はこのような発話をほとんど耳にしたことがないのに、それを知りつつ容認度の判断を下すようなものだからである。この容認度テストには理論性はあっても、実効性がほとんどないと言えるのではないだろうか。

²⁰ Comrie (1974) p.12.さらに二重使役文の仲介者が *-In yardımıyla* 「～の助けを伴い」によって導入されることもある。Turgut kitabı Ahmet'in *yardımıyla* Yalçına aldirtmış.「トゥルグトはその本をアフメットの助けをかりて(=に頼んで)ヤルチュンに持って来させたそうだ」。Gencan (1979) p.333.

確かに統辞構造の創造性や生成性を問うことは重要である²¹。しかしながら二重与格文を議論するとき、理論上必要とされる統辞構造が、実際の発話では、どれほどその余剰性を削り取られるものなのかという視点が全くと言っていいほど無視されているのである。談話上で余剰的と判断されるとき、二重与格のどちらか一方は表層には現れない筈である。たとえばⅦ章の例文(32)(33)を参照。また理論的な観点だけから言えば、使役文は無限に繰り返し生成され得る。なぜなら使役化は、もとの文の中に行為項と過程さえあれば、新たにそれに使役項を付け加えるだけで成立するからである。

理論上の使役化

非使役文：行為項―被行為項―過程 (görmek 見る)

使役化：使役項―行為項―被行為項―過程 (göstermek 見せる²²)

二重使役化：使役項―使役項―行為項―被行為項―過程 (göstertmek 見させる)

三重使役化：？使役項―使役項―使役項―行為項―被行為項―過程

ところが Tahir Nejat Gencan も指摘するように、実際には使役化を二回以上行なうことは避けたほうがよいのである²³。

Ⅶ. 行為項分析

使役文の分析はもっと現実的な実効性のある言語分析であって欲しい。ここでは使役文が実際の文脈の中でどのように現れるのかを主に行為項の分析を通して考えていくことにする。この論文の始めに見たとおり、直接目的格動詞の使役文では行為項は間接目的格に降格される。Ⅰ章の例文(4)を参照。ところでその場合、間接目的格は受益格 -E「～に、～へ」と同じ形態であるため、解釈に曖昧性の生じる可能性がある。

²¹ 言語形式の創造性や生成性は形態論の領域では決定的に重要であると考ええる。筆者はそうした観点からトルコ語の形容詞強調形の生成規則を分析したことがある。Kawaguchi (1992)を参照。

²² göstermek は語彙的使役形の例である。Ⅴ章を参照。

²³ Yalnız ikiden çok ek takmak sakıncalıdır. Gencan (1979) p.333.

- (31) Arzuhalcı Kozanoğlu Fethi Bey -e bir tel yaz -dır -dı -lar. (Memed)
 代書屋 コザノウル フェトヒ氏 -に 一 電報 書く-使役-定過去-複数
 彼らは代書屋コザノウル・フェトヒ氏に電報を一通書かせた
 (=書いてもらった)

この例文(31)では、代書屋(arzuhalcı)という単語があるため、フェトヒ氏が行為項と分析される。しかし形態の上からは、受益項としての解釈、すなわち「フェトヒ氏への電報」という解釈も不可能ではない。このような解釈の曖昧性が生じるのは、yazmak「書く」が直接目的格と間接目的格の両方を支配できる動詞だからである。

とはいえ実際には、こうした統辞的な曖昧性を排除するためであろうか、註7で述べたように、行為項を表す間接目的格が文中にすでに存在するとき、受益項はより低い格階層の斜格形 için に降格される。

- (31') Arzuhalcı Kozanoğlu Fethi Beye Memed için bir tel yazdırdılar.
 彼らは代書屋フェトヒ氏にメモへの電報を書いてもらった

この仮説が常に正しいとすれば、逆に、直接目的語しか支配しない直接目的格動詞の使役文の場合、間接目的格があれば、それを自動的に行為項と考えてよいのであろうか。次の例文を検討してみよう。

- (32) <<Yağmur Ağa-ya gid -elim, söyle-yelim ki köy-de ne kadar
 ヤームル 殿 -に 行く-勧誘 言う -勧誘 接続詞 村-で どれほど
 at var-sa hepsi-ni çal-dır -sın.>> (Memed)
 馬 ある-仮定 全て -を 盗む-使役-命令
 「ヤームル殿のところに行って言おう、村にどれくらい馬があっても全部盗ませたらいいと」

- (33) Sultan Üçüncü Mustafa Cami-i Mimar İbrahim Paşa-ya yeniden
 スルタン 3番目 ムスタファ モスク-を 建築家 イブラヒム パシャ-に 再び
yap -tır -mıştı. (Altan)
 建てる-使役-推量過去
 スルタン・ムスタファ三世はそのモスクを建築家イブラヒム・パシャに再び建てさせたらしい

çaldırmak「盗ませる」と yaptırmak「作らせる」は、ともに直接目的格動詞

çalmak「盗む」と yapmak「作る」の使役形である。(32)と(33)の場合、ヤームル殿 (Yağmur Ağa)と建築家イブラヒム・パシャ (İbrahim Paşa)は文脈の意味からして行為項とは言えない²⁴。なぜなら実際に「馬を盗み」、「モスクを建てる」のは彼らではないからである。彼らは使役項であり、言わば命令を下す立場の者であって、本当の行為項はおそらくヤームル殿の手下であり、イブラヒム・パシャの部下たちの筈である²⁵。こうした二重使役的な解釈（「AはBを仲介にしてCに～をさせる」）は、例文(12)のように二重使役文として実現されることもある。

- (12) Kanunî, baba-sı Yavuz-'un anı -sı için yap -tır -t -mıştı
 スレイマン大帝 父-彼の ヤヴズ-の 回想-その ために 作る-使役-使役-大過去
 使役項 過程
 bu cami-i. (Altan)
 被行為項
 この モスク-を
 スレイマン大帝は父ヤヴズの回想のためにこのモスクを建設させた

この(12)にも行為項は明示されていない。いずれにせよ事実上の行為者たちは表層には現れていないのである。これらの使役文は、実際の行為項を省略することで、二重与格文になるのを回避していると言える。これ以外にも行為項が明示されていない例は多々ある。

²⁴ (32)の Yağmur Ağaya は、統辞的には、gidelim, söyleyelim に対する間接目的語（「ヤームル殿のところへ」）であるだけでなく、同時に、接続詞 ki に後続する使役文の行為項（「ヤームル殿に～させる」）にもなる、一種の ἀπὸ κοινοῦ 構文と考えられる。

²⁵ こうした使役文の行為項を解釈する作業は、意味的な使役の解釈と厳格に区別されなければならない。たとえばラテン語の Caesar pontem fecit. 「カエサルはその橋を作った（＝作らせた）」という文は、確かに意味的に使役と解釈し得る。カエサル自身は石工ではないからである。しかしこの意味的解釈には形態的な裏づけが一切ない。こうした言語分析が困って立つ原理は、言語記号の本質である記号内容(signifié)と記号表現(signifiant)の両面性ではないのである。逆に、例文(32)の動詞 yaptırmak には、動かし難い使役接尾辞 -tır- が存在している。筆者は上のラテン語文を使役文とする意味的解釈に納得できない。それは名詞 Caesar と動詞 facere の発話内での役割解釈の結果なのであって、使役という統辞操作とは何の関係もないからである。したがって本論考では意味的な使役文は問題にならない。ただしV章の yormak「疲れさせる」は例外であると言える。

- (34) *imparator bun-lar-ın Anemas ad-ı-ndaki başkan-ları -nı*
 皇帝 この-複数-の アネマス 名-その-ある 長 -彼らの-を
idam et -tir -me -ye kalk-mış. (Altan)
 処刑 する-使役-動名詞-に 企てる-推量
 皇帝はこの人々のアネマスという名の長を処刑させようと企てたようだ

(34)も直接目的格動詞 *idam etmek*「処刑する」の使役化と考えられる。当然のことながら皇帝は自らの手で処刑を行わない。彼は死刑執行人に命令するだけである。この箇所は、ビザンチン時代の革命家アネマスを皇帝が捕らえて処刑しようとするが、結局、皇帝の娘たちの好意に助けられて、彼は処刑を免れたという逸話を説明した箇所である。処刑について語っているわけでもなく、単にアネマスの経歴が述べられており、死刑執行人は談話の上でも二次的な話題である。それゆえ(34)には行為項が表示されていないのだと考えられる。

次の文も直接目的格動詞の使役文である。行為項はやはり明示されていないが、その原因は先程とは異なる。

- (35) *Resm-i-ni çek -tiğ -imiz -i gör -ünce adres-i-ni*
 写真-彼の-を 撮る-動名詞-私たち-を 見る-分詞 住所-彼の-を
yaz-dır-dı: (Altan)
 書く-使役-定過去
 私たちが写真をとったのを見ると、彼はすぐに自分の住所を書かせた
 (使役動詞 *yazdırmak* の意味上の行為項は「私たち (biz)」)

(35)では行為項は文脈から明白である。この箇所はイエニカプ・バザール付近の風俗を描写した部分である。若者たちが木箱の上に座って草ボウキを作っている。私たちはその男の様子を写真にとる(*Resmini çektiğimiz*)。するとそれを見た男は、すぐに「私たち-に(*biz-e*)」自分の住所を書き取らせたのだった。 - *Bir tane de bana gönderin, dedi.*「一枚俺にも送ってくれ、と彼は言った」という発話がある。その後が続いている。次の(36)もこれと同じように考えることができる。

- (36) Yarın gece gene adam gönder-ir, gene köy-ü kurşunla-t-ır. (Memed)
 明日 夜 再び 手下 送る-超越時制 再び 村-を 撃つ-使役-超越時制
 明日の夜、また手下を送りこみ、また村を銃撃させるだろう
 (使役動詞 kurşunlatmak の意味上の行為項は「手下(adam)」)

アリ・サファ(Ali Safa)が夜の闇に紛れてオスマン(Osman)とメーメト(Memed)のいる村に手下を送り込み、銃撃を仕掛けたシーンである。老オスマンはなんとか相手の膝頭に一発お見舞いすることができた。アリ・サファ自身は決して姿を現さない。彼はいつも手下を送り込んでくるだけなのだ。明日もまた手下を送りこんで (gene adam gönderir)銃撃させるのだろう。銃撃を行なうのはもちろん、アリ・サファの手下(adam)に決まっている。(36)を説明した後、オスマンはこう付け加える。Yarın bir tanesini daha vuracağım.「明日またもう一人撃ってやるぞ」。(35)や(36)のように文脈から行為者が明白であるとき、直接目的格動詞の使役文では行為項が表示されない。

次の(37)と(38)でも行為項は表層に現れていない。しかし今度も別の理由があることである。

- (37) Çeşitli salata-lar ısmarla -t -tı, şampanya aç -tır -dı. (Mizah)
 様々な サラダ -複数 注文する-使役-定過去 シャンパン あける-使役-定過去
 被行為項 過程 被行為項 過程
 いろいろなサラダを注文させ、シャンパンをあけさせた

- (38) Sabah-a kadar ev-i-nin ön-ü-nde ateş yak -tır -dı. (Memed)
 朝 -に まで 家-その-の 前-その-で 火 燃やす-使役-定過去
 被行為項 過程
 朝まで家の前で火を焚かせた

ここでは「サラダを注文する」「シャンパンをあける」「火を燃やす」のは誰なのか特定できない、あるいは誰でもよいとも考えられる。これらの使役文が受身文に極めて近いのは意味的な面だけではない。これらの文では行為項が消え去り、被行為項と過程だけが残っている。三人称の使役項 (açtır-dı, yaktır-dı の語尾を参照) が導入されているが、この文の論理・意味構造は受動文のそれに極めて近い。III章の例文(10)を参照。(37)と(38)において、被行為項が非限定の直接目的語

(salatalar, şampanya, ateş)である点は注目に値する。それは言わばどのようなサラダ、シャンパン、火でもよいのである。重要なのは「注文させる、あけさせる、燃やさせる」という、その行為自体と考えられる。

VIII. 使役の意味

最後に使役の意味を考えておきたい。使役の意味は使役文の中に現れる使役項と行為項の間の関係としてとらえることができる。使役項と行為項の関係には二種類ある。一つは、使役項と行為項が二つの異なる指示対象を指す場合であり、もう一つは、使役項と行為項が同一の指示対象を指す場合である。

一般的な使役文は使役項と行為項が異なる指示対象を表す。その使役項と行為項の関係はさらに三つに下位分類することができる。第一は、使役項が行為項に積極的に働きかけを行なうことで事態を生起させる場合である。第二の場合は、使役項が行為項に消極的にしか働きかけない。そして第三の場合には、使役項のそうした働きかけが感じられない。

使役項が行為項に積極的に働きかける例はいまさら言うまでもあるまい。「AがBに～をさせる」という最も普通の使役文は全てこの意味構造をもつと言える。これに対して、使役項が消極的にしか働きかけない使役文では、あたかも使役項が行為項の意志や意向を慮っているような受身的なニュアンスが出てくる。これが「AはBに～してもらう」という使役文である。すでに挙げた(31)も同様の例と言える。

- (39) Gömlek firma-lar-ı da, kendi ürün-leri -ni insan-lar-a
 シャツ 商社-複数-その も 自分 製品-彼らの-を 人 -複数-に
 使役項 被行為項 行為項
 giy -dir -mek farklı yol-lar-a başvur-uyor-lar. (Nokta)
 着-使役-不定詞 異なる 道-複数-に 試す -現在-複数
 過程

シャツ会社も自社製品を人々に着てもらうための様々な方法を試している。使役項の働きかけが感じられないような使役文では、使役項の存在自体が背景に消え去り、使役文でありながら、行為項が自らその行為を成立させるという自発

的なニュアンスが出てくる。

- (40) Saltanat gemi-si kaptan-sız kal -ır -sa çok geç-meden
スルタン 船-その 船長 -なし 残る-超越時制-仮定 多く 経つ-なしに
行為項
bin -dir -ir kayalık-lar -a, (Kösem)
乗る-使役-超越時制 岩礁 -複数 -に
過程 被行為項
スルタンの船は船長なしでは、すぐに岩礁に乗り上げてしまう

上に述べたタイプにくらべて明らかに頻度は低いが、使役項と行為項が同じ指示対象を表す使役文がある。そうした使役文では、行為項は使役項の身体の一部、いわゆる譲渡不可能な対象である場合が多い。使役項は「自らの身体の一部を～させる」わけであり、そこから再帰的なニュアンスが生まれる。

- (41) Vasfiye Teyze yüz-ü -nü kız -dır -dı. (Mizah)
ヴァスフィエ おばさん 顔-その-を 熱くなる-使役-定過去
使役項 行為項 過程
ヴァスフィエおばさんは自分の顔を熱くさせた（＝顔をほてらせた）

最後に使役の意味についてまとめておこう。

1. 使役項と行為項が二つの異なる指示対象
 - a. 使役項が行為項に積極的に働きかける（使役的「～させる」）
 - b. 使役項が行為項に消極的に働きかける（受身的「～してもらう」）
 - c. 使役項の働きかけが感じられない（自発的「～してしまう」）
2. 使役項と行為項が同一の指示対象（再帰的）

結論

論文の最初にも述べたように、現代トルコ語における使役構文を分析するための作業仮説を筆者なりに提示することが本稿の目的であった。当初の目的は果たせたものと考えているが、さらに多くの使役構文を分析し、作業仮説の妥当性と有効性が今後検討されねばならないことは言うまでもない。ここでは筆者の提起した

作業仮説のうち重要と思われる部分だけをまとめておくことにしたい。

現代トルコ語の使役動詞は、接尾辞 *-Dir-* あるいは *-T-* を用いる生産的な使役動詞と非生産的な語彙化した使役動詞に分かれる。

使役化とは、非使役文における行為項と被行為項の論理・意味的な関係を保持しながら、新たに使役項というかたちで動詞の支配格をもう一つ増やすための統辞的操作を意味する。ただし心理的状态をあらわす幾つかの動詞では、そのような統辞的操作が行なわれない使役文も観察される。

使役は受動態と共起することができ、また二重使役も可能である。したがって使役を態の一種とみなすことはできない。また使役化は、使役項という非使役文にはなかった新たな項を発話の中に導入する点で受動化と全く異なる。

非使役文において行為項を表していた主格は、使役文の中でも行為項のまま残るが、その格は使役化の影響を受け、格の組み換えが起きる。そのとき行為項に割り振られる格は、使役文の被行為項がもっている格より低い階層の格になる。また使役文の中に被行為項がない場合は直接目的格が割り振られる。

一般に、自動詞や間接目的格を支配する動詞の使役文の場合、行為項は常に限定的(*definite*)かつ特定の (*specific*)でなければならないという制約がある。これに対して直接目的格を支配する動詞の使役文では、様々な原因により行為項が表層に現れない場合がある。

使役文の意味は、文中の使役項と行為項の関係としてとらえることができる。その関係には大きく二つの場合が考えられる。一つは、使役項と行為項が異なる指示対象を指す場合であり、もう一つは両者が同一指示の場合である。使役項の行為項に対する働きかけの度合いにより、前者はさらに三つに下位分類される。

参考文献

AKSU-KOÇ Ayhan A. and Dan I. SLOBIN, "The Acquisition of Turkish", in *The Crosslinguistic Study of Language Acquisition*, Volume 1: The Data, ed. Dan Isaac Slobin, Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale, New Jersey, 1985, pp.839-878.

AMMON M.S. and Dan I. SLOBIN, "A cross-linguistic study of processing of causatives sentences", *Cognition* 7/1, 1979, pp.3-17.

BABBY L.H. "The relation between causative and voice: Russian vs. Turkish", *Wiener Slavistischer Almanach* 11, 1983, pp.66-88.

COMRIE Bernard, "Causatives and universal grammar", *Transactions of Philological Society* 1974, pp.1-32.

— "The syntax of causative constructions: cross-language similarities and divergences", in Masayoshi Shibatani (Ed.), *Syntax and Semantics 6, The Grammar of Causative Constructions*, New York, 1976, pp.261-312.

ERGUVALI Eser, "An odd case in the causative construction of Turkish", in *Papers from the 15th Meeting of Chicago Linguistic Society*, April 19-20, 1979, pp.92-99.

GENCAN Tahir Nejat, *Dilbilgisi*, Türk Dil Kurumu Yayınları, 4th edition, 1979.

GIBSON J. and I. ÖZKARAGÖZ, "The syntactic nature of the Turkish causative", in R.A. Hendrick et alii (Eds.), *Papers from the 7th Regional Meeting*, Chicago Linguistic Society, Chicago, 1981, pp.83-98.

JOHANSON Lars, "Studien zur Turkeitürkischen Grammatik", in Görgy Hazai (Ed.), *Handbuch der Türkischen Sprachwissenschaft*, Part 1, Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1990, pp.146-255.

KAHRAMAN Tahir, *Çağdaş Türkiye Türkçesindeki fiillerin durum ekli tamlayıcıları*, Atatürk Kültür, Dil ve Tarih Yüksek Kurumu. Türk Dil Kurumu yayınları, Ankara, 1996.

KAWAGUCHI Yuji, "Sur les adjectifs intensifs en turc moderne", *Turcica* 24, 1992, pp.317-330.

KNECHT Laura, "Lexical causatives in Turkish", in Dan I. Slobin and Karl Zimmer (Eds.), *Studies in Turkish Linguistics*, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia, 1986, pp.93-121.

KORNFILT Jacklin, *Turkish*, 1997, Routledge, London and New York.

KULIKOV Leonid I., "The "second causative": A typological sketch", in Bernard Comrie and Maria Polinsky (Eds.), *Causatives and transitivity*, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia, 1993, pp.121-154.

Mounin Georges, *Dictionnaire de la linguistique*, PUF, 1974, 特に p.63 の Causatif.

SEBÜKTEKİN Hikmet, *Turkish-English Contrastive Analysis*, Janua Linguarum, Series Practica 84, Mouton, The Hague/Paris, 1971.

STEUERWALD Karl, *Türkisch-Deutsches Wörterbuch*, Otto Harrassowitz, Wiesbaden 1974, ABC Kitabevi A.Ş., İstanbul, 1996.

SULTANOV Vügar, "The category of causality in Turkish", in Lars Johanson (Ed.), *The Mainz Meeting: Proceedings of the Seventh International Conference on Turkish Linguistics*, August 3-6, 1994, Harrassowitz, Wiesbaden, 1998, pp.265-268.

TUNA Osman Nedim, "Türkçede transitive-causative 'geçişli-ettirgen' fiiller bunlarla ilgili morfoloji ve öğretim meselelerinin çözümü", *İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Türk Dili ve Edebiyatı Dergisi* 24-25, 1986, pp.381-428.

TURAN Ümit Deniz, "Zero object arguments and referentiality in Turkish", in Lars Johanson (Ed.), *The Mainz Meeting: Proceedings of the Seventh International Conference on Turkish Linguistics*, August 3-6, 1994, Harrassowitz, Wiesbaden, 1998, pp.154-182.

Türkçe Sözlük, 6ncı baskı, Ankara, 1982.

ZIMMER Karl, "Some constraints on Turkish causativization", in Masayoshi Shibatani (Ed.), *Syntax and Semantics 6, The Grammar of Causative Constructions*, New York, 1976, pp.399-412.

川口裕司、「トルコ語における態の選択」、人文論集 45.2、静岡大学人文学部、1995、pp.117-144。

『国語学大辞典』、国語学会編、東京堂書店、1980、pp.455-456。

『言語学大辞典』、第6巻、術語編、亀井孝・河野六郎・千野栄一編著、三省堂、1996、pp.623-624。

『現代言語学辞典』、編集主幹 田中春美、成美堂、1988、pp.80-81。

『ラールス言語学用語辞典』、J.デュボワ他著、伊藤晃、木下光一他編訳、大修館書店、1980、pp.182-183。

語彙アスペクトとスペイン語の迂言的受動文

—— De Miguel(1992)第4章から ——

高垣 敏博

1. スペイン語の受動文

スペイン語の受動文には次の2種類が存在する。¹⁾

(1)a. La noticia fue divulgada por los periódicos.

b. Aquí se venden periódicos.

(1a)のような、いわゆる迂言的受動文(*pasiva perifrástica*)の作り方は英語などと同じく、繫辞動詞*ser*と他動詞の過去分詞が結合し、統語的には他動詞の目的語が主語位置に移動するとともに、主語は随意的に前置詞*por*により導かれる前置詞句を構成する。

一方、スペイン語特有に見られる(1b)のような再帰受動文は一般に事物を主語としてとり、人間主語が許容されない。迂言的受動文にはそのような制約がないため、事物主語の場合にはどちらの構文によっても受動化が可能である。

ところで、一般にスペイン語の迂言的受動文は英語などのそれに比べて使用頻度がきわめて低いというのが母語話者の直感でもある(De Miguel 1992, p.205)。その原因としては、

(i)上述のような再帰受動文による代替が考えられる。事物が主語の場合には迂言的受動の代わりに再帰受動が用いられる傾向が大きい。再帰受動は迂言的受動と違って普通*por*による動作主句が取れないという制約があるものの、実態としては受動文一般に動作主句を伴うことが少なく、したがって再帰受動への代替も問題なく行われる。

(ii)また、スペイン語がそもそも能動文を好む傾向をもつと考えられる("el idioma español tiene marcada preferencia por la construcción activa." Gili Gaya 1973, p. 122)。

迂言的受動文のこのような低使用率にもかかわらず、文法書では「他動詞がどういいうきに受動化されないのかや、どうして迂言的受動文の使用が少ないのか」な

どについてはあまり言及されないため、とりわけ翻訳やマスコミなどで、また英語を母語とするスペイン語学習者によって迂言的受動文が乱用される傾向が見られるという。

そこで、迂言的受動文と再帰受動文の使い分けや使用頻度差、および受動文と能動文の比率を調査することが重要な課題となるのであるが、本稿では、そもそも迂言的受動文（以下、「ser受動文」と呼ぶ）がどのような条件の下に成立するかテーマを絞ることにするが、とくにこの問題についてアスペクトの視点から新たな知見をもたらした Elena de Miguel (1992) の議論にヒントを求めることにする。

2. Gili Gayaの一般化と迂言的受動文の成立要因

まず出発点としてGili Gaya 1973の一般化から始めよう。時制のアスペクトと動詞の語彙アスペクトに着目し、(2)のような組み合わせを考える(時制は完了時制と未完了時制、動詞は語彙的に完了アスペクトをもつものと未完了アスペクトをもつものが対立する)。

- | | |
|--|-------------|
| (2)a. La puerta había sido abierta. | 完了時制×完了動詞 |
| b. (Fulano) fue querido (por todos los que le conocieron). | 完了時制×未完了動詞 |
| c. *La puerta es abierta por el portero. | 未完了時制×完了動詞 |
| d. Fulano es (era) muy conocido en aquella comarca. | 未完了時制×未完了動詞 |

ここで(2a)(2b)のように、完了時制であれば動詞が完了動詞であろうと、未完了動詞であろうと受動文が可能であるが、未完了時制の場合には、(2d)のように動詞が未完了アスペクトをもてば受動化するが、完了アスペクトをもつ(2c)では受動文にはならない、というのが一般化である。

しかし、De Miguelによると、このような観察では不十分で、以下の諸点が指摘される。

(i)まず、唯一非文とされる(2c)であるが、Gili Gayaもふれているように「習慣・繰り返し」の意味では用いることができる。

また、完了動詞が未完了時制で用いられて瞬時的事象(acción puntual)を表す可能性が(3)のように現実には存在する。後述の(8)(9)も同様である。

- | |
|--|
| (3)a. En este momento es asesinado uno de los rehenes. |
| b. En aquel momento era asesinado un rehén. |

そうすると、すべての組み合わせで *ser* 受動文が可能であることになってしまうが、実際には別の制限が存在する。

(ii)すなわち完了時制であればつねに受動化が可能であるという観察は不十分である。

(2b)の未完了動詞についてGili Gayaは完了の「時制によって表現される完了性が助動詞 *ser*を特徴づける未完了性を無効にする」ということを根拠に受動化が可能であると考えている。しかし、同種の文でも動作主が(2b)の例のように総称(*genérico*)、集合的(*colectivo*)ではなく、個別の存在である場合には(4)のように受動化ができなくなるという。

(4)a. *El documento fue temido *por Juan*.

b. *El documento fue conocido *por Juan*.

c. *Isabel fue querida *por su abuela*.

d. *El libro fue buscado *por Juan*.

(iii)このような動作主の総称性の問題は(2d)にも関係する。未完了動詞は未完了時制であっても、つねに受動化が可能であるとはいえないことは、(5)のJuanのように動作主に総称性がない場合の結果から明らかである。

(5)a. En su tiempo, era conocido *por todos* / **Juan*.

b. La noticia era comentada *por todos* / **Juan*.

このような問題点から、De Miguelは「完了動詞では、(2c)のような場合（瞬時的意味あるいは一般的、習慣的意味）も含めて、受動化がつねに可能である。一方、未完了動詞の場合にはより制約があり、総称的動作主が必要となる。」(p. 208)とデータを軌道修正し、これに対処するために、

(i) 動詞の語彙アスペクトAktionsart（完了telicもしくは未完了atelic）

(ii) 助動詞 *ser* の時制（完了時制 perfective もしくは未完了時制 imperfective）

(iii) *por* 句が表す動作主の個別性ないしは総称性

の3つの要素を軸に新たな分析をすすめる。

3. De Miguelのアスペクト分析

De Miguel (1992) *El aspecto en la sintaxis del español: Perfectividad e impersonalidad*

「スペイン語の統語論におけるアスペクト：完了性と非人称性」はGB理論の枠組みで、文法にアスペクト範疇を設ける提案がなされている。²⁾ そしてこの範疇の完了性もしくは未完了性によりスペイン語の絶対過去分詞構文や、再帰非人称構文などの構文が成り立つという証拠を示すことによりその分析の妥当性を主張しているわけであるが、いま問題のser受動文のデータもさらにその仮説を支持するという。

その第4章 "Más datos a favor del nudo SASP: La construcción pasiva en castellano" 「アスペクト接点を支持するさらなるデータ：カスティリア語の受動構文」でser受動文が再帰受動文とともに扱われているが、ser受動文が成立するのは、このアスペクト範疇がもつ「完了性」に動詞が適合することが条件になると主張している。

こうして、動詞が語彙的にもつアスペクトが完了の場合には受動形態素の-doがその動詞に付加して過去分詞化し、助動詞serと組むことができる。しかしながら、上述のように未完了動詞の受動文も現実には存在するのでこれにどう対処するのかに興味がもたれる。

以下で、上記の3要素を考慮した4つの分類を順に見ていこう。

A. 完了動詞×完了時制

定義上受動形態素-doは完了アスペクトの動詞と適合するので、動詞が完了アスペクトをもつかぎりいつでもser受動が可能である。

(6) Steffi fue derrotada por Arantxa en Roland Garros.

(7) El huerto de mi abuelo fue heredado (por mi madre / todos los hermanos).

(7)からわかるように、動作主は 'mi madre' のように個別 (un único individuo) でも 'todos los hermanos' のように総称 (genérico, plural o colectivo) でもよい。もちろん省略も可能である。

B. 完了動詞×未完了時制

ここでも動詞が完了アスペクトをもつのでいつでもser受動が可能のはずである。この組み合わせが表す意味によって、いわゆる「歴史的現在」の用法と、「習慣・繰り返し」の用法の2種類が存在する。

B-1. 歴史的（分析的、瞬時相的）現在

すでに(3)で見たように、未完了時制でも瞬時相(*puntual*)で用いることができる。(8)(9)も同様であるが、(8)はスポーツ中継やテレビのレポートなどで用いられる。

- (8)a. *María es descubierta detrás de la puerta.*
- b. *La falta es señalada al borde del área.*
- c. *En este momento, la llama es encendida por el ilustre visitante.*
- d. *El ilustre visitante es recibido por el presidente al pie del avión.*
- (9)a. *Napoleón es vencido en Waterloo.*
- b. *Un anciano octogenario es atracado y robado por unos desconocidos.*

このいわば特殊用法は、「(現実であれ虚構であれ)行為の証人がその行為が見られるまさにその時点においてその行為のことを報告する」(*el testigo (real o ficticio) del acto da noticia de él en el mismo momento que se produce*---Fernández Ramírez 1986, p.424, 79節) 時制だと考えるのであるが、もともと能動態(*'abre', 'abría'*)においてもこのような「偽」の現在(もしくは未完了過去)では、完了の意味が生まれることを考え合わせると理解できるという(De Miguel p. 210)。

また、この組み合わせでは、(10)のように個別の動作主をとることも問題がない。

- (10) *Y con aquella subida a la red, Steffi era derrotada por Arantxa por primera vez desde que ambas competían.*

B-2. 総称的解釈

Gili Gaya 1973 でもふれられている用法である。

- (11) *Steffi, aquel año, era derrotada por Arantxa en todos los torneos en que se encontraban.*
- (12)a. *Las hogueras que veíamos eran encendidas por la tripulación náufraga.*
- b. *Los arcaduces se rompen y no son repuestos.*
- c. *El viento es requerido por el otoño para poder arrancar las hojas de los árboles.*

ここでも上の歴史的現在(および未完了過去)と同じく、能動態(*abre, abría*)が瞬時的動作の繰り返しもしくは習慣を表す働きをもちうることを想起できるだろう。

しかしこのような繰り返し解釈は一体どこから生まれるのか。De Miguelによると、

動詞がもつ完了アスペクトとは独立して（外部に）存在する助動詞 *ser* の時制のアスペクトの影響によりもたらされるもので、これを（アスペクト）操作（*manipulación*）と呼ぶ。このいわば二次的作用により「完了の事象を未完了にしてしまうことなく、(...) 繰り返し、すなわち、継起的な開始と終了」（p. 216）を含意するように修正を加えるという。言いかえれば「完了した事実の繰り返し」が総称性をもたらすわけで、これが全体としては完了と把握され、受動化を可能にするのである。

動作主については(11)(12c)のように個別なものでもよいが、(12a, b)のように繰り返し解釈が与える一般的、習慣的意味により、総称の動作主が好まれるのも事実である。³⁾

C. 未完了動詞×完了時制

(2b)に対応する例で、従来の分類でいえば、次の D で見る未完了動詞が未完了時制で用いられる用法の特殊なケースということになるだろう。

未完了動詞がベースなので定義上受動形態素-*do*の完了性には適合せず、受動は成り立たないはずである。実際(13)は非文となる。

- (13)a. *El documento fue temido por Juan.
 - b. *El documento fue conocido por Juan.
 - c. *El champán fue bebido por los invitados.
 - d. *Isabel fue querida por su abuela.
 - e. *El libro fue buscado por Juan.
- (14) (Fulano) fue querido (por todos los que le conocieron).

しかしながら対比的に(14) [= (2b)]は問題がない。De Miguelによると、ここでもアスペクトの二次的操作が作用し、助動詞のもつ完了時制の情報が述語のアスペクト指定に修正を加え、未完了事象を完了化するという。⁴⁾ 未完了アスペクトをもつ *querer* もいったん助動詞の完了性によってその終了点が示されると、行為の実現を示すようになり、それゆえ受動文を許容するようになる。(14)は例えば、(14')の意味に相等するようになるという。

- (14') Fulano 'llegó a ser, resultó' querido...

動作主についても(15)(16)の例から確かめられるように、総称的なものが好まれるが、これは *conocer, querer* などの未完了事象が特定の状況下で完了化しても、語彙的にはもともと未完了であることに起因すると考えられる。ここでも未完了アスペクトが総称性と関連していることがわかる。

(15)a. El libro fue conocido *por todo el mundo* / **por Juan*.

b. Juan es querido *por todo el mundo* / **por su abuela*.

(16) McEnroe fue temido (= llegó a ser temido) *por todos los jueces* mientras estuvo en activo.

D. 未完了動詞×未完了時制

最後に、未完了動詞が未完了時制で用いられるケースであるが、これは伝統的に認められている。受動形態素の *-do* は完了アスペクトの動詞と適合するという定義からすると、本来許容されないはずである。実際、(17)(18)は成り立たない。

(17) */??Juan es temido *por Pedro*.

(18)a. *En su tiempo, era conocido *por Juan*.

b. *La noticia era comentada *por Juan*.

しかし、(17)(18)が総称的な動作主をもった場合の(19)(20)は正しい文である。

(19) Juan es temido *por todo el mundo*.

(20)a. En su tiempo, era conocido *por todos*.

b. La noticia era comentada *por todos*.⁵⁾

これは最も説明が困難なケースであると思えるが、De Miguelによると、上述の B と同じように総称的意味をもつ未完了助動詞の働きにより事実の繰り返し、すなわち行為の継起的終了が全体として完了を表すことになる」と議論される。

具体的な例を見てみよう。

(21) Arantxa, desde Roland Garros, es conocida *por todos los aficionados al tenis*.

このような例においては、「述語が何度も繰り返されることにより、ついには被動

者に影響を与えるようになる。すなわち、Arantxa ha llegado a ser famosa. <アランチャは有名になるにいった>を意味する」ようになる。そして一つの結果をもつようになるにいたるという意味において(21)は完了化するという。

ここでも、助動詞による二次的アスペクト操作がその効果を見せていることになる。「助動詞の総称性が事象の繰り返しを表すならば、事象は一連の実現ないしは活動、すなわち継起的な終結や開始によって構成される一つの複合的事象として理解されるだろう」 ("Si la genericidad del AUX hace referencia a la recursividad del evento, éste se entenderá como una serie de realizaciones o actividades, como un evento complejo, compuesto por sucesivos finales e inicios." p.218) と述べている。つまり総称的な複合事象の中身は個々の完了的行為から成っており、総体としては完了としてとらえられるはずだ、という論理でまとめられている。

すでに上の例から明らかなように、動作主についても、B のケース同様、総称的なものが好まれるのであるが、これは助動詞の未完了性に呼応するものであろう。

本節で述べた、A から D までのタイプをまとめておこう。

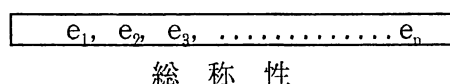
動詞の語彙アスペクト telic/atelic	助動詞の時制 perfect/imperfect	助動詞操作による二次的アスペクト	動作主
A 完了	完了		個別/総称
B-2 完了	未完了	総称性 (習慣、繰り返し)	個別/総称 (助動詞の総称性に呼応)
C 未完了	完了	完了性	総称 (動詞の総称性に呼応)
D 未完了	未完了	総称性	総称 (助動詞の総称性に呼応)

4. 問題点

4.1 助動詞の二次的アスペクト操作が De Miguel の議論において重要な役割を果たす概念であることがわかった。しかし、その機能について幾つかの疑問を呈することができるだろう。

まず、動詞が完了アスペクトで、これに助動詞の未完了性が影響を与える B のケースでは「完了の事象を未完了にしてしまうこと」がないと述べている。ところが、同じメカニズムで未完了動詞に助動詞の完了性が作用するケース C では、「完了時制の助動詞が事象を完了化する」と述べている。同じ助動詞でありながらそれが及ぼすアスペクト操作の浸透度が異なり、一方では動詞まで及ばないのに、もう一方ではそこにまで達していることになる。

4.2 B のケースにおける助動詞の未完了性は「完了の事象を未完了にしてしまうことなく、修正」し、「事象の繰り返し、継起的な開始と終了を含意して、結局は完了性を保持する」(p. 216) と説明される。ここで「完了性を保持する」という説明は動詞がもともと持っている完了性が考慮されていることになる。これを下図のように表すと個々の行為 e がそれぞれ完了しているわけであるが、これに助動詞の未完了性による総称性が付加されて全体を包み、結果として繰り返し、習慣解釈が出てくることもよく理解できる。



一方、D のケース（未完了動詞に助動詞の未完了性が二次的操作を加える）では助動詞の未完了性が総称性の効果を生み出すという主張は認めるとしても、もともと未完了アスペクトをもつ動詞がどうして完了行為の複合体とみなされるようになるのだろうか。上の図で考えると、各々の e がはたして完了といえるのかどうかということである。De Miguel は総体として総称性をもつ事象は、当然、いくつもの繰り返される完了行為が連続しているはずだという発想なのであろうが、説得力に乏しい。

5. このように動詞の語彙的アスペクトをベースに、助動詞による時制のアスペクトによる操作を二次的作用として加える有機的分析は *ser* 受動文の理解に新たな視点をもたらしているといえる。

「総称性」も興味深い概念である。総称性には時間軸で繰り返される「習慣的」なものと、空間軸で繰り返される「一般的」なものがあり (una actividad o acción que se repite en tiempo (que es habitual) o en el espacio (que es general), p.218)、継起する個々の完了行為の複合体とみなされる。これがアスペクトでは未完了相に相等するという考え方である。しかし、既述のようにこれについてはさらなる検討が必要となるであろう。

注

1) さらに繫辞動詞 *estar* と過去分詞からなる受動文も存在し、行為の結果状態を表す。高垣(1998) など参照。

2) De Miguel の理論を要約する (pp. 211-212, 218)。

受動形態素 *do* は動詞が表わす事象が完了しているという情報をもたらす。したがって語彙的に完了の動詞とは適合するが、未完了の動詞とは不適合である。*do* は事象項 (argumento eventivo)、すなわちアスペクト情報が統語的に実現したもので、独立の範疇 ASP に [+perfectiva] と指定され

doは性・数をもつ（人称を欠く）アスペクトの一致要素(una concordancia nominal)なので動詞性ではなくて名詞性（[+N]の素性）をもつ。そのため動詞に付加すると、動詞から対格を付与する能力を奪う。そこで目的語は格を求めて主語位置へ移動し、助動詞serから主格を受け取る。一方、動詞の外項の意味役割はpor句として（随意的に）

具体的には、doがASPに投射されるが、SASPはその最大投射。SASPは動詞SVの主要部をなす助動詞AUXのserによって選ばれる。そしてASPの中のdoは原則的には語彙的に完了の動詞を主要部としてもつ動詞句を補部とする。

ところで非対格自動詞も内項をもつので受動化してしまうおそれがある。この点については、過去分詞と組む助動詞serには外項が必要である、という制約により阻止される。結局受動態は他動詞が動作主と被動者の2項をもち、前者の影響が後者に及ぶことが前提になるといえる (un evento que no acaba no deja sentir sus efectos o sus consecuencias sobre el paciente. --p. 212)。

- (i)a. Isabel fue fotografiada en bikini.

- b. *Isabel es fotografiada en bikini.

- c. Todos los años Isabel es fotografiada en bikini.

- d. En este momento Isabel sale del agua y es fotografiada en bikini por nuestro enviado especial.

これは例えば写真に付けられた説明のような場合であるが、fotografiarは完了動詞なので(a)は問題がない。非文の(b)に対し、(c)(d)は可。これは事象がそれぞれ習慣的か、歴史的現在の場合である。ともに完了ととらえられる。

- 4) 助動詞の完了、未完了のAspectが動詞のAspect情報を(完了したもの、もしくは繰り返して提示することによって)操作するという仮説はGili Gayaの観察に想を得たものである(2節(ii)でふれたように、「時制によって表現される完了性が助動詞serを特徴づける未完了性を無効にする」)。

- 5) さらに Fernández Ramírez (pp. 421-422) の例を追加しておこう。

- (i)a. (...) esta cualidad (...)es poseída por todo pueblo saludable.

- b. Yo pensaba en Dios, como el espía (...) que es conducido ante el pelotón.

- c. Es muy comentada (...) la noticia de que...

- d. Él, acostumbrado a dominar, es dominado ahora.

- e. Dirigido por ella, será más estimado en todo Madrid que nosotros.

CONC
 / \
 CONC' \
 / \
 CONC STPO
 [3rd pth sg]_i \
 / \
 TPO' \
 / \
 TPO SASP
 [+ pas.] \
 / \
 ASP' \
 / \
 ASP SV
 [+ perf.] \
 / \
 V' \
 / \
 V SASP
 ser_i \
 / \
 ASP' \
 / \
 ASP_{iN} SV
 [+ perf., + fem., + sg.] \
 / \
 ESP V'
 Arantxa_s \
 / \
 V SN
 derrotar_i *Steffi_i*

Fernández Ramírez, S. (1986) *Gramática Española: El verbo y la oración*, vol 4.
(Ordenado y completado por Ignacio Bosque), Madrid, Arco/Libros.

- Gili Gaya, Samuel (1973) *Curso Superior de Sintaxis Española*. Bibliograf. Barcelona.
- Miguel, Elena de (1992) *El Aspecto en la Sintaxis del Español: Perfectividad e Impersonalidad*. Ediciones de la Universidad Autónoma de Madrid.
- 高垣敏博(1998)「自動詞派生の過去分詞について」*HISPANICA* 42, pp. 13-23.
日本イスパニヤ学会
- (1998)「研究ノート スペイン語の過去分詞構文」*言語研究* VIII, pp. 97-110. 東京外国語大学

使役対象が人ではない他動詞使役をめぐって

— 使役動詞文と他動詞文 —

早津恵美子

0 はじめに

他動詞使役文（他動詞にいわゆる助動詞「－（サ）セル」がついてできる使役動詞を述語とする文）では、(1)(2)のように使役対象（被使役者、使役の客体）が人であることが普通であり、そうでない(3)(4)のようなものはきわめて少ない。

- (1)先輩が 後輩に 荷物を 運ばせる
- (2)明子が 妹に 食器を 洗わせる
- (3)看護婦が 脱脂綿に 消毒液を 含ませる
- (4)女の子が 冷たい風に 髪を 吹かせて（駆けていく）

使役動詞の用例8700例のうち、他動詞使役はおおよそ4600例ほどだが、そのうち使役対象が人でないものは200例ほどである〔注1〕。それも、人に準じて考えられるもの（本稿の1節で述べるものにあたる）が90例ほどであり、それ以外のものは、約110例（他動詞使役の約2.4％）にすぎない。約4100例ほどの自動詞使役では、使役対象が人であるもの、物であるもの、人の身体部位などであるもの（「子供が目を輝かせて童話をきく」「彼は胸をどきどきさせながら聞いてみた」など）があるが、ごくおおざっぱな数でいえばこの三種がほぼ同じくらいであることと比べると、他動詞使役の使役対象のこの特徴は自動詞使役との大きな違いである〔注2〕。

使役対象が人でない他動詞使役はこのように極めて少なく、また、2節、3節でみるように、現れる動詞にもある面で偏りがある。おそらくそのためだろう、こういった使役文の特徴についてはこれまであまり考察されることがなく、各種の文法事典や文法書などでも述べられていないようである〔注3〕。しかしながら、この類の使役にどんなものがあり、どのような性質をもつのかについて考えてみることは、使役文の性質を明らかにしていくうえで、必ずしも後回しにすべきことではないように思われる。使役対象が人でないということは、これらは、使役主体から言語的あるいは態

度的な働きかけを受けて意志的な動作を行う主体であったり（「部下に書類をまとめさせる」「孫に肩をたたかせる」），何らかの影響を受けて生理的・心理的な変化を引き起こす主体であったり（「子供に風邪をひかせる」「親に悲しい思いをさせる」）することはできないわけで〔注4〕，そうだとすればこれらの「～に」の性質については，それが人である場合とは別に考えなければならない。それはまた，人である使役対象の性質を考えることをもおのずから必要とする。いわば典型からはずれたこういった使役対象をめぐる考えることは，この場合むしろそのことを通じて「使役」「使役構文」というものの性質を知ることに基づきうるのではないかと思われるのである。

使役対象が物である他動詞使役文「～が〈物〉に～を Vt-サレ」における「～に」は，使役動詞「Vt-サレ」に対する元の動詞「Vt」との意味的な関係でいえば，たしかに“元の動詞の表す動きや変化の主体”である。したがって，それを主語とする他動詞文は使役文を派生させる元の文であって，両者はそういった意味で対応するものだと一応は言ってよいだろう。

(5) 美術館に 貴重本を 所蔵させる —— 美術館が 貴重本を 所蔵する

(6) 脱脂綿に 消毒液を 含ませる —— 脱脂綿が 消毒液を 含む

(7) 言葉に 威厳を もたせる —— 言葉が 威厳を もつ

(8) 雨に 全身を 打たせる —— 雨が 全身を 打つ

その一方で，いったん使役文として成立した「～が〈物〉に～を〈述語動詞(Vt-サレ)〉」における「～に」は，“元の動詞の表す動きや変化の主体”という性質に加えて，そのできあがった使役文の構造を直接に成り立たせている要素として，それにふさわしい新たな性質・意味を帯びてくるのではないだろうか。物を使役対象とする他動詞使役文は，〈使役主体〉，〈使役対象（物）〉，〈元の動詞の表す動きの対象〉をそれぞれが格，二格，ヲ格とする次のような構文をとる。

(9) 「〈使役主体〉が 〈使役対象（物）〉に，〈動きの対象〉を Vt-サレ」

三つの必須成分をとるこの「～が〈物〉に～を〈述語動詞〉」という構文は，いわゆる三項動詞のうち同じく「～が〈物〉に～を Vt」という構文をとる次のような他動詞文と，意味的にも構文的にも似ている。

(10) 美術館に 貴重本を 収蔵する

(11) 脱脂綿に 消毒液を 湿す

(12) 言葉に 威厳を こめる

(13) 雨に 全身を ぬらす

(5)～(7) と(10)～(12)の「～に」は，働きかけのあとに〈動きの対象〉が存在す

るようになる場所、(8)と(13)は、〈動きの対象〉を包む状況としての現象ととらえられるだろう。こういった感じを与えることには、これらの文に「～に」としてあらわれる名詞の意味的な多重性も関わっている。たとえば、(5)(10)の「美術館」は、「美術館が企業に財政援助をもとめる」「美術館が新しい企画をたてる」というように使われる時には、人が構成するもの、背後に人が控えているもの、ととらえられている。一方、「美術館で楽しい時を過ごす」「美術館を見てまわる」では「美術館」の場所的・空間的な面がとらえられている。(6)(11)「脱脂綿」は、「脱脂綿を切る」「傷口に脱脂綿をあてる」「脱脂綿で消毒する」などふつうは単に「物」としてとらえられるが、内部に水分を存在させることのできるものと考えればその水分の存在するところである。(7)(12)「言葉」は抽象的なものであるが、何らかの属性をもっているわけだから、それを内在させるところという意味では一種の場所ともみさなれる。(8)(13)「雨」は「雨が強い」「雨がやむ」など現象名詞であるが、「雨が窓をたたく」では「たたく」主体として、「雨に全身をぬらして働く」では原因的なものとして、「ひどい雨に出かける」では行為の際の状況としてとえられているだろう。

以下で順にみてゆくように、使役対象が人でない他動詞使役文にはいくつかのタイプがあるのだが、それらの「～に」にはいずれも、動作や変化の主体という面だけでなく、ある種の場所的な性質、あるいは状況的な性質がうかがえるようである。この種の他動詞使役文は、先に述べたような三項他動詞文の構造と、二格名詞のその文中での意味とにささえられて、使役動詞「Vt-サレ」の意味が、〈元の動作(Vt)+使役性(-サレ)〉といった二重性からときはなされ、一つの動きを表すものに近づいているのではないだろうか。

使役対象が物や事である他動詞使役について考察してみることは、使役文と他動詞文との関係(類似・相違)を全体的に明らかにするための、小さくはあるがひとつの手がかりとなりうるように思われる。本稿では使役文一般・他動詞文一般の性質と両者の関係の考察にまでは至るべくもないが、それへの一つのノートとして、この問題を考えてみようと思う。

以下では、使役対象が人でない他動詞使役文を大きく3つの類に分けて、その使役対象の性質を考えることにする。〈2〉は人性と場所性との、〈3〉は人性と状況性との、そのいずれがそれぞれの文において強くでるかはさまざまであるにしろ、二重の性質をもっているといえるものである。

〈1〉人性を有する「～に」

〈2〉場所性も有する「～に」

〈3〉状況性も有する「～に」

考察にあたっては、単にその二格の名詞がいわゆる人名詞か物名詞かといったことだけでなく、当該の使役文の中でどのような役割をになっているか、あるいは、用いられる動詞の構文・意味的な性質はいかなるものかといった点を合わせて考えていくと思う。また、随時、他動詞文との構文・意味的な類似を求めながらすすめていくことにする。

1 人性を有する「～に」

使役対象がいわゆる人名詞によっては表されていない他動詞使役文のうちにも、人である場合に準ずるものとして扱うことのできそうなものがある。

(1) 組織や集団を表す「国、県、市、村、・・・」「政府、警察、消防、裁判所、・・・」「会社、銀行、研究所、興信所、当局、党、・・・」「議会、審議会、委員会、・・・」「総務部、庶務課、会計係、・・・」「図書館、博物館、美術館、・・・」「周囲、まわり、世間、全米、世界、・・・」などは、人によって構成されているもの、内部に人を含むものであることから、しばしば人に準ずるものとして扱われる。人名詞が本来であるべきところにこれらの名詞が用いられてもとくに擬人法的には感じられないのもそのあらわれだろう。(15)のように、人の行為・変化などを表す他動詞を述語とする文の主語ともなる。

(14)「国から撤去を命じられる」「政府を困らせる」「委員会の見解が示された」
「庶務課に人数をたずねる」「周囲の迷惑を考えない」

(15)「警察が事件を捜査している」「委員会が適否を審議する」「興信所が彼の行動を追う」「庶務課が通勤手当を計算する」「全米が彼の活躍に驚く」

これら組織や集団は使役表現においても、人と同じような意味での使役対象とみなしうることが多い。人である使役対象の意味的な性質にどのような類があるかは別に考えねばならないが、いま仮に簡単に次のように分けてそれぞれの例を示しておく。

〈行為を行う主体〉

(16)それが政府に世間の指弾をそらす手段を講じさせたのである。(田中正義の生涯)

(17)この中古排水器を村に買い上げさせたのである。(田中正義の生涯)

(18)生活状況を興信所に調べさせてあった。(櫻)

(19)彼女は、息子が成人するまで、本名で呼ばなかった。「ヒャオ（ブタ）」と口汚く呼び捨て、周囲にもそう呼ばせた。(サイゾウのいちばん長い日)

(20)「県に 事業を 請け負わせる」「村に その企てを 撤回させる」「会社に 補償金を ださせる」「寺に 無事を 祈願させる」「会計課に データを

まとめさせる」

〈認識の変化を生じる主体〉

- (21) クリトンは、・・・ソクラテスの身の保釈を当局に認めさせようとし、その保証に立った。(死の思索)
- (22) サルトルが・・・左翼乃至進歩的といわれる作家詩人たちとともに、フランス政府に中共を承認させ、(広場の戦慄)
- (23) ロシアに起った革命は、・・・いわゆるインテリゲンチヤの存在を世界に知らしめた。(日本文化と個人主義)
- (24) 「委員会に 現状を 理解させる」「まわりに 状況を 納得させる」「会社側に 条件を のませる」「周囲に 不安を 感じさせる」

〈何らかの影響を受ける主体〉

- (25) 足尾銅山より流出するすべての鉱害は、・・・渡良瀬川沿岸の各郡村に年々巨万の損害を被らしむること、(峠正義の生涯)
- (26) 「組合側に 責任を 負わせる」

犬・猫・馬をはじめ、自らが何らか意志的な動きをする、少なくとも我々にそう感じられることがある動物も、しばしば人に準じる存在とみなされる。存在表現において「ある」ではなく「いる」が用いられる(「犬がいる」)ことや、人に類した行為を行う主体として次のような文の主語になりうることはそのあらわれだろう。

- (27) 「犬がミルクを飲む」「猫がねずみをつかまえる」「馬がそりをひく」

これらが使役対象である使役表現においても、人である場合と同じように、動物に働きかけて何らかの動きを行わせたり変化を生じさせたりするもののよう表現する。これも仮にいくつかに分けて例を示す。

〈何らかの行為を行う主体〉

- (28) (逃げた土方をつかまえて) 棒杭にしばりつけておいて、馬のあと足で蹴らせたり、裏庭で土佐犬にかみ殺させたりする。(蟹工船)
- (29) この後に、象にひかせて、立派な霊柩車がいく台もつづきました。(ピルマの響琴)
- (30) 私たちは妹がもらって来た仔猫になにを食べさせて、どの部屋に寝床をつくり、どういうしつけ方をしたらよいかという話をしていた。(羊の歌)
- (31) 子羊には母羊の乳を一切吸わせない。(ルーマニアの小さな村から)
- (32) (この絵の馬は) 荷をつけて運ぶための駄馬である。駄馬は普通、銜をはませない。この馬にも銜をはませていない。(絵巻物に見る日本庶民生活談)
- (33) ほんとうに鳥がいうことを聞くのなら、手紙を足に結びつけてお袋のどこまで運ばせてみる。(鳥)

〔使役対象は文中に明示されていないが、表すとすれば「鳥に」〕

- (34)「鸚鵡に 口まねを させる」「馬に 訓練を させる」「鶯に 稽古を させる」「鰯に 泥を はかせる」「仔犬に 牛乳を 飲ませる」

〈認識の変化・感情の変化を生じる主体〉

- (35)猿に早く芸を覚えさせられたことがうれしく、また自慢でもあったのだろう。

(サ-カス放浪記)

- (36)「馬に 気を 鎮めさせる」「子猫に 叫び声を あげさせる」

〈何らかの影響を受ける主体〉

- (37)貧しい源さんが廃馬を生かしておくことも、治療を受けさせることができないのも当然のことだった。(北斎) 〔「廃馬に」〕

- (38)(その象に)動物園で他の仲間と一緒に余生を送らせてやる方が、まだ幸せだろうと思うのである。(サ-カス放浪記)

機械や装置(次例では「コンピューター」「巨砲」「遊水池」)のように、それ自身が主体となってある動きを行い得る機能を本来的にそなえていたり、人間からそういった機能や役割を与えられていたりするものの場合、それらを使役対象とする使役文は、それに外がわから働きかけてその機能を発揮させることを表現する〔注5〕。こういったものも人の行為に準じた表現といってよいだろう。これら機械や装置も、人の動きを表す他動詞による文の主語としても自然である。

〈行為を行う主体〉

- (39)コンピューターにデータを計算させる(表を作らせる／将棋をさせる)

〔コンピューターが データを 計算する／表を作る／将棋をする〕

- (40)「大和」と「武蔵」は山本の予言通り、それから八年乃至九年後、その十八時九門の巨砲に殆ど有効な火を吹かせないまま、アメリカの飛行機に沈められるのであるが、(「山本五十六」：東京外国語大学大学院生李恩思氏より)

〔巨砲が 火を 吹く〕

- (41)遊水池に、洪水調節の機能をはたさせるための調水池工事が完成すると(舩越の生涯)

〔遊水池が 洪水調節の機能を はたす〕

このように、組織、動物、機械などはいずれも、人に類する行為を行う主体ととらえることができ、使役対象としてもやはり人に準じたもの、人性をもったものとして扱い得るあるいは扱うべき面が確かにある。したがって、これらを使役対象とする他動詞使役は使役対象が人であるものにきわめて近く考えることも可能だろう〔注6〕

(2) ただ、「組織に／動物に／機械に ～を Vt-セル」の「～に」には、ときとして、人的な性質だけでなく場所的な意味の感じられることがある。2 節の考察に先立って次のような例を少し考えてみたい。これらは、使役対象が人である場合とそうでない場合との中間的なもの、あるいは両者をつなぐものではないだろうか。

まず、組織・集団を表す名詞は、デ格の形でも“動作を行う主体”を表すことができることがよく知られているが、このことは組織・集団がまったく人に準じた性質しかもたないわけではなく、場所的（あるいは手段的）な性質をも合わせもっていることをうかがわせる。

(42)「警察で事件を捜査している」「委員会で適否を審議する」「興信所で彼の行動を追う」「庶務課で通勤手当を計算する」

後に 2 節でもみる次のような使役文では、使役対象「～に」に動作主性ととも場所性もみることができるのではないだろうか。

(43) 欧州大戦の船景気は、この急作りの造船所にも激しい勢いで人員を吸収させていたのである。(巖波)

動物については、たとえば次のような「馬に」がある。

(44)「・・・おれは気ちがいようになってやったものだから、刈ったのなんのって、一匹の馬にしよわせきれないほど刈ったのだ。こっちのクラに草をつけると、馬のやつ、こんなふうによろよろとなりゃがったよ。・・・」「おれたちはいくら活字を拾ったって、馬にしよわせるわけじゃなし、馬をいたわってやることはいらんないじゃないか。」(巖波)

「馬」は、もちろん「草をしょう」主体ではあるが、自らの力で「しょう」行為を行うというよりも、この場合むしろ、人がそこに「草」を「のせる」あるいは「おく」場所という性質が感じられないだろうか。(44)の初めの「しよわせる」の例に続いて「クラに草をつける」という表現があるが、これと「馬に草をしよわせる」とは事態としてはほとんど同じである。先の(32)(33)の「馬に銜をはませる」「鳥に手紙を運ばせる」も、「馬に銜をつける」「鳥に手紙を結びつける」に近いだろう。動物に行わせる行為が、その動物自身の身体の一部に何かを付着させることになる動きである場合、使役対象「動物に」は、動作主であるとともに場所的な性質を帯びてくると思われる。

次の「コンピューターに」にも場所的な性質が感じられる。

(45) やはり人事は不可解、ということか。同社では「(社員の) 調査票」から得たデータをコンピューターに記憶させ、合理的な異動システムをつくろうと模索

中だが、ことは人がらみ。まだ実用化のメドは立たないとか。(単健佐)

この「コンピューターに データを 記憶させる」や「機械に 数字を 覚えさせる」などの場合の「コンピューター」「機械」にはたしかに、「データ」「数字」を受け取ってそれを記憶する主体という性格はあるが、その面だけでなく、「コンピューターに データを 入れる／収める／保存する」などにおける「コンピューター」と同様に、データや数字を“入れるところ”といった面もある。

組織・動物・機械などのもつこういった場所性について、2節であらためて考察しようと思う。

(3) なお、使役対象が人でない他動詞使役のうちには、いわば擬人法的な比喻表現となっていると思われるものがある。(先にみた機械などの場合もこの擬人法的な表現に含めて考えたほうがよいのかもしれない。)

(46) (それは) 名手伯牙が、あたたかな愛撫の手をもって、琴に森の四季を思い出させつつかき鳴らす物語である。(梨本)

(47) おそらく小説という怪物を成育させる術は、これに時間の餌を喰わせる以外になさそうである。(豊奴)

次の例は、擬人法としても言わば死んだ比喻であり、下線部全体としてかなり固定している。

(48) 飢えている国々の人びとにまわるかもしれない食料を、札束にものをいわせてうばうことによって、(餓の文嘯)

(49) 「あんな処?!…」と雪江さんが一寸驚くのを、阿母さんが眼に物言わせて、了解(ノミ)ませて、(平凡)

(50) 腕に年はとらせないつもりでも、じじいになったというわけだろうねえ。(仙太郎 大江の物語)

(51) 古いものには凋落の途をたどらせ、空蟬が指先で千々に磨り潰されて風に吹き飛ばされるように、俤をとどめぬほど砕けちらせるがいい。(北村)

(4) 以上、使役対象が人性(動作・認識などの主体性)をもつといえそうな他動詞使役をみてきたが、これらは、どのような使役動詞を述語とする文であるかという点においても2節3節でみる他動詞使役 — 使役対象が人性だけでなく場所性や状況性をそなえているもの — と異なる。2節3節でみる他動詞使役では、後にみるように「～に」の性質のそれぞれにおいて動詞にかなり限定があるのに対し、この節でみた他動詞使役では、人の行為や認識などを表す様々な種類の他動詞が用いられている。このことも人に準じて扱うことのできる使役対象だからだろう。

2 場所性も有する「～に」

構文的には使役対象と考えられる「～に」のうちに、動作の主体という面がありながらも、場所的な性質をも帯びているものがある。ここで使役対象に場所的な性質があるというときの「場所」というのは、次の(52)の「美術館、病院」のような、a) “そこで何らかの行為を行ったり、そこに物や人が存在したりするところ”であるとともに、b) “人で構成される組織”でもあるもの、(53)の「ガーゼ、子供の手」のように、a) 物や身体部位であるとともに、b) “物が付着したり接触したりするところ”でもあるもの、(54)の「メッセージ、彼」のような、a) 物や人であるとともに、b) “属性が内在するところ”でもあるもののことをいう。

(52)a. 「美術館で楽しい時をすごす」「美術館に多くの彫刻がある」

「病院で手術をする」「病院に入院する」

b. 「美術館が新しい企画をたてる」「病院が誤った診断を下す」

(53)a. 「ガーゼで消毒する」「子供の手をひっばる」

b. 「ガーゼに消毒液を湿す」「子供の手に包帯をまく」

(54)a. 「メッセージを送る」「彼を尊敬する」

b. 「メッセージに暗号を込める」「彼にはやさしいところがある」

いわゆる場所名詞のうち、(55)の「駅前、路地裏、通路、原っぱ、外」のような、“そこで何らかの行為を行いうる空間、何かが存在する空間”という面はあるものの、組織性や物性が感じられないものは、使役対象とはなりにくいと思われる（少なくとも手元の用例にはない）。

(55)「駅前に交番がある」「路地裏に車をとめる」「通路をトラックがふさぐ」

「原っぱで遊ぶ」「外で運動する」

以下「～に」の性質をいくつかにわけてみていくが、各類のはじめに、その類の他動詞使役を作る動詞、その類の他動詞使役構文、その類の使役構文と類似の性質をもつと思われる他動詞構文、を例示的にあげることにする。また、こういった他動詞使役文をつくりうる動詞には、類として語彙的・文法的にかなり特徴があることについて、2. 4で述べる。

2. 1 組織や集団を場所的にとらえる

先に1節の(1)で、組織や集団が人に準ずるものと扱い得ることをみたが、組織

や集団が自らのものとして建物や敷地を占有するものであってその性質が前面にでてくる場合、その組織や集団が場所的にとらえられることがある。

◆ 《物を存在させる場所》

〔動詞〕 ㍿ 収容する，吸収する，所蔵する，保存する，保管する

〔収蔵する，貯蔵する，たくわえる，蓄積する，備蓄する，ためる，納める，格納する〕 cf. 〔 〕内は手元に実例のないもの

イ 購入する，買う，買い取る（，買い入れる）

〔使役構文〕

㍿ 「施設に 怪我人を 収容させる」

イ 「図書館に 貴重本を 購入させる」

「Aに Bを Vt-サレ」

A：場所としての組織や集団

B：具体物（・人）

意味：㍿ 物をその組織・集団の建物や敷地などに存在するようにさせる

イ 物を，組織・集団に備えつけるものとして買い入れさせる

〔他動詞文における類似の構造〕

㍿ 「施設に 怪我人を いれる／収容する」

イ 「幼稚園に ピアノを 備えつける／設置する／導入する／購入する」

「収容する，吸収する，所蔵する，保存する，保管する」などからの使役文において，使役対象が組織や集団を表すものである場合，その使役文は，“物をその組織・集団のものとして建物や敷地内に存在するようにする”ことを表現することがある。

(56) 小学校はそれですっかりいきりたって，そういうなにをしでかすか分からない者をこれ以上放置しておくつもりなら，強制的にでも管理の行き届いた施設に収容させる，とまで言いだし，(野-面)

(57) 欧州大戦の船景気は，この急作りの造船所にも激しい勢いで人員を吸収させていたのである。(靱の嶺)

(58) 大学の図書館に貴重な資料を所蔵させる。

(56)の「施設」，(57)の「造船所」は，「施設が彼らを収容する」「造船所が人員を吸収する」という事態を考えれば，それぞれ「収容する」「吸収する」主体とも考えられるが，それと同時に事実としては，「施設に彼らを収容する」「造船所に人員を吸収する」といった事態における「収容する」「吸収する」場所でもある。

「購入する，買う」などによる使役文でも，“物を，組織・集団に備えつけるもの

として買い入れる”といった意味を表現する場合には似たことがみられる。次の「ゲスト東洋文庫」は、「購入する」主体としての性格と、「書物」の設置・保管される場所としての性格とをあわせもっているだろう。

(59)私は、過去一年間にプリンストン大学のゲスト東洋文庫に数千冊の書物を日本から購入させて、(アメリカ私)

このように、「収容する、吸収する、所蔵する、・・・」「購入する、買う」などの動詞による使役文「〈組織・集団〉に ～を Vt-サル」は、「〈組織・集団〉に ～が 存在する」ようになることを含意し、「〈組織・集団〉に」は働きかけのあとの物の存在場所としての性質をもつ。

この二種類の他動詞には、少なくとも本稿の問題に関わる限りで、構文・意味的に次のような似た性質がある。いずれも、物（・人）を表すヲ格名詞と場所を表すニ格名詞とを補語として「ドコに ナニを Vt」という他動詞文をつくり、“物のある場所に設置する、存在するようにする”といった意味を表す。

(60)「架設テントに 怪我人を 収容する」「金庫に 浮世絵を 所蔵する」

「社長室に 風景画を 購入する」「寝室に クーラーを 買う」

このニ格名詞は組織・集団を表す名詞であってもよく、「〈組織・集団〉に ナニを Vt」という他動詞文となる。

(61)「病院に 怪我人を 収容する」「博物館に 浮世絵を 所蔵する」

「図書館に 電動書架を 購入する」「区立幼稚園に ピアノを 買う」

そしてまた、「収容する」「購入する」主体がまさにその組織・集団であるような場合には、そのガ格名詞を主語として「〈組織・集団〉が ナニを Vt」という他動詞文で表現することも可能である。

(62)「病院が 怪我人を 収容する」「博物館が 浮世絵を 所蔵する」

「図書館が 電動書架を 購入する」「区立幼稚園が ピアノを 買う」

こういった性質をもつ動詞であることから、これらによる使役文「〈組織・集団〉に ナニを Vt-サル」の「～に」には動作の主体としての性質だけでなく存在場所としての性質も感じられるのだろう。

(63)「病院に 怪我人を 収容させる」「博物館に 浮世絵を 所蔵させる」

「図書館に 電動書架を 購入させる」「区立幼稚園に ピアノを 買わせる」

いま、この種のタイプの使役文に対して、元の動詞による文を考えてみる。次のような対応関係の何れかなのだろうか。

- (64) 「(病院の人が/ ヲレカガ) 病院に 怪我人を 収容する」
 —— 「(病院の人/ ヲレカニ) 病院に 怪我人を 収容させる」
 「(図書館の人が/ ヲレカガ) 図書館に 電動書架を 購入する」
 —— 「(図書館の人/ ヲレカニ) 図書館に 電動書架を 購入させる」
- (65) 「病院が 怪我人を 収容する」
 —— 「病院に 怪我人を 収容させる」
 「図書館が 電動書架を 購入する」
 —— 「図書館に 電動書架を 購入させる」

元の動詞による文と使役動詞による文との関係が(64)(65)のいずれであるかを定めようとすることは、この問題においてあまり意味がないように思われる。それよりも、成立しているこの類の使役文の構造が、「病院に 怪我人を いれる」「図書館に 電動書架を 備えつける」といったいわゆる“付着（とりつけ）動詞”のとり他動詞構造に類似するものであることを見いだすほうが興味深い。この種他動詞文との構造的な類似にささえられて、先の(56)～(59)における「収容させる、吸収させる、購入させる、所蔵させる」が“入れる、集める、おさめる、備える、備えつける”のような意味に近く感じられるのではないだろうか。

2. 2 身体部位を場所的にとらえる

使役対象が人や動物の身体の一部（「手、足」など物理的な部分、「心、胸」など心理的な部位）である場合に、その身体部位が“場所性”をもつものととらえられることがある。

◆《作用（付着・接触）を与える場所》

〔動詞〕ア〔付着性〕もつ、つかむ、握る、はく

〔とる、うけとる、だく、かつぐ、背負う、着る、かぶる、はめる〕

イ〔接触性〕くらう、かむ〔負う、浴びる〕

ウ〔入れ込み性〕(栓^コ)含む〔吸う〕

〔使役構文〕

ア「子供の手に お菓子を 握らせる」

イ「相手の頭に 一発 くらわせる」

ウ「子供の口に ミルクを 含ませる」

「Aに Bを Vt-サル」

A：身体部位

B：具体物・打撃

意味：物を他のある物に付着させたり，接触させたりする

〔他動詞文における類似の構造〕

ア「娘の手に 箒を 押しつける」「車掌の手に 切符を 渡す」

イ「人の頭に ボールを ぶつける／あてる」

「腰に クッションを あてがう」

ウ「病人の口に 流動食を 入れる」

「赤ん坊の口に 薬を 流し込む」(cf. 例(74))

「握る，もつ，つかむ」「はく」といった，物を自分の手中におさめる，物を自分の身につける」動きを表す他動詞からの使役動詞が，その動詞の表す動きに必然的にかかわる身体部位を「～に」で表して「〈ダレの手／足〉に 物を Vt-サル」という使役動詞文をつくらることがある。誰の身体部位なのかがたとえ文脈上明らかであっても「ダレの」が表現されているものが比較的多い。

〈「ダレの」が表現されているもの〉

(66) 奥さんはそう言いながら，さっき出した西洋菓子の残りを，紙に包んで私の手に持たせた。(ころ)

(67) 先生は苦笑した。懷中から藝口を出して，五銭の白銅を子供の手に握らせた。(ころ)〔注7〕

(68) 事務長は，物慣れた様子でポケットからいくらかを水夫の手に握らせておいて，上を向いて合図をすると，(或女)

(69) 車の中で，俺は，予備の靴下を出して多江の足にはかせた。(時雨の記)

〈「ダレの」が表現されていないもの〉

(70) 女は，小判なりの薫のたかい麦粉菓子をとりだして・・・「坊ちゃん 坊ちゃん」と手にもたせてくれたので伯母さんはしかたなしにそれを買った。(銀の匙)

(71) それなら自分でふきなさい，と手にティッシュをもたせると，ある夜彼は泣きながら怒鳴った。(黙って子育て)

これらにおける「子供の手」「多江の足」などは「白銅」や「靴下」をいわば付着させる場所である。そして，使役文全体としては，「子供の手に 白銅を 渡す／与える」「多江の足に 包帯を まく」といった他動詞文の意味構造に近くなる。

「(一発)くравせる，(一撃を)かませる」や「(水を口に)含ませる」も，身

体部位への物理的な働きかけを表すことがあり、これらも同様の構造の使役動詞文「〈ダレの身体部位〉に 物を Vt-セル」をつくる。

(72)親父が妾と酒のんでいるところへ行って、頬っぺたに一発くらわしてやったこともある。(死刑の記録)

(73)野伏せりが刀を引き抜いたのと、駆け寄った太郎作が相手の頸に鉈の一撃を噛ませたのが同時だった。(敵の情)

(74)私は茶の間に寝かされ、じっとうつろな眼を見開いていた。薬売りはそんな私の眼を覗きこみながら、・・・黒い丸薬をとり出して私の口にふくませ、焼酎でそれを私の咽喉にながしこんだ。(足跡)

上の「頬っぺたに」「相手の頸に」は、打撃を当てる場所を表しており、「私の口に」は、入れこむ場所を表している。そして、使役文の表す事態としては、他動詞文「相手の顔に ボールを ぶつける」「病人の口に 流動食を 流し込む」などに近く、そういった構造にささえられて、使役動詞「くらわせる、かませる」「含ませる」の意味も上の例でそれぞれ、他動詞「あてる、ぶつける」や「入れる」に似てくる。

手元の実例にはなかったが、「握らせる」に類する「背負わせる、かつがせる、しよわせる、抱かせる」、「はかせる」に類する「はめさせる、かぶらせる、浴びさせる、(傷を)負わせる」、「含ませる」に類する「吸わせる」にも似た用法がありそうである。

(75)子供の背に 大きなリュックを 背負わせる

(76)弟の肩に スキーを かつがせる

(77)夫の手に 子供を だかせる

(78)赤ん坊の両手に 手袋を はめさせる

(79)子供の頭に 毛糸の帽子を かぶらせる

(80)敵の背中に 深手を 負わせる

(81)赤ん坊の口に ミルクを 吸わせる

身体部位が場所的な性質をもつことがありうることは、人だけでなく動物の場合でも同様である。先に1節で、(32)「馬に銜をはませる」、(44)「馬に草をしよわせる」といった例をみたが、これは、身体の一部に影響を与えることになる動きであるから、その身体部位を文中に表して次のように表現することもできるだろう。そしてこれらにも他動詞文との類似があり、それぞれ「馬の口に 轡を はめる／つける」「馬の背に 草を のせる」などに近い。

(82) 馬の口に 轡を はませる

(83) 馬の背に 草を しょわせる

動詞の性質をみると、この類の動詞も、2. 1 でみたのと同様、「～に ～を Vt」(「<人の身体部位>に ナニを Vt」)という他動詞構文をとりうるものがほとんどである。

(84)ア 「左手に 箸を もつ」「弱った手に ロープを つかむ」

「右手に ボールを 握る」「両腕に 荷物を かかえる」

「素足に 靴を はく」「小さな頭に おとうさんの帽子を かぶる」

イ 「頭に げんこつを くらう」「背中に 傷を 負う」

ウ 「口に 水を 含む」

2. 1の類と異なるのは、「<身体部位>に」のうち、「もつ、つかむ、握る、かかえる」のとり「～に」には、場所性だけでなくさらに道具的な性質も感じられることである。(84)ア はそれぞれ「左手で 箸を もつ」「弱った手で ロープを つかむ」「右手で ボールを 握る」「両腕で 荷物を かかえる」とかなり近い〔注8〕。この類の使役文における「人の手に」には場所性に加えて“道具性”もみとめることもできるかもしれない。

では、「人に ～を Vt-サレ」 と「人の身体部位に ～を Vt-サレ」とにはどのような違いがあるのだろうか。「もつ」「握る」や「かぶる」「はく」は、現象としては“手にもつ”“手に握る”“足にはく”“頭にかぶる”であることは明らかであるから、“どちらの手／足に”とか“どんな手／足／頭に”とかが通達上の重要な情報にならない限り、それが表現されていなくてもそれほど問題にはならず、「人に Vt-サレ」と表してもほぼ同じ事態が表現され理解される。ただ、たとえば「人の手に Vt-サレ」と表現することによって、「人に」のときよりも人性（相手性）が弱まり、物を手中におさめるその場所としての「手」を明確に表現することになるだろうか。

(66)' 奥さんは、西洋菓子の残りを私に持たせる

(69)' 予備の靴下を多江にはかせた

(74)' 薬売りは、黒い丸薬を私にふくませ、

(85) 改札口のところでちかちゃんは私に雄一の泊まる宿の地図と電話のメモをくしゃっとにぎらせた。(キチン)

(86) 町で買ってきた帽子を、子にかぶらせることがあったが、(子どもの民俗)

(87) すみ子は自分のスリッパを男にはかせ、(ばく業譚)

一方、「くらわせる」「(傷を)負わせる」「(一撃を)噛ませる」などの場合は、次の(88)～(89)のように具体的な身体部位が表現されていなければ、身体の中のどの部分が作用を受けたのかわからない。先の(72) (73) のように「〈身体部位〉に」が表現されることでようやく、作用を受けた身体部位が明らかになるのである。

(88)院長はつかつかとやって来て、この医師に平手をくらわした。(黙) (黙)

(89) (ゆりさんは) いきなり床の上に起きあがったが、一言も言わずにぴしゃりと、俺にびんたを喰らわしたからね。(黙) (黙)

以上みてきた「人の身体部位に」の場合は、場所性がありつつも、なお人性(相手性)を全く失ってはいないだろうが、「～に」が次の例のように「あごの下に」であると、場所性がよりはっきりしてくる。

(90) (猫は) (私が) 知らん顔で鉛筆を動かしていると、わざと原稿用紙の上に寝そべったり、ひとのあごの下に軽い頭突きをくらわせたりして、遊んでくれと催促をする。(好) (好)

さらに、作用(接触)をうける身体部位がへ格で表されると、場所性はより明確になる〔注9〕。

(91) 私の知ったものに、夜中職人と喧嘩をして、相手の頭へ下駄で傷を負わせたのがありました。(こ) (こ)

(92) 母が死んだ時、中学生の真吾は誰にもみられないように、納棺された母のかたびらの袖のなかへハモニカを抱かせた。(抱) (抱)

◆ 《状態変化の発露(現出)場所》

〔動詞〕ア (変化を) 起こす, (微笑を) 浮かべる, (波を) 打つ, (笑いを) 含む, (熱を) もつ

〔(発疹を) ふきだす, 併発する, 再発する, 発生する, 生じる〕

イ 感じる, (気を) 起こす, のみこむ

〔使役構文〕

ア 「少女の顔に 微笑を 浮かべさせる」「身体に 熱を もたせる」

イ 「人々の胸に 悔しさを 起こさせる」「子供の心に 大切な意義をのみこませる」

「Aに Bを Vt-サレ」

A : 身体部位・心的部位

B : 生理的・心理的な状態

意味：生理的・心理的な変化を身体の一部に表面化させる

〔他動詞文における類似の構造〕

ア「背中に 寒けを もよおす」「後頭部に 発疹を だす」

「肝臓に ガンを 再発する」「意識に 変調を きたす」

イ「人々の胸に 感動を よびおこす」「子供の心に 自信を もたらす」

「（胃腸障害を）起こす」「（発疹を）ふきだす」「（悔しさを）起こす」などは、他動詞ではあるが「～を Vt」全体として、生理的・心理的な状態変化がその内部から生じてくることを表す。また「（事態を）のみこむ」「（すばらしさを）感じる」などは、他からの刺激を受けて人がある認識をもつようになることを表す。こういった動詞からの使役動詞が、変化が生じる身体部位（物理的な部位・心理的な部位）を「～に」で表して「〈身体部位〉に 〈状態〉を Vt-サル」という使役文をつくると、生理的・心理的な状態変化が身体の一部に表われ出てくるようになることを表現する。

〈生理的な状態変化〉

(93)何か一つになろうとしながら、そのできないもどかしさが、かわるがわる二

人の身体に、何かの感覚の変化を起さしていたのにちがひありません。(天の夕顔)

(94)「おれにはやはり勇気があるんだな。真心から出る勇気が。」と思う子供らし

い意識が彼の顔に満足げな微笑を浮かべさせていた。(静の聲)

(95)明子は意地悪な笑いを目にふくませて、(くねい)

(96)翁は薄髭を生(ハ)した口元に笑を含ませ、(ばく(頼譯))

(97)身体をあたため、熱を身体中にもたせてくれるのは、これ(冷凍のアザラシ)

に限るのだ、と彼はいう。(文化人類のすめ)

(98)絶えず体に波を打たせていた蛇の下半身が、(雁)

〈心理的な状態変化〉

(99)この考えは、お俊の小さな胸に制え難い口惜しさを起こさせた。(家)

(100)大塚先生の講義はその熱烈な向学心をひしひしと我々の胸に感じさせ、(和辻哲郎隨筆)

(101)ややむつかしい意味の標語でも、子供の心に自然にその大切な意義をのみこませることができるであろうと思います。(おさなごを親せは)

これらには、対応する他動詞文として、身体部位をガ格で表す次のような文が一応考えられる〔注10〕。

〈生理的な状態変化〉

(93)' 二人の身体が 感覚の変化を 起こす

- (94)' 彼の顔が 満足げな微笑を 浮かべる
 (95)' 明子の目が 意地悪な笑いを ふくむ
 (96)' 薄髭を生した口元が 笑を 含む
 (97)' 身体中が 熱を もつ
 (98)' 蛇の体が 波を 打つ

〈心理的な状態変化〉

- (99)' お俊の小さな胸が 制え難い口惜しさを 起こす
 (100)' 我々の胸が 先生の熱烈な向学心を 感じる
 (101)' 子供の心が 大切な意義を のみこむ

しかしこれらの他動詞文においても「～が」は、「～をVt」を引き起こす主体ではそもそもなく、その変化が生じてくる場所的、変化が表れ出てくる場所といったものである。元の動詞にこういった性質があることから、使役文における「～に」にも動作主性というより場所性のほうがより強く感じられるのだろう。

次の「～のなかに」では内在場所としての性格がはっきりする。先の例のうちでも(96)「口元に」、(97)「身体中に」は場所的な性質をもつ名詞であった。

- (102)そしてそのことが、芸術にたいする決して変らぬ愛を相田のなかに保たしている。(むらき)

このタイプの使役文の構造は、「〈身体部位〉に」が「〈状態〉を」の現出する場所を表す「〈身体部位〉に 〈状態〉を Vt」という他動詞文の構造と類似する。生じてくる状態変化が身体や意識の内部からわき起こってくるような変化であることも似ている〔注11〕。

- (103)「背中に 寒けを もよおす」「後頭部に 発疹を だす」
 「肝臓に ガンを 再発する」「意識に 変調を きたす」

先の使役文(93)～(101)のうち、使役文の主語にあたるものが、二格の身体部位の持ち主(全体)ではないものの場合、「〈人の身体部位〉に」ではなく「人に」と表現しても表現される事態としてはほとんどかわらない。

- | | |
|------------------------------------|------------|
| (93)' <u>二人に</u> 感覚の変化を 起こさせる | 〔二人の身体に〕 |
| (94)' <u>彼に</u> 満足げな微笑を 浮かべさせる | 〔彼の顔に〕 |
| (99)' <u>お俊に</u> 制え難い口惜しさを 起こさせる | 〔お俊の小さな胸に〕 |
| (100)' <u>我々に</u> 先生の熱烈な向学心を 感じさせる | 〔我々の胸に〕 |
| (101)' <u>子供に</u> 大切な意義を のみこませる | 〔子供の心に〕 |

それにもかかわらず、「〈人の身体部位〉に」と表現されることがあるのは、そうすることによって、表情などのあらわれる身体部位、感情を抱くところとして捉え得る「心、胸」を、それぞれの変化の生じてくる場所として明確に表現しようとするものではないだろうか。

ところで、身体部位を二格にするこういった使役文が存在することは、日本語において、人に対してその身体の一部や精神（心）に働きかけることを、全体としての「人」と部分としての「身体部位・精神」とをともに二格で表す文「*〈人〉に〈身体部位〉に ナニを Vt」がふつうはきわめて不自然であり〔注12〕、「〈人の身体部位〉に ナニを Vt」としななければならないことに関係しているだろう。

(104)「*弟に 頭に ボールを ぶつける」〔弟の頭に〕

(105)「*彼に 身体に 熱を 与える」〔彼の身体に〕

(106)「*我々に 胸に 安心を もたらす」〔我々の胸に〕

使役文においても「*人に 身体部位に ナニを Vt-サレ」ということはできず、「人の身体部位に ナニを Vt-サレ」と表現しなければならない〔注13〕。

(107)「*子供に 手に ボールを 握らせる」〔子供の手に〕

(108)「*彼に 身体に 熱を もたせる」〔彼の身体に〕

(109)「*我々に 胸に 安心を 感じさせる」〔我々の胸に〕

2. 3 物を場所的にとらえる

◆《入れ込み先》

〔動詞〕吸収する、吸いとる、吸う、含む、はらむ

〔使役構文〕

「新聞紙に 油を 吸わせる」「ガーゼに 消毒液を 含ませる」

「Aに Bを Vt-サレ」

A：具体物

B：具体物（主に液体）

意味：物Bをある場所的な物Aの内部に存在させる

〔他動詞文における類似の構造〕

「水に 塩を とかす／まぜる」「脱脂綿に 消毒液を 湿す」

「含む、吸収する、吸いとる、吸う、はらむ」といった動詞による使役動詞文「Aに Bを Vt-サレ」は、物Bを物Aの内部に入れ込みそこに存在させるようにする働

きかけを表現し、「Aに」は、働きかけのあとで物Bが内在するようになる場所としての物である。たとえば、「脱脂綿に 消毒液を 含ませる」において、「脱脂綿」は、「含ませた」あとに「消毒液」が内在するようになる場所として捉えられるものであり、そういった意味でこの「～に」には場所性がある。

(110)それを布の上から軽く抑え、布に汗や膿を吸いとらせるより他にどうすることも出来ないのだ。(黒い雨)

(111)食事中に、テーブルクロスにたらした汚れは塩に吸わせます。(『掃除便利帳』 江頭1996:21 より)

(112)彼はペンに赤いインキを含ませて読んで行くところの句の肩にいちいちアンダアラインをした。(田淵の髪)

(113)石油や食用油など、大量にこぼしたときは、洗たく用合成洗剤の粉末を盛りあげ、いちはやく粉末に吸収させ、次いでちり取りで掃きとります。(『掃除便利帳』 江頭1996:21 より)

(114)(それまで逡巡していたお玉は)追手(颯)を帆に孕ませた舟のように、志す岸に向かって走る気になった。(雁) cf. この例は、働きかけが消極的である点で他の例と異なる。

これらにも、元の動詞による対応する他動詞文として、物Aをガ格で表す次のような文が一応可能である。

(110)' 布が 汗や膿を 吸いとる

(111)' 塩が テーブルクロスにたらした汚れを 吸う

(112)' ペンが 赤いインキを 含む

(113)' 粉末が 石油や食用油を 吸収する

(114)' 帆が 追手(颯)を 孕む

これらにおいて、たとえば「布が 汗や膿を 吸収する」の主語である「布」は、「汗や膿を吸収する」という動き（典型的な動きではないが）の主体であり、かつそれは結果として「水」が内部に存在するようになる場所でもある。

次の「～に」は、「～のなかに」となっており場所性がはっきりしている。

(115)(二人の女は)人知れぬ涙を夜具のなかにこそ吸わせていたのではなかったらうか。(鬼龍院花子の生涯)

この種の使役文の構造は次のような他動詞文と類似し、こういった構造にささえられて先の使役動詞「吸わせる、含ませる」は、“とかす、込める、入れる、湿す”と

いった意味を帯びている。

- (116)「水に 塩を とかす」「ドレッシングに カレー粉を まぜる」
「脱脂綿に 消毒液を 湿す」

◆ 《属性・要素の付与先》

〔動詞〕もつ、含む、よそおう

〔使役構文〕

- 「瓦に 破壊力を もたせる」「スカートに ゆとりを もたせる」
「言葉に やわらかさを もたせる」「発言に 批判を 含ませる」
「Aに Bを Vt-サシ」

A：物（言葉・具体物・抽象物）

B：物の属性・要素 〔注14〕

意味：物（A）にある属性・性質（B）を帯びさせる（ある要素を内在させる）

〔他動詞文における類似の構造〕

- 「布地に 光沢（高級感）を 与える」「鉄骨に 強度を 加える」
「言葉に 威厳を 込める」「物事に 意味を 与える」
「行為に 意義を 与える／付与する」

「もつ」「含む」は、「〈物〉が 〈属性・要素〉を もつ／含む」という他動詞文によって、物にある属性（意味）や要素が内在する（備わっている）ことを表現しうる動詞である（「布地が光沢をもつ」「口調が威厳をもつ」「発言が批判を含む」）。これらからの使役動詞文「〈抽象物〉に 〈属性・要素〉を もたせる／含ませる」は、物にある属性（意味）を帯びさせる、あるいは何らかの要素を内在させるようにすることを表現し、その使役対象「～に」は、属性（意味）を帯びたり要素を内在させたりする場所としての物を表す。

手元の例には、人が自分自身の言葉づかいや言動にある種の調子や感情的な意味合いを込めることを表現するものがかなり多い。動詞「もつ」がシテ形をとり「人が〈自身の言葉・言動〉に〈属性〉を もたせて ～する」という構造になっているものが多く、「〈自身の言葉・言動〉に〈属性〉を もたせて」は、主語である人が発話を行う（「語る」「口をきる」など）際の様子を特徴づけるものとなっている。たとえば次の諸例では「AにBを もたせて」が“冷静に”“威圧的に”“陰しく”などの副詞が表すような意味を表している。

- (117) 言葉だけでも何処までも冷静な調子を持たせ続けて葉子は総てを語り終わって

から、(或女) 〈冷静な調子で(冷静に)語り終わる〉

(118)「桑原君じゃないか。」と一種の威圧感をもたして齊藤が口を切った、「どうしたっていうんだ。」(或男) 〈威圧的に口を切る〉

(119)(葉子が女中に)「何処か掃除の済んだ部屋があるんでしょう。暫くそこを貸して下さいな。そしてここも綺麗にして頂戴。部屋の掃除もしないで雑巾がけなぞしたって何にもなりはしないわ」と少し剣をもちて云ってやると、(或女) 〈陰しく云ってやる〉

次の例も「AにBをもちせて ～する」という構造だが、「Aに」が「～の中に」「～の間に」「そこに」であってより場所的である。

(120)大番頭は柔らかなことばの中に、重みをもちせて、主人のむすこに注意した。
(或男) 〈重々しく注意する〉

(121)「お須賀さん」という呼び名の間に女中や出入りのものが微妙な感じをもちせて話している調子を・・・(或女) 〈微妙な感じで話している〉

(122)早いといえばちゃっかりした早い交渉だが、そこにゆとりをもちてふわりとした持ちかけかたをする。(或男) 〈ゆったりと持ちかける〉

「AにBをもちせて ～する」という構造でないものもあるが、少なくとも手元の例にはごくわずかである。

(123)モニカの調子は、・・・はじらい深い娘の口調ではなかった。ましてそこにチャーミングな余剰を含ませんがためのわざとらしいあまい「舌足らずさ」ではなかった。(或男)

(124)ことばの民族学は、国語国字問題、国語教育をめぐる民間学のたちばに科学性をもちせるための理論的なささえをさしだすのに役だっている。(或男)

「～に 意味(意義)をもちせる」はかなり固定的な言い方で、「～に 意味・意義を 与える」にきわめて近い。事柄の認識の仕方に対するいわば“論理的なはたらきかけ”を表現するとでもいえるだろうか。

(125)私の生は他人たちの自由にゆだねられる。私の生にどんな意味をもちせようと、死んだ私は、それを運命として甘受しなければならない。(或男)

(126)イエスの死と復活に、パウロがどんな意義をもちせているかを見て、(或男)

(127)ソクラテスがプシュケーに個別的な自己あるいは個別的な人格という意味をもちたとき、(或男)

(128)なぜ今頃になって、自分の部屋がどこかに続く夢を見はじめるようになったの

か、納得がいかない。が、夢は夢なのだ。女は自分の見る夢などに意味を持たせたくなかった。(勸)

使役主体にあたるものが人ではなく抽象的なものである場合（下の例では“葉子に人の好きがあること”），それが原因となって「～に」にあたるものがある属性を帯びることが表される。

(129) (葉子には) 子供のまんまに固まってしまったような人の好きがあって、それが今日なお葉子の表情や仕様に、娘のような初々しさを持たせることがある。
(懺)

「Aに Bを もたせる」の「Aに」が具体物であるとき、外部から働きかけることによってその具体物がある属性を帯びるようになることが表現される。「～に」は、属性の付与先すなわち働きかけのあとに属性が内在するようになる場所としての物である。

(130) (奥さんは) 瓦の怖さを知っているそうだ。・・・まして今度のような光の玉や爆風は、どんなに強い顕在力を瓦に持たせるか分らないと奥さんは云った。
(黒い雨)

(131) 『墨東綺譚』はその初め・・・「玉の井双紙」と題したのであるが、後に聊か思うところがあって、今の世には縁遠い墨字を用いて、殊更に風雅をよそおわせたのである。(黒く刺繍)

手元の用例にはなかったが、「ゆとり／余裕／遊びを もたせる」もかなり固定した表現としてある。

(132) 「スカートに ゆるみを もたせる」「収納スペースに 余裕を もたせる」
「スケジュールに ゆとりを もたせる」「設計に 遊びを もたせる」

類似の構造の他動詞文としては次のようなものがある。

(133) 「布地に 光沢（高級感）を 与える」「鉄骨に 強度を 加える」
「言葉に 威厳を 込める」「物事に 意味を 与える」
「行為に 意義を 与える／付与する」

「Aに Bを V-サレ」の「B」が「A」を成り立たせるひとつの内容的要素である場合もあり、これは他動詞文「ナニに ナニを いれる／こめる／含める／とりいれる」などに構造的にも意味的にも似ている。

- (134) エスパー記者らは、メッセージにたくみに暗号でも含ませて、ほんとうにうまうまと走稿したのかもしれない。(サイゾのいちばん長い日)
- (135) (大鏡)の構成には)特に若き侍の発言に道長の政治への批判を含ませるのが目立ち、・・・(大鏡の人びと)
- (136) 初等教育段階の教育計画には、・・・創作活動に親しませることを含ませ、・・・教育的価値への初歩的洞察力を含ませるべきである。(階級と教育)

◆ 《接 触 場 所》

〔動詞〕 もつ、かむ

〔使役構文〕

「壁に 背を もたせる」「椅子の足に 新聞紙を かませる」

「Aに Bを Vt-サレ」

A：具体物

B：身体部位・具体物

意味：物Bを物Aに接触させる

〔他動詞文における類似の「～に」〕

「柱に 体重を あずける」「隙間に 新聞紙を はさむ」

ほとんどが、他動詞「もつ」の使役動詞「もたせる」の場合だが、使役文「Aに Bを Vt-サレ」が、物Bを物Aに接触させるようにする働きかけを表現し、「～に」が接触場所的にとらえられるものがある。

(137) 葉子は壁に背をもたせ、眼を細めて眺めていた。(懺)

(138) 二人はいつか外套に身を包んだまま、背を貨車の囲いにもたせたまま眠った。
(あすなろ物語)

(139) 明子は、ぐったりと疲れた身体を火鉢にもたせて、空ろな目を宙に浮かしていた。(くねい)

(140) 人々は・・・、あるいはうつむき、墓地の灌木に身をもたせ、あるいはのけぞって嘆き悲しんでいる。(ル・マニアの小さな村から)

(141) ツトムは・・・座席にもたせた頭を張子の虎みたいにぐらぐらさせた。(豊奴)

「ナニに」には、(137)(138)「壁に」「貨車の囲いに」や「堤に」「石組に」「扉に」のように場所的な性質がやや強く思われるものや、(139)(140)「火鉢に」「灌木に」や「柱に」「三面鏡に」のようにより物的なものがある。(141)「座席に」は「椅子に」と比べより空間的なとらえ方である。また、次の「船縁に」「椅子の背

に」のように物の部分としての位置を表す名詞の二格もある。

(142)赤シャツは馬鹿あ云っちゃあいけない、間違いになると、船縁に身を倚たした奴を、少し起き直る。(虜ちゃん)

(143)代助は・・・椅子の背に頭を持たせて、寛いだように、「・・・」と聞いた。
(それから)

さらに、「～の上に」のようないわば空間化された二格の例もある。

(144)(葉子は)かなり強い疲れを一時に感じながら、猫板の上に肘を持たせて居住いを崩して凭れかかった。(或女)

「もたせる」以外の例としては次の「かませる」があるが、この例も「～の前後に」と場所化された二格である。

(145)ぼくはタイヤの前後にそれぞれ大きな石をかませると、車体の下にできた日陰にもぐり込み、客を待った。(『屋の悲しみ』 瀬(1996::21)より)

この類の使役動詞文は、次のような他動詞文に類似する。

(146)「柱に 体重を あずける」「隙間に 新聞紙を はさむ」「背中に クッションを あてがう」

ところで、この類の「もたせる」による文に対しては、そもそも他動詞文「?壁が背をもつ」「?火鉢が肘をもつ」が不自然であるものが多い。「もたせる」を使役動詞とみることがはたして適切か、「もたせる」はすでに一語として独立した他動詞なのではないかと思われてくる〔注15〕。この意味での「もたせる」が「凭せる」のように漢字表記されることもあるのは、少なくとも自然な意識としては一語としてとらえられているということの現れだろうし、「もたせる」を前項要素とする複合動詞「もたせかける」が存在することも一語性のひとつの傍証にはなるだろう。「もたせる」については、先の《属性・要素の付与先》にあたるものや、使役対象が人である「人に ～を もたせる」をも含め、稿を改めて考えてみたい。

2. 4 動詞の性質

以上、2. 1～2. 3で、「～に」が場所性をも有するものをみたが、この種の他動詞使役をつくる動詞は、1節でみた他動詞使役の場合と異なり、意味的にも構文的にも特徴があり、動詞のタイプが限られている。それぞれの類の動詞を再掲すると次のようである。

- (147)「～に」が《物を存在させる場所》であるもの(2. 1)
 ア 収容する, 吸収する, 所蔵する, 保存する, 保管する
 イ 購入する, 買う, 買い取る(, 買い入れる)
- (148)「～に」が《作用(付着・接触)を与える場所》であるもの(2. 2)
 ア [付着性] もつ, つかむ, 握る, はく
 イ [接触性] くらう, かむ
 ウ [入れ込み性] (粧に)含む
- (149)「～に」が《状態変化の発露(現出)場所》であるもの(2. 2)
 ア (黥を)起こす, (黥を)浮かべる, (黥を)打つ, (笑いを)含む, (黥を)もつ
 イ 感じる, (黥を)起こす, のみこむ
- (150)「～に」が《入れ込み先》であるもの(2. 3)
 吸収する, 吸いとる, 吸う, 含む, はらむ
- (151)「～に」が《属性・要素の付与先》であるもの(2. 3)
 もつ, 含む, よそおう
- (152)「～に」が《接触場所》であるもの(2. 3)
 もつ, かむ

各小節でもいくつか触れたが, 意味的には, 物をあるところに入れこんだり付着させたりすることを表現する動詞と, 現象をあるところに現出させることを表現する動詞とがほとんどである。2. 3の類(上の(150)～(152))では, 「もつ」「含む」とそのバリエーションであるような動詞がほとんどであることも個別に気づかれる。

また, 構文的には, 二種類の構文すなわち, 物をヲ格で表すほかに, 物の存在する場所をガ格で主体として表す構文「〈場所〉が 〈物〉を Vt」と, 物の存在する場所をニ格で場所的に表す構文「〈場所〉に 〈物〉を Vt」とのふたつのいずれもとりの他動詞がかなりある。

宮島(1972)に, 「1つの動詞が, 内容的には同一の, 2つの構文のなかではたらくばあい」にどんなタイプがあるかが検討されており, 7つのタイプがあげられている(pp. 42-43, 701-707 たとえば, 「太郎が花子と結婚する $\Leftrightarrow$ 花子が太郎と結婚する」「酒が杯にあふれる $\Leftrightarrow$ 杯が酒であふれる」など)。そこには,

「〈場所〉が 〈物〉を Vt $\Leftrightarrow$ 〈場所〉に 〈物〉を Vt」

というタイプの動詞はあがっていないが, 2節でみたかなりのもの, たとえば「病院が怪我人を収容する $\Leftrightarrow$ 「病院に怪我人を収容する」(2.1), 「顔が微笑を浮かべる」 $\Leftrightarrow$ 「顔に微笑を浮かべる」(2.2), 「布が水を含む $\Leftrightarrow$ 布に水を含む」(2.3), 「言葉が威厳をもつ $\Leftrightarrow$ 言葉に威厳をもつ」(2.3)などは, 「1動詞における構文機

能のかさなり」のタイプのひとつとってよいのではないだろうか。宮島(1972:689-701)にはまた、「2 動詞間の構文機能の対応」の成り立つものとして11のタイプがあげられている。その一つに、「AがBをxする $\Leftrightarrow$ BがAにyする」があり、「含む」が「ふくむ $\Leftrightarrow$ はいる／属する」という関係をなすという（他は「まかす－まける」「めとる－とつぐ」「みちびく－したがう」「支配する－従属する」「つかまえる－つかまる」「おしえる－おそわる」）。2節でみた類の「もつ」も、「ふくむ」と同様に、「もつ $\Leftrightarrow$ はいる／属する」という関係があるといってよいのではないだろうか。

3 状況性を有する「～に」

◆《状況》

〔動詞〕吹く、打つ、たたく、なぶる、照る

〔使役構文〕

「風に 髪を 吹かせる」「雨に 頬を 打たせる」

「Aに Bを Vt-サル」

A：自然現象（風、雨、波、など）

B：身体部位・具体物

意味：その状況のもとに具体物・身体部位をおき何らかの影響を受ける

〔他動詞文における類似の構造〕

「寒風に 肌を さらす」「雨に 全身を ぬらす」

（1）他動詞使役における使役対象が人でない場合のもうひとつの類として、「風、雨、露、波、空気、清流の響き、月(朧)」など自然現象を表す名詞の二格を補語とする他動詞使役がある。多くはなく手元の用例中に20例ほどである。

〈風に〉

(153)彼は、乱れた髪を微風に吹かせながら、馬上に頭をめぐらして、後に罵り騒ぐ人々の群を、誇らかに眺めやった。(鑑)

(154)私はその反対にぬれたからだを風に吹かして水から上がってきた。(ころ)

(155)私は疲れてきていて、窓を開けて冷めたい風に頬を吹かせた。(靉04)

(156)俺が椽鼻で清の手紙をひらつかせながら、考え込んでいると、……。大事な手紙だから風に吹かしては見、吹かしては見ると、自分でも要領を得ない返事をして膳についた。(坊っちゃん)

〈雨に〉

(157) ほんの少しの雨に、わざと頬を打たせながら、私たちは那須の家を出た。(残っている話)

(158) 灰色になった殻とサンゴを雨にたたかせ十日ほど放置しておく、(南太平洋の環境にて)

〈露に〉

(159) 彼は頭から鳥打を脱(ト)った。黒い髪を夜露に打たして、時々帽子をわざと振って歩いた。(それから)

(160) (代助は) そうして頭を露に打たせながら、また三千代のいる所まで遣って来たのである。(それから)

〈波に〉

(161) 土木吏が鍬で切り崩した波除けの柳を切り、太いところを削って細くした、その跡を波に打たしたから、たいそう波の荒い様に見える。(中江の生涯)

〈空気に〉

(162) 葉子は・・・手欄に臂をついたまま安心して、晩春の景色をつつむ引き締まった空気に顔をなぶらした。(郵便)

〈清流の響きに〉

(163) 透きとおるばかりのわかし湯にからだを浸しあためて、しばらく清流の響きに耳をなぶらせるその楽しさ。(郵便)

〈月(朧)に〉

(164) 「ようし。」幼なく、母のやったとおりを真似て、こみ上げてくる笑いを月に照らさせながら、母の前に(拳を)つき出す。(くぬい)

二格で表されている「風，雨，露，波，空気，清流の響き，月(朧)」は，他動詞「吹く，打つ，たたく，なぶる，照る」などの表す動きの主体と考えることができるので，それらを主語として他動詞で表現することが可能である〔注16〕。上の(153)～(164)で表現されている事態に含まれている現実の現象も「風，雨，・・・」などを主語とする次のような他動詞文で表現される。(動詞がかなり限られるのは，それぞれの自然現象の動きを典型的に表現する動詞ということだろう。)

(153)' 微風が (彼の) 髪を 吹く

(157)' 雨が (私たちの) の頬を 打つ

(159)' 夜露が (代助の) 頭を 打つ

(161)' 波が 柳を 打つ

(162)' 空気が (葉子の) 顔を なぶる

(163)' 清流の響きが (私の) 耳を なぶる

(164)' 月が (子供の) 笑いを 照らす

こういった他動詞文を考えることができることから、先の使役文(153)～(164)は、「風に、雨に、・・・」を使役対象とする使役表現とみなすことが一応可能ではある。しかし、これら自然現象は、それに外がわから働きかけて「吹く」「打つ」といった動きをひきおこすことは不可能である。したがって、「風に～を吹かせる」「雨に～をたたかせる」の「～に」もまた、2節で検討した「～に」と同じく、使役主体からの言語的・態度的な働きかけを受けて意志的に行為を行いうるものとしての使役対象（「子供にろうそくの炎を吹かせる」「孫に肩をたたかせる」などの「子供に」「孫に」）と考えることはできない。とすればこれらの「～に」はどんな性質のものだろうか。

(2) ひとつのとらえ方は、「〈自然現象〉に ～を Vt-サル」は、「〈人〉に ～を Vt-サル」に擬したいわゆる擬人法的な表現だとして、「風に」「雨に」は人にたとえられているのだとみなすことである。1節の最後にみた(46)(47)などと同様に考えるわけである。しかしながら、後にみるように、自然現象を使役対象とする使役文はいくつかの点でかなり一定の特徴的な性質を示すので、単に擬人法一般として扱うことは適切でないように思われる。

(3) 「雨に」「風に」などの性質を考えるにあたって、この類の使役表現の構文的・意味的な性質をみておこう。まず、「風、雨、・・・」が使役対象であるような使役文においては、「ダレが 〈自然現象〉に ～を Vt-サル」における「～を」が主語である人の身体部位や持ち物である例が多い（そうでないのは(158)(161)）。また、その場合さらにほとんどが次のふたつの構文で用いられている。ひとつは、使役動詞が「Vt-サレ」あるいは「Vt-サレガ」の形をとっていわば従属節となり、《「人が 〈風・雨〉に 〈自身の身体部位〉を Vt-サレ/Vt-サレガ ～する」》となる構造、いまひとつは、使役動詞が主節動詞で他の動詞のシテ形を従属節にする《「人が ～して 〈風・雨〉に 〈自身の身体部位〉を Vt-サル」》という構文である。
《「人が 〈風・雨〉に 〈自身の身体部位〉を Vt-サレ/Vt-サレガ ～する」》

(153)' 彼は、乱れた髪を微風に吹かせながら、～を眺めやった

(154)' 私はぬれたからだを風に吹かして水から上がってきた

(156)' 俺は大事な手紙を風に吹かして見る

(157)' 私たちは雨に頬を打たせながら、那須の家を出た

(158)' 殻とサンゴを雨にたたかせ放置しておく

(159)' 彼は黒い髪を夜露に打たして、帽子をわざと振って歩いた

- (160)' 代助は頭を露に打たせながら、遣って来た
 (163)' 私はわかし湯にからだを浸しあためて、清流の響きに耳をなぶらせる
 (164)' 彼は笑いを月に照らせせながら、母の前に拳をつき出す
 《「人が ― して <風・雨>に <自身の身体部位>を Vt-サレ」》
 (155)' 私は窓を開けて冷めたい風に頬を吹かせた
 (162)' 葉子は手欄に臂をついたまま安心して、引き締まった空気に顔をなぶらした

こういった構文において、下線部「<風・雨>に <自身の身体部位>を Vt-サレ/Vt-サレガ」 「<風・雨>に <自身の身体部位>を Vt-サレ」は、主語である人が、それぞれの構文において、「― する」「― して」で表されている主たる動作を行っているときにおかれている付帯的な状況を表すものとなっている〔注17〕。したがって、使役動詞自体が表現しているのは、述べられている現実の事態における主たる動作（そのことを目的とする動作）ではないことがほとんどなのである。

(4) 次に、自動詞「なびく、そよぐ、光る、飛ぶ、ひびく」からの次のような使役表現について考えてみる。

- (165) (ユキちゃんが) 長い髪の毛風になびかせ、男三人従えてやってきたのはよかったけれど、(サ-カス^鑑)
 (166) 馬は、尾と鬣とを、長く風になびかせながら、蹄に火花を散らして、まっしぐらに狂奔する。(鑑)
 (167) 葦が・・・幅広な葉を風にそよがせて、ざわざわと音をたてているのであった。(田園の^鑑)
 (168) 華やかなネオン・サインと呼び込みの男たち、それにライトに車体を光らせるタクシーの長蛇の列がなかったとしたら、(北^鑑)
 (169) 闇市の十字路で、風に髪を飛ばせながら、オシゲは言った。(あ^{なる}物語)

これらに対する元の自動詞による表現を考えるとすれば次のようなものになる。

- (165)' 長い髪の毛が 風に なびく
 (166)' 馬の尾と鬣とが 風に なびく
 (167)' 葦の葉が 風に そよぐ
 (168)' 車体が ライトに 光る
 (169)' オシゲの髪が 春の風に 飛ぶ

これらの「風に」「ライトに」は、自動詞「なびく」「光る」の主体ではもちろん

なく、「髪がなびく」「車体が光る」という動きが行われているそのときの状況を表現している。つまり、〈風が吹いている、日がさしている〉という現象、そういう状況のもとで、動きが生じているということを表現するものであり、「～に」は“状況的”な与格とでもいえそうなものである〔注18〕。これらの「～に」はまた、事態の変化に影響を与えるという点で“原因的”な面もあるかもしれない。「～に」のこういった性質は、奥田(1983c)の第三章「状況的なむすびつき」で述べられている二格名詞の性質のうちの、「情勢的」なもの(「この雨にやってきた」「晴れわたった天気に墓をはく」など)と、「原因」的なもの(「雨にぬれる」「海風にゆれる」など)とがあわさったような性質に思われる。奥田(1983c:320)には、「に格の名詞がそのまま状況を示すようなことは、現代日本語ではあまりない。たいてい、現象性名詞のあとに後置詞的な「うち」「なか」がついていて、それがに格の形をとり、状況を示している。」と述べられているが、ここでみている使役文における「風に」「雨に」はそのまま状況を表しているといえるのではないだろうか〔注19〕。

朝山(1942:66-67)は、「松が嵐に吹き折れる」「月が雲にかくれる」などの「～に」について次のように述べ、この「嵐に」「雲に」には動きの主体としての性質が乏しく、むしろ「事態の単なる原点を、唯靜的に」示しているという。

「嵐に」「雲に」の「に」は未だ奪格的と言はんより、我等の意識には多く地格的であり、「嵐」「雲」における、主動者としての行為の積極性が其処に感ぜられないばかりでなく、又助詞「に」は、被動者「松」「月」において体験せられた「吹き折らる」「隠さる」なる事態の単なる原点を、唯靜的に指示して居るに過ぎないのである。」

「風に、雨に、・・・」など自然現象を表す二格名詞のこういった性質に留意して、先にみた他動詞使役とこの種の自動詞使役とを比べてみると、元の動詞はそれぞれ他動詞・自動詞であってその点異なるのだが、両者の使役動詞によってできあがった使役文は、構文・意味的な特徴がきわめて似ている。

(165) 彼女が 長い髪を 風に 吹かせて やってきた ――他動詞使役

[風が 彼女の長い髪を 吹く]

彼女が 長い髪を 風に なびかせて やってきた ――自動詞使役

[彼女の長い髪が 風に なびく]

(168) タクシーが 車体を 雨に 打たせて 走っている ――他動詞使役

[雨が タクシーの車体を 打つ]

タクシーが 車体を ネオンに 光らせて 走っている ――自動詞使役

[タクシーの車体が ネオンに 光る]

こういったことから、他動詞使役「風に髪を吹かせる」「雨に頬を打たせる」などにおける「～に」も、「吹く」「打つ」という動きの主体という面がありながらもなおそれは、(165)～(169)について述べたのと同様の意味での状況性をも帯びたものではないかと思われるのである〔注20〕。(3)でみた構文的な性質も考え合わせると、この種他動詞使役では、“使役文の主語である人(使役主体)が、〈風が吹く、雨がふる〉という状況に身をおいて何らかの影響を受けつつその下である行為を行ったりたたずんでいたりすること”が表現されているといえそうである。

こういった「～に」の性質は、長谷川(1969)で「随順用法」とされるものとの近さを思わせる。長谷川は、いわゆる「武者詞」について従来「受身をきらった武士が受身の意味を使役の形で表わした、軍記物に特有な言い方だ」とされてきたことに対する疑義を示し性質を論じているのだが、そのなかで、土佐日記にみられる次のような「せ」をとりあげて検討している。

(170)白散をある者夜のまとて舟屋形にさし挿めりければ風に吹きならさせて海にいれてえのまずなりぬ。(土佐日記:和歌, 長谷川1969:82)

長谷川は、この「せ」について、「従来はほとんどこれを受身的に解するだけで、それ以上には全く問題にされずにきたものである。……しかし、「海に入れて」を考慮にいれるとき、これを単なる受身とするだけではすませなくなる。」とする。そして「使役とはまさに力の関与にほかならない」という考察のうえで、この「風に吹きならさせて」は、「「風が絶えず吹きつづけるそのママニナッテ」ということの表現である、とするのが、最も自然な解し方であろう。受身とみるのは結果論的な見方にすぎない。」といわれる。そして「せ」のこういった用法“一種の自然発動的な言い方”“自発的用法”を「随順」とされる。ここでみている他動詞使役における“〈風が吹く、雨がふる〉という状況に身をおいて何らかの影響を受けつつその下である行為を行ったりたたずんでいたりする”というのはこれと似たとらえ方といえるのではないだろうか。長谷川には平家物語の次の例もあげられているが(“放任”の意を表す例とされる)、「～を」が身体部位であり、構文的にも(3)で述べたような使われ方である。

(171)〔俊寛僧都ハ〕あやしの臥しどへも帰らず、浪に足うち洗はせて、……そこにぞ明かされける。(平家物語, 巻二・足置 髭, 早瀬)

他動詞使役・自動詞使役にみられた(165)“(168)”のような構造は、他動詞文においても類似のものがみとめられる(長谷川(1969)にも述べられている)。

《他動詞文における二格補語》

(172)窓をあけて北風に身をさらした。(鑑時)

[～が 北風に 身を さらす]

(173)私は、風に素足をさらして、・・・歩いたが、(靱嶺)

[私が 素足を 風に さらす]

(174)一匹の狐が、暖かな毛の色を、傾きかけた日に曝しながら、のそりのそりと歩いて行く。(鞆)

(175)(初江が)水に濡れた全身を火に乾かすことに、(靱)

(176)私はルーズリーフの手帳を取り出して数ページを破り、びりびりにちぎって風に散らす。(堀河)

(177)ケネディは、・・・短い髪を風に乱していた。(アメリカ私)

(178)人はなく、屋根のトタンが一枚落ちかかって、夕方の風に音を立てていた。

(靱野村) ((177)(178)は、原因的な性質のほうが強いだろうか)

つまり、他動詞使役文、自動詞使役文、他動詞文いずれにも、こういった、状況的な「～に」がみられるのである。

(179) [他動詞使役文] 微風に 髪を 吹かせる

[自動詞使役文] 風に 髪を なびかせる

[他動詞文] 北風に 身を さらす

(5) さらに、受身文「〈自然現象〉に ～を Vt-サレ」における「自然現象に」にも状況性の感じられるものがある〔注21〕。先述の朝山(1942)は、「松が嵐に吹き折られる」「月が雲に隠される」といった受身文における「～に」にも「松が嵐に吹き折れる」「月が雲に隠れる」の「～に」と同じ性質をみている。

《受身文における二格補語》

(180)外は可成り強い夜風が吹いている。が、肩をすぼめながら、もうその風に頬を吹かれるのも、そそられるような心よさがあった。(靱牧)

(181)庭へ椅子を出して、沼を渡って来る風に吹かれながら涼んでいる時、(和解)

(182)風に吹き曝されながら稽古をするという習慣・・・(春柳)

(183)雨に洗われた桜若葉は・・・(おと)

(184)人里離れた山中に籠り、雪に閉じこめられて、他の何をすることができたろうか。(羊の歌)

(185)お雪は・・・冷え冷えとした夜気に打たれながら、彼方此方を歩いていたが、(家)

(186)来る時に見えなかったいろいろな物が、朝日の光に照らし出された。(和辻哲郎隨筆集)

そして最初の例(180)のように、「～を」が身体部位であるものは、ほとんど同じ事態を使役表現でも表現しうる。

(180) 肩をすばめながら、もうその風に頬を吹かせるのも、そそられるような心よさがあった。

受身文における「～に」がこういった性質をもつためであろうと思われるが、「～を」が先の(153)～(164)のような類の使役表現のなかには、その表す事態が、同じ動詞による受身表現の表す事態と、必ずしもその文中でおきかえられないにしても、かなり近くなるものがある〔注22〕。

(153) 彼は、乱れた髪を微風に吹かせながら、・・・誇らかに眺めやった。

〔≒乱れた髪を微風に吹かれながら、誇らかに眺めやった〕

(155) 私は窓を開けて冷めたい風に頬を吹かせた。

〔≒窓を開けて冷めたい風に頬を吹かれた〕

(157) 私たちは雨にわざと頬を打たせながら、家を出た。

〔≒雨に頬を打たれながら、家を出た〕

(160) (代助は) そうして頭を露に打たせながら、遣って来た。

〔≒頭を露に打たれながら、遣って来た〕

使役表現「そよ風に髪を吹かせながらたたずむ」「雨に頬を打たせながら歩く」や受身表現「そよ風に髪を吹かれながらたたずむ」「雨に頬を打たれながら歩く」では、「たたずむ」「歩く」ときの「風」や「雨」の様子が、それぞれ「(髪を)吹く」「(頬を)打つ」という動詞によって具体的な動きとして表現されており、「風」や「雨」は、動きの主体という性質をやはりまだ失ってはいないだろう。ここでは〈風が吹く〉〈雨が降る〉という現象における動きの主体としての「風」や「雨」がなお表に感じられる。ところが、自動詞文「そよ風にたたずむ」「雨に浜辺を歩く」や他動詞文「寒風に身をさらす」「少しの雨に傘をさして歩く」という表現においては、〈風(が吹く)〉〈雨(が降る)〉という現象が総体として、人がある行為を行うときの“状況”として述べられている。そこでは、「～に」はもはや述語動詞と直接の格関係をもたない要素としての二格すなわち「状況語」である。

(187) 冬のひざしに、・・・新聞をよみ返していた。(薔艸)

(188) 少しの雨に 傘を さす

(189) 爽やかな風に テニスを する

(190) 大嵐に 舟を 出す

4 おわりに

この稿では、他動詞使役には使役対象が人であるものとそうでないものがあるといわば二分して、その後者について考えてみたのだが、そのことに既に問題がないわけではない。組織、動物、機械などを表す名詞は、いわゆる人名詞ではないことから本稿の考察の対象にしたわけだが、1節でみたように、使役対象としてのこれらに人性が強く感じられる場合が確かにある。これと反対のことが、使役対象が人である場合にもありうるのである。たとえば、1節で例文(44)について、「馬に草をしょわせる」の「馬に」が場所性を帯びることをみたが、使役対象が人であるときでも「赤ん坊にズボンをはかせる」「病人に薬を飲ませる」など、その使役対象（「赤ん坊」「病人」）が意志的な行為を行う力のないものとみなされる場合には、「～に」に同様の性質がうかがえる。使役対象が人名詞であるものについても、どのような他動詞使役であるかによってその「～に」の意味はさまざまであるだろう。今後考えてみなければならない。

また、本稿は他動詞使役文といわゆる三項他動詞文との類似性という面を強くみとめようとしすぎる述べ方になってしまった。かりにそういった類似性があるとしても、述語動詞の形態論的なつくりの異なる両者（「Vt-サレ」と「Vt」）は、文の性質において相違があるのかもしれない。形が違えば内容も異なるとは一般にいわれることだが、他動詞使役文と三項他動詞文との場合それはたしてどうなのか。使役対象が人である場合を考察したうえで、両者の関係は注意深くさぐらなければならないだろう。

はじめにも述べたように、使役対象が人でないこの類の他動詞使役は、他動詞使役全体の中に占める数においても、また“使役”という働きかけがどんなものであるかという点においても特殊といわざるを得ない。しかしながら、使役対象が人であるものとそうでないものが全く意味的に無関係とは思えない。1節で述べたような両者をつなぎうる名詞があることもそのひとつであるが、使役文の表す文法的な意味においても両者には接点があるのではないか。3節で長谷川(1969)の「随順用法」をみたが、これには「放任の使役」といわれることのある使われ方とのつながりがあるのではないか。先にあげた平家物語の例(171)が“放任”を表すものと解されていたことも思い出される。2節で述べたものについても合わせ考えて、使役構文が表す文法的な意味の全体の中での位置づけをする必要があるだろう。

使役対象のもつ性質として“場所性”“状況性”をみてきたことも、さらなる考察が必要だろう。こういった意味が二格名詞の意味の全体のなかで、（受身文、他動詞文、自動詞文、形容詞文なども含めて）どのような位置づけになるのか考えてみたい。

この稿は、以上のような課題を今後大きく残した研究ノートとなった。

注

〔注1〕資料として用いた使役動詞による表現は、明治時代後期以降（主に昭和）に書かれた小説・随筆・評論など88作品（短編集は全体で1作品とした）から全例採集した約8300例（手作業で集めたため若干の漏れはあるかもしれない）と、その他任意に集めた約400例との合計約8700例である。稿末に88作品の出典一覧をあげた。

使役動詞の認定においては、たとえば「行かせる」「食べさせる」という下二段活用のものでなく、「行かす」「食べさす」という四段活用のものも使役動詞とみとめた。その他の点でも、使役動詞とみなしてよいか否かに迷う形もあるが、使役動詞の形態面での認定の仕方については、早津(1997)で考察したことに基づいた。

〔注2〕人以外のものが使役対象である他動詞使役「物（事）に ～を Vt-サレ」がきわめて少ないのは、他動詞文の主語は基本的には人であって、「物（事）が ～を Vt」という表現はそれほど多くないことなどによるとと思われる。他動詞文の主語が物や事であるときのその性質については別に考えたい。

〔注3〕使役構造の文についてかなり詳しく分析されている佐藤(1986, 1990)でも扱われていない。佐藤(1990:142-151)に、「§4 使役の客体が《出来事・物》のばあい」として、使役の主体も客体（本稿でいう「使役対象」）もともに非情物であるばあいの使役について考察されているが、とりあげられている例はいずれも自動詞使役の例である。また、使役の主体が人、使役の客体が非情物という使役については述べられていない。

〔注4〕早津(1998)で、使役対象が人である場合に、「ダレを／に V1-シ （～を） V2-サレ」といういわば複文構造の使役文があることをみた。これらでは、従属節「ダレを／に V1-シ」において、使役主体から使役対象への言語的・態度的な働きかけが表現され、主節で行わせる行為が表現される。こういった構造の使役文は、使役対象が物・事の場合にはなさそうである。

○家政婦を呼んで 鏡台を運ばせる。

○弟をおどして いうことをきかせる。

○女中に命じて 提灯を用意させる。

○子供に言いつけて 葉書を買ってこさせる

〔注5〕「枯れ木に花を咲かせる」は自動詞使役の例だが、この「枯れ木に」も同趣だろうか。

〔注6〕自動車、電車などの乗物も、自ら動くもののようにとらえられるからか、人

に準ずるものと扱われることがある（「車がいる」）。しかし使役対象が乗物である他動詞使役の例は手元に次の一つしかなかったので、分析は控えた。

○かづは奇妙なものを見た。桃いろの半外套の娘が、突然男の制帽をうばい取ると、それを車道へほうったのである。・・・今し制帽はあとから来る車に轢かれたところで、・・・男の帽子を奪いとして車に轢かせる若い娘の鮮烈な動作に魅入られた。(夏目漱石)

〔注7〕「(ダレの)手に金を握らせる」はかなり固定した比喩的な表現としても使われる。

○(末造は)世話をする婆あさんを片陰へ呼んで、紙に包んだ物を手に握らせて、何やら囁いた。(篠田篤)

○裕佐はつぶやくようにこうってちょっと外をのぞいたが、主婦のところへ行って茶代を払うふりをしながらそっとその手に銀貨を握らせた。(龍崎喜久) 国語辞典においても、『岩波国語辞典』（第二版、岩波書店）、『広辞苑』（第四版、岩波書店）、『学研国語大辞典』（初版、学習研究社）、『新明解国語辞典』（第四版、三省堂）、『大辞林』（初版、三省堂）など、調べてみたすべての辞書が、「にぎらせる」を立項して、たとえば“（金を相手ににぎるようにさせて渡す意から）わいろのお金などを渡す。”（『学研国語大辞典』）という語釈をしている。

〔注8〕「両手に水をすくう」「片手にドアをあける」などとの共通性をみることのできる「～に」だが、奥田(1983b:308-309)にもあるように、こういった二格は文体的にやや古いものだろう。

〔注9〕使役対象が人である場合も、それは使役文でヲ格または二格で表されることがほとんどである。まれにカラ格などの場合もあるが、へ格という例はないと思われる(早津1995)。

〔注10〕これらのうちには、本文にあげた構造の他動詞文だけでなく「〈全体〉は〈身体部位〉が ～を Vt」といういわゆる「ハガ構文」的な他動詞文と対応するものもある。

(94) 彼は 顔が 満足げな微笑を 浮かべる

(95) 明子は 目が 意地悪な笑いを ふくむ

(98) 蛇は 体が 波を 打つ

〔注11〕奥田(1983b:203)は、「身体に変調をきたす」「田中教師のうえに変化をもたらす」の「きたす」「もたらす」を、“状態生産動詞”としている。奥田(1983a:67, 1983c:290)も参照。

〔注12〕いわゆる主題やとりたて、あるいは対比的な表現においては、「〈人〉には

〈身体部位〉に「～」の次のようなも文が成り立つ。

(104)「弟には 頭に ボールを ぶつける」

(107)「子供には 手に ボールを 握らせる」

〔注13〕「*子供を 頭を なでる」ではなく「子供の頭を なでる」とするのも同様である。「子供の手で 運ばせる」のようなデ格ならば「子供に 手で 運ばせる」ということもできそうではある。しかしやはり表現されるニュアンスは同じではないだろう。

〔注14〕奥田(1983b:211-212)の、第一章：はたらきかけ 第四節：論理の表現、の「関係の表現」のうち「内在の関係」を表現するものの説明のなかに、“属性（あるいは性格や特徴）が、ある物や人や状態につきまといっている”ことをいいあらわしうる動詞として次のようなものがあげられている。

○もつ、ふくむ、おびる、そなえる、やどす、ひめる、とどめる、かく、
保有する、含有する、包含する、具備する

〔注15〕辞書などでも多く立項されている。ただし、辞書で立項されていることが必ずしも一語性を保証するわけではない。

〔注16〕「吹く」は「風が吹く」のように自動詞としての使われ方がむしろ多いが、次の諸例のように、「風」などを動作の主体とした「ナニを吹く」という他動詞的な使われ方もある。

○海の風はきびしく明子の頬を吹いた。(〈植い〉)

○そ、るように頬を吹く風。(〈植い〉)

○雑木の梢を吹く風の音が、(あすなろ物語)

○台風は稲の花を吹くことによって人間の生活を脅かす。(駄)

また、「打つ、たたく、なぶる」にも「雨、風、波」などを主体とする次のような他動詞用法がある。

○雨は古い軒を打ち、・・・「はけ」の古い家を閉じ籠めていた。(蔵野人)

○雨よけの帆布の端から余滴がぽつりぽつりと葉子の顔を打つ度に、(或女)

○波は拍々として岸を打っている。(中正造の生涯)

○黒いつめたい風が、どっとふいてきて、わたしの頬をたたいた。(「人生手鑑」 鶴 1972:110 より)

○風が一段と鋭く、強くなって頬をなぶる。(北斎)

ただし、こういった用法の多くが、「(風／雨が) N1 (鉢)のN2 (顔)を 吹く／打つ／たたく／なぶる」といった構文、すなわち「～を」が人や物の全体ではなくその一部分であるような構文であって、「明子を吹く」「家をたたく」といった使われ方が少ないことが注意される。

〔注17〕自動詞使役においても、身体部位が使役対象である場合には「〈身体部位〉を Vt-サ行」が同様な特徴をもつことについては早津(1991)でみた。

〔注18〕実際にこういった状況的な二格が表されている自動詞文に次のような例がある。

《自動詞表現における二格補語》

〈風に〉

- 今朝軒端に吊るしておいた照る照る坊主が風に揺れ、(北斎)
- その雑草には白いこまかな十字形の花が風にわなないていた。(金時)
- はるか霞の中に、風にそよぐ竹林や、・・・茶園が見渡せる。(「俳」の予て)
- 青年たちの乾燥した髪の毛は、岩山を吹き渡る高地の強い風になびいていた。
(野面)

- 白樺の木はやわらかな葉を茂らせて風にさやさと鳴っていた。(北斎)
- 「風に乱れる花は」「風に波うつ青田」「ユーカリは時々風にうごめいて」
「青桐の葉が風にさわぎ」「川風に縮まって遅く歩けば」

〈雨に〉

- ただひとりで、雨に濡れながらとぼとぼと、(古詩)

〈露に〉

- 小川の緑の草は露に光っていた。(親鸞)
- 土手の灌木の緑に半ば埋もれて萼紫陽花の花が・・・(紙)

〔注19〕次のように「～のなかに」であれば、動作主性はたしかになく状況的である。

- 出来得るならば、自分の頭だけでもいいから、緑のなかに漂わして安らかに眠りたい位である。(それら)
- 田舎道は日の光りのなかに牛のふんの臭気をただよわせていた。(「蘭」 廻19 83c:320 より)

〔注20〕ただし、例(159)(160)における「露」は、「風、雨、空気」などと比べて物としての性格がかなり強いだろう。

〔注21〕さらにまた、まつもと(1979)に述べられている形容詞と二格名詞とのむすびつきのさまざまのうちの「環境的なむすびつき」をつくる次のようなものにも通じるのではなかろうか。

- ……ときをおいてかれのかおをのぞきに行くたびに、雨にくらい空もあけて行き、…… (『龍蔵集』まつもと 1979:303 より)

〔注22〕ただし、受身文では「風に吹かれながら散歩する」「雨に打たれながら歩く」のように身体部位を明示しない表現が可能であるのに対して、使役文では「*風に吹かせながら散歩する」「*雨に打たせながら歩く」と表現することができず、

身体部位を明示する表現しかできない点は異なる。これが両者のどういう性質の反映なのかよくわからない。

引用文献

- 朝山信彌 1942～1943「国語の受動文について」『国語国文』12-11, 12-12, 13-6
（朝山信彌著作集刊行会編 1992 『朝山信彌国語学論集』和泉書院、に所収）
- 江頭由美 1996 『現代日本語の使役文をめぐって－物使役文－』東京外国語大学大学院地域文化研究科（日本専攻）修士論文
- 江頭由美 1997 「もの対象語のサセル動詞文について」『東京外国語大学日本研究教育年報（1996年度）』東京外国語大学日本課程
- 大鹿薫久 1986～1987「使役と受動（一）（二）」『山邊道』30, 31 天理大学国語国文学会
- 奥田靖雄 1983 a 「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」, b 「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」, c 「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」, 以上, 言語学研究会編 1983 『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房
- 佐藤里美 1986 「使役構造の文」言語学研究会編『ことばの科学1』むぎ書房
- 佐藤里美 1990 「使役構造の文(2)」言語学研究会編『ことばの科学4』むぎ書房
- 長谷川清喜 1969 「使役の助動詞 す・さす〈古典語〉」松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社
- 早津恵美子 1991 「所有者主語の使役について」『東京外国語大学日本語学科年報』13 東京外国語大学日本語学科
- 早津恵美子 1992 「使役表現と受身表現の接近に関するおぼえがき」『言語学研究』11 京都大学言語学研究会
- 早津恵美子 1995 「使役表現における使役対象の表され方と動詞の自他」『日本語の研究と教育 窪田富男教授退官記念論文集』専門教育出版
- 早津恵美子 1997 「使役動詞の認定をめぐって（1）――形態面の問題――」『環北太平洋の言語』3 京都大学大学院文学研究科
- 早津恵美子 1998 「複文構造の使役文についてのおぼえがきの――従属節と主節との関係――」『言語研究Ⅷ』東京外国語大学1997年度教育改善推進経費による刊行
- まつもとひろたけ 1979 「に格の名詞と形容詞とのくみあわせ――連語の記述とその周辺――」言語学研究会編『言語の研究』むぎ書房
- 宮島達夫 1972 『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

出典一覧

用例を全例採集した88作品(小説61作品, 随筆・評論27作品)について, 作品名, 作者名, 出版社, 発表年などの一覧を, それぞれ作品名の五十音順にあげる。(発表年は, 雑誌・新聞などに掲載された後に単行本になったものは, 最初に単行本になった年とする)

《小説》

『青い山脈』石坂洋次郎(新潮文庫)昭和22年／『足摺岬・絵本』田宮虎彦(角川文庫)昭和24～昭和26年(足摺岬, 異母兄弟, 絵本, 霧の旗, 子別れ, 梅花抄, 幼女の声)／『あすなる物語』井上靖(新潮文庫)昭和29年／『あらくれ』徳田秋声(新潮文庫)大正4年／『嵐』島崎藤村(岩波文庫)昭和2年／『或る女(上)』有島武郎(新潮文庫)大正8年／『家(上・下)』島崎藤村(新潮文庫)明治43～明治44年／『異形の者』武田泰淳(新潮文庫)昭和25年／『宴のあと』三島由紀夫(新潮文庫)昭和35年／『海肌のにおい』武田泰淳(新潮文庫)昭和26年／『おとうと』幸田文(新潮文庫)昭和32年／『重い歳月』津村節子(新潮文庫)昭和55年／『花影』大岡昇平(新潮文庫)昭和36年／『蟹工船・一九二八. 三. 十九』小林多喜二(岩波文庫)昭和4年／『月山』森敦(文春文庫)昭和49年／『彼方』津島佑子(新潮文庫)昭和54～56年(彼方, 野一面, 幻, 夢の道)／『雁』森鷗外(新潮文庫)大正4年／『城の崎にて』志賀直哉(新潮文庫)大正7年／『鬼龍院花子の生涯』宮尾登美子(文芸文庫)昭和55年／『金閣寺』三島由紀夫(新潮文庫)昭和31年／『銀の匙』中勘助(岩波文庫)大正4年／『鎖』他 中里恒子(中公文庫)昭和34年／『くれない』佐多稲子(新潮文庫)昭和13年／『黒い雨』井伏鱒二(新潮現代文学)昭和41年／『恋の巣』立原正秋(新潮文庫)昭和42年／『ころ』夏目漱石(角川文庫)大正3年／『山椒魚』井伏鱒二(新潮文庫)昭和4年／『潮騒』三島由紀夫(新潮文庫)昭和29年／『時雨の記』中里恒子(文春文庫)昭和52年／『斜陽』太宰治(新潮文庫)昭和22年／『春琴抄』川端康成(新潮文庫)昭和8年／『素足の娘』佐多稲子(新潮文庫)昭和15年／『聖少女』倉橋由美子(新潮文庫)昭和40年／『青銅の基督』長与善郎(岩波文庫)大正12年／『それから』夏目漱石(岩波文庫)明治42年／『偷盗』芥川龍之介(新潮文庫)大正6年／『天の夕顔』中河与一(新潮文庫)昭和13年／『鳥』大江健三郎(新潮文庫)昭和33年／『菜穂子』堀辰雄(新潮文庫)昭和16年／『流れる』幸田文(新潮文庫)昭和31年／『野菊の墓』伊藤佐千夫(岩波文庫)明治39年／『花霞』芝木好子(集英

社文庫) 昭和44年／『張り込み』松本清張(新潮文庫) 昭和30年／『ビルマの豎琴』竹山道雄(新潮文庫) 昭和23年／『広場の孤独』堀田善衛(新潮文庫) 昭和26年／『蒲団』田山花袋(新潮文庫) 明治40年／『墨東綺譚』永井荷風(岩波文庫) 昭和12年／『北帰行』外岡秀俊(河出文庫) 昭和51年／『坊っちゃん』夏目漱石(新潮文庫) 明治40年／『武蔵野夫人』大岡昇平(新潮文庫) 昭和25年／『むらぎも』中野重治(文芸文庫) 昭和29年／『めし』林芙美子(新潮文庫) 昭和26年／『雪国』川端康成(新潮文庫) 昭和23年／『夜の香り』古井由吉(福武書店) 昭和53年／『夜の橋』他 藤沢周平(中公文庫) 昭和56年／『路傍の石』山本有三(新潮文庫) 昭和16年／『和解』志賀直哉(新潮文庫) 大正8年

《随筆・評論》

『アメリカと私』江藤淳(文春文庫) 昭和40年／『大鏡の人びと』渡辺実(中公新書) 昭和62年／『おさなごを発見せよ』羽仁もと子(婦人之友社) 昭和40年／『男だって子育て』広岡守衛(岩波新書) 昭和65年／『女のこよみ』宮尾登美子(角川文庫) 昭和62年／『個人主義の運命』作田啓一(岩波新書) 昭和56年／『ことばと国家』田中克彦(岩波新書) 昭和56年／『サーカス放浪記』宇根元由紀(岩波新書) 昭和63年／『死刑囚の記録』加賀乙彦(中公新書) 昭和55年／『死の思索』松浪信三郎(岩波新書) 昭和58年／『社会科学における人間』大塚久雄(岩波新書) 昭和52年／『寿岳文章随筆集』寿岳文章(弥生書房) 昭和58年／『障害児と教育』茂木俊彦(岩波新書) 昭和65年／『田中正造の生涯』林竹二(講談社現代新書) 昭和51年／『中学校は、いま』望月一宏(岩波新書) 昭和62年／『日本文化と個人主義』山崎正和(中央公論社) 昭和65年／『庭の山の木』庄野潤三(冬樹社) 昭和48年／『花のある遠景』西江雅之(旺文社文庫・福武文庫) 昭和50年／『羊の歌』加藤周一(岩波新書) 昭和43年／『貧困の精神病理』大平健(岩波書店) 昭和61年／『風土』和辻哲郎(岩波文庫) 昭和10年／『「待ち」の子育て』山田桂子(農山漁村文化協会) 昭和61年／『南太平洋の環礁にて』畑中幸子(岩波新書) 昭和42年／『メキシコからの手紙』黒沼ユリ予(岩波新書) 昭和42年／『指と耳で読む』本間一夫(岩波新書) 昭和55年／『ルーマニアの小さな村から』みやこうせい(NHKブックス) 昭和65年

Une correspondance entre *On baisse le niveau*, *Le niveau baisse* et *On fait baisser le niveau*

Yoichiro TSURUGA

1. Introduction

On peut reconnaître une certaine correspondance entre *On baisse le niveau* et *Le niveau baisse*. Il y a une série de formes verbales qui acceptent cette correspondance. Et il y a aussi une construction factitive *On fait baisser le niveau*. Et il est possible de reconnaître une relation de synonymie entre *On baisse le niveau* et *On fait baisser le niveau*.

Dans toutes sortes de dictionnaires du français contemporain, la forme verbale *baisser* est présentée comme organisant à la fois les constructions transitive et intransitive. Ce que nous nous proposons de faire dans cet article, c'est de voir d'abord, quelles sont effectivement les fréquences des emplois transitif et intransitif de *baisser*, et ensuite, si les deux constructions sont autant attestées dans la construction factitive en *faire*.

Les fréquences effectives d'une forme verbale dans un corpus donné ne peut bien sûr pas refléter directement la place qu'elle occupe dans le système des constructions verbales. Mais elles peuvent donner quelques indications non inintéressantes sur le mécanisme dynamique du système. Le corpus que nous avons choisi est *Le Monde* 1993 et *Le Monde* 1994. Nous avons recensé toutes les occurrences de la construction de *faire baisser* dans les deux années du *Monde* et nous avons trouvé 201 exemples. Et quant à la forme verbale *baisser*, elle est très fréquente. Nous avons donc recensé seulement les premières 258 occurrences du *Monde* 1994 pour pouvoir les comparer avec les 201 exemples factitifs.

2. Les fréquences des constructions

Les fréquences que nous avons dégagées sont comme suit:

<i>baisser</i> :	258 occurrences
<i>baisser</i> , transitif:	37 (14%)
<i>baisser</i> , intransitif:	221 (86%)

faire baisser: 201
faire baisser (transitif): 2 (1%)
faire baisser (intransitif): 199 (99%)

On peut constater qu'en général, les emplois transitifs (14%) de *baisser* est beaucoup moins fréquents que ceux qui sont intransitifs (86%). On peut ainsi espérer que cette différence de fréquence se reflète dans la construction factitive précédée par *faire*. Mais le fait est que dans la factitive, on ne peut presque pas rencontrer le *baisser* transitif (1%). Notons que dans la factitive nous avons reconnu comme transitifs seulement les cas où on peut trouver l'objet direct et le sujet sémantique (sous forme de à-N ou par-N) de *baisser*. Dans les 199 exemples de la factitive, ci-dessus, on peut dire qu'il est plutôt naturel de considérer le substantif qui suit *baisser* comme sujet sémantique (et non l'objet direct) de *baisser*. Nous jetterons ci-dessous un coup d'œil aux exemples.

2.1. On baisse le niveau

(1) "Never give up" (ne jamais abandonner), son mot d'ordre préféré, reflète bien son inlassable combativité. Jamais en effet il ne baissa les bras. Il était par excellence un animal politique, [...].

(2) [...] bateaux qui reliaient Bordeaux à l'océan avaient besoin de deux marées pour accomplir leur trajet, et c'est donc à ce port constituant une limite de navigation qu'ils baissaient la voile.

(3) Ces massives expliquaient que la ville et le district (présidé par le même Georges Frêche) baissaient leur taux d'imposition de 0,1 %, en 1994, alors que le conseil général les augmentait de 3,9 % [...].

(4) Power PC n'est pas pour autant une panacée. Intel, avec ses ressources, a, d'ores et déjà, annoncé qu'il baissait les prix du Pentium et qu'il sortirait un nouveau microprocesseur plus puissant dès septembre.

(5) The Independent a annoncé, quelques heures après le Daily Telegraph, qu'il baissait lui aussi son prix de vente, de 50 à 20 pence, mais uniquement pour un jour.

(6) Le secrétaire américain au Trésor s'était employé ensuite à contenir la mauvaise humeur des marchés en "expliquant" que l'hôte de la Maison Blanche ne baissait pas pavillon devant les marchés.

(7) La "banque verte" estime faire son devoir en réaménageant les dettes, en baissant certains taux, en privilégiant les règlements à l'amiable "quatre cents cas contre quatre saisies", avance-t-elle et en continuant à investir dans le secteur [...].

(8) Pour une simple raison financière: en baissant de 80 % à 51 % sa participation au capital de Renault, l'Etat empocherait 29 % d'une entreprise valorisée aux alentours de 40 milliards de francs [...].

(9) La banque centrale allemande, en baissant de seulement 0,03 % le taux de ses prises en pension, a presque donné le sentiment de narguer les marchés.

- (10) [...], le sultanat ayant donné lui même l'exemple en baissant de 5 % son extraction.
- (11) D'abord bien sûr en maintenant un important déficit budgétaire, mais éventuellement aussi en baissant encore les taux d'intérêt.
- (12) Ce taux balise, par le haut, le chenal d'évolution du loyer de l'argent à court terme sur la place de Paris, et la Banque de France, en le baissant, fait connaître qu'elle ne redoute pas une crise sur le franc, puisque ses pensions à 5-10 jours ne sont pratiquement utilisées qu'en cas de crise.
- (13) On ne parle de lui, habituellement, qu'en baissant la voix.
- (14) Aujourd'hui, des responsables de l'audiovisuel privé qui se retrouvent rivaux de la Sofirad parlent en baissant la voix des "activités de renseignement" de certains responsables de la holding d'Etat.
- (15) C'est l'une de ses dernières batailles. "Mes projets, l'année prochaine, consistent à ne pas avoir de projet", laisse-t-elle tomber en baissant le nez.
- (16) Lorsque l'ancien drapeau descendit de son mât, la petite foule, composée en majorité de Blancs à l'allure d'étudiants tardifs, trépigna, certaines baissant le pouce comme César vouant les gladiateurs à la mort.
- (17) [...], certaines groupes ont eu au départ une démarche inverse en baissant le prix de leurs paquets, comme Reynolds avec Winston, ou en lançant des nouvelles marques à bas prix, [...].
- (18) [...] Philippe Chotard, secrétaire général de la mairie, souligne les redressements opérés par la municipalité Vigouroux: "Elle a stabilisé la fiscalité locale, notamment en baissant le taux de la taxe professionnelle devenu l'un des plus faibles des grandes villes de la région, déclare-t-il.
- (19) On imagine mal Chirac baissant les bras.
- (20) Quant à la CGV (groupe Générale des eaux), elle réclame ardemment le droit de faire du téléphone. Elle veut bien accompagner l'effort du gouvernement en baissant les frais de raccordement au câble, mais pas l'abonnement.
- (21) La tentation est d'autant plus grande que le président américain se trouve dans une situation politique difficile. En baissant les impôts des ménages, il pourrait ensuite compenser le coup de frein donné à la croissance par le Réserve fédérale (Fed).
- (22) [...] ils se sentent encouragés aussi bien par les expériences anglaises du Times et du Sun, notamment, que par celles que le groupe lui-même a faites en Espagne, en baissant les prix de certains magazines qu'il avait repris.
- (23) "Lorsque j'aurai le temps, j'irai dans la rue de mon enfance et je devrai voir alors qui est mort, qui a survécu", dit-elle en baissant les yeux.
- (24) Cette semaine encore, la Bundesbank, en baissant mercredi de façon plus que symbolique (de 0,03 % à 5,94 %) son taux de prise en pension, et la Banque de France, qui n'a pas touché du tout jeudi à ses taux directeurs, [...].
- (25) Ne baissant pas les bras, M.Meciar a annoncé son intention de lancer une deuxième pétition nationale et d'y ajouter une question: [...].
- (26) En outre, la nouvelle concurrence du câble a incité ATV à résister, en se concentrant sur le marché local et en baissant ses tarifs de publicité, tout en essayant d'améliorer ses

programmes.

(27) Ce quotidien contrôlé par Rupert Murdoch avait entamé cette “guerre des prix” il y a six mois, en baissant son prix de vente de 45 à 30 pence [...].

(28) [...]: le Point a renouvelé avec succès sa formule tout en baissant son prix de vente, [...].

(29) [...], la déception des marchés d’actions et obligatoires a été inversement proportionnelle à la demi-mesure prise par la Banque de France. Se doutait-elle qu’en baissant son taux d’appel d’offre de 0,1 %, pour le ramener à 6,10 %, elle allait créer un mouvement de mauvaise humeur sur les marchés ?

(30) [...] L’Allemagne baisse à nouveau ses taux.

(31) Suivant l’exemple de deux éditeurs de livres de poche, un éditeur de bandes dessinées baisse aussi le prix de certains de ses albums.

(32) [...] et qui ne sait définitivement parler que de lui, de sa “maladie”, de ses “pulsions”, se prend la tête dans une main, regard baissé.

(33) En augmentant son prix, alors que Murdoch baisse celui du Times, Andreas Whittam Smith qui vient d’être remplacé [...].

(34) [...] Robert, reprenant le prénom de son grand-père, arrivé de Berlin à la fin du dix-neuvième siècle boit du bourbon dans un verre turquoise. La télévision est allumée, son baissé.

(35) [...]: depuis que son prix d’achat a été baissé de 45 à 30 pence [...], le journal a augmenté ses ventes de 100 000 exemplaires en un an, soit près de 30 %.

(36) Conclu pour une durée de deux ans, l’accord de janvier 1993 a amputé la prime annuelle et baissé de cinq heures les horaires hebdomadaires.

(37) Quand ils n’apparaissent pas très gênés, et le regard baissé, de devoir citer un annonceur-partenaire!

Dans notre corpus, les termes taux et prix, par exemple, sont très fréquents (la moitié des exemples ci-dessus) comme objet du verbe *baisser* transitif. Comme on le verra ci-dessous, ces termes sont aussi fréquents comme sujet du verbe *baisser* intransitif et aussi comme sujet sémantique de *baisser* dans la construction factitive. Le fait qu’il y a des termes communs à l’objet du transitif et au sujet de l’intransitif n’est pas négligeable, bien que les exemples du *baisser* transitif ne soient pas très fréquents.

objet de *baisser* :

<i>taux</i>	9 occurrences
<i>prix</i>	9 (<i>frais</i> 1, <i>tarif</i> 1)
<i>bras</i>	3
<i>voix</i>	2

regard 2 (yeux 1)
etc.

2.2. Le niveau baisse

L'emploi intransitif de *baisser* est fréquent. Et on peut fréquemment rencontrer le terme *taux*, par exemple, dans la position du sujet. Ce terme se rencontre souvent dans la position de l'objet du baisser transitif, ce que nous venons de le voir ci-dessus. Il est ainsi difficile de ne pas reconnaître une certaine correspondance entre Le taux baisse et On baisse le taux.

(1) Dans les foyers, le taux de giscardisation baissa aussi vite qu'il avait grimpé quelques secondes plus tôt, pour revenir exactement à son point de départ.

(2) La production automobile, cette industrie-clé, baissa de 23 % en 1993.

(3) Cela nous avait conduits, à un moment où l'argent était disponible et où les taux baissaient, à envisager, avec le Trésor, d'autres solutions.

(4) [...], acheter des emprunts d'Etat européens, dont le cours montait en même temps que les rendements baissaient, avec une valorisation des cours de 5 % par point de rendement en moins.

(5) Donc des moins-values considérables pour l'épargne obligataire investie ces dernières années quand les taux baissaient.

(6) A qui fera-t-on croire que tout irait bien en France si les taux d'intérêt baissaient de deux points, alors qu'ils viennent de baisser de quatre points sans le moindre résultat ?

(7) [...] alors que les exportations baissaient de 5 % seulement à cause de la meilleure santé économique des pays anglo-saxons et de l'Asie en développement.

(8) Dans le cas de l'Allemagne, ce sont les taux longs qui ont monté plus vite que les taux courts ne baissaient, leur recul s'effectuant par petites gouttes, distillées par une Bundesbank ultraprudente.

(9) Une crédibilité qui semble actuellement suffisante puisque l'OCDE n'hésite pas à écrire que, "si les taux d'intérêt baissaient moins que prévu en Allemagne, les autorités françaises auraient à considérer comment poursuivre leur politique de baisse graduelle des taux d'intérêt dans le respect [...].

(10) [...] puisque, à chaque hausse des rendements près de 2 % depuis le début de février les cours de leurs acquisitions baissaient (plus de 8 % en quatre mois).

(11) Les campagnes menées, surtout à l'Ouest, contre certains personnages connus à l'Est ont baissé d'intensité au cours des derniers mois.

(12) Depuis, les bombardements sur Bihac-ville ont baissé d'intensité. La population apprécie.

Les deux dernier exemples (11) et (12) sont distincts des autres en ce qu'ils montrent un objet indirect. On peut reconnaître une ressemblance sémantique entre *baisser l'intensité* et *baisser d'intensité*.

2.3. On fait baisser le niveau

2.3.1. On fait baisser le niveau

(1) Le gouvernement devrait annoncer son intention de faire baisser à terme la durée légale.

(2) Une autre solution consiste à démanteler les mécanismes de protection sociale et à faire baisser ainsi le coût de la main-d'œuvre, mais sans immigration,

(3) [...], deux formules présentées comme miraculeuses puisque non seulement elles soulageraient les femmes mais permettraient de redresser la courbe des naissances et de faire baisser celle du chômage...

(4) Après avoir entrepris de faire baisser ces taux, le gouvernement a eu raison de refuser de les relever face aux spéculateurs.

(5) [...], ils pensaient qu'un apport exogène d'acide oléique permettrait de faire baisser considérablement le taux d'acides gras saturés en excès dans l'ALD et, ainsi, d'infléchir le cours de la maladie.

(6) Les services municipaux ont calculé que les taxes professionnelles versées par une dizaine de firmes japonaises, installées dans Paris intramuros permettraient de faire baisser d'un point la taxe d'habitation acquittée par les Parisiens.

(7) Les prédécesseurs de M. Bayrou, MM. Jospin et Lang, mais aussi, à sa façon et avant eux, Jean-Pierre Chevènement, avaient essayé de faire baisser d'un ton la rengaine sur la montée de l'illettrisme scolaire.

(8) [...] et que la société explique par la dépréciation des monnaies européennes qui aurait contribué à faire baisser de 11 %, en valeur, les ventes sur le Vieux Continent.

(9) Il s'agira d'abord de "faire baisser de 10 % le nombre des vols de voitures à Paris", en ramenant à 18 000 le nombre de 20 000 vols constatés en 1992.

(10) A terme, l'objectif est de faire baisser de 20 % les coûts unitaires d'Air France, et de retrouver l'équilibre financier du groupe en 1995.

Dans presque tous les cas de la construction factitive, il n'y a pas, comme on le voit dans les exemples ci-dessus, de sujet sémantique à-N(ou *par*-N) du *baisser* qui pourrait être transitif. Il est ainsi naturel d'interpréter comme intransitif le *baisser* des exemples donnés ci-dessus.

2.3.2. On fait baisser le niveau à-N

(1) C'étaient deux diamants noirs qu'éclairaient par instants de riches reflets d'or... Des yeux à faire baisser la prunelle aux aigles, à lire à travers les murs et les poitrines, à foudroyer une bête fauve furieuse, des yeux de souverain, de voyant, de dompteur.

(2) [...], le climat a changé, comme si la sauvagerie gratuite des bombardements de samedi et dimanche avait fait baisser le ton aux plus irréductibles partisans de l'apaisement.

3. Conclusion

On peut constater certaines tendances assez nettes. D'abord, dans la construction non factitive, l'emploi intransitif de *baisser* est beaucoup plus fréquent que son emploi transitif. Et dans la construction factitive, l'emploi transitif de *baisser* est quasi inexistant. Rappelons aussi que *faire baisser* et le *baisser* transitif sont presque synonymes. Cela suggère que la forme *baisser* a tendance à se spécialiser dans l'emploi intransitif et que son emploi transitif est, au moins en partie, remplacé par la construction factitive *faire baisser*.

Il faut, pourtant, remarquer que l'emploi transitif de *baisser* existe, que même dans la construction factitive le transitif *baisser* n'est pas impossible et qu'il y a des différences entre le *baisser* transitif et la factitive *faire baisser*.

Concernant la construction factitive, nous l'avons examiné dans un corpus suffisamment grand. Mais concernant la fréquence du transitif *baisser*, il faut l'examiner dans une étendue plus large du corpus que nous avons utilisé, et aussi dans des corpus plus variés. Il faudra aussi examiner d'autres constructions qui peuvent être liées à celles de *baisser* : celles de *se baisser*, d'*abaisser*, de *baisse*, substantif, etc. Notre examen présenté ci-dessus est donc loin d'être suffisant. Mais ce sur lequel nous voudrions insister, c'est que l'examen d'un corpus, d'emplois effectifs d'une forme en question peut suggérer quelque chose qu'il n'est pas toujours facile de voir par l'examen des formes acceptables, examen qui recourt à la compétence linguistique.

Bibliographie

BOONS, Jean-Paul, GUILLET, Alain, LECLERE, Christian. 1976. *La Structure des phrases simples en français*, Genève, Droz, 377p.

GROSS, Maurice. 1975. *Méthodes en syntaxe*, Paris, Hermann, 414p.

ROTHERMBERG, Mira. 1974. *Les Verbes à la fois transitifs et intransitifs en français contemporain*, The Hague, Mouton, 334p.

Annexe

(la suite des exemples de 2.2.)

(13) Pendant le même temps nos exportations [...] ne baissaient que de 4,8 %, malgré la mauvaise conjoncture de l'Union européenne, [...].

(14) [...] par la hausse des cours des emprunts du Trésor américain dont les rendements baissaient sensiblement, revenant en deux jours de 7,17 % à 6,90 % pour le 10 ans [...].

(15) L'année a été faste, car le niveau de l'intérêt baissait à vue d'œil.

(16) A qui fera-t-on croire que tout irait bien en France si le franc baissait alors qu'à son niveau actuel, il nous procure un excédent commercial jamais atteint sur l'Allemagne ?

(17) [...], mais la hausse des taux d'intérêt à long terme entraînait la morosité de la Bourse; et le dollar baissait.

(18) Le lendemain, toujours aussi volatil, le titre baissait de 10 % à l'ouverture avant de terminer la journée sur un gain de 2,5 % à 34,70 francs avec 3,6 millions de titres échangés.

(19) Le chiffre d'affaires du groupe baissait de 7,5 %, à 28,9 milliards de marks.

(20) [...], le carnet de commandes des chantiers finlandais a augmenté sensiblement alors que, dans les autres pays traditionnels, il baissait ou stagnait.

(21) De plus "cent quarante-trois personnes dont le salaire ne baissait pas n'auraient pas dû voter", dénonce la CFDT.

(22) Sa santé était fragile, sa vue baissait, sa vie lui échappait.

(23) En clair, estimant que la valeur publicitaire des émissions de Michel Drucker baissait, TF 1 lui aurait proposé de faire le même nombre de shows qu'auparavant [...].

(24) Les pertes étaient passées de 11,2 millions de francs en 1990 à 45 millions de francs en 1993 pour un chiffre d'affaires baissant dans le même temps de 12,7 à 8,9 millions de francs.

(25) The Guardian perd un peu de terrain, ses ventes baissant de 2 % en juillet.

(26) Ce texte ramène le temps de travail hebdomadaire de 38 h 50 à 37 h 50, les salaires baissant de 4 %, et permet d'éviter 100 suppressions d'emploi [...].

(27) Le magistrat note en outre qu'"il n'existait aucune homogénéité de tarification d'un exercice sur l'autre, le tarif baissant de 100 000 francs par jour en 1987 à 85 000 francs en 1988, [...].

(28) Le chiffre d'affaires semestriel a augmenté de 6,4 % à 40,9 milliards de deutschemarks, croissant fortement à l'étranger (+ 14,8 %) mais baissant en Allemagne (3,2 %).

(29) Le taux d'épargne baissant et le taux d'investissement augmentant, l'unification a fait disparaître ce qui avait fait la suprématie de l'Allemagne.

(30) Du moins, mardi soir, le taux des bons du Trésor à trente ans avait-il baissé (à 7,25 %), aidant Wall Street à clôturer à la hausse, cependant que [...].

(31) La participation au scrutin de 1991, assez élevée dans les petites chambres, baisse à 20 % en moyenne dans les plus importantes... [...].

(32) En Allemagne de l'Ouest, le taux de chômage a baissé à 7,9 % en septembre, contre 8,2 % le mois précédent et 7,4 % en septembre 1993.

(33) Comme le loyer de l'argent avait un peu baissé à Francfort depuis le jeudi 17, puisque la Bundesbank ramenait de 5,75 % à 5,25 % le taux de reprise des liquidités à trois jours [...].

(34) Les rendements des emprunts d'Etat ont baissé à Francfort et à Paris [...].

(35) L'ensemble des budgets de fonctionnement du conseil général a donc baissé, à l'exception de l'aide sociale et de la réhabilitation des collègues.

(36) Dès l'annonce de ces chiffres, le titre a baissé à la Bourse de Paris.

(37) Le déficit public a fortement baissé, à la suite d'une réduction des dépenses de 255 millions de dollars, [...].

(38) Depuis l'annonce de la réouverture de l'aéroport et la fin des combats croato-musulmans, les cigarettes, comme le reste, ont baissé (à 8 marks).

(39) L'eau s'est un peu évaporée, le niveau baisse à mesure du temps car la boule de verre est scellée, jamais désaltérée.

(40) De son côté, le chiffre d'affaires a baissé à 37 milliards, contre 37,7 milliards en 1992.

(41) Ce relèvement étant acquis vendredi en fin d'après-midi, le dollar, qui, le matin avait baissé à moins de 1,73 DM, se retrouver en soirée à 1,76 DM, [...].

(42) [...] les chances sont bonnes pour que l'inflation baisse à nouveau dans les mois qui viennent en Allemagne”.

(43) Le chiffres d'affaires a baissé à nouveau l'an dernier, revenant à 7,98 milliards de francs (-7,6 %).

(44) Or, lorsque le dollar baisse à Tokyo, il baisse également à Francfort et à Paris, par la vertu des “parités croisées” [...].

(45) Quant aux soubresauts des énormes marchés les infractions à la législation sur les stupéfiants [...] et les délits à la police des étrangers [...] ont curieusement baissé, alors que ces deux sortes d'infractions ont été placées parmi les priorités du gouvernement Balladur.

(46) Parallèlement, la participation de l'Etat a baissé, alors que le financement par les ménages a été porté de 14 % à 15,4 %.

(47) Lui-même se vante d'avoir jugulé l'inflation, qui de fait a régulièrement baissé au cours du second semestre de l'année écoulée, [...].

(48) Mais je ne peux pas vous promettre, car je mentirais si je le faisais, que le chômage aura baissé au début de l'année prochaine (...).

(49) L'inflation a baissé au-delà de toute espérance, les investissements étrangers commencent à affluer, Moscou affirme ouvertement ses droits sur sa zone d'influence [...].

(50) La demande intérieure ouest-allemande a baissé au dernier trimestre 1993 et le mouvement pourrait se poursuivre au début de 1994, sous l'effet de mesures fiscales et budgétaires sévères.

etc.

(la suite de 2.3.1.)

(11) [...] un plan qui va progressivement sortir le pays de la crise [...], mais va aussi réduire massivement les emplois et faire baisser, deux années durant (1983-1984), le pouvoir d'achat des Français.

(12) [...]: la Bundesbank s'est engagée à faire baisser l'inflation allemande: elle ne s'est pas engagée à soutenir le SME à tout prix.

(13) Les effets pervers des politiques de rigueur sont évidents: si elles parviennent mais seulement quand le taux de chômage dépasse 8 % ou 10 % à faire baisser l'inflation de 5 % [...] à 3 % [...].

(14) [...] les experts du FMI considèrent que "beaucoup reste à faire" pour faire baisser l'inflation [...].

(15) "Nos discussions ont permis de faire baisser la pression", a indiqué un responsable américain, [...].

(16) [...] aux maires qui, devant la gravité de la situation, emploient tous les moyens pour essayer de faire baisser la pression.

(17) Il faut rappeler l'immense effort fourni par les communes dans la création d'un réseau associatif destiné à faire baisser la pression sociale.

(18) Quant aux banques centrales, elles nourrissent un jet continu de ventes de marks sur les marchés, afin de faire baisser la pression.

(19) Au milieu de la halle, les fours luisants et la chaleur de juin empêchent les ventilateurs de faire baisser la température ambiante en deça de 40 degrés.

(20) Plusieurs tentatives de conciliation à l'initiative du Comité régional de paix n'ont pas réussi à faire baisser la tension.

(21) [...], la Grèce s'est employée à faire baisser la tension, en réponse à une note de protestation de Tirana, envoyé lundi 5 juillet.

(22) [...] puisque, aux yeux de M. Mitterrand, il est capable de faire baisser la tension entre la droite et la gauche.

(23) Il suffirait au gouvernement israélien d'une semi-reculade [...] pour faire baisser la tension et détourner progressivement l'attention de cet abcès de fixation.

(24) Pour tenter de faire baisser la tension sur un marché "verrouillé", la municipalité, conduite par Catherine Trautmann (PS), veut mener une nouvelle politique du patrimoine de la ville [...].

(25) [...] c'est la relance qui va faire baisser le chômage, c'est participer à l'entretien d'une espérance [...].

(26) [...] “la vieille théorie de la droite pour faire baisser le chômage; d’un côté il faut baisser les salaires et de l’autre il faut réduire le rôle de l’Etat, c’est le contresens de M. Laval en 1935”.

(27) [...] bien des techniciens capables de faire baisser le chômage et augmenter la croissance économique.

(28) “REBONDIR n’a pas la prétention de faire baisser le chômage, mais l’espoir d’aider ses lecteurs”.

(29) [...] la croissance ne permettait plus à elle seule de faire baisser le chômage.

(30) On murmure aussi que les rodomontades de Port-Moresby pourraient avoir pour but de faire baisser le cours des actions de la PJV, [...].

(31) D’ores et déjà, ces sombres prévisions de résultats, conjuguées à un manque d’optimisme, ont atteint l’un de leurs objectifs, celui de faire baisser le cours en Bourse [...].

(32) [...] selon lequel il faudrait faire baisser le coût du travail et donner plus de flexibilité [...].

(33) Ils préfèrent donc garder leurs positions, quitte à payer un coût de portage [...] conséquent, et contribuent donc à faire baisser le franc, puisque les achats demeurent moindres.

(34) [...] ont tort de se priver de la possibilité qu’offrent les marges de fluctuations élargies au sein du SME pour réduire fortement les taux à court terme et faire baisser le loyer de l’argent, ce qui soulagerait [...].

(35) [...], mais le choix d’un taux de change ambitieux, ajouté à la libération fût-elle partielle des prix, risque de faire baisser le niveau de vie de la population.

(36) C’est la langue de l’école secondaire (même si de fortes concentrations d’élèves “latinos” ont pu faire baisser le niveau général).

(37) Comme tout acheteur, il cherchait à faire baisser le prix d’achat d’autant plus qu’il savait que Bernard Tapie était condamné à vendre.

(38) Ce beau score ne s’expliquait pas uniquement par le principal argument de sa campagne présidentielle: faire baisser le prix de la vodka!

(39) Mais peut-on faire baisser le taux d’épargne des ménages ?

(40) Que reste-t-il donc pour faire baisser le taux d’épargne des particuliers dans cette période de crise ?

(41) [...], la situation générale de l’emploi devrait faire baisser le taux de placement des stagiaires [...].

(42) Lundi 2 août, Helmut Schlesinger, [...], avait indiqué que son établissement pourrait, éventuellement, faire baisser le taux de ses pensions à court terme au dessous du taux d’escompte.

(43) Dans un traité global censé faire baisser les barrières douanières, la CEE a construit un grand mur, empêchant de passer les créateurs et créatrices qui ne sont pas de l’Europe.

(44) [...] l'idée que des taux d'intérêt assassins étranglent l'activité et qu'il importe avant tout de les faire baisser ?

(45) Vous n'y êtes pas, il faut faire baisser les charges!

(46) [...] hommes d'affaires, dont [...], tous accusés d'avoir perpétré une série d'attentats à la bombe pour faire baisser les cours de la Bourse et en tirer profit, [...].

(47) L'arrivée [...] imposait de se doter d'avions plus petits pour faire baisser les coûts d'exploitation et de multiplier [...].

(48) La qualité peut y gagner et cela peut faire baisser les coûts.

(49) [...] lequel proclamait, [...], qu'il fallait faire baisser les prélèvements obligatoires.

(50) Ainsi, France Télévision n'a pas de centrale d'achat de droits de retransmission pour faire baisser les prix.

etc.

資料：ドイツ語の他自動詞

成田 節

1. はじめに

ドイツ語の動詞 brechen には Die Äste brechen. 「枝が折れる」のような自動詞用法と Ich breche die Äste. 「私は枝を折る」のような他動詞用法がある。両者は自動詞用法の主語と他動詞用法の4格目的語が「折れる対象」を表すという関係にある。この brechen のような特徴を備えた動詞をここでは「他自動詞」と呼ぶ。

この資料は、ドイツ語の「他自動詞」110語を意味の点から分類し、例文と日本語訳を添えたものである。「他自動詞」は野入(1972)、藤縄(1990)、Oya(1995)を下敷きに取り捨選択し、文例・句例は主に Duden Deutsches Universalwörterbuch A-Z (1997) 及び Langenscheidts Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache (1993) から採った。

分類した各グループには I. a. 「折れる・切れる・取れる」のような自動詞の意味に基づいた見出しが付いているが、これは厳密な分類基準ではなく、一応の目安に過ぎない。

見出し語に続いて [sein] あるいは [haben] とあるのは、それぞれの自動詞が完了形を作るときに用いられる助動詞である。周知のように自動詞の場合、perfektiv ならば sein, imperfektiv ならば haben というように、完了の助動詞の選択は動詞の Aktionsart とおおよそ連動している。

2. 他自動詞のリスト

I 「状態の変化」

a. 「折れる, 切れる, 取れる」

1. brechen [sein]

- i) Die Äste brachen unter der Schneelast. 枝が雪の重みで折れた
- i) Das Brett bricht. 板が(重みに耐えられずに)折れる
- i) Das Leder beginnt zu brechen. 革にひびが入り始める
- i) Die Achse ist gebrochen. 車軸が折れた
- t) Er/Die Schneelast bricht die Äste. 彼は/雪の重みが枝を折る
- t) einen Stock in Stücke brechen 棒を粉々に折る
- t) Ich habe mir den Arm gebrochen. 私は腕を折った

2. abbrechen [sein]

- i) Die Spitze des Messers/Das Stuhlbein brach ab. ナイフの先が/椅子の脚が折れた
- i) Der Henkel der Kanne war abgebrochen. ポットの取っ手が折れていた
- i) Der Absatz ist mir abgebrochen. ヒールが折れた
- t) einen Zweig abbrechen 枝を折り取る
- t) die Spitze des Bleistifts [beim Schreiben] abbrechen [書いていて] 鉛筆の先を折る
- t) Ich habe mir den Fingernagel abgebrochen. 私は爪を折つ(てしまっ)た

t) Der Zahnarzt hat mir den Zahn abgebrochen. 歯医者が私の歯を折っ(てしまっ)た

3. aufbrechen [sein]

i) Die Knospen brechen auf. つぼみが開く

i) Die Wunde ist wieder aufgebrochen. 傷がまた開いた

i) Die Straßendecke war an verschiedenen Stellen aufgebrochen. 路面はあちこち穴が開いていた

t) ein Schloss/die Tür/ein Auto aufbrechen 錠を/ドアを/車をこじ開ける

t) Er brach die Kiste mit einem Stemmeisen auf. 彼は木箱をのみでこじ開けた

t) den Straßenbelag mit dem Pressluftbohrer aufbrechen 路面に空気ドリルで穴を開ける

4. ausbrechen [sein]

i) Der Haken ist [aus der Wand] ausgebrochen. [壁面から] ハーケンが抜けた

t) Steine [aus der Mauer/aus der Wand] ausbrechen [塀から/壁から] 石を割り取る

t) Ich habe mir einen Zahn ausgebrochen. 私は歯を折っ(てしまっ)た

5. durchbrechen [sein]

i) Das Brett ist [in der Mitte] durchgebrochen. 板が[真中で] 二つに折れた

i) Der Sitz ist in der Mitte durchgebrochen. 座席は真中で二つに折れた

t) eine Tafel Schokolade [in der Mitte] durchbrechen 板チョコを[真中で] 二つに折る

6. losbrechen [sein]

i) Die Äste sind im Sturm losgebrochen. 枝が嵐で折れた (=折れて落ちた)

t) einen Ast losbrechen 枝を折り取る

7. zerbrechen [sein]

i) Der Teller fiel auf die Erde und zerbrach. 皿が地面に落ちて割れた

i) Eine Bindung/Freundschaft zerbricht. 人間関係が/友情が壊れた

t) Er hat die Tasse/den Teller zerbrochen. 彼はカップを/皿を割った

8. reißen [sein]

i) Papier reißt leicht. 紙はすぐに破れる

i) Der Film ist gerissen. フィルムが切れた

i) Mir ist das Schuhband gerissen. 私は靴ひもが切れた

t) Ich habe den Brief mittendurch gerissen. 私はその手紙を真っ二つ破いた

t) etwas in Stücke/Fetzen reißen ある物を細かく/ぼろぼろに裂く

t) den Stoff in schmale Bahnen reißen 布地を細い帯状に裂く

9. abreißen [sein]

t) alte Plakate [von der Wand] abreißen 古いポスターを[壁から] はがした

t) Der Wind hat die Blüten abgerissen. 風が花びらを[木から] 散らした

t) Sie riss ihm den falschen Bart ab. 彼女は彼の付け髭をもぎ取った

i) Der Aufhänger am Mantel/der Schnürsenkel riß ab. コートのフックが/靴ひもがちぎれた

i) Mir ist der Knopf abgerissen. 私のボタンが取れた

10. **aufreißen** [sein]

- i) Die Hose ist an der Seite aufgerissen. ズボンの横が破れた
- i) Die Wolkendecke reißt auf. 覆いのような雲に隙間が開く
- i) Die Wunde ist aufgerissen. 傷が開いた
- t) Ich habe mir den Rocksaum aufgerissen. 私は(引っ掛けて)スカートの裾を破った
- t) das Fenster/die Wagentür aufreißen 窓を/車のドアを(勢いよく)開ける
- t) einen Brief/eine neue Schachtel Zigaretten aufreißen 手紙を/新しいタバコの封を開ける

11. **ausreißen** [sein]

- i) Das Futter/Der Aufhänger reißt aus. 裏地がはがれる/襟づりが取れる
- i) Der Ärmel ist ausgerissen. 袖が引きちぎれた
- i) Die Knopflöcher sind ausgerissen. ボタン穴がほつれた
- t) Blumen/Unkraut ausreißen 花を/雑草を引きぬく
- t) Er riss sich die ersten grauen Haare aus. 彼は出始めた白髪を抜いた

12. **durchreißen** [sein]

- i) Der Faden/Das Seil ist durchgerissen. 糸が/ザイルが切れた
- t) den Faden/das Tuch [in der Mitte] durchreißen 糸を/布を[真中で]切断する

13. **einreißen** [sein]

- i) Der Stoff reißt überall ein. その布はあちこちに裂け目が入る
- i) Der Ärmel war bis zum Ellbogen eingerissen. 袖は肘のところまで裂けていた
- i) Der Fingernagel ist eingerissen. 爪がひび割れた
- t) Ich habe den Geldschein eingerissen. 私はあいにく紙幣に裂け目を入れてしまった
- t) Er hat das Tuch eingerissen. 彼は布に裂け目を入れた

14. **zerreißen** [sein]

- i) Der Faden/Das Seil zerriss [in zwei Stücke]. 糸が/ザイルが[二つに]切れた
- i) Der Stoff zerreißt leicht. その生地は切れやすい
- i) Die Bande zwischen ihnen waren zerrissen. 彼ら間の絆は切れた
- t) Er zerriss das Foto in kleine Stücke. 彼は写真を細かく破いた
- t) Das Raubtier zerreißt seine Beute mit den Zähnen. 猛獣は獲物を牙で引き裂いた
- t) Ich habe [mir] an den Dornen meine Strümpfe zerrissen. 私は棘で靴下に穴を開けてしまった

15. **knicken** [sein]

- i) Die dünnen Äste knicken. 細い枝が折れ曲がる
- i) Im Sturm knickten die Bäume wie Streichhölzer. 嵐の中で木々がマッチ棒のように折れ曲がった
- i) Die Balken knickten wie Strohhalme. 梁が麦わらのように折れ曲がった
- t) Er knickt die dünnen Äste. 彼は細い枝を折り曲げる
- t) Der Sturm knickt Bäume/die dünnen Äste. 嵐が木々を/細い枝を折り曲げた
- t) die Seiten im Buch knicken 本のページを折り曲げる

16. **umknicken** [sein]

- i) Bäume knickten um wie Grashalme. 木々が草の茎のように折れ曲がった
- t) Grashalme umknicken 草の茎を折り曲げる
- t) ein Blatt Papier umknicken 1枚の紙を折り曲げる

17. **zerknicken** [sein]

- i) Ganze Wälder zerknickten unter den Sturmböen. 森中(の木)が嵐の突風で折れ曲がった
- t) Zweige/Stängel/Halme zerknicken 枝を/茎を/わらを折り曲げる

18. **zersplittern** [sein]

- i) Bei dem Aufprall zersplitterte die Windschutzscheibe. 衝突の際にフロントガラスが砕けた
- i) Der Armknochen ist zersplittert. 腕の骨が砕けた
- t) Der Sturm hatte den Mast zersplittert. 嵐がマストを砕いた

b. 「乾く」

19. **trocknen** [sein/(haben)]

- i) Die Wäsche trocknet im Wind. 洗濯物が風の中で乾く
- i) Die aufgehängten Netze sind schon getrocknet. 吊るした網はもう乾いた
- t) Die Sonne trocknet die Wäsche. 陽光が洗濯物を乾かす
- t) die Wäsche auf dem Balkon trocknen 洗濯物をベランダで乾かす
- t) die Haare mit einem Föhn trocknen 髪をドライヤーで乾かす
- t) seine Stirn/seine Augen mit einem Taschentuch trocknen 額を/目(の涙)をハンカチで拭く

20. **abtrocknen** [sein/haben]

- i) Die Straße trocknet ab. 道路が乾く
- i) Nach dem Regen ist/hat es schnell wieder abgetrocknet. 雨の後(地面が)すぐにまた乾いた
- i) Die Wäsche hat/ist schnell abgetrocknet. 洗濯物はすぐに乾いた
- t) Geschirr/die Hände abtrocknen 食器を/手を拭く
- t) Ich trocknete dem Kind die Tränen ab. 私はその子の涙を拭いてやった
- t) Die Sonne hat die Straße schnell abgetrocknet. 陽光が道をすぐに乾かした

21. **austrocknen** [sein]

- i) Das Brot/Die Haut trocknet aus. パンが/皮膚が乾燥する
- i) Der Fluss trocknet aus. 川が干上がる
- t) Die Sonne trocknet den Boden aus. 日照りが土地を乾燥させる

c. 「とける・柔らかくなる」

22. **tauen** [sein]

- i) Der Schnee ist getaut. 雪がとけた
- i) Das Eis ist von den Scheiben getaut. 氷が窓ガラスからとけて流れた
- t) Die Sonne hat den Schnee getaut. 陽光が雪をとかした

23. **abtauen** [sein]

- i) Der Schnee/Das Eis taute ab. 雪が/氷がとけた
- i) Die Straßen tauen allmählich ab. 道路 (の氷雪) が徐々にとける
- i) Die Scheiben sind abgetaut. 窓ガラス (の氷) がとけた
- t) das Eis von den Scheiben abtauen 氷を溶かして窓ガラスから取る
- t) die Fensterscheibe/den Kühlschrank abtauen 窓ガラス (の氷) を/冷蔵庫 (の霜) をとकाす

24. **auftauen** [sein]

- i) Die Windschutzscheibe ist noch nicht aufgetaut. フロントガラス (の霜) がまだとけていない
- i) Der See ist wieder aufgetaut. 湖 (の氷) がとけた
- i) Er taut in Gesellschaft nur ganz langsam auf. 彼はパーティーでなかなか打ち解けない
- t) Die Sonne hat die Fensterscheiben aufgetaut. 陽光が窓ガラス (の霜) をとकाす
- t) Wir tauten die eingefrorene Wasserleitung auf. 凍りついた水道管をとかした
- t) Lebensmittel aus der Tiefkühltruhe auftauen 冷凍室の食料品を解凍する

25. **schmelzen** [sein]

- i) Der Schnee ist [an/in der Sonne] geschmolzen. 雪が [日に当たって] とけた
- i) Quecksilber schmilzt schon bei ca. -38°C . 水銀は摂氏 -38 度で融解する
- i) Unsere Zweifel schmolzen schnell. 私たちの疑念は氷解した
- t) Die Sonne schmolz den Schnee. 陽光が雪をとかした
- t) Erz/Eisen schmelzen 原鉱を/鉄をとかす

26. **abschmelzen** [sein]

- i) Das Blei schmilzt ab. 鉛がとける
- i) Wasser von abschmelzendem Eis とける氷から流れる水
- t) Die Hitze schmolz das Blei ab. 熱が鉛をとかす

27. **verschmelzen**

- i) Wachs und Honig verschmelzen [miteinander]. 蠟と蜂蜜が溶け合う
- i) Musik und Bewegung verschmolzen zu einem Ganzen. 音楽と動きが融合して一つになった
- t) Kupfer und Zink zu Messing verschmelzen 銅と亜鉛を融合して真鍮にする

28. **weichen** [sein]

- i) die Wäsche einige Stunden weichen lassen
洗濯物を数時間 (液に浸して) 柔らかくする (<柔らかくならせる)
- t) Wäsche weichen (液に浸して) 洗濯物を柔らかくする

29. **abweichen** [sein]

- i) Das Plakat weichte ab. ポスターが (湿り気で) はがれた
- t) das Etikett von der Flasche abweichen ラベルをびんから (湿らせて) はがす
- t) die Briefmarke abweichen 切手を (湿らせて) はがす

30. **aufweichen** [sein]

- i) Der Boden weichte allmählich auf. 地面が徐々に柔らかくなる
- i) Der Asphalt ist durch die Hitze aufgeweicht. アスファルトが暑さで柔らかくなった
- t) Der Regen hat den Boden aufgeweicht. 雨が地面を柔らかくした
- t) ein Brötchen in Milch aufweichen パンをミルクに浸して柔らかくする

31. **erweichen** [sein]

- i) Der Asphalt ist in der Sonne erweicht. アスファルトが日に当たって柔らかくなった
- t) Die Hitze erweicht das Wachs. 熱が蠟を柔らかくする
- t) Ihre Tränen haben mein Herz erweicht. 彼女の涙が僕の心を軟化させた

d. 「色あせる・磨耗する」

32. **bleichen** [sein]

- i) Der Teppich bleicht in der Sonne. カーペットが日に当たって色あせる
- t) Wäsche bleichen 洗濯物を漂白する
- t) Die Sonne hat ihr das Haar gebleicht. 太陽が彼女の髪を脱色した

33. **ausbleichen** [sein]

- i) Der Stoff bleicht aus. 布地が色あせる
- t) Die Sonne hat den Stoff ausgebleicht. 太陽が布地を色あせさせた

34. **abstumpfen** [sein]

- i) Die Klinge stumpft allmählich ab. 刃が徐々に磨耗する
- t) Kanten/Spitzen abstumpfen 縁/先端を磨耗させる
- i) Der alte Mann stumpft immer mehr ab. その老人はますます無気力になる
- t) Die Not hat ihn abgestumpft. 困窮が彼を無気力にした

e. 「熟す・発酵する・腐る」

35. **reifen** [sein]

- i) Das Obst reift dieses Jahr später. 果物は今年は熟すのが遅い
- i) Die Tomaten reifen an der Sonne. トマトが日に当たって熟れる
- i) Das Kind ist früh gereift. その子は早く成熟した
- t) Die Sonne reifte die Pflirsiche. ((雅語)) 太陽が桃を熟れさせた
- t) Diese Erfahrung hat ihn gereift. ((雅語)) この経験が彼を成熟させた

36. **gären** [sein/haben]

- i) Der Most/Der Teig gäerte/gor. 果汁が/パン生地が発酵した
- i) Der Wein ist zu Essig gegoren. ワインが発酵して酢になった
- i) Der Hass/Die Wut gärt in ihm. 憎しみが/怒りが彼の中で大きくなる
- t) Bier/Tabak gären ビールを/タバコを発酵させる

37. verderben [sein]

- i) Das Obst verderbt, wenn es nicht gegessen wird. 果物は食べなければ傷む
- i) Sie lässt viel verderben. 彼女はいろんな食品を腐らせる
- t) bei der schlechten Beleuchtung die Augen verderben 不十分な照明で目を悪くする
- t) Sie hat den Kuchen verdorben. 彼女はケーキを(焼くのを)失敗した

f. 「疲れる・硬くなる・愚かになる」

38. ermüden [sein]

- i) Die Augen ermüden beim Autofahren zuerst. 車の運転で最初に疲れるのは目だ
- i) Auf der langen Fahrt sind die Kinder ermüdet. 長旅で子供たちは疲れた
- i) Der Stahl ermüdet. 鋼鉄が疲弊する
- t) Das viele Reden ermüdet mich. 多弁が私を疲れさせる
- t) Langes Fahren ermüdet. 長距離ドライブは(ドライバーを)疲れさせる

39. versteifen [sein]

- i) Seine Glieder/Gelenke versteifen zusehends. 彼の手足/関節は目に見えて硬くなる
- t) einen Kragen [mit einer Einlage] versteifen 襟を[芯を入れて]硬くする

40. verdummen [sein]

- i) Bei dieser Tätigkeit verdummt man allmählich. こうしていると人は徐々に愚かになる
- t) Zuviel Fernsehen verdummt [die Leute]. テレビの見過ぎは[人々を]愚かにする

g. 「治る・冷める」

41. heilen [sein]

- i) Die Entzündung/Die Wunde heilt. 炎症が/傷が治る
- i) Der Muskelriss ist geheilt. 筋断裂が治った
- t) Er heilt die Entzündung mit Penicillin. 彼は炎症をペニシリンで治した
- t) Das Penicillin heilt die Entzündung. ペニシリンが炎症を治す
- t) den Kranken mit einem neuen Medikament heilen 病人を新薬で治す

42. ausheilen [sein]

- i) Eine frühe Tuberkulose ist ausgeheilt. 初期の結核が完治した
- i) Der verstauchte Fuß kann bei der Beanspruchung nicht ordentlich ausheilen.
捻挫した足は負担をかけるときちんと完治しない
- t) Der Arzt hat den Patienten ausgeheilt. 医者が患者を完治させた
- t) Du musst deine Lunge erst ausheilen, bevor du wieder anfängst zu arbeiten.
君はまた仕事を始める前に肺をまず完治しておかなくちゃいけない

43. abkühlen [sein/haben]

- i) Der Motor/Die Suppe muss noch abkühlen. エンジン/スープは冷める必要がある
- i) Das Badewasser ist nun abgekühlt. 風呂のお湯がもう冷めた

- i) Nach dem Regen hat es stark abgekühlt. 雨の後、急激に冷えた
- i) Die Begeisterung kühlte ab. 熱狂が冷めた
- t) die Milch abkühlen. ミルクを冷ます
- t) Ich habe mich vor dem Baden rasch abgekühlt. 水浴の前にすばやく体を冷やした
- t) Das hat seine Liebe abgekühlt. そのことは彼の愛を冷ました

II 「非自律的な動き」

a. 「落ちる・倒れる」

44. stürzen [sein]

- i) aus dem Fenster/vom Dach stützen 窓から/屋根から落ちる
- i) Die Temperatur stürzte um 20°/auf 10° unter null. 気温が 20 度も/氷点下 10 度まで下がった
- i) Die Preise stürzen. 価格が暴落する
- i) Er ist beim Rollschuhlaufen gestürzt. 彼はローラースケートをしていて転んだ
- i) Das Wasser stürzt über die Felsen zu Tal. 水が岸壁から谷底へ落下する
- t) jemanden von der Brücke/aus dem Fenster stürzen 人を橋から/窓から突き落とす
- t) die Kuchenform/den Topf stürzen ケーキの型/鍋を(中身を出すために) ひっくり返す
- t) Pudding/den Kuchen stürzen (容器をひっくり返して) プリンを/ケーキを取り出す

45. umstürzen [sein]

- i) Der Kran ist umgestürzt. クレーンが倒れた
- i) Ich bin mit dem Stuhl umgestürzt. 私は椅子ごとひっくり返った
- t) Tische und Bänke umstürzen テーブルと長いすをひっくり返す

46. kleckern [sein]

- i) Etwas Soße ist auf die Decke gekleckert. ソースが少しテーブルクロスにこぼれた
- t) Das Kind hat Suppe auf den Boden gekleckert. その子はスープを床にこぼした

47. tropfen [sein]

- i) Der Regen tropft vom Dach. 雨水が屋根から滴り落ちる
- i) Der Schweiß tropfte ihnen von der Stirn. 汗が彼らの額から滴った
- i) Der Wasserhahn/die Kerze tropft. 水道の栓が/ろうそくがたれる
- t) eine Tinktur auf die Wunde tropfen チンキ剤を傷口にたらす

48. tröpfeln [sein]

- i) Blut tröpfelt auf die Erde/aus der Wunde. 血が地面に/傷口から滴り落ちる
- i) Regen tröpfelte von den Blättern der Bäume. 雨水が木の葉から滴り落ちた
- t) die Medizin auf den Löffel tröpfeln 水薬をスプーンにたらす

b. 「転がる・ほどける」

49. **rollen** [sein]

- i) Das Fass/Der Ball/Der Würfel rollt. 樽が/ボールが/サイコロが転がる
- i) Der Ball rollt ins Aus. ボールがフィールド外に転がり出る
- i) Tränen rollten über ihre Wangen. 涙のしずくが頬を転がり落ちる
- i) Eine Lawine rollte zu Tal. 雪崩が谷へと転がり落ちた
- t) Er rollt das Fass. 彼は樽を転がす
- t) Der Wind rollt das Fass. 風が樽を転がす

50. **kullern** [sein]

- i) Die Äpfel kullerten über die Dielen. りんごが床を転がって行く
- i) Die Münze kullerte unter den Tisch. 小銭がテーブルの下に転がって行った
- t) Steine ins Tal kullern 石を谷へ転がし落とす

51. **abrollen** [sein]

- i) Das Kabel/Der Film rollt ab. (巻いてあった) ケーブルが/フィルムがほどける
- t) ein Kabel [von einer Trommel]/ein Tau abrollen ケーブルを [ドラムから]/ロープをほどく

c. 「流れ出る・飛び出す・飛び散る」

52. **ausströmen** [sein]

- i) Wasser/Gas/Dampf strömt aus. 水が/ガスが/蒸気が流れ出る
- t) Der Ofen strömt Wärme aus. ストープが熱を放出する
- t) Die Blumen strömen [einen] betörenden Duft aus. 花が魅惑的な香りを放つ

53. **spritzen** [sein/haben]

- i) Das Wasser ist aus dem Schlauch gespritzt. 水がホースから飛び出した
- i) Das Fett hat gespritzt. 油がはねた
- t) Die Feuerwehr hat Wasser und Schaum in das Feuer gespritzt. 消防隊が水と泡を炎にかけた
- t) jemandem Wasser ins Gesicht spritzen 人の顔に水をかける

54. **sprühen** [sein/haben]

- i) Die Brandung tobte, dass die Gischt nur so sprühte.
波が荒れ狂い、水しぶきがひどく飛び散った
- i) Funken sind nach allen Seiten gesprüht. 火花が四方八方へ飛び散った
- t) Wasser über die Pflanzen sprühen 水を植物にかける
- t) Das Feuer/Der Krater sprüht Funken. 火が/噴火口が火の粉を飛び散らす

55. **stäuben** [haben]

- i) Sie fuhren so rasch, daß der Schnee stäubte.
彼らはとても早く走ったので雪が舞い上がった
- i) Der Springbrunnen stäubte [auf den Parkweg]. 噴水の水が [遊歩道に] 飛び散った

- t) Sie stäubte Mehl auf das Kuchenblech. 彼女は小麦粉をプレートにふりかけた
- t) Sie stäubte Staubzucker über den Kuchen. 彼女はパウダーシュガーをケーキにふりかけた

56. **schleudern** [sein]

- i) In der Kurve fing der Wagen plötzlich an zu schleudern. カーブで車が突然スリップしだした
- i) Das Auto ist auf einen geparkten Lkw/in den Graben geschleudert.
その車は(スリップして)駐車しているトラックに/溝に突っ込んだ
- t) Der Hammerwerfer schleuderte den Hammer 60 m weit. 選手はハンマーを 60 メートル投げた
- t) Der Wagen wurde aus der Kurve geschleudert. 車はカーブから投げ出された

d. 「漂う・揺れる」

57. **treiben** [sein/haben]

- i) Das Schiff treibt steuerlos auf dem Meer. 船が操縦不能で海上を漂っている
- i) Der Ballon treibt landeinwärts. 気球は内陸の方へ漂って行く
- i) Der Kahn ist an das andere Ufer getrieben. 小船は向こう岸へ流れ着いた
- t) Die Strömung trieb ihn ans Ufer. 流れが彼を岸へ押し流した
- t) Das Boot wurde vom Wind an Land getrieben. ボートは風で陸へ押し流された

58. **rütteln** [sein/haben]

- i) Der Wagen hat auf dem Pflaster sehr gerüttelt. 車が敷石の上でひどく揺れた
- t) Sie rüttelt ihn am Arm. 彼女は彼の腕を揺すった

59. **schaukeln** [sein/haben]

- i) Die Boote schaukeln [am Kai]. ボートが[埠頭で]揺れている
- i) Lampions schaukeln im Wind. 提灯が風の中で揺れている
- i) Betrunkene sind über den Marktplatz geschaukelt.
酔払いがよろめいてマルクト広場を横切っていった
- t) Er schaukelt die Wiege. 彼は揺りかごを揺らす
- t) ein Kind auf den Knien schaukeln 子供をひざの上で揺する
- t) Der Wind/Die Wellen schaukelten den Kahn. 風が/波が小船を揺らす

60. **schwingen** [sein/haben]

- i) Die Schaukel schwingt. ブランコが揺れる
- i) das Pendel schwingen lassen 振り子を揺れさせる
- i) Der Artist schwingt am Trapez [durch die Kuppel].
芸人が空中ブランコで[ドームの中を]振り子のように揺れている
- t) die Peitsche/den Hammer schwingen 鞭を/ハンマーを振るう
- t) die Beine schwingen 両足をぶらぶらさせる

61. **anwehen** [sein]

- i) Hier weht immer viel Sand an. ここはいつも砂がたくさん吹きだまる
- t) Der Wind hat viel Schnee/viele Blätter angeweht. 風が大量の雪を/木の葉を吹き集めた

III 「自律的な動き」

62. abrollen [sein] 走り出す, 転がり出す

- i) Das Flugzeug rollt zum Start ab. 飛行機が離陸のために動き出す
- i) Der Zug ist eben abgerollt. 列車はちょうど今走り出した
- t) Der Spediteur hat die Kisten abgerollt. 運送屋が木箱を搬出した

63. fahren [sein]

- i) Das Auto fährt. 車が走る
- t) Er fährt das Auto. 彼はその車を運転する

64. fliegen [sein]

- i) Die Maschine fliegt. 飛行機が飛ぶ
- t) Er fliegt die Maschine. 彼は飛行機を操縦する

65. landen [sein]

- i) Das Flugzeug landete sicher. 飛行機がしっかりと着陸した
- i) Der Vogel landete auf dem Dach. 鳥が屋根に降りた
- t) Der Pilot hat das Flugzeug sicher gelandet. パイロットは飛行機を着陸させた

66. segeln [sein]

- i) Das Schiff segelt schnell. その船は速く帆走する
- i) Wann segelt das Schiff. いつその船は出帆するの
- t) eine Jacht [nach Kiel] segeln ((稀)) ヨットを [キールに向けて] 操縦する

67. starten [sein]

- i) Das Flugzeug ist pünktlich gestartet. 飛行機は時刻通りに出発した
- i) Der Motor startet. エンジンがかかる
- t) eine Rakete starten ロケットを発射する
- t) Er startet den Motor. 彼はエンジンをかける

68. steuern [sein]

- i) Das Schiff steuert nach Norden. 船は北へ向かう
- i) Wohin steuert unsere Politik? 我々の政治はどこへ向かっているのか?
- t) einen Ferrari steuern フェラーリを操縦する
- t) das Schiff [sicher] in den Hafen steuern 船を [確実に] 港内へ導く

69. drehen [haben]

- i) Das Schiff dreht [nach Norden]. 船が [北に] 進路を変える
- i) Der Autofahrer drehte und fuhr zurück. ドライバーはターンして戻って行った
- t) Er dreht das Schiff nach Norden. 彼は船の進路を北に変えた

70. **wenden** [haben]

- i) Das Auto/Der Schwimmer hat gewendet. 車が/水泳選手がターンした
- t) den Braten/den Mantel/die Seite wenden 焼肉を/コートを/ページを裏返す
- t) das Auto wenden 車をターンさせる

71. **anhalten** [haben]

- i) Das Auto hält vor dem Haus an. 車が家の前で停まる
- t) Er hält das Auto vor dem Haus an. 彼は車を家の前で停める
- t) von einer Streife angehalten werden パトロール隊に止められる

IV 「燃える, 焼ける・焦げる」

72. **brennen** [haben]

- i) Das Haus brennt. 家が焼ける
- i) Das dürre Holz brennt gut. 干からびた木はよく燃える
- i) Öl/Benzin brennt leicht. 石油は/ガソリンは燃えやすい
- t) Holz/Öl brennen 木を/石油を(燃料として)燃やす

73. **abbrennen** [sein]

- i) Das Haus/Der Schuppen brannte ab. 家が/納屋が焼け落ちた
- t) Gehöfte/ganze Dörfer abbrennen (いくつもの) 家屋敷を/村全体を焼き払う

74. **anbrennen** [sein]

- i) Die Kohlen sind angebrannt. 石炭が燃え始めた
- t) den Holzstoß/die Pfeife anbrennen 薪の山に/パイプに火を着ける

75. **niederbrennen** [sein]

- i) Der Hof brannte [bis auf die Grundmauern] nieder. 館が[礎を残して]焼け落ちた
- i) Die Kerze/Das Feuer ist niedergebrannt. ロウソクが/火が燃え尽きた
- t) ein Haus/ein Dorf niederbrennen 家を/村を焼き尽くす
- t) Die Soldaten brannten die Kirche nieder. 兵士たちは教会を焼き尽くした

76. **verbrennen** [sein]

- i) Die Dokumente sind verbrannt. 書類が焼失した
- i) Die Passagiere verbrannten in den Flammen. 乗客は炎の中で焼け死んだ
- i) Der Kuchen ist [im Ofen] verbrannt. ケーキが[オーブンの中で]焦げた
- t) Reisig/Müll verbrennen 柴を/ゴミを燃やす
- t) einen Toten verbrennen ((口語)) 死体を焼く

77. **glühen** [haben]

- i) Das Feuer glüht nur noch. 火はまだ赤熱している
- i) Die Zigaretten glühten in der Dunkelheit. タバコが暗闇で赤く灯っている
- t) Eisen glühen 鉄を(赤くなるまで)熱する

78. **ausglühen** [sein]

- i) Das Fahrzeug war völlig ausgeglüht. その乗り物は (内部が) 完全に焼け落ちた
- t) Draht/Nadeln ausglühen ワイヤーを/針を強く熱する

79. **durchglühen** [sein]

- i) Die Kohlen sind noch nicht ganz durchgeglüht. 石炭はまだ完全に燃え切っていない
- i) Die Heizspirale ist durchgeglüht. 電熱コイルが焼け切れた
- t) Eisen/Metall durchglühen 鉄を/金属を灼熱させる

80. **sengen** [haben]

- i) Die Schuhe fingen an zu sengen. 靴が焦げ始めた
- t) Sie hat beim Bügeln die Bluse gesengt. 彼女はアイロンをかけていてブラウスを焦がした

81. **verkohlen** [intr.:sein]

- i) Das Holz ist verkohlt. 木が炭化した
- t) Holz im Meiler verkohlen 木を炭焼き窯に入れて炭にする

V 「煮炊き」

82. **backen** [haben]

- i) Der Kuchen muss eine Stunde backen. ケーキは1時間焼か (れ) ないといけない
- t) Sie bäckt Kuchen. 彼女はケーキを焼く

83. **braten** [haben]

- i) Das Fleisch brät in der Pfanne. 肉がフライパンの中で焼けてくる
- i) Die Gans muß zwei Stunden braten. ガチョウは2時間焼か (れ) ないといけない
- t) Sie brät das Fleisch in der Pfanne. 彼女はフライパンで肉を焼く

84. **bräunen** [haben]

- i) Der Braten bräunt gleichmäßig. 焼肉がむら無く狐色になる
- t) Mehl bräunen/Zwiebeln in Öl bräunen 小麦粉を/たまねぎを油で狐色に炒める

85. **garen** [haben]

- i) Während das Gemüse garte, bereitete er die Soße vor.
野菜に火が通る間に、彼はソースを準備した
- t) Gemüse/Fleisch garen 野菜に/肉に火を通す

86. **kochen** [haben]

- i) Die Milch/Der Brei/Die Suppe kocht. ミルクが/お粥が/スープが煮える
- i) Das Wasser kocht [noch nicht]. お湯が沸く [まだ沸かない]
- i) Der Reis muss 20 Minuten kochen. お米は20分間炊か (れ) ないといけない
- t) Fleisch/Kartoffeln [weich] kochen 肉を/ジャガイモを [やわらかく] 煮る

t) eine Suppe/Kaffee kochen スープを作る/コーヒーを淹れる

87. schmoren [haben]

- i) Der Braten schmort in der Pfanne. 肉がフライパンの中で蒸れる
- t) das Fleisch im eigenen Saft schmoren 肉を肉汁の中で蒸らす

88. sieden [haben]

- i) Wasser siedet bei 100°C. 水は摂氏 100 度で沸騰する
- i) Die Eier haben 5 Minuten gesiedet/gesotten. 卵は 5 分間茹でた
- t) Wasser/Milch sieden 水を/ミルクを沸かす
- t) Kartoffeln/Eier sieden ジャガイモを/卵を茹でる

VI 「始まる, 終わる」

89. anfangen [haben]

- i) Das Konzert fängt um 20 Uhr an. コンサートは 20 時に始まる
- i) Hier fängt das Sperrgebiet an. ここから封鎖区域が始まる
- i) Das Wort fängt mit p an. その語は p で始まる
- t) Er fängt das Konzert um 20 Uhr an. 彼はコンサートを 20 時に始める
- t) eine Arbeit/einen Brief/ein Gespräch anfangen 仕事を/手紙を(書き)/会話を始める

90. beginnen [haben]

- i) Die Vorstellung beginnt um 20 Uhr. 上演は 20 時に始る
- i) Dort hinten beginnt die Schweiz. あそこからはもうスイスが始まる
- i) Namen, die mit dem Buchstaben B beginnen B という文字で始まる名前
- t) Sie beginnen den Streit. 彼らは争いを始める
- t) ein Gespräch mit jemandem beginnen 人と会話を始める

91. abschließen [haben]

- i) Das Geschäftsjahr schließt mit einem Fehlbetrag ab. 事業年度は赤字で終わる
- i) Die Veranstaltung schloss mit einem Feuerwerk ab. 催しは花火で終わった
- t) eine Verhandlung/eine Untersuchung abschließen 交渉を/調査を終える
- t) ein Dribbling mit einem Tor abschließen ドリブルをゴールで終える

VII 「ある」

a. 「着いている」

92. kleben [haben]

- i) Am Fenster klebt ein nasses Blatt. 窓に濡れた葉が着いている
- i) Das Pflaster klebt nicht mehr. ばんそうこうがもう粘着しない
- t) Plakate/Tapeten an die Wand kleben ポスターを/壁紙を壁に貼る
- t) eine Marke auf den Brief kleben 切手を手紙に貼る

93. **ankleben** [sein]

- i) Der Teig ist in der Schüssel angeklebt. パン生地がボールの中に付着した
- t) Er hat sich einen falschen Bart angeklebt. 彼は贗物の髭を付けた

94. **festkleben** [sein]

- i) Der Kaugummi ist an der Schuhsohle festgeklebt. ガムが靴底に着いた
- t) die abgelöste Sohle festkleben はがれた靴底を貼りつける

95. **verkleben** [sein]

- i) Beim Färben verkleben die Wimpern leicht. 染めるときにまつげがくっつきやすい
- t) Der Schweiß und Staub verklebten ihm die Augenlider. 汗と埃が彼の両まぶたをくっつけた

b. 「位置している」

96. **lehnen**

- i) Das Fahrrad lehnt am Zaun. 自転車が塀に立て掛けてある
- i) Er lehnt an der Wand. 彼は壁に寄り掛かっている
- t) die Leiter gegen die Wand lehnen はしごを壁に立て掛ける
- t) Müde lehnte sie den Kopf an seine Schulter. ぐったりと彼女は頭を彼の肩に持たせ掛けた

97. **stecken**

- i) Der Schlüssel steckt im Schloss. 鍵が錠に刺さっている
- i) Das Geschoss steckt noch in seiner Lunge. 銃弾はまだ肺に入っている
- i) Er hat die Hände in den Taschen stecken. 彼は手をポケットに入れている (く入った状態で持つ)
- t) Er steckt den Schlüssel ins Schloss. 彼は鍵を錠に刺し込む
- t) die Hände in die Taschen stecken 両手をポケットに入れる

98. **hängen**

- i) Das Bild hängt an der Wand 絵が壁に掛かっている
- i) Die Wäsche hängt auf der Leine. 洗濯物がロープに干してある
- i) An dem Baum hingen Äpfel. 木にりんごがぶら下がっている
- t) das Bild an die Wand hängen 絵を壁に掛ける
- t) die Wäsche an/auf die Leine hängen 洗濯物をロープに干す

99. **aufbauen**

- i) Diese Lehre baut auf der Beobachtung auf, dass ... この学説は... という観察に基づいている
- i) Seine Darstellung der Epoche baut auf ganz neuen Quellen auf.
彼の時代描写はまったく新しい資料に基づいている
- t) eine Theorie auf einer Annahme aufbauen 理論のある仮定の上に立てる

100. **gründen**

- i) Seine Überzeugung gründet auf der Erfahrung, dass ... 彼の確信は... という経験に基づく

- t) Er gründete seine Hoffnung auf ihre Aussage. 彼は彼女の発言に希望を置いた

VIII その他

101. läuten [haben]

- i) Die Glocken läuten von allen Türmen. 鐘があらゆる塔から鳴り響く
- t) Der Küster läutet die Glocken [zum Gottesdienst]. 寺男が[ミサを告げる]鐘を鳴らす
- t) Die Glocken werden jetzt elektrisch geläutet. 鐘は今では電動式で鳴らされる

102. riechen [haben]

- i) Diese Blumen riechen. これらの花は香りがする
- t) Er riecht den Duft der Blumen. 彼は花の香りを感じる

103. schmecken [haben]

- i) Das Essen schmeckt salzig. 食事はしょっぱい味がする
- t) Ich schmecke allerhand Gewürze im Essen. 私はその食事に色々な香辛料の味を感じる

104. passen [haben]

- i) Die Bolzen passen in die Bohrlöcher. ボルト(のサイズ)が穴に合う
- i) Dieser Deckel passt nicht auf den Topf. ふたが鍋に合わない
- t) Er paßt die Bolzen in die Bohrlöcher. 彼はボルト(のサイズ)を穴に合わせる

105. schließen [haben]

- i) Um Mitternacht schließt das Lokal. 夜中の12時にその飲食店は閉まる
- i) Die Tür schließt nicht richtig. ドアがきちんと閉まらない
- i) Die Türen schließen automatisch. ドアは自動で閉まる
- t) einen Deckel/eine Tür/ein Ventil schließen ふたを/ドアを/バルブを閉める
- t) einen Gürtel/das Kleid schließen ベルトを/ワンピース(のファスナー)を閉める
- t) eine Kiste/einen Briefumschlag schließen 木箱を/封筒を閉じる
- t) ein Buch schließen 本を閉じる

106. baden [haben]

- i) Er badet jeden Morgen. 彼は毎日入浴する
- i) im Meer baden 海水浴する
- t) Sie badet das Kind. 彼女はその子を入浴させる
- t) die Wunde baden 傷を水に浸す

107. scheiden [sein]

- i) Wir schieden grußlos. 私達は挨拶もせずに分かれた
- i) Er ist aus dem Dienst geschieden. 彼は職を退いた
- t) Ihre Ehe wurde geschieden. 彼らは離婚した(<分けられた)
- t) Ihre unterschiedliche Erziehung scheidet die beiden. 異なった教育が二人を分けている

108. **speisen** [haben] ((文語))

- i) gemeinsam mit der Familie speisen 家族と一緒に**食事**する
- t) Hungrige/die Armen speisen 空腹な者達に/貧者達に**食事**を与える

109. **weiden** [haben]

- i) Die Schafe weiden. 羊たちが**草**を**食べる**
- t) Die Hirten weiden ihre Tiere. 羊飼いが羊たちに**草**を**食べさせる**

110. **quellen** [sein]

- i) Hülsenfrüchte quellen. 豆が**ふやける**
- i) Die Fensterrahmen sind durch Nässe gequollen. 窓枠が湿気で**膨らんだ**
- t) Erbsen müssen vor dem Kochen gequellt werden.
えんどう豆は煮る前に**ふやかせない**といけない

参考文献

藤縄 真由美 (1990): ドイツ語の他自動詞についての報告. 大阪府立大学独仏文学研究会編「独仏文学」第24号, S.123 - 148.

野入 逸彦 (1972): 動詞の意義と他動・自動および能動・受動. 大阪市立大学文学部「人文研究」第24巻, S.16 - 26.

Oya Toshiaki (1995): Über die kausativ-inchoativen Alternationen im Deutschen. (Manuskript)

結合価理論を越えて

——文意味形成メカニズム研究へ——

在間 進

0. 従来の結合価研究にはいくつか方法論上の問題点あるいは限界が指摘されている。しかし、そもそも結合価は、文を形成する際に動詞がどのような語句と義務的に結合するかという問いかけであり、したがって、本来、この結合価の問題は、文がどのように形成されるのかという問題提起の一部なのである。本稿では、まず、従来の結合価研究の持つ問題点と限界をいくつか具体的に指摘した後、結合価を本来的な視点からとらえ直す新しい研究方向を述べる。

1. まず、結合価研究の方法論上の問題点あるいは限界について述べる。

1. 1. 第1の問題点は、補足成分と添加成分を区別するための、各種のテストに関してである。

結合価研究では、動詞と結合する文構成素に補足成分と添加成分とがあると想定し、個々の動詞の補足成分を一定のテストによって抽出しようとする。最もオーソドックスなテストは削除性に基づくものである。たとえば、(1)に示すように、動詞 *wohnen* の場合、時間前置詞句 (*seit einigen Jahren*) は削除しても当該の文は容認可能であるが、場所前置詞句 (*in Bonn*) は削除すると当該の文は容認不可能になる。

- (1) a. *Er wohnt seit einigen Jahren in Bonn.*
 b. *Er wohnt in Bonn.*
 c. **Er wohnt seit einigen Jahren.*

このことより、動詞 *wohnen* と結合する文構成素には、削除しても当該の文が容認不可能にならないもの（ここでは時間前置詞句 *seit einigen Jahren*）と削除すると当該の文が容認不可能になる文構成素（ここでは場所前置詞句 *in Bonn*）の2種類があることが確認できる。そこで、文構成素には、削除しえない、したがって中核的なものと、削除しうる、したがって周辺的なものとがあると一般化し、前者を補足成分、後者を添加成分と名づける。

しかし、動詞全般に関して具体的に削除テストで補足成分と添加成分を区別しようとする、様々な困難に突き当たる。この時点で、本来、このような限界の原因がテスト方法にあるのか、あるいはそもそも補足成分・添加成分という区分にあるのかが問われるべきなのだが、

実際は、後者について問うことなく、前者の立場から、削除テストに代わる新たなテストを考案することに多大のエネルギーを割かれてきた。すなわち、削除テストから補足成分・添加成分を抽出した場合とは逆に、今度は、補足成分・添加成分という知覚不可能な現象を抽出できる類似の統語的現象を探そうとする方向を選んだのである。

ある種の意味的現象が反映しているだろう統語テストを求めることに問題があるのではない。しかし、補足成分・添加成分とはそもそも何であるかがテストとは別個に明確に定義されていない限り、それらを抽出する新たなテストを考案することはそもそも不可能であろう。そして、また、たとえある種のテストが考案されたとしても、それによって、ドイツ語研究者が補足成分あるいは添加成分として求めているものが得られているとの保証はない。

そもそもある一つのテストAによって抽出される意味現象A'は、他のテストBによって抽出される意味現象B'と、たとえどんなに類似していると感じられても、同一であるとの保証はない。削除テストで抽出された補足成分・添加成分はあくまでも削除性に基づくもので、他のテストによって抽出された補足成分・添加成分は、同じ名前を付けたとしても、削除テストで抽出したものと（部分的にはなく、全体的に）同一であるという保証はない。どのようなテストであれ、あるテストによって抽出されるカテゴリーは、そのテストによって抽出されるカテゴリーでしかなく、それ以上でもそれ以下でもない。もしA'=B'であると主張しようとするならば、それ自体を、当該テストとは別のレベルで、証明することが必要になる。削除性という形態的統語的現象に基づき、文形成の規則体系の解明に有意義と思われる補足成分・添加成分のという概念を獲得したところから結合価研究が始まった。しかし、削除テストによる補足成分・添加成分の抽出という方法論に困難が生じたとき、補足成分・添加成分という概念そのものの持つ意義を問わず、新たなテストの抽出に研究の方向が向いたところに結合価研究の方法論的誤りがある。

1. 2. 第2点は、補足成分と添加成分の区別に関するものである。

結合価は、現実の発話文を見ているだけでは抽出できない。したがって、上例(1)で見たように、具体的な文に様々なバリエーション、たとえば削除などの操作を加え、変更が加えられた文が容認し得るか否かを母語者に問う形で行われる。ただし、このようなテストは、特定の文脈を超えたところで行われねばならない。たとえば、次例に見るように、特定の文脈（たとえば対比的な文脈）を考慮に入れると、一般的に添加成分とされる副詞あるいは副詞句も削除できなくなり、結合成分の削除性を問うテストは意味をなさなくなる。

(2) Hast du das Buch gestern gekauft ?

— Ja, ich habe es gestern gekauft.

/*Ja, ich habe es $\emptyset$ gekauft.

(3) Hast du in Bonn studiert ?

— Ja, ich habe in Bonn studiert.

/*Ja, ich habe ϕ studiert.

したがって、結合価に関するテストは、一般性のある文脈を想定し、母語者の語感に基づき、容認性を判断する形で行われる。すなわち、結合価研究におけるテストは、母語者の語感に基づいて行われる。しかし、語感とは、論理構造、ノルムに関する教育、文体的感覚、日常の会話経験などによって形成される個人的、主観的、文体的、地域的なもので、個人差の伴うものである。したがって、語感に基づく容認性の判断は、（語感に個人差があるのであるから）必然的に個人によって異なりうるもの、ずれが生じうるものである。容認性の判断がこのような個人においてずれの生じるものであるとするならば、このような判断に基づく結合価（すなわち補足成分と添加成分の区別）は、たとえ多くの部分が言語事実を反映するものであったとしても、個人のレベルでの言語現象ということになる。そうであるとするならば、結合価という現象は実体のないものになり、このような結合価を言語事実として追求することは、言語学的に意味があるとは言えない。したがって、このような概念を軸にする結合価研究にはこれ以上発展する可能性がない（注1）。

1. 3. 第3点は、結合価研究の、動詞が語句結合を規定するという立場に関してである。ふつう「動詞」の結合価と言うが、結合価は實際上、形態的単位としての動詞ではなく、動詞のそれぞれの意味用法（Bedeutungsvariante）での問題である。一般的に一つの動詞の結合する語句は多様である。たとえば、動詞 packen には、少なくとも（4）のa文および（5）のa文のような複数の語句結合が認められる。

(4) a. Er packt den Koffer.

b. BEWIRKEN (er, WERDEN (Koffer, gepackt))

(5) a. Er packt die Kleider aus dem Koffer.

b. BEWIRKEN (er, sichBEWEGEN (Kleider, aus dem Koffer))

注：BEWIRKEN (er, WERDEN (Koffer, gepackt)) は、er BEWIRKT, dass der Koffer zum Zustand gepackt WIRD, また、BEWIRKEN (er, sichBEWEGEN (Kleider, aus dem Koffer)) は er BEWIRKT, dass die Kleider sich aus dem Koffer BEWEGEN と読む。表記は簡略化してある。

形態的単位という観点から純粋に眺めるならば、（2）のa文の前置詞句は添加成分あるいは任意的補足成分となり、有意義な結合価を規定することはできない。したがって、結合価は、たとえば（4）のbおよび（5）のbに示したような、動詞の個々の意味用法に関連して問われて始めて意義を持つ。しかし、動詞の意味用法は、動詞のみでは規定できず、それ

が用いられる文全体の意味、すなわち文意味の中で規定される。動詞の意味用法は、当該の文意味に従属するものである。したがって、結合価を分析するとは、ある一定の文意味における動詞と他の構成素との結合を分析することになる。

文意味のレベルから動詞の語句結合、すなわち動詞と統語形式の関係を眺めると、別の側面が見えてくる。すなわち、文意味の形成において、統語形式は動詞によって必ずしも単純に規定されていない。たとえば、他者の身体部位への働きかけを表す場合、他者の身体部位への働きかけのみを表すならば、例（６）のような、身体部位が前置詞句で表示される統語形式が、他者の身体部位への働きかけのみならず、その結果としての状態変化をも表すならば、例（７）のような、身体部位が４格で表示される統語形式が用いられる（清野 1991）。

- （６） 主語＋動詞＋３格目的語＋前置詞句目的語

Er schlägt ihr ins Gesicht.

- （７） 主語＋動詞＋３格目的語＋４格目的語

Er wäscht ihr die Hände.

しかし、たとえば、例（８）のように、他者の身体部位の状態変化が表示されるならば、他者の身体部位への単なる働きかけだけを表す動詞 *schlagen* が用いられても、統語形式は、状態変化を表す例（７）に準じた、すなわち身体部位を４格目的語にしたものが用いられる。

- （８） 主語＋動詞＋３格目的語＋４格目的語＋形容詞

Er schlägt ihr das Gesicht wund.

すなわち、例（８）の主語＋動詞＋４格目的語＋形容詞という統語形式は、動詞 *schlagen* によって規定されているのではなく、状態変化という文意味に基づいて形成されるのである。この文意味では、動詞 *schlagen* は状態変化を引き起こすための手段を表す修飾成分になっている。

統語形式のこのような自立性は、次のような事例（９）（１０）でも確かめることができる。

- （９） a. Er schüttelt den Baum.

b. Er schüttelt die Äpfel vom Baum.

c. BEWIRKEN (er, sich BEWEGEN (Äpfel, vom Baum))

DURCH schütteln

- （１０） a. Er klopft an die Tür.

b. Er klopft den Sand aus den Socken.

c. BEWIRKEN (er, sich BEWEGEN (Sand, aus den Socken))

DURCH klopfen

本来、a文のように、主語＋動詞＋4格目的語という統語形式で用いられる動詞 *schütteln* 「揺する」あるいは主語＋動詞＋前置詞句(方向)という統語形式で用いられる動詞 *klopfen* 「たたく」が、それぞれb文の主語＋動詞＋4格目的語＋前置詞句(方向)という統語形式では、移動を引き起こす手段を表す修飾成分になっている。この場合も、位置移動という文意味構造は主語＋動詞＋4格目的語＋前置詞句という統語構形式が担っていると言える。このように、統語形式には、動詞から独立した形で文の構造的意味を形成する意味機能があり、統語形式は動詞によって固定的に支配されているわけではないのである(詳細は Zaima1987 を参照)。

結合価研究は、動詞が統語形式を規定するという立場に立つため、動詞と他の構成素の結合を動詞という視点からのみとらえることになり、統語形式を自立的なものにとらえる発想はない。したがって、結合価辞書の作成という発想がありえても、文形成の仕組み全体を解決しようという問題提起はなしえない。上例の場合、結合価研究では、個々の動詞のそれぞれの意味用法での結合価を記述するのみで終わりにしよう。

2. 新しい方向

結合価の方法論上の問題点および限界について述べた。次に、結合価研究に代わる、動詞の語句結合を含み、文形成を視野に入れた新しい研究の枠組みを示すことにする。ドイツ語文はどのように形成されるのかというのが問題提起である。この試みは、結合価研究の名のもとでなされてきた数々の成果を否定するものではない。むしろそれらの成果をより有意義なものにするためのものである。私の仮説は、次の2つの前提に基づく。前提の一つは、文意味には意味構造が認められるということである。文意味構造とは、本稿ですでに使用しているが、文意味の骨組みをなすもので、たとえば、例文(11)(12)(13)(14)のa文には、それぞれのbに表記したような移動という文意味構造が認められる。

(11) a. Er geht ins Kino.

b. SICH-BEWEGEN(er, ins Kino) 修飾的成分 zu Fuß

(12) a. Er fährt nach Frankreich.

b. SICH-BEWEGEN(er, nach Frankreich) 修飾的成分 mit einem Fahrzeug

(13) a. Er taumelt über den Flur.

b. SICH-BEWEGEN(er, über den Flur) 修飾的成分 taumelnd

(14) a. Der Zug braust über die Brücke.

b. SICH-BEWEGEN(er, über die Brücke) 修飾的成分 brausend

文意味は、骨組みを成す構造的成分と付加的な修飾的成分とによって構成される。また、文意味構造の数は、語彙と異なり、有限と考える。

もう一つの前提は、すでに見たように（1. 3. を参照），統語形式には文意味構造を表示する意味機能があるということである。なお，上例（13）（14）の動詞 *taumeln*, *brausen* の基本的な意味用法は，例文（15）（16）に示すように，「よろめく」「ゴーゴー音を立てる」というもので，したがって，上例（13）（14）に認められる移動という意味構造は，動詞の意味そのものよりも，それぞれの方向規定（*über den Flur*, *über die Brücke*）を伴う統語形式によって表示されると考える。この場合，動詞の意味は，すでに *b* の表記に表したように（*taumelnd* および *brausend*），修飾的成分になる。

(15) *Er taumelt vor Müdigkeit.*

(16) *Das Meer braust.*

なお，文意味構造の表示には動詞接頭辞も関与する。たとえば，例文（17），（18）の *a* 文はそれぞれ「叩いて落とす」「押して開ける」という意味で，移動および状態変化の意味構造が認められるが，これらの基礎動詞 *drehen*, *drücken* の基本的な意味用法は *b* 文がそれぞれ示すように「叩く」「押す」で，対象に向けられた行為を表す。したがって，例文（17）の *a* 文の移動および（18）の *a* 文の状態変化という意味構造は基礎部分の動詞の意味そのものよりも，離脱を表す接頭辞 *ab-*，状態を表す接頭辞 *auf-* によって形成されると考える。これらの場合も，動詞の意味は修飾的成分になっている。

(17) a. *Er klopft sich den Staub ab.*

b. BEWIRKEN(X, SICH-BEWEGEN(Y, Z)) 修飾的成分 durch Klopfen

Vgl. *Er klopft an die Tür.*

(18) a. *Er drückt die Tür auf.*

b. BEWIRKEN(X, WERDEN(Y, Z)) 修飾的成分 durch Drücken

Vgl. *Er drückt auf den Knopf.*

次に，以上の2つの仮説に基づく私の仮説を述べる。私は，ドイツ語文は，文意味構造に意味特徴が挿入されることによって文意味が形成された後，それに応じて形成される統語形式に適切な動詞，名詞などが挿入されて形成されると仮定する。たとえば，（19）の *a*，（20）の *a* のような文意味構造に具体的な情報が加わり（それぞれの *b* を参照），それに応じて形成される統語形式（それぞれの *c* を参照）の中に具体的な語彙が挿入されると，（19）（20）の *d* な文が形成される。

(19) a. WERDEN (X, Y)

b. X = *Hans*, Y = *Arzt*, WERDEN = *werden*

c. NP + V + NP

d. *Hans wird Arzt.*

- (20) a. sichBEWEGEN (X, Y)
 b. X = *Zug*, Y = *zum Friedhof*, sichBEWEGENS = *sich bewegen*
 c. NP + V + NP
 d. Der Zug bewegt sich zum Friedhof.

動詞と他の構成素とは、文意味構造を介して結合されるというのが特徴である。

なお、意味特徴の挿入された文意味構造の語い化の過程で、複数の構成素が一つの語いとして実現することもある。たとえば、上例 (11) (12) の移動動詞 *gehen*, *fahren* の場合、文意味構造は同一で、修飾的成分としての手段が異なるだけである。この手段に関する意味特徴を包入することによって、異なる語い *gehen* と *fahren* が形成される。したがって、これらの動詞の形態的相違は修飾的成分によるものなのである。

(21) sichBEWEGEN + zu Fuß ⇒ *gehen*

(22) sichBEWEGEN + mit einem Fahrzeug ⇒ *fahren*

また、修飾的成分を実現する形態を統語形式の動詞として用いることもある。たとえば (23)

(24) (上例 (9) (10) の再掲) の a 文の場合、文意味構造の修飾的成分 [(DURCH) schütteln] および [(DURCH) klopfen] (それぞれの b を参照) の動詞が統語形式の動詞として用いられている (c を参照)。

(23) ← (9) a. Er schüttelt die Äpfel vom Baum.

b. BEWIRKEN (er, sichBEWEGEN (Äpfel, vom Baum))

DURCH schütteln

c. BEWIRKEN + sichBEWEGEN + DURCH schütteln ⇒ schütteln

(24) ← (10) a. Er klopft den Sand aus den Socken.

b. BEWIRKEN (er, sichBEWEGEN (Sand, aus den Socken))

DURCH klopfen

c. BEWIRKEN + sichBEWEGEN + DURCH klopfen ⇒ klopfen

以上の他に、文意味構造の一部の構成素が構造的成分と融合しながら、具体的な語いになることがある。たとえば、(25) (26) の場合、結果状態を表す構成素が構造的成分と融合して語彙が形成される。このタイプの典型的な例が形容詞派生の他動詞である。この場合、統語形式 (d を参照) は文意味構造と部分的に異なったものになる (すなわち結果挙述の部分が統語形式では欠ける)。

(25) a. Die Polizei befreit die Geiseln.

b. BEWIRKEN (X, WERDEN (Y, frei))

- c. BEWIRKEN+WERDEN+frei ⇒ befreien
 - d. NP+V+NP
- (26)
- a. Der Lehrer öffnet das Fenster.
 - b. BEWIRKEN (X, WERDEN (Y, offen))
 - c. BEWIRKEN+WERDEN+offen ⇒ öffnen
 - d. NP+V+NP

以上、ドイツ語文の形成に関して、

- (a) 文意味には意味構造が認められる
- (b) 統語形式には文意味構造を表示する意味機能がある

ということを前提にし、

(c) 言語表現は、文意味構造に意味特徴が挿入されることによって文意味が形成され、また、それに応じて形成される統語形式に適当な動詞、名詞などが挿入されて文が形成されるという仮説を述べた。その際に、動詞の形態化における4つのタイプについても述べた。今後、この仮説について行うべきことは、この仮説がドイツ語文の形成を記述する上で妥当であるか否かをドイツ語一般について実証的に検証することである。仮説の妥当性は、仮説を具体的に研究対象に適用する中で判断されるものである。少数の事例に基づいて立てられた仮説は、できるだけ多くの事例に適用し、その妥当性を検証しなければならない。そしてまた、(もしこの仮説が妥当であるとすれば)この仮説に基づき、文形成の仕組みを具体的に記述することである。このような考えに基づき、現在、基本動詞約1000語を分析対象に選び、

- (a) 文意味構造としてどのようなものが想定できる<すべき>か
- (b) 統語形式はどのような文意味構造を表示しうなのか
- (c) 動詞はどのような統語形式と結合しどのような意味用法を持つか

を分析している。文意味構造に関する問題提起は言語の普遍性に関わるもので、後者2つは、個別言語的に異なる、個別言語的なものである。

3. 次に、上記の方法論が、結合価理論とを比べ、どのようなメリットを持つかを述べる。

第1点は、この方法論の場合、文意味構造(そしてその構成素)の分析・記述が主要な目的になり、補足成分・添加成分というカテゴリーを立てる必要がなく、したがって、それらを区別するテストも必要とされないということである。文意味構造内の構成素を補足成分とし、それ以外の修飾的成分を添加成分と名づけることもできようが、このような命名自体なんの意義ももたらさない。なお、文意味構造は人間の認知様式の反映と考えられるもので、文意味構造を分析することは人間の認知の解明に言語の側から貢献することでもある。文意味構

造の分析は、その意味でも発展性のあるテーマである。

第2点は、統語形式を自立的なものとしてとらえるため、たとえば (27) (28) のような、動詞と統語形式による創造的表現がどのように形成されるかも説明することができるということである。

(27) Er schläft seinen Chef herbei.

(28) Er spielt Weib und Kind auf die Straße.

もし統語形式が動詞によって固定的に規定されるものであるならば、なぜこのような創造的表現が形成されうるのかが説明できない。統語形式が自立的な意味機能を持つがゆえに、このような表現が可能になるのである。

第3点は、この方法論では、語彙の形成も規則によって生成的に説明できるということである。◇◇ページで、分離動詞における分離前つづりと基礎動詞の間に、文意味構造に基づく一定の意味的規則性が認められること、したがって、分離動詞の形成を一定の規則性で説明できることを述べた。語彙も、決して閉ざされたクラスではなく、必要に応じて作り出される。そして、そこにも一定の生成的規則が認められる。たとえば、(29) の a 文の動詞 *beschneien* のような、時代に即した新たな語彙の形成も、b を元にした c に示すような一定の規則性に基いている。話者はそれに則って語彙を作り、聞き手もそれに則って理解するから、新たな語彙も言語形式として機能しうるのである。

- (29) a. Man *beschneit* einen Quadratmeter Boden mit einer 30 Zentimeter hohen Kunstschneedecke.
b. BEWIRKEN (X (WERDEN (Y, mit etwas versehen))
c. BEWIRKEN+WERDEN+ [mit Schnee versehen] ⇒ *beschneien*

なお、この方法論でも、個々の動詞の用法の記述が一つの課題になるが、結合価理論と異なるのは、既に述べたように、動詞と他の構成素との結合を固定的なものとしてではなく、組合わせ的なものとしてとらえるため、複数の意味用法を単なる多義としてではなく、相互に関連付けながら、統語形式との組合わせによる意味的展開としてとらえることができることである（在間 1996 を参照）。これも一つの長所である。単一動詞が統語形式と組み合わせられてどのような意味的展開を示すのか、また、分離前つづりおよび非分離前つづりと組み合わせられてどのような意味的展開を示すのかを見ることはきわめて興味深いことである。この方法論では、未だ観察されていない新しい意味用法の出現を予言することも可能である。

4. 以上の理論的枠組みからこぼれ落ちるのが削除性の問題である。最後に、この問題について、私の現在考えていることを簡単に述べる。削除性の問題には、理論的な側面とドイツ

語教育上の側面がある。

まず、理論的な側面についてであるが、削除性は、——すでに触れたが——動詞と他の語句との論理的関係の中だけではなく、文脈に基づく、情報の新旧に関連しても認められる。たとえば、次例 (29) (上例 (2) の再掲) の場合、副詞 *gestern* を削除した c 文が容認不可能なのは、副詞 *gestern* が当該の文脈で対比的な新情報を担っているからである。新情報を担う構成素は旧情報を担っている構成素よりも先に削除できないという規則に基づく現象である。これは、日本語にも適用できる普遍的な原理と言えるものである。

- (30) ← (2) a. Hast du das Buch *gestern* gekauft ?
 b. Ja, ich habe es *gestern* gekauft.
 c. *Ja, ich habe es $\emptyset$ gekauft.

また、削除性は、テーマ・レーマという情報構造の形成に関連しても認められる。たとえば、非人称受動文の次例 (31) (32) の場合、副詞句 *nur einmal in der Woche* あるいは *zu Fuß* のある a 文は容認可能なのに対して、それらのない b 文が容認不可能になるのは、a 文の場合、当該の副詞句によってテーマ・レーマという情報構造の形成が可能である一方、それらのない b 文の場合は、その形成が不可能であるからだと考えられる。

- (31) a. Nach London wird nur einmal in der Woche geflogen.
 b. *Nach London wird geflogen.
(32) a. Damals wurde nach München zu Fuß gegangen.
 b. *Damals wurde nach München gegangen.

削除性の問題は、以上のように、単なる動詞と他の語句との結合関係に限定されない多様な側面を持つ。削除性は、すでに 1. 2. で述べたように、ある語句の削除によって文全体の容認性に変化が生じることが問題なのであるから、最終的には容認性の問題である。したがって、結合価研究で扱われてきた削除性という問題は、(30) (31) (32) のような事例とも関連付けながら、容認性というより広い枠組みの中で扱うべきだというのが私の考えである。このような考えから現在、私は、容認性を規定する種々の要因の分析を始めている。

なお、結合価研究での狭義の削除性の問題は原則的に個別言語的なものである。たとえば、次例 (33) に示すように、ドイツ語で削除できないとされる構成素も、(34) に示すように、日本語では問題なく削除できる。

- (33) Kennst du ihn ?
 → Ja, ich kenne ihn.
 → *Ja, kenne ihn.
 → *Ja, ich kenne.

→ *Ja, kenne.

(34) *kimi-ha kare-wo sitteiru ka*

→ *hai, watasi-ha kare-wo sitteimasu*

→ *hai, kare-wo sitteimasu*

→ *hai, watasiha sitteimasu*

→ *hai, sitteimasu*

次に、教育上の側面について述べる。削除性にはドイツ語教育上の観点から取り上げられたという背景がある。結合価理論での狭義の削除性は、すでに述べたように、ドイツ語の個別言語的側面を持つ。したがって、ドイツ語教育上、削除性は無視できない現象であるが、言語教育にとって重要なことは、言語が実際に使えるようになることであり、それ以上のことは基本的に必要ない。したがって、補足成分と添加成分の区別が明確にできない現状では、補足成分と添加成分に関する不確かな知識よりも、実際の言語運用において個々の動詞がどのような語句とどのような頻度で用いられるかという情報の方が实际的でより有益であろう。削除不可能ということは、頻度が100パーセントという特殊例のことである。言語運用上の頻度的傾向を知るとは、現在、コーパスを利用することによって可能である。実際、コーパスを用いて、結合頻度の高い語句結合を分析し、その結果をドイツ語教育に利用しようという試みがすでに始められ、興味深い成果が得られている (F. Mielke 1997 を参照)。私も、ドイツ語教育上の効果を考えた場合、削除性は削除できるか否かという Entweder-Oder の問題としてではなく、結合頻度の問題としてとらえることの方が有益だと考える。なお、具体的にどのような手順でコーパスを利用するのかについての、私の考えは別の機会に取り上げることにする (注2)。

注

- 1 : 補足成分・添加成分という概念には、説明的有用性という観点からも限界がある。すなわち、統語的意味的カテゴリーである主語、目的語などの概念が文意味構造に関する情報を持ちうるのに対して、補足成分あるいは添加成分という概念は、具体的な動詞について個別的に、当該の文構成素が削除できるか否か（あるいは他のテストを用いる場合、そのテスト内容に基づく情報）の表示機能を持つだけである。したがって、文の構成に関する構造的な情報は示しえない。
- 2 : 文形成を問う立場では、どのような構成素が削除できる（できない）かという問いよりも、どのような構成素を実際に表示する（表示しなければならない）のかという問いがよりふさわしいものである。表示しなければならない構成素が（表示しなければならないのだから）削除できない構成素になる。文脈から補うことができ、したがって言語経済性からいって、表示しなくてもよいのに、表示しなければならないのかはなぜか（文法的制約）とか、文法的に表示すべき文構成素が表示されないのはなぜか（統語形式の表現機能）とか、単に削除できるかどうかを問うだけではなく、それらの背後にある言語の原理を探ることは重要である。すでに発話された（形成された）表現からある構成素が削除できるかできないか（だけ）を問うことは一種の操作的遊びになる。

文献

- Gruber, Jeffrey S. (1976) : *Lexical Structures in Syntax and Semantics*, North-Holland
- Jacobs, Joachim (1994) : *Kontra Valenz*, FOKUS Linguistisch-Philologische Studien, Band 12, Trier
- Mielke, Frank (1997) : *Frequenzbasierte Gebrauchsanweisungen für Verben*, in : *Der Japanische Deutschlehrerverband (hrsg.) Deutschunterricht in Japan*, Heft 2, Tokyo
- Storrer, Angelika (1992) : *Verbvalenz, Theoretische und methodische Grundlagen ihrer Beschreibung in Grammatikographie und Lexikographie*, Tübingen,
- Zaima, Susumu (1987) : "Verbbedeutung" und syntaktische Struktur, in : *Deutsche Sprache*, Heft 1, Erich Schmidt Verlag
- (1994) : *Linguistische Untersuchungen und Deutschunterricht in : Deutsch als Fremdsprache*, Heft 2, München/Berlin
- (1997) : *A Study on "Semantic Sentence Structures" in German in : The Locus of Meaning; Papers in Honor of Yoshihiko Ikegami*, Tokyo
- 成田 節 (1995) : 補足成分と添加成分の区別をめぐって, 大阪市立大学文学部紀要「人文研究」第 46 号所収
- 清野智昭 (1991) : 身体表現における 4 格目的語の機能, 熊本大学文学部編文学部論叢第 35 号所収
- 在間 進 (1996) : 移動動詞にみられる意味的展開, 科学研究費研究成果報告書「言語におけるカテゴリーの認知言語学的研究<英語を中心とした類型論的考察>」所収

コーパスを用いた認知論的頻度分析

－ steigen と ab -, aus -, auf -, einsteigen を調査対象に －

亀ヶ谷 昌秀

0. 本稿の目的

本稿では、コーパス¹⁾を用いて行った、語句の結合頻度に関する調査結果と、それに基づく認知論的考察について述べる。移動を表す動詞が「起点」および「着点」を表す前置詞句と、どのような頻度で結合するか、そして次に「起点」および「着点」を表す前つづりと、どのような頻度で結合するか、というのが調査対象である。調査対象の動詞は steigen とその複合動詞 absteigen, aussteigen, aufsteigen, einsteigen である。最後に、異なった二種類のコーパスを用いた場合の調査結果を比較し、コーパスの適性規模について述べる。調査に用いたコーパスは、「マンハイム・コーパス I」²⁾ および「HIT コーパス」³⁾ である。

1. 調査対象

1. 1. 単一動詞の「起点」と「着点」表現

(1), (2), (3) のように、単一動詞 steigen と前置詞 aus, von の前置詞句が結び付いたものを単一動詞の「起点」表現とし、

(1) [...], als er neben mir stoppte und aus dem Wagen stieg.⁴⁾

(2) Henry stieg vom Rad [...].

(3) Als ich aus der Wanne stieg, [...].

(4), (5), (6) のように、単一動詞 steigen と前置詞 auf, in の前置詞句が結び付いたものを単一動詞の「着点」表現とする。

(4) Er stieg auf das Fahrrad.

(5) Ich stieg in Mutters Auto, [...].

(6) Er stieg in die Wanne.

1. 2. 複合動詞の「起点」と「着点」表現

(7), (8) のように, 基礎動詞 *steigen* と分離前つづり *ab-*, *aus-* が結び付いたものを複合動詞の「起点」表現とし,

(7) Das Fahrrad holte er früh, [...], stieg ab.

(8) Er kam mit dem Auto, stieg aus, [...].

(9), (10) のように, 基礎動詞 *steigen* と分離前つづり *auf-*, *ein-* が結び付いたものを複合動詞の「着点」表現とする。

(9) Wir steigen wieder auf!

(10) Erst als ich eingestiegen war und der Bus anfuhr, [...].

なお, 単一動詞を用いた表現とは異なり, これらの複合動詞を用いた表現には, 調査したデータに関する限り, (11), (12) のように, 「起点」あるいは「着点」の前置詞句を伴った事例は見られなかった。

(11) Er steigt aus dem Zug aus.

(12) Er steigt in den Zug ein.

したがって, 複合動詞を用いた表現に関しては, 前つづり *ab-*, *aus-* が付いているか, *auf-*, *ein-* が付いているか, という基準で「起点」か「着点」表現かを判断した。

2. 調査結果

2. 1. 単一動詞

調査結果 (1) 単一動詞 *steigen* では, 「マンハイム・コーパス I」の中で, (1), (2), (3) のように, 「起点」表現は, 75 例のうち 13 例 (約 17, 3%), (4), (5), (6) のように, 「着点」表現は, 75 例のうち 62 例 (約 82, 7%) であった。「HIT コーパス」でも, (1), (2), (3) のように, 「起点」表現は, 68 例のうち 16 例 (約 23, 5%), (4), (5), (6) のように, 「着点」表現は, 68 例のうち 52 例 (約 76, 5%) であった。両コーパスの調査結果を合計して示すと, 「起点」表現は, 143 例のうち 29 例 (約 20, 3%), 「着点」表現は, 143 例のうち 114 例 (約 79, 7%) であった。以上のように, 単一動詞 *steigen* の「起点」と「着点」表現を比べると, 両コーパスとも, 若干の差はあるが, ともに近似値を示し, 「着点」表現の方が多く, 「着点」志向性が認められた。

調査結果 (1) ⁵⁾

単一動詞 steigen (事例総数 143)

	MK	HIT	合計
起点	13例	16例	29例
着点	62例	52例	114例

2.2. 複合動詞 ⁶⁾

調査結果 (2) steigen を基礎語とする複合動詞 absteigen, aussteigen および aufsteigen, einsteigen では、「マンハイム・コーパス I」の中で、(7), (8) のように、分離前つづり ab-, aus- を伴う「起点」表現は、92例のうち62例 (約 67, 3%), (9), (10) のように、分離前つづり auf-, ein- を伴う「着点」表現は、92例のうち30例 (約 32, 7%) であった。「HIT コーパス」でも、(7), (8) のように、分離前つづり ab-, aus- を伴う「起点」表現は、53例のうち33例 (約 62, 2%), (9), (10) のように、分離前つづり auf-, ein- を伴う「着点」表現は、53例のうち20例 (約 37, 8%) であった。両コーパスの調査結果を合計して示すと、「起点」表現は、145例のうち95例 (約 65, 5%), 「着点」表現は、50例 (約 34, 5%) であった。以上のように、複合動詞の「起点」と「着点」表現の頻度を比べた場合、「起点」表現の方が多く、「起点」志向性が認められた。

調査結果 (2)

複合動詞 ab-, aus-, auf-, einsteigen (事例総数 145)

	MK	HIT	合計
起点	62例	33例	95例
ab-	10	1	11
aus-	52	32	84
着点	30例	20例	50例
auf-	5	5	10
ein-	25	15	40

このように、単一動詞の場合は、「着点」志向性が認められたが、複合動詞の場合は「起点」志向性が認められた。なぜ単一動詞は、「着点」志向性を示し、複合動詞は、「起点」志向性を示すのか、これについては、3. 考察で述べることにする。なお、単一動詞と複合動詞の「起点」および「着点」表現の合計数を比較すると、「起点」表現は、288例のうち124例、「着点」表現は288例のうち164例となり、「着点」表現の方が多く、ドイツ語全体として見た場合は、「着点」志向性が認められた。

調査結果 (3)

単一動詞および複合動詞の「起点」と「着点」表現 (事例総数288)

	MK	HIT	合計
起点	75例	49例	124例
単一	13	16	29
複合	62	33	95
着点	92例	72例	164例
単一	62	52	114
複合	30	20	50

3. 調査結果の考察

調査結果では、単一動詞の場合は、「着点」志向性が、複合動詞の場合は「起点」志向性が認められることが明らかになった。なぜ単一動詞は「着点」志向性を示し、複合動詞は、「起点」志向性を示すのか、これについて単一動詞と複合動詞の表現形式に関する相違、および「起点」と「着点」の情報的価値に関する相違に基づいて考えていくことにする。

3. 1. 単一動詞と複合動詞の表現形式に関する相違

単一動詞と複合動詞の表現形式に関する相違は、「(起点あるいは着点という) 場所を明示するか否か」である。すなわち、単一動詞の場合、(1) - (6) のように、(起点あるいは着点という) 場所が前面に現れるのに対して、複合動詞の場合は、(7) - (10) のように、(起点あるいは着点という) 場所が明示されず、移動そのものが前面に出ている。このように、単一動詞は「場所」を明示する表現形式、複合動詞は「場所」を明示しない表現形式といえる。

3. 2. 「起点」と「着点」の情報的価値に関する相違

「起点」は、原則として移動の前に移動者が存在する場所であり、この限りでは一義的に決まると考えられる。それに対して、「着点」は移動者の向かう場所であり、「起点」のようには一義的には決まらない。すなわち、「起点」は情報としての価値が低く、「着点」は情報としての価値が高いと考えられる。このように考えるならば、このことは、「起点」を表す前置詞と「着点」を表す前置詞の数の違いからもうかがえる。つまり「起点」を表す前置詞が aus, von の二つであるのに対して、「着点」を表す前置詞には nach, zu のみならず, an, auf, in など合計9の3・4格支配の前置詞があり、多様な関係に応じた表現が可能になっている。「着点」は表示される傾向を持ち、「起点」は表示されない傾向を持つといえるのではないか。そして「場所」を明示的に表現する単一動詞において、「場所」の表現を求める「着点」表現が多くなり、これに対して、「場所」を明示的に表現しない複合動詞において、「場所」の表現を求めない「起点」表現が多くなるのは、ごく自然な

ことだといえる。これを図示すると次のようになる。

- (13) 着点／場所：情報的価値が高い ⇒ 場所（着点）を明示する傾向 ⇒ 単一動詞
起点／場所：情報的価値が低い ⇒ 場所（起点）を明示しない傾向 ⇒ 複合動詞

4. コーパスを用いた言語調査

4. 1. 調査結果の比較

調査結果のように、単一動詞の「起点」と「着点」表現の比率は、両コーパスとも「着点」志向性が認められた。複合動詞の「起点」と「着点」表現の比率は、両コーパスとも「起点」志向性が認められた。次に、事例数に関して述べると、「マンハイム・コーパス I」は、約220万語、「HIT コーパス」は、約280万語というように、両コーパスとも、ほぼ同規模と考えられるが、単一動詞においては「マンハイム・コーパス I」では75例、「HIT コーパス」では68例と、事例総数も、ほぼ同数を示した。そして複合動詞においては、「マンハイム・コーパス I」では92例、「HIT コーパス」では53例と、この場合、若干の数値の差が認められた。

4. 2. コーパスの構築と利用

本調査に関する限り、両コーパスを用いた語句の結頻度に関する調査結果では、コーパス間では、大きな数値的な差は見られなかった。本調査に用いたコーパスが現代ドイツ語の全体像を映し得ているかに、調査結果の正当性が大きく左右されるわけであるが、この総数約600万語のデータを用いた単一動詞 *steigen* およびその複合動詞 *absteigen*, *aussteigen*, *aufsteigen*, *einsteigen* の事例総数は、288例と予想した事例総数を下回った。今後、コーパスの構築を考える場合、コーパスが広範囲のデータを収録していくと信頼性が高くなると考えられるが、規模が単に大きければ、いいというものでもない⁷⁾。言語は、等質的なものではなく、複数のサブシステムあるいは言語変種の集合であるので、少なくともデータの対象分類（書き言葉、話し言葉、テキスト、音声コーパス、新聞記事、文学作品等⁸⁾）とデータへのタグ情報（品詞、構文情報等）を考慮してコーパスを構築しなくてはならない。また、コーパスを用いて言語調査を行う場合、データや調査結果の数値のみに頼るのは、大きな危険が潜んでおり、インフォーマントテスト等を併用する必要があるといえる。

5. まとめ

本稿では、「マンハイム・コーパスⅠ」と「HIT コーパス」の二種類の異なったコーパスを用いた語句の結合頻度に関する調査結果と、それに基づく認知論的考察について述べた。これらをまとめると、以下ようになる。

- 1) 単一動詞の場合には「着点」志向性が認められた。
- 2) 複合動詞の場合には「起点」志向性が認められた。
- 3) 両コーパスの結果比較では、ともに近似値を示した。

従来までのドイツ語学研究、すなわち研究者が研究対象とした事項について考察を行う場合、ドイツ語で書かれたテキスト、すなわち小説や新聞などから事例集を行ったり、研究者が自分自身でドイツ語文を作例し、インフォーマントにたずねるといった方法が試みられて来た。今日では、コンピュータを用いて膨大なデータの中から瞬時に仮説検証を行うことが可能になった。そして、この方法は、語学教育⁹⁾の分野でも、どのような語がよく使われるか、どのような表現が多いか、などを調査する場合にも有用である。今後、語学教育の分野でさらなる利用が期待される。最後に、コーパスを用いた言語調査においても従来までの研究と同様に、正しい情報が得られるかどうかは、研究者自身に関わっているといえる。これを確認しながら、さらに研究を深めて行くことを今後の課題として、本稿を終えることにする。

注

本稿は、1998年6月6日、日本独文学会春季研究発表会・語学シンポジウム（中央大学）において「コーパスを用いた新しいドイツ語研究の方向性・コーパスを用いた認知論的頻度分析」と題して行った発表を敷衍したものである。

- 1) ここで述べるコーパスとは、デジタル化されたテキストデータおよび検索に対応したタグ等を付加したデータの集合を示す。本稿で調査に使用した「マンハイム・コーパスⅠ」は前者に、「HIT コーパス」は後者に属する。「マンハイム・コーパスⅠ」の機械処理については室井（1992）で述べられている。
- 2) 「マンハイム・コーパスⅠ」は、ドイツのマンハイムにあるドイツ語研究所Institut für deutsche Sprache（以下、IdS）が1950年代から1960年代にかけて現代ドイツ語で書かれた文学作品、新聞記事、科学論文を収集し、構築したコーパスで語彙数は約220万語である。また、「マンハイム・コーパスⅠ」を補完するものとして「マンハイム・コーパスⅡ」がある。これは、公文書、マニュアル、新聞記事、通俗小説などからなり語彙数は約33万語である。以下にIdSが所有するコーパスの一覧を示す。
 - (1) Mannheimer Korpra (Mannheimer Korpus I, II)
 - (2) Grammatik – Korpus (GR1)

- (3) Bonner Zeitungskorpus (BZK)
- (4) Handbuchkorpora (HBK) gesondert nach Jahrgaengen; H85, H86, H87, H88
- (5) Wendekorpus (WK)
- (6) LIMASA – Korpus (LIM)
- (7) Korpus – Kartei der Gesellschaft fuer deutsche Sprache (GfdS), Wiesbaden
- (8) Korpus Projektdokumentation FOBER (Forschungsberichte) der Universitaet
- (9) Mannheim Mannheimer Morgen (MMM, MMT)
- (10) Goethe – Korpus (GOE)
- (11) GRIMM – Korpus
- (12) Marx – Engels – Korpora
 - Marx – Engels – Gesamtausgabe (meg)
 - Marx– Engel – Werke (mew)
 - Herausgeber – Anmerkungstexte zu mew (mwa)

(13) Kopora der gesprochenen Sprache

- Freiburger Korpus (FKO)
- Dialogstrukurenkorpus (DSK)
- PFEFFER – Korpus (PFE)

上記の説明は、大矢 (1996) に拠る。また上記のコーパス入手方法等は樋口 (1998) を参照。

- 3) 「HIT コーパス」は、堀口氏、池内氏、恒川氏が独自に新聞記事、文学作品などを中心に資料収集し、構築したコーパスで語彙数は、約280万語である。
上記の説明は、池内・堀口・恒川 (1997) に拠る。
- 4) 「マンハイム・コーパス I」のテキストファイルでは、ä ⇒ {, ö ⇒ |, ü ⇒ }, Ä ⇒ [, Ö ⇒ ¥, Ü ⇒], ß ⇒ ~, 「HIT コーパス」のテキストファイルでは、ä ⇒ ¥a, ö ⇒ ¥o, ü ⇒ ¥u, Ä ⇒ ¥A, Ö ⇒ ¥O, Ü ⇒ ¥U, ß ⇒ ¥s で置き換えられ、文頭でも名詞以外は小文字で表示されている。このようなデータ形式はテキスト検索をするために用いるもので、読書をするためのものではない。本稿での引用に際しては通常の表記に変換した。
- 5) MK は、「マンハイム・コーパス I」、HIT は、「HIT コーパス」を示す。
- 6) 複合動詞 besteigen は、事例のように、「着点」を表示することから、明らかに「着点」表現となるが、「場所」を表示する点で、他の複合動詞とは異なるので本稿では調査対象から除外した。
Wir besteigen das Flugzeug.

- 7) 堀口・池内・恒川 (1995) では、約10メガバイト (約1431000語) のテキストデータベース・コーパスを用いて「『不定詞句+helfen』構文における zu の有無について」調査を行った。この調査は、コーパス構築と同時平行的に進められ、得られた各データの比率は5メガバイトを超えた頃から数値はほぼ一定となり、大きく変化することはなかったと報告している。
- 8) 口頭言語のコーパスとしては、「フライブルク・コーパス」Freiburger Korpus がある。樋口 (1996) は、「ドイツのコーパスについて」、樋口 (1987) は、独自に構築した「トーマス・マン・ファイル」について述べている。
- 9) 亀ヶ谷 (1998) 「コーパスを用いた新しいドイツ語研究の方向性・コーパスを用いた認知論的頻度分析」と題するシンポジウムにおいて、言語研究の成果がいかなる点で、語学教育に役立ち得るかについて述べた。(11), (12) は教科書、辞書等の記述で見られるがコーパスを用いた調査では一例も見られなかったことを報告した。
- (11) Er steigt aus dem Zug aus.
- (12) Er steigt in den Zug ein.

参考文献

- 池内宣夫・堀口里志・恒川元行 (1995) : 「『不定詞句+helfen』の構文における zu の有無について」 西日本ドイツ文学 第7号, S.1-14.
- 池内宣夫・堀口里志・恒川元行 (1997) : 「anrufen における4格と副詞規定の交替について」 大分大学工学部研究報告 第35号, S.69-75.
- 大矢俊明 (1996) : 「マンハイムドイツ語研究所コーパスについて」 日本ドイツ語情報処理研究会編 ドイツ語情報処理 第8号, S.11-12.
- 亀ヶ谷昌秀 (1996) : 「移動動詞 steigen についての一考察」 東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会編 Der Keim Nr.20. S.53-60.
- 亀ヶ谷昌秀 (1998) : 「現代ドイツ語における移動動詞のコロケーション分析」 昭和音楽大学研究紀要 第17号, S.105-122.
- 在間進 (1996) : 「移動単一動詞一覧」 東京外国語大学論文集 第52号, S.258-279.
- 在間進 (1996) : 「移動動詞に見られる意味的展開」「言語におけるカテゴリーの認知言語学的研究」 平成5-7年度科学研究費補助金研究成果報告書, S.1-10.
- 嶋崎啓 (1997) : 「bevor 文における時制の組み合わせトーマス・マン・ファイルを利用した時制研究の試み」 九州ドイツ文学 第11号, S.1-35.
- 鈴木敦典 (1995) : 「telnet, ftp による九州大学大型計算機センター『トーマス・マン・ファイル』の利用」 日本ドイツ語情報処理研究会編 ドイツ語情報処理 第7号, S.31-40.
- 中川裕之 (1998) : 「計量的コーパス分析から語順変動要因の解明へ」 一話し言葉

- Freiburger Korpus と書き言葉 Bonner Zeitungskorpus における不定代名詞 man
の語順」東京都立大学人文学部 第293号 人文報 独語・独文学, S. 1 - 17.
- 樋口忠治 (1994) : 「テキストデータベース『ゲーテ・ファイル』書簡の完成」九州大学
大型計算機センター広報 第27号, No.4.
- 樋口忠治 (1996) : 「ドイツ語のコーパス」月刊言語 第25巻 第10号, S. 127 - 130.
- 室井禎之 (1992) : 「コンピュータ利用によるコロケーション分析の実際とその言語研
究上の意義について」北海道大学言語文化部紀要 第22号, S. 153 - 196.
- 山田善久 (1997) : 「IDS のドイツ語コーパス検索システム COSMAS」日本ドイツ語情報
処理研究会編 ドイツ語情報処理 第8号, S. 67 - 81.

コーパス言語学の試み

“on the hoof”の新しい意味をめぐって

馬 場 彰

現在市販されているたいていの英和辞典において、“on the hoof”という成句に関しては、「[家畜が] (まだ屠殺されないで) 生きている」という意味を示すのが一般的である。ときに、『リーダーズ英和辞典』(初版、1984年、研究社)とか『ランダムハウス英和大辞典』(第2版、1994年、小学館)などのように、さらに「(人が) ふだんの状態で」という意味を追加して示している場合もあるが、後者の意味は、おそらく、*Webster's Third New International Dictionary*にある語義記述を参考にして追加されたものだと言って間違いない。なぜならば、提示してある例文まで同じものであるからだ。

(1) *Webster's Third New International Dictionary* (1961):

- (a) (of meat animals) living, liveweight: e.g. *10 cents a pound on the hoof / on the hoof meat is supplied*
- (b) (of persons) in ordinary condition; without an opportunity for any special show: e.g. *meeting people on the hoof across a sales counter / executive expert at judging men on the hoof*

それでは、*OED* (第2版、1989年) ではどう記述してあるかということ、見出し語 *hoof* の語義区分1の最後に成句として「生きている」の意味が挙げてあり、さらに4のところで “humorously or derogatively” と注記した上で、人間の足についても用いて、「歩いて」という意味で用いることもあるという説明が載っているくらいである。しかし、*OED*のCD-ROM版(1992年)をデータベースとして活用してみると、多少面白いことが分かってくる。*OED*の全用例に対して *on the hoof* という連語検索を行うと8例見つかるが、年代順に並べて提示すると次のようになる。

(2)

- (a) 1691 They all beated it **on the hoof** ... to London. (*beat v.*)
- (b) 1750 The good man was ... forced to beat it **on the hoof** as far as Hernhuth in Germany.
(*hoof n.*)
- (c) 1787 Lure, a sore on the hoof of a cow, cured by cutting it cross-ways. (*loor*)
- (d) 1818 Cattle ... are sold in this State, **on the hoof**, for about 3 dollars per hundred weight. (*hoof n.*)
- (e) 1902 The estimated dead weight of the sheep imported **on the hoof** for slaughter.
(*hoof n.*)

- (f) 1930 Cows, as all cattle were called regardless of age and sex, were an investment which traveled on the hoof. (cow n.)
- (g) 1936 Why buy Bret Harte, I asked, when I was prepared to supply home-grown fiction on the hoof? (hoof n.)
- (h) 1957 An august figure, weighing seventeen stone or so on the hoof. (hoof n.)
- (i) 1971 You can't grade hoggets on the hoof. (hoof n.)

(2. c)は「蹄」の意味で用いてあるので除外すると、「歩いて」の意味で用いてるのは(2. a) (2. b) (2. f)であり、「(まだ屠殺されないで) 生きている」の意味で用いてるのは(2. d) (2. e) (2. g) (2. h) (2. i)である。ただし、(2. g)は比喩的な用法と考えてよい。

用例の年代を手掛かりにすれば、次のような推定が可能であろう。この成句は、まず、「(家畜が自力で) 歩いて」の意味を持っていたが、時には on foot との類推も働いて、戯れに人について言う場合も出てきた。そしてさらに、家畜が自力で歩くということは、まだ屠殺されないで生きている状態を示すと受け取られるようになり、この成句の中心的な意味(すなわち、「[家畜が] (まだ屠殺されないで) 生きている」)が確立したのだと思われる。(2. g)などは、その延長線上に生まれてきた比喩用法であり、「生きのよい状態で」といった意味に解釈できるだろう。(1. b)の比喩的用法も、「生きている」の意味から「(ありのままの) ふだんの状態で」という意味へ転用されて生まれてきたものであろう。以上が、成句 on the hoof をめぐる、これまでの一般的状況であった。

筆者が担当している副専攻語科目「英語」のクラスでは、今年度は「*The Times*を読む」と題して、1996～98年の*The Times*から面白そうな記事を選んで一緒に読んでみたのであるが、その中に、次のような一節があった。

(3)

Opposition parties that have a clear lead in campaigns tend to play safe and let their rivals make mistakes. Margaret Thatcher took the same approach in 1979 and was accused of a lack of detail and of making policy changes *on the hoof*. But the country at least had a clear idea of what to expect from her Government: trade-union reform, income-tax cuts and control of inflation.

(*The Times* : 2 May 1997)

これは、1997年5月1日のイギリス総選挙で労働党が圧勝した翌日の記事であるが、これまでの英和辞典・英英辞典に記載されていた意味でないことは文脈からして自明である。受講生たちは、通例、自分の愛用する英和辞典ぐらいしか調べないものなので、結局、確たる解答は得られなかった。そこで、彼らに代わって最新の辞典まで駆使していろいろ調べてみたところ、様々なことが分かってきた。本稿では、それらについて少し詳しく報告

しておきたい。

まず、1995 年に一斉に改訂版ないしは新版が刊行されたイギリス系の英英辞典には、この成句の新しい意味がきちんと記載されていることが分かった。

(4)

(a) *Longman Dictionary of Contemporary English* (第3版、LDCEと略) :

(BrE) if you make decisions **on the hoof**, you make them while you are doing other things, without stopping to think

(b) *Oxford Advanced Learner's Dictionary* (第5版、OALDと略) :

(1) (of cattle) alive; before being killed for meat: *bought on the hoof and then slaughtered*

(2) (informal) while busy doing sth; without stopping to pay full attention to sth: *eat lunch/make a decision on the hoof*

(c) *Cambridge International Dictionary of English* (初版、CIDEと略) :

(1) If an animal which is used for meat is **on the hoof**, it is still alive: *He's a bit squeamish about seeing his veal on the hoof.*

(2) (Br) If you do something **on the hoof**, you do it while you are moving about or doing something else, often without giving it the attention it deserves: *Educational policies made on the hoof by successive secretaries of state are the main reason for low teacher morale.*

(d) *Cobuild Dictionary of Idioms* (初版) :

(1) If you say that someone does something **on the hoof**, you mean that they do it in response to things that happen, rather than as part of a carefully considered plan. This expression is used in British English. *They expressed their disquiet at the disarray over the government's handling of its economic policy and their fears that policy was being made on the hoof. / There is nothing more dangerous than policy-making on the hoof. All ministers are prone to it, particularly during a parliamentary recess.*

(2) If someone does something **on the hoof**, they do it while they are doing something else, or without stopping to sit down. *We know the character: his shirt is always undone, he is rude, consumes junk food on the hoof and is always complaining. / Presumably, like everybody else, you learnt the job on the hoof.*

LDCE (第2版、1991年) には、従来の「(まだ屠殺されないで) 生きている」の意味しか記載されていないが、改訂版ではこの意味を削除して、新しい意味のみを示している点で、

相当思い切った改訂であると言うことができよう。また、*OALD* (第4版、1989年) にも、(4. b. 1) の意味しか記載されておらず、(4. b. 2) の記述は見られない。では、なぜ各辞典において、今回申し合わせたように、このような記述の変化が生じたのであろうか。

実は、この新しい意味の誕生は、もう少し早く探知できていてしかるべきものであった。上記の (4) では、*Cobuild English Dictionary* (初版、1987年；第2版、1995年) のことに触れなかったが、それは、この辞典本体に問題の成句が出ていないからである。ところが、この辞典の初版と、同系列の文法辞典と語法辞典、およびこれらの辞典類に基づいているデータベース *The Bank of English* の一部 (5百万語分) を同梱した CD-ROM を検索してみると、本稿で問題にしている意味で用いられていると思われる用例がいくつか見つかるのである。

(5) *Cobuild-on-CD-ROM* (1994):

- (a) Again, Mr. Baker was making policy on the hoof; he told the Senate Foreign Relations Committee it was the logical second half of the policy to open talks with Vietnam. (newspaper)
- (b) As you are not under pressure, you are more likely to make the right decisions than when you are editing on the hoof. (book)

(4. d) に挙げた記述が生まれてくる背景には、このようなコーパスの存在があったのである。さらには、次に示すのも同様の理由によると思われる。

(6) *New Shorter Oxford English Dictionary* (1993):

- (a) (of cattle) not yet slaughtered
- (b) (of an action) extempore

(7) *New Oxford Dictionary of English* (1998):

- (a) (of livestock) not yet slaughtered
- (b) (informal) without great thought or preparation: policy was made on the hoof.

もっとも、(6) (7) の辞典に基づいているデータベースは *The British National Corpus* と呼ばれるものであって、(5) の *The Bank of English* ではないが、いずれも巨大データベースであることにはかわりはない。

コーパスのことが話題になったついでに、1960年代の代表的なコーパスである *The Brown Corpus* で検索してみると、次の1例だけが見つかった。

(8) *The Brown Corpus* (1964):

"On the hoof" was a reference to live cattle and was also used in referrin' to cattle travelin' by trail under their own power as against goin' by rail.

この用例は、*OED*が示していた二つの意味を見事に反映した文になっていて、実に興味深いものである。

筆者の手元には、イギリスの日刊紙 *Daily Mail* の百年分の中から色々な分野別に貴重な記事を選別して CD-ROM 化したものがあるが、全コーパスに対して単語検索が可能である。そこで、このデータベースに対して hoof の単語検索を実行してみると、5 例見つけたが、そのうち 4 例 (1952/1952/1965/1968 年度の記事) はすべて「蹄」の用例である。ところが、次に示す最新の用例だけが、本稿で取り上げている新しい意味のまさに典型的な実例となっている。

(9) *Daily Mail on CD-ROM* (1996):

The public address announcer had just declared that extra time would be played when Rob Andrew conspired amid unbearable tension to drop the greatest goal in rugby history.

It had all been planned and executed with military English precision, as well as a commendable sense of occasion, coming as it did 200 years to the day since the British invasion force hove to off the Cape.

The best in the world and the best in Europe were locked at 22-22 going into the third minute of injury time when Andrew and Dean Richards hatched the plan which brought an epic contest to its momentous climax.

While sheer bedlam was breaking out all around them, the pair of unflappables devised their strategy on the hoof as they moved into position for that last line-out. Mike Catt had fired a penalty into touch close to the Australian 10-yard line, guaranteeing England the throw. Even so, both Andrew and the bandaged Richards knew the odds were against them. "We talked about winning the line-out," Andrew said. "And then driving it forward to set up an opportunity for the drop."

(*Daily Mail* : 12 June 1995)

現在では、上で述べた The Bank of English (約 3 億語) も The British National Corpus (約 1 億語) も (多少の制限は課されているものの) インターネット上での検索が可能になっている。実際に on the hoof を連語検索してみると、The Bank of English から 12 例、The British National Corpus から 27 例が見つかった。それらをさらに仔細に検討してみると、本稿で議論している新しい意味で使用されている用例が、The Bank of English に 11 例、The British National Corpus に 11 例あることが分かった。代表的な用例を数

例ずつ挙げておこう。

(10) The Bank of English:

- (a) Election policies were made **on the hoof** ...
- (b) You can't make policy **on the hoof** in a radio car but ...
- (c) They say policy is made **on the hoof**.

(11) The British National Corpus:

- (a) (CBX 845) It wasn't a decision we agonised over, it was made **on the hoof** at about 10 o'clock at night.
- (b) (FT6 476) Making social policy **on the hoof** and enforcing social work to use all its energy reorganising the services to a business model, will not stop more young people in public care dying in stolen cars.
- (c) (HTL 1929) We decided to grab some lunch **on the hoof**.

以上に示した様々なコーパスから得られる用例に基づいて言えることは、(4. d) に挙げた二つの意味（「何か他のことをやりながら、片手間に」と「何の準備もなしに、即席に、その場の思いつきで」）は、とくに 1990 年代以降、イギリス英語において、急速に広まってきた新しい用法であるということであろう。このことを確かめる上で、コーパスは実に強力である。ただし、その場合、コーパスの規模も、重要な要因になってくることが予想される。

たとえば、今年の 1 月にやっと入手できた The International Corpus of English : Great Britain (1998, UCL) で hoof の単語検索してみると、「蹄」の用例が 1 例出てくるのみで、残念ながら on the hoof の用例は 1 例も見つからない。このコーパスは Spoken Corpus と Written Corpus の二つの部分から成るが、合わせて百万語しかなく、採録語数の点で The Brown Corpus と同じである。しかも、後者においても、on the hoof はたった 1 例しか見つからなかった。このような場合に、コーパスを構成するテキストの選択は、大きな問題点としてクローズアップされることになるであろう。

さて、on the hoof の従来の意味から外れた新しい用例が見つかったとして、それらの用例だけから純粋に帰納的に、(4. d) にあるような意味記述を、我々外国人研究者・辞書編集者が行うことは可能であろうか。多少は可能かもしれないが、おそらく困難な場合が多いのではないかと思われる。しかしもしそうだとすると、本稿で示したように、せめてコーパスの構築・検索を通して、絶えず問題の所在だけは確実に把握しておきたいものである。

(1999 年 3 月 4 日)

教育改善推進経費

言語研究 IX

1999 年 3 月

編 者 在間 進, 敦賀陽一郎

発行所 東京外国語大学

〒114-0024

東京都北区西ヶ原 4-51-21

電 話 03-3917-6111